

DS . . . Kurokawa, Mamichi
803 Kokushi sōsho
K84
v.13

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

國史叢書

新

東

鑑

二

評 文學博士

萩野由之

文學士

笹川臨風

議 文學博士

黑板勝美

文學士

菊池謙二郎

員 文學博士

松本愛重

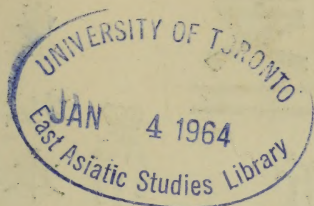
文學博士

三宅米吉

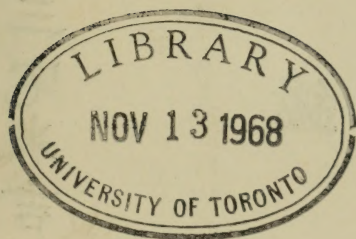
黑川真道編

(順ハロイ)

國史研究會藏版



DS
803
K84
v. 13



目次

新東鑑 二

卷之十

諸勢追々大坂へ押す并池田左衛門督神前川先陣の事

將軍伏見へ着御附新宮一揆事 榎島玄蕃允被_レ讒言事并兩御所伏見御出陣の事

向井將監到着并眞田隱岐守爲御使幸村へ參る事

大御所茶臼山御巡見并蜂須賀乗取穢多ヶ崎壘之事

城中反間之使被_レ生捕并野田・福島合戰の事 大御所再び茶臼山御登覽の事

安藤・伊藤・屋代三人欲_レ攻鳴野之柵事 今福合戰の事

卷之十一

信貴野合戰の事 兩御所仕寄場御巡檢并斥候衆言上附本多正純取_レ扱小栗

山本口論事 敕使御下向并福島正勝・島津家久不應大坂之招事

拔伯樂淵之壘事并乘取船場町事 乘取福島之壘并道頓堀壘放火の事

城兵出張欲燒高麗橋之事 本多正信頼智の事并川田八助勇力の事

南條中務大輔誅せらるゝ事

卷之十二……………二三

玉造合戦の事 藤堂高虎攻豊志谷口事

兩將軍御巡見并有樂修理亮之使茶臼山に來る附所々仕寄の事

關東・大坂御和睦取組の事 諸浪人諫言の事 蜂須賀陣所へ夜討せしむる事

夜討の次第註進の事 關東、大坂と御和睦の事

卷之十三……………二九

木村重成・板倉重昌雙方へ使者に立つ并青山石見守内通露顯の事

諸大名追々御目見え附總湍埋の事

大御所參内并池田・酒井・有馬・伊達・片桐等へ恩賜ある事

大御所二條の城御出門并御道中御泊々御使者等の事

兩將軍家還御の事 大野主馬介軍議并大坂の使者駿府に到る事

小幡勘兵衛浪速を退く附神踊停止の事 家康公御出陣附大野治長難に遭ふ事

將軍御動座附大坂より大御所へ御返答の事

卷之十四……………三二

將軍伏見へ着御并法隆寺炎上附青木民部少輔の事

諸大名追々到着并筒井兄弟の事 古田織部正の事

榎井合戰附塙團右衛門・淡輪六郎兵衛戰死の事 上田主水の事

兩御所御出門の事

卷之十五……………三二

細川越中守參向附内室自害の事 後藤又兵衛戰死附神保長三郎討たる事

薄田隼人正討死の事 眞田、仙臺勢と合戰の事

越後少將忠輝朝臣着陣の事

卷之十六……………三六七

木村長門守並内藤・山口等戰死の事 八尾・久寶寺表合戰の事

木村重成以下の首御實檢并河野權右衛門御勘氣御赦免附木村主計助、榊原勢と合戰の事 越前少將忠直朝臣御先手を望まるゝ事

五月七日兩將軍家御陣御進めの事

眞田左衛門佐、大野治長を諭す并幸村、息大介を促し城中に遣す事

卷之十七……………四三七

眞田左衛門佐并御宿越前守戰死の事 松平伊豫守高名の事

水野日向守、明石掃部助と合戰の事

本多出雲守の事 毛利豊前守武功并本多出雲守戰死附松下石見守高名の事

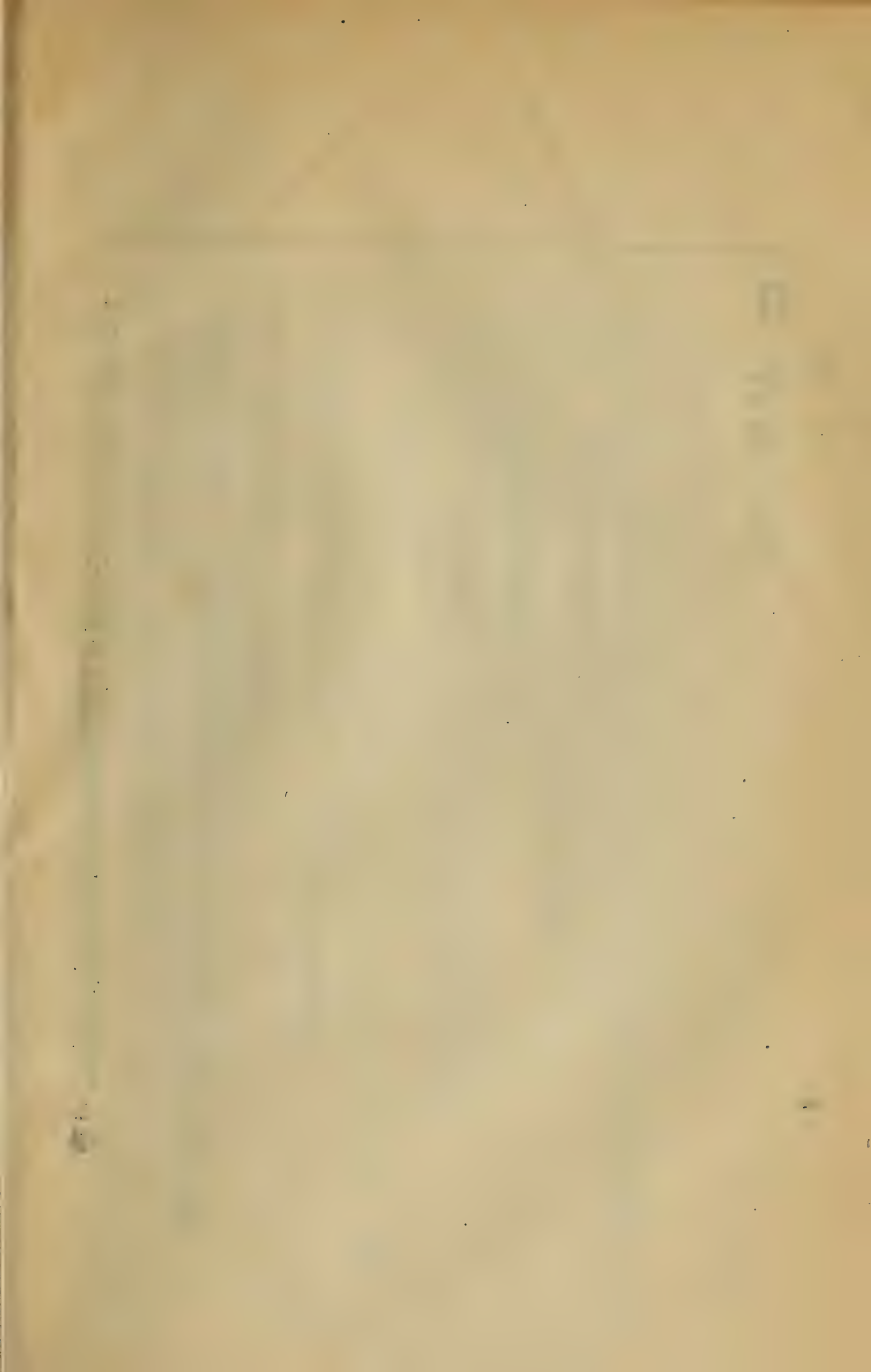
毛利豊前守、井伊・藤堂と合戰并安藤彦四郎戰死の事

小笠原兵部大輔父子戰死附保科甚四郎勇氣の事

大野治長・速水時之城中に歸る井石川重之拔駈附細川柵際に押詰むる事

目次終

目次



新東鑑卷之十

諸勢追々大坂へ押す

井池田左衛門督神前川先陣の事

十一月二日將軍秀忠公は、尾州名古屋に御止宿あり。然るに大御所の御内書相達し、此所に於て拜誦し給へるに、路次を甚だ急がせ給ふ事、理とは雖も、是に因つて士卒困弊し、行伍整齊せざる時は、輕忽の誹を得給ひ、勇武の瑕瑾ともなるべき間、御思惟あるべしとの事なりけり。同三日、卿相雲客二條の城に來臨あつて、大御所に謁せらる。御使番の内山城宮内少輔忠久・瀧川豊前守忠往・城和泉守昌茂・鈴木久右衛門重量・横田甚右衛門尹松^{にねまつ}・眞田隱岐守信尹・初鹿傳右衛門正信^{本書昌備}、以上七人を監軍として、諸將へ附置かる。

或記に、勢州の軍將本多美濃守忠政・濃州の軍將松平下總守忠明、四日陣の飯盛に進むべき旨を命ぜらる。是淺野但馬守長晟、今以て紀州和歌山を發するの告なき故に、世人怪みて、渠は幼弱より秀頼公へ昵近し、後に兒扈從の頭となりけるを、去ぬる秋幸長歿して、今年遺領を關東より給ふと雖も、豐臣家の舊恩を思ひ、内應する由風聞す。又藤堂も、未だ攝州の地に入らざる故に、是も巷説ありしかば、忠明が美濃組を進め、高虎が形勢を窺はるべき爲なり。高虎も亦之を察して、道明寺の陣營を發しけるが、殊更其先鋒渡邊勘兵衛吉光・藤堂仁右衛門高刑・藤堂新七・高治は、河州小山より、攝州平野に至る折節、大坂の城より、薄田隼人正・山口左馬助以下、糧米鹽等を侵略せん爲めに、平野に出でけるが、大に難儀し、城中へ引取りぬ。東兵則ち平野の邑里に入りて、捨てたる器械を拾ひ取らせ、大仙陵に至りて屯をなすと云々。

同四日、松平下總守正明〔忠明カ〕が美濃組の陣を、飯森に移す。暮方片桐市正且元より、大坂近邊の地圖を二條に獻じければ、本多上野・成瀬隼人正・安藤帶刀・板倉加賀守を

召して、地の利を論せられ、中井大和に命じ、彼地圖を改め畫かしめ給ふ。此日秀忠公は、濃州岐阜に到らせ給へり。同五日藤堂和泉守高虎は、泉州堺を左とし、住吉を右として野陣を張る。此所に去ぬる慶長五年、石田に與して浪人せし堀内安房守氏善が嫡子新宮若狹氏弘、其弟堀内右衛門兵衛氏滿は、本國紀州に蟄居し、世の變を窺ひ居たりしが、今度の亂を幸として彼國に起り、大坂に籠りけるが、堺の津を放火せんと、其兵三百計にて馳向ひし所、藤堂が勢住吉にありければ、其後を斷たれん事を慮り、堺に行かずして、大坂に歸らんとしけり。素より壯勇の士たるが、藤堂の先隊渡邊勘兵衛吉光が、千餘人にて控へし備へ、二町計も隔てたる前を、會釋もなく馳通り、城に歸り入りけり。折節霧深くして、咫尺の間も見えざるにより、流石銳武の譽ある渡邊勘兵衛なれども、遙に行過ぎて、其跡を慕ひしにより、其詮なかりけり。豫て御譜代の諸將を越えて、太閤恩顧の士たる藤堂和泉守に、先鋒の任を命ぜられしにより、關東の諸士の疑へる事を、藤堂の重臣等難澁の思をなす處に、此勢を討漏らせしかば、必ず故太閤の舊恩を慕ひ、城方へ密旨を通ずるかと、大御

所の思召も計り難く、次には武備を懈れるの謗も免れ難し。誠に渡邊が油斷の至なりと、高虎大に憤る。是より主従の間不快なりとぞ。叔新宮若狭は、秀頼公の命によつて、左馬助行朝堀内右衛門兵衛は、大和と改名したり。此左馬助と、先達つて召入れられし塙團右衛門は、譽の士たる故、秀頼公厚く稱愛し給ひ、騎士二十人宛に、輕卒を副へて預けられ、第一に斥候を役すべしと仰付けられけり。

或記に、藤堂和泉守は、河内の國府迄向ふ。松平下總守・石川主殿頭、何れも平野口より、住吉阿倍野原へ押出す。其折節城兵大野主馬介が組に、新宮左馬助といふ者、同組なる赤座内膳・榎島玄蕃允は、堺にあつて近隣を亂妨せり。赤座と榎島の二人は、平野葛井寺の近邊迄、關東の先陣來れる由を註進せしかば、早々引取りしに、新宮左馬助は大膽不敵の者にて、猶堺に居残りて近邊を掠めしに、大野主馬介、新宮が方へ使を以て、早々人數を擧ぐべしと申遣すと雖も、左馬助更に承引せざる所、俄に近邊騒ぎ立ちて、關東勢近付きたりといふに付、左馬助は手勢百七八十計にて堺を出で、住吉の南の松原へ上つて見るに、藤堂の先手渡邊勘

兵衛千餘騎にて、岸際を去る事二町餘りなり。是に依つて新宮は、捨鞭打つて住吉指して逃げたりけり。藤堂勢之を見て追駆け、討止めんとせしが、折節霧深ければ、渡邊下知して堺に奇兵を置き、味方をおびき出さんする謀なるべしと思ひ、堅く制して追はざる故、新宮は恙なくして歸れり。主馬が組の米田監物塙團右衛門・御宿越前守等援に來りしが、天下茶屋といふ所にて行遇ひ、口々に叱つて、大坂へ引取りけりと云々。或本に、天下茶屋は、西成郡勝間村の東なる新家にあり。秀吉公堺の政所入御の時、へ此茶屋に休ませ給ひしにより、世に天下茶屋といふと云々。

此日東兵の居を安からしめんと、城中より兵を出し、火を放ちて天王寺を焼く。折節大風頻に吹きて、猛火東西に分れ、餘煙四方に靡き、東金堂・西金堂・四面の廻廊・太子殿に至る迄、一時に焦土となれり。一本、此事を六日に作る。又秀忠公は、佐和山に着かせ給へり。

爰に福島左衛門大夫の長臣福島丹波治重の嫡男に、長門といへる者あり。先達つて父に勘當せられしが、此亂を幸とし、大坂の城に籠らん志にて來り、住吉の汀に船を寄せ、主從廿人計り平砂に上れり。藤堂が兵之を見て、誰人に候やと尋ねけるに、長門は、敵今頃爰にあるべしとは思寄らず。豊臣家の御味方に參りたる者に候。

御城中へ御案内を頼み申候といひければ、東兵等之を聞き、天の興と悦びおつ取巻き、一人も残さず討取りて、物始よしと勇み、此首を住吉の濱邊に梟せり。一本、此事を六日に作る。

又大坂にては、七組の長、速水甲斐守時之、旗奉行郡主馬助良州等、大野修理亮に對し、只今藤堂和泉守、微勢にして味方を放れ、住吉迄來れり。速に兵を發し、藤堂を討つべしといへども、座中の諸將、暗然として同心なく、衆議區々にて一決せざる故に、其議止みぬ。

或記に、松平下總守が組石川主殿頭、遠藤但馬守、徳永左馬助等は平野に屯し、番所を五箇所^{五箇所}に設けたり。時に豊臣家の斥候三騎、此所に來りしを、石川忠總が從士都石三九郎馳出で、一騎を討取る。残る二騎は逃去る。右の首級を大御所へ獻せし所、是れ常陣最初の首級なりと上意あつて、御感悅淺からずと云々。

或記に、播磨の大守池田武藏守利隆は、西の宮より神崎に向ふ。其弟備前の國主左衛門督忠繼は、備中の國士を組として七千餘兵、其弟淡路の國主宮内少輔忠雄も、攝州の地に馳入る所に、兄利隆より、神崎迄進めるの由告なかりければ、忠繼

憤を起し、浦江に着し、此處より唯一騎、神崎の利隆が屯に此恨を述べて、向後は一隊切に軍すべきの旨を相斷ると云々。

六日將軍秀忠公、永原に着かせ給へり。

或記に、今朝大御所へ中井大和言上しけるは、照高院御門主

或説に、今の妙法院御門主の地にましませりと未詳

並に三井寺の僧侶七人、大坂の密旨を得て、君を咒詛し奉る趣、三井寺の本覺坊訴ふ。依之板倉伊賀守に御吟味仰付けられ、一本に、御吟味は八日なり、三井寺の法泉院・光淨院

此兩僧、召に依つて來る。彼兩僧申すは、本覺坊不義の僧たるに依り、僧中詮議して、一山を追出致候に付、近き頃は、大徳寺邊に徘徊仕候由を申者有之候。追出されたるを意趣とし、照高院並に三井寺の僧中を惡み、斯く偽りて申すなるべし。其上照光院と三井寺の僧中と不和たる間、調伏合體の儀あるべからずと、重ねて申上ぐるに依り、板倉より彼本覺坊を召捕へ、差出すべき由を申渡す。

別記に、照高院と不和たるの起は、先年聖護院・實相院・圓滿院の三御門主にて、三井寺を御支配たる所に、秀吉公より以來、聖護院計りの支配となりし故に、

斯くいへりとぞ。一本に、關東調伏の儀は、金地院を以て御尋ありしと云々。

一本、此日松平下總守が美濃組、平野を發して段々と進む故に、平野の警固を、松平安房守信吉に命ぜらる。信吉が相守りし泉州岸和田の城を、北條出羽守氏重に渡し平野に赴き、木津川の船留を、溝口伊豆守宣政に命ぜらると云々。

爰に池田武藏守利隆は、神崎川にあり。舍弟左衛門督忠繼は、尼ヶ崎に陣せしが、大坂より此處に番船を置きて相守れり。記には、織田有樂竝に七組の長、此所に出張すと云々。然るに左衛門督は、人數

を押出して、家臣矢野兵庫佐分利さぶり九之丞を物見として、海老江の地形を窺はしむる處に、矢野・佐分利歸り來つて、彼所は兩方沼にて、前狹く末廣し。御方の爲には利少なく、敵の爲には便あらんと申す。重ねて由井伊豆・丸山豊後・渡瀬淡路を遣はしし所に、三士歸りて、味方に利あらんと申すに依り、忠繼は、矢野・佐分利二人が言と相違するを以て、其由を尋ねられしに、由井・丸山・渡瀬が申すは、君人數を押出させらるゝは、合戦に望ませ給ふならずや。城兵味方の大軍なるを見て、土地に利なき時は、敵必ず怖れて出づべからず。然る時は君合戦を好み給ふとも得べからず。城

兵土地の利を頼みにして居る處を、味方の大軍を以て長々と押出し、而後急に討たば、御勝利案の内ならん。速に御勢を向けられなば、御舍兄の備跡に續くを見て、城兵是に恐れ、戦はずして引退き候はんと申すに依り、忠繼尤もなりといひて急に押寄せ、神崎の渡を、會釋もなく打渡せば、從兵戸川肥後守・花房志摩守・同助兵衛等も之に従ふ。城兵も身命を〔脱字ア
ルカ〕防ぎ戦ふと雖も、叶はずして引退きけり。

或本に、花房助兵衛は老衰に及び、知行所備中に蟄居の處に、大御所より、池田左衛門督が方へ向け、御内意あつて、大坂へ出陣すべき由仰ありしかば、忠繼より、右の趣を申遣はし、處に、行歩不自由にて、家内さへ心に任せざる仕合なれば、戰場へ出でたりとも、何の御用にか相立ち申すべきと、辭退せしかども、御内意の上なれば、再三忠繼より申遣し、により、志摩守と相共に出勢せりと云々。

別本に、花房助兵衛は、もと浮田秀家卿の家臣なり。或時秀吉公、戰場に於て野陣を張り幕打廻し、猿樂を始め給ひけるにより、諸軍其前を通るには、何れも下馬せしが、花房は馬に乗り、甲をも脱がず通りけるに依り、番人類に制しけるを、

助兵衛大音にて、戦場に於て猿樂をする戲氣たる大將に、下馬すべきかと唾を吐きて行過ぎけるを、秀吉公聞き給ひ、大に御立腹まし、それ秀家をば早く呼べよと仰あつて、右の趣を宣ひ、助兵衛儀縛首しばりくびを討つべしと仰あり。秀家卿も爲方なく其座を立たれ、一町計りも行かれしと思ふ時に、秀吉公御思案ありて、それ秀家を呼返せと宣ひけるに依り、秀家卿立歸られければ、一旦の怒にて、縛首にせよとは申し、かど、さもなるまじ。切腹を申付けらるべしと宣ひければ、秀家卿承り、又其座を立ちて、一二町も行かれしと思ふ頃、重ねて呼返し給ひ、今天下に於て、予に向ひ、先の如く大言せん者は覺なし。天晴大剛の武士なり。斯る者を殺すに忍びず、加増して仕はるべしと仰ありけりと云々。

舍兄武藏守利隆を始め、森右近大夫有馬玄蕃頭、神崎川の上の瀬より、悉く押渡れり。

或記に、加藤式部少輔明成は、豫州より渡海し、神崎川上に控へ、其臣加賀山小左衛門を以て、斥候たらしむる處に、歸り來り、早く川を越して屯し給へと申す。又

川村權七・佃次郎兵衛一成兩人の功臣は、此寒天、而も夜陰に及び川を越えなば、士卒凍えん。其時敵兵寄せ來りて一戦せば、手足かゝまり、忽ち利を失ふべし。然れば川の此方に夜を明し、明早天に川を渡して宜しからんと申すにより、皆是に同せり。加賀山重ねて、拙者が軍理未だ不熟と雖も、今宵川を打越して然るべし。其故は、此川の上下なる味方の勢を見るに、早川を渡らんとする用意をなす。縦ひ踟躕する勢ありとも、一陣渡さば、諸軍皆渡し果て、明朝合勢せん時、當手計り一戦も遂げざるに於ては、武名の瑕瑾遁るべからず。且兩御所の御疑を蒙り、國家危からん。今般の軍は、天下中を味方とする事なれば、戦の土地を爭ふ端軍とは大に異なり。然れば強ひて勝敗にも拘るべからず。後度の事をも計るべからず。只人に先んずる戦を以て、專要とし給へかしと申せば、川村大に感心せり。佃は暫く思惟し、足下壯年と雖も、只今の諫言理に當れり。我等が及ばざる處なりと、忽ち川を渡し、北中の島に屯せり。世に川村・佃が忠を專として、己を立てざる事を感じりと云々。

或記に、七日、大御所、和州平群郡龍田より國分を、近日大坂へ御動座あつて、住吉を御本陣とせらるべき由、令を下し給へりと云々。

將軍伏見へ着御附新宮一揆の事

爰に紀州和歌山の城主淺野但馬守長晟は、領國紀伊國を發し、大坂に向ふ處に、一本、は、藤堂が御陣住吉の傍今和州吉野・紀州北山筋には、淺野が隙を窺ひ一揆蜂起し、紀州新宮淺野右近が城を攻めんとす。城代戸田六左衛門之を抑へて註進す。但馬守聞きて大に怒り、熊澤兵庫といふ者に、二千餘人を分ち遣はし、加勢として途中より差下しければ、熊澤、一揆等と川を隔て、備をなせり。爰に長晟が臣狩野主膳は、敵の長たる湊惣左衛門と舊知なる故、渠が許へ只一人行きて往事を談話し、虚を窺うて湊を刺殺せり。又右近が家來等は、長晟より加勢の來るを見て大に氣を得、城代戸田六左衛門は、新宮川を打渡し、一揆の兵を攻討ちければ、賊徒等二百餘人は、忽ちに敗走し、淺野が手へ、首卅餘級を得て註進しければ、大御所聞召され、御感狀を

下し給へり。扱將軍は、永原に二日御逗留あつて、御跡備を待たせらる。然るに安藤對馬守重信は、後陣の勢を引牽し、同八日永原に押付く。又池田武藏守利隆は、一萬餘兵にて長柄川に至りしが、先に弟左衛門督忠繼に、神崎川の先登を奪はれ、無念骨髓に徹し、いざや此川を渡り、南中の島に到らんとす。從兵の古老諫めて申すは、敵の虚實も探らずして攻蒐り、利を失はば後の憂なり。先づ斥候を遣はし様子を探ひ、其後に御合戦あるべしと差止めけり。大坂よりは此所へ、織田有樂其外七組の者共人數を備へ、川邊に陣せり。利隆之を見いらつて、是非とも川を打越え勝負を決せんと、馬の轡を並べ、旗の手を颯と進め、川へ乗入らんとする所に、御使番の城和泉守昌茂、之を見て申すは、敵は大軍にて、而も大坂に近し。是れ主戦なり。味方は微勢にて大河を渡る、是れ客戦なり。川を越ゆる事、必ず無用と制せり。其時利隆、敵を見ながら進まざる時は、勇なきに似たり。已に川を越えん具をなす上は、忽ち川を押渡らんと申せば、昌茂重ねて、是れ私に非ず。大御所の命なれば、決して川を渡る事罷成らずと申せば、武藏守答へて、川を打越して利なくんば、敵中

に死なん。縱令我勢一隊悉く歿すとも、味方の弱みになるべからず。又命を全うし城を攻めたりとも、勝つべきにあらず。早く川を渡り、必死の一戦に決せり。然るに敵を見乍ら兵を收めなば、軍を起して此處に来る者、何の爲にかなる。大御所決して斯る非理の命あるべからずといへば、和泉守齒嚙をなして小踊し、汝等我が言を輕んじ用ひざる時は、叛逆の徒に準すべしと、大音揚げて罵りければ、利隆も此言を聞き、牙を嚙んで止りけり。又今日暮方に及び、左衛門督忠繼・戸川・花房等の備中勢は、長柄川の下の瀬は水深き故、舟筏を組んで渡さんとする處、城兵南中の島を棄て、天滿を持固む。記に、此時天滿を自燒す
と作るは誤なりとぞ。翌九日、池田左衛門督、北中島より南中

島に移れり。此時石川主殿頭忠總、山陰及び豊後の國の軍士等、長柄川・吹田川を越

して此中の島に到る。池田武藏守利隆

一本に、有馬玄蕃頭豊氏もあり

も爰に赴き、中の渡りに舟橋を渡

し、天滿に押渡らんとすれども、城和泉守又之を押止むるにより、空しく留まれ

り。同日將軍、膳所に御止宿あり。同十日、

一本に、今日永原を發興し給ふとあり

將軍を御迎として、御舍弟

義直卿・賴宣卿、追分迄來らせらる。諸卿並に僧徒、或は大津に出で、或は追分に出

でて謁し、未刻將軍は伏見に着御し給ふ。又本多佐渡守正信は、坂東の政事を沙汰し、御後より發せしが、今日尾州名古屋に來れり。同十一日、將軍伏見より御入浴あつて、大御所へ御面謁し給ひ、御出軍を待たせられし事を謝せらる。其上に本多上野介・成瀬隼人正・安藤帶刀・板倉伊賀守・酒井雅樂頭・土井大炊頭・安藤對馬守等に仰付けられ、明後十三日、御出陣と定め給へり。

或本に、成瀬隼人正を大坂表に遣はし、池田左衛門督忠繼・戸川肥後守達・安・花房志摩守が一揆、長柄川を越して南中の島を取敷き、雜卒を討捕へ、首級を獻ずる事を褒美せられ、武藏守利隆を始め、將軍是に後れて、未だ神崎近邊に支ふる所以を、窺はしめ給ふ。又當月朔日以来今日迄二々度、尾州名古屋の城に、豫て貯へ置き給へる白銀三千貫目、二條に來着すと云々。

或本に、尾州義直卿は伏見を發し、綴喜郡木津迄出張せらると云々。

又爰に奥州會津の城主松平本姓蒲生下野守忠郷が家人に、同半兵衛重政といふ者あり。忠郷の母儀家康公の御女に對して、度々違背する事あり。母儀此事をば、内々大御所へ訴へ

られしによりて、半兵衛が祿を放つべき御誼の旨、老臣より奉書を投ず。大坂御歸陣以後、種々陳じ申すと雖も、終に御赦免なく、駿府に於て死す。且半兵衛に同心したる池信濃以下數輩浪人す。半兵衛が居城奥

州津村の城には、蒲生五郎兵衛を移し、又蒲生源左衛門尉郷成をば呼返し、三春の城に差置くべき旨、仰出さるゝに依つて、源左衛門を召寄せらるゝ處に、路次にて病死せり。郷成が嫡子源三郎郷喜を、源左衛門と改名して三萬石、二男源兵衛郷舍に、一萬五千石を賜はりて、兄弟を返す。蒲生家執權の事は、町野長門守・玉井數馬兩人、相勤むべき旨御下知ありけり。又下野守が使者に來りし安達内匠といふ者申上ぐるは、蒲生主計事、年來武勇に達し、其上無欲にして、家中及百姓等を撫育するにより、家貧しき處に、今度兩御所大坂へ御發向に付、下野守が人數も差向け給ふべきかの由を風聞す。依之蒲生主計が訴に、家貧うして兵を動かし難し。願くは黄金拜借仕り、忠郷が名代として大坂に馳向ひ、討死を遂げ度由望み候へども、下野守忠知と諱す中務大輔兄弟共に幼少にて、殊更主計は、御改易仰付けられたる岡半兵衛が一族に候故、訴訟を取次ぎ申す者御座なく候處、主計之を恨み憤り、忽ち自害

仕候。此趣は、先達つて江府に御留守たる忠輝朝臣迄申上候へども、今又直に言上仕る由を申す。大御所の仰に、主計事、武功ある者なり。渠が如き者は、善惡に依らず、訴訟の事あらば舉達すべき處に、打捨て置く事、老臣等が緩怠甚し。主計卒爾の自害、不便の次第なり。凡そ家中の困窮は、其將の過なり。然れども忠郷未だ幼少なり。是等臣下が罪なりと仰せられ、御立腹ありけるに依り、安達内匠、迷惑して國に歸れり。秀忠公には、未刻伏見に還御ありけり。扨先達つて大坂へ捕へられし泉州堺の榮屋宗薫は、茶道に熟する故を以て、朋友たるはとて、織田有樂、是が爲めに愁訴頻なりしに依り、遂に宗薫父子縲紲を免れ、上京して二條に登營せり。

榎島玄蕃允被讒言一事并兩御所京伏見御出陣の事

大坂城中に於ては、榎島玄蕃允重利、心變じて關東へ内通する由を、秀頼公へ訴ふる者ありけり。是故に七組の長たる眞野豊後守頼包、野々村伊豫守雅春兩人の外に、北川治郎兵衛尉宣勝に、人數を差添へられ、榎島を搦捕りて來るべし。若し異儀に

及びなば、忽ち誅戮すべしと仰付けられければ、兩士承り、城の西なる玄蕃允が持口に至り、重利を取籠め、残る勢は槇島が人數を押へ、或は持口を守らしむ。時に眞野豊後守、玄蕃允に向つて、其方事、關東へ内通する由上聞に達せり。さるに依つて糺明すべしと仰を蒙り、兩人罷向うたり。申譯ありやと尋ねれば、其時玄蕃允、勇士たる者は、二心あるを以て恥辱の第一とす。然れば某反忠の虛名を受け、骸を軍門に晒し、末代子孫の面を汚さんこそ口惜しけれ。我れ此事を深く歎く。今陳防して命を全うする事を願ふにあらず。只切腹仕らん。我が首取りて實檢に入れ、二心なき旨を、君にも仰上げられ、傍輩にも語り傳へて、汚名を雪ぎ給はれと申して、已に自害せんとす。眞野・野々村兩人は、玄蕃が心底、野心なしと見てければ、押止め、貴殿申さるゝ處尤なり。君よりは糺明すべしとの仰により、兩人罷向ひたり。卒爾の自害詮なしと、北川治郎兵衛を使として、秀頼公へ此旨申上げければ、暫く罪を宥められ、大野修理亮治長に召預けらる。此玄蕃は、速水甲斐守が組下にて、其身器量ありて、秀頼公に忠節を致すべき者と選に遇ひ、一方の大將を承り、子孫

の眉目に當てんと思ひけるに、不慮の讒言により、押籠められて居たりしが、虚名なる事分明にして、終に御赦免を蒙りけり。

記に曰、北川覺書に、治郎兵衛一人罷向ひて問答し、玄蕃が申分を上達し、死罪を申直し、修理亮に預けらるとあるは、誤なりと云々。

或曰、玄蕃允、後に細川越中守に仕ふ。然るに細川家に於て、烏犀圓調合の時、代狐を殺すの役なりしが、故あつて家斷絶せりと云々。

同十二日、城中には軍評定あつて、長曾我部毛利・真田・後藤・明石等新參の輩が申すは、大御所天王寺へ着陣せられ、備定まらざる以前に逆寄して、勝負を決せんと望むを、治長聞きも敢ず、千騎二千騎の私軍には、左様の手段に利を得べけれども、是は天下の勢を引受けてする合戦なれば、若し初度の戦に兵を打たせし時は、後日の軍致し難からん。只堅固に城へ籠り、敵を偽り寄せ、射伏せ切伏せ、合戦せんには如かじと申せば、七組の者共も之に應せし處、新參の輩一同に、凡そ合戦の道は、不意を討つて利を得る事、古今其例多し。然るを大軍に對し、尋常の如く戦ひなば、

萬に一へも勝利あるべからずと諫めけれども、衆議歸一ならずして相延びけり。

一説に、大坂の老臣等、始より籠城を旨とするは、關東諸將の中に、太閤恩顧の輩あれば、是非反忠せんと、夫を頼として、度々の軍に圖を外しゝものなるべしといへり。

同日、天台眞言の僧侶在洛せる中に、秀でたるを召集められ、傳長老を以て、高野の僧侶に、清淨行者不入涅槃破戒比丘不墮地獄といふ圓覺經の文を題とし、議論御聽の處に、佐竹右京大夫義宣參着する由、近臣言上せし處に、大御所、論議の間に、之を披露するに及ばんやとて怒らせ給ひ、論議終りて僧徒に對せられ、大坂に軍事あつて發向す。幾程なく歸京し、又論議を聞くべしと仰あつて後に、佐竹拜謁せしむる處、御容顏御言語殆んど平日の如く、聊も軍旅を以て、心を勞せらるゝ體に非ず。此旨今日より三日を過ぎて大坂に風聞し、舊臣客將、大御所の英雄にして、無雙の大度たる事を感嘆して、秀頼公の利運あるべからざる事を憂苦せりとぞ。今日晩方、南光坊天海并に金地院傳長老出仕し、明十三日、南行に凶日たる由言上するに依

り、御出陣延滞せらる。此由を伏見へ仰遣はさる。同十三日難波より、監軍横田甚右衛門・山城宮内少輔歸參し、先鋒の諸將、城外四五里に屯して、遠く圍む由を演説す。大御所、諸將等に、大樹より下知なき以前に、軍すべからざる旨、制令すべしと仰付けらる。同十四日本多佐渡守は、東武の法制を施し、大御所へ拜謁す。

一本に、同日制札を出さる。

定

一、軍勢甲乙人等亂妨狼藉之事。

一、放火之事。

一、竊取田畑作毛事附伐採竹木事。

右條々堅令停止畢。於違犯輩者速可被處嚴科旨、所被仰出者也。仍下知如件。

慶長十九甲寅十一月

安藤對馬守

土井大炊頭

酒井雅樂頭

一本に、内藤左馬介政長は、房州に在番す。然るに息帶刀忠興、大坂へ供奉せざる事を遺恨に思ひ、父政長へ頻に請ひければ、左馬助黙止し難く、兵士二十騎、輕卒百餘人を授けゝるに任せて、急ぎ伏見に至り、本多佐渡守へ達しければ、正信、其時、番所を捨て卒爾に上京し、台命を輕んずるに似たりといひけるが、大御所へ言上に及びければ聞召され、若輩の士は、斯く思ふも尤なりとて、酒井左衛門尉が組に入れ給ひ、忠興が舅松平丹波守康長が備に在りて、忠を盡すべしと仰ありけり云々。

家康京都
を發す

同十五日卯刻、記に辰刻、大御所京都を御動座あり。供奉の輩、何れも小具足に差堅め甲を着す。未刻城州綴喜郡木津へ着し給ひ、名主の家に御旗を立てられ、暫く御陣を取り給ふ。供奉の輩は鎧を脱ぎ、過半野陣を取る。御旅館狭き由にて、御湯漬を召上がらるゝと其儘、扈從の士僅十五騎にて、此所を御立ありけり。何故にやと尋ぬるに、臺所下男の中、傳馬人足に紛れ者一人ありけるを見咎め、即ち搦捕りて、御穿鑿

仰付けられしが、密事たるに依り其沙汰なし。

傳曰、城方より、大坂口の堤を掘切れば、本道閑道共に水押込み、供奉の輩遲滯し、守禦疎なる處へ、伏兵を發し押懸け、討取るべきの謀にて、其註進の爲の間者なる由、御詮議の上、白狀に及びけりと云々。

秀忠伏見
を發す

初大御所は、本道を除け給ひ、奈良へ向つて御急あり。御跡より次第々々に追付き奉りける程に、頓て中坊左近奈良の代官なりと云々が宅に御止宿あり。觀世宗説が脇師延命喜四郎入道、御前に出でて謳を唱ふ。一本、高砂・老松三輪とあり。麾下の輩は、今日道を急ぎ給へる事を怪み思ひしが、此謠にて、自然と靜まりしとなり。又秀忠公は、同日卯の半刻、伏見を御出陣にて、牧方に御止宿あり。兼々同朋筑阿彌が經營せし茶亭を以て、本陣とし給ひ、態と弓銃の卒を後陣に置き給ふ。又松平周防守康重岡部内膳正長盛は、山陰道の兵を率し、攝州の地に入り、吹田川を渡り、西成郡北中島に至れり。又去年大久保氏と縁組の事にて蟄居せし山口修理亮重政、今常州河内郡牛久城主一萬石を領する山口氏の先祖なり。武州龍隱寺にありけるが、土井大炊頭利勝が許へ、書を以て、日頃深く關東の御厚恩を仰

ぎ奉る故、今度僞り大坂へ籠城し、透を見て秀頼公を刺し、御厚恩を報じ奉らんと存じ、妻子を江府に人質として残し置き、急ぎ大坂に籠らんと發足仕る處、箱根に於て止められ候。哀れ此儀御免を蒙りたき由を乞ひけるに依り、大炊頭言上せし處に、籠城の事は、差止め候やうにと命せらるゝに依り、利勝は、本多佐渡守と連判して、返狀を遣はし之を留めけり。

向井將監到着^并眞田隱岐守爲御使幸村へ參る事

十一月十五日の夜、雨少々降りければ、同十六日の巳の中刻に、大御所は奈良を御出興あり。本多上野介正純が曰、面々末々の者迄、是より甲冑を帶し申すべく候はんやと言上せし處、仰に、去る慶長五年の秋、關ヶ原へ向ひし時、江戸の町人金六といふ者、道中へ具足を着し來りけるを、村越茂助^{直吉と譯す。長門守吉時入道道半が父なり}之を見て、金六は町人の身として、御傳馬人足の事に走廻り乍ら、武具を着用仕るは、心得ざる事と申し、を、其儘にして置けと申し、が、程なく鎧一領、木の枝に懸けてありつるを、

あの具足取りて來れと申して吟味せしに、果して金六が具足なるに依り、金六を呼出し、仔細を尋ねし處に、随分と精を出し、是迄着用仕り候所、次第に草臥れ、中々着用なり難く、捨置き候と申したり。總じて武具は、長く着し難き物なれば、先づ此儘にて進むべしと仰あつて、行程四里を経て、法隆寺の内、阿彌陀院に着御し給ふ。此日秀忠公は、牧方を御立あつて、河州河内郡平岡の神官へ着御し給ふ。美濃國士大島治右衛門光成・岡茂兵衛光政・同久左衛門義俊守護せり。又同日水軍向井將監忠勝は、大坂轉法院に着船せり。抑向井忠勝は、先達てより大御所の上意を蒙り、江戸を出陣して、相州三崎迄來り、夫より船數都合六艘にて渡海せし處に、打續き西風烈しく、諸船進む事を得ざれば、各三崎へ戻すべし。さり乍ら暫く相待ち、風少し靜まらば、纜を解かんと議すれども、風猶止まず。之に依つて各三崎に歸ると雖も、向井が船竝に従者の船一艘は、片帆にかけて走り行く。夜に入りて、風益盛なりと雖も、將監下知して帆を迦し、櫓を以て濤を切り、押し貫きて押しける故に、殊の外疲れけれども、向井ちつとも氣を屈せず、心を勵まし力を添へ、三日が間に勢

州龜島に至る。與力渡邊五郎作家來的場太兵衛の船は行方知れず。向井も氣疲れ力盡きけるにより、療養を加へ、後大坂へ來りしが、兩將軍の仰に依つて、轉法院口へ相向へり。餘の船は、若干の日を隔て、大坂に着しけり。

或記に、向井將監が船中にて心苦せし事、大御所の上聞に達し、父兵庫は、竹馬の頃より交深し。老衰して、汝が風波を凌ぐ事の危さを、晝夜氣遣ふべし。當地へ無事に着岸せる由の飛札を、早く遣すべしと、難有き仰ありけりと云々。

同十七日卯の上刻、大御所は法隆寺を出御し給ふ。供奉の輩鎧を着す。金地院傳長老・林道春・片山興庵・法印宗哲等、武具を帶し御前に伺公しけるを上覽あつて、予が幕下にも、三人の法師武者ありとて、笑はせ給ひけり。龜ヶ瀬越は順路たりと雖も、軍旅に赴く者、駄馬匹夫共に此道を往くべからざる旨、往昔上宮太子の御遺戒あつて、今以て石牌存するにより、關屋越を歷て、住吉に着御あり。

或本に、大御所は、加賀利常を召して、藤堂和泉守と共に、大坂の攻口地形の損益、地圖を以て之を論せられ、利常に教へ給へりと云々。

或本に、志州の九鬼長門守守隆、尾州師崎の千賀與八郎信親、且小濱民部光隆等の水軍今日着陣し、向井と共に轉法院口に船を進む。此外南海中國の諸侯の水軍、野田・福島に續く新家居村を乗出さんと欲して、大坂の番船と、互に火炮を發して挑み戰ふ。然れども新家居は、戸原入江にして船を寄せ難く、大坂より又陸地にも兵を賦して、鳥銃を放つ故、即功を遂げ難しと云々。

或本に、奥州の伊達・上杉、羽州の佐竹、已に伏見に着しけれども、後軍の登るを待つて、未だ大坂に至らずと云々。

或本に、南部家説に、信濃守利直、畿内の地にて、大御所大坂に赴かせ給ふ時に到着し、路傍に蹲踞せり。諏訪部宗右衛門定吉披露して、拜謁を遂ぐ。大御所已に軍位相定まる間、後軍に控ふべき旨を仰出さると云々。

或本に、大野道犬が侍四五人輕卒二三十人計りを、忍船に乗せて、葦島新家居邊の寄手の水軍の體を窺はしむる處に、二三日を経て後、夜中痛く寢入りたるを、西國方の番船より之を測り知りて、密に忍び寄り、碇綱を切つて、川下の味方類

船の間へ引入れて、塵にすと云々。

秀忠公は、今日平岡を御立あつて、攝州平野に着かせ給へり。又藤堂和泉守高虎は、住吉の北なる陣所より、天王寺に移る。其舊營は、尾張義直卿の陣所とせらる。又岡山と茶臼山との間の葭谷口に、駿河頼宣卿屯せらる。酉の刻には、大樹平野より住吉へ成らせられ、大御所に御對面あり。尾張義直卿・駿河頼宣卿も御一座にて、御陣所以下、様々の事仰合され、歸らせ給ふ。今日暮方より、大雨頻りに降りけり。此時城中の兵、心を一にして逆寄せにせば、東國勢若干討たるべきに、其儀なし。眞田以下、此事を様々申しけれども、種々異議あつて、寄せざりけりとぞ聞えし。叔大御所、眞田隱岐守信尹を召され、汝眞田左衛門佐が方へ行向つて申すべき趣は、幸村大坂に合體の儀を翻し、味方に屬し従ふならば、信濃國にて一萬石を給はるべしと仰遣はさる。此隱岐守は、眞田安房守信幸が舍弟にて、左衛門佐にも正しき伯父なれば、今更此御使を承れば、隱岐守は潜に幸村に對面して、上意の旨を演説す。左衛門佐申しけるは、上意の趣、身に餘り有難き所なり。然れども某は去ぬる慶長

眞田幸村
家康の招
きに応ぜ
ず

五年關ヶ原の合戦に、御敵對仕るにより、身の置所なく、數年高野山に籠り、一族を養ひ露の命を送りしに、此度豊臣家に召出され、領知としては給はらねども、過分の人數を預けられ、大將の號を免せらるゝ事、生前の喜是に如かず。然れば御味方申すべしとは、得こそ申すまじけれと返答しければ、信尹も爲べき様なく、罷歸りて御前に出で、委細に言上しければ、大御所聞召され、返々も殘念なり。汝今一度行向ひ、信州一箇國を與へん條、吳々申すべしと仰遣さる。信尹復行向ひ、重ねて上意を申聞かず。其時左衛門佐も、謹んで上意誠に有難し。身不肖なる某に、信州一國を給はらん事、生涯の面目なれば、上意に隨ひ申度候へども、秀頼公より御頼ありて、一旦御請を申上げしを、祿に愛で今更約を變せば、人豈人倫といはんや。只一筋に討死ところ思定め候へ。併し乍ら若しも御和睦にならば、領知を給はるに及ばず、足下の扶持を分け給はらば、身命を抛つて御奉公いたすべし。旗を御立あらん中は、縦ひ日本を半國下し給ふとも、御味方に參るまじ。自今以後此事とは、御對面致すまじ。御入來必ず御無用なりとて、終に隱岐守を返しけり。

眞田隱岐守、左衛門佐が陣へ使する事、信僞雖未詳、記に

依りて之
を載す。

或記に、天正十八年以前、江戸城主は、北條の臣遠山左衛門佐景政なり。然るに太閤北條を攻め給ふ時、景政は小田原にありて、弟兵部大輔に、江戸の城を守らしむる處、景政が甥遠山丹波守、眞田隱岐守と示し合せ、志を家康公に通じ奉り、案内者として、川村兵部及景政が從卒等を追出し、家康公を渡御なさしむ。其功に依つて五千石づつ御加増あつて、信尹は舊領合せて一萬石となる。然るに信尹功に誇り、加賜微少なるを恨み、江戸を去り、秀吉公に屬せんと乞ひしかども、太閤敢て御許容なき故に、浪人となれり。然るに蒲生氏郷に仕へて一萬石となりしが、後家康公、隱岐守を召返され、五千石を給ひき。

大御所茶臼山御巡見^并蜂須賀乗取穢多^ケ崎壘之事

十一月十八日、家康公天王寺に來らせ給へば、秀忠公は、平野より出合はせ給ひ、已の下刻、兩御所は茶臼山へ移らせられ、攻口を遙に御巡見あり。此山を陣所とし給

ふべしとの事なり。

或本に、天王寺の邊に、荒陵といへる三あり。一は天王寺村にあり、俗茶臼山と呼ぶ。一は岡村にあり、秀忠公此所に陣し給ふ。一は國分村にありと云々。

尾

張・駿河の兩卿・本多佐渡守・井伊・藤堂・本多美濃守・松平下總守等も參向せし處に、御備の定あり。申の下刻に還御あつて、兩御所住吉に於て軍議し給ふ。西尾丹後守忠永、記に、豊後守忠政とあるは誤なるべし、味方の軍兵等、大和の國に亂れ入りて、堂社佛閣を破壊するにより、其狼藉を鎮めん爲に彼地向ふ。

記に、久世三四郎・坂部三十郎といへる者あり。去る慶長十三年、遠州横須賀を立退きて籠居せしが、不慮に此亂あつて、大樹御出馬の砌、彼兩人は、先年大須賀五郎左衛門康高が手に屬し、數度武功ある者共なり。然れば今度召出さるべしとありけるに依つて、夜を日に繼ぎて馳せ參り、御目見えすと云々。

一本に、久世坂部拜謁の後に、大坂の城郭、縦ひ總曲輪を破るとも、無類の名城なれば、抜く事を得難し。向城を所々に築き、大御所は、畿内の地に放鷹し給ひ、大樹は、一旦伏見迄軍を返され、來春に至り、再び御動座あらんかと會議せられけるが、今已に井伊・藤堂越前の猛勢、天王寺表敵城の黒門に迫り、其餘も總構を幅

つる事數丁に過ぎず。總攻あつて、外郭を破り給ふべきに決し、天満川仙波口の川水を乾し、步渡りにせん爲に、淀川の流を、新莊村より鳥飼邊へ掘通し、新莊村の端にて、北中の島の間なる川口を堰留め、淀川の流を北へ落して、天満筋の河水乾かば、土俵葦芽を投入れ、步渡して總郭を破るべしとて、攝河兩國より土俵數廿萬餘、葦芽の數悉く運送すべき旨を、觸れ促し給ふと云々。

川口寺島の南の崎に向ひ、三軒屋の端穢多ヶ城へ、小妻の郷に陣をなす蜂須賀阿波守至鎮が船大將森甚五兵衛は、川より進み、稻田修理宗祐・中村右近は、陸地より向ひて、土地の損益を見届けさせけるが、阿波守は、御陣所へ參向して、兩將軍へ御目見を仕り、彼地の次第を具に言上し、穢多ヶ崎を攻めて見申し度旨を望み申す。家康公聞召され、一段然るべし。松平宮内少輔淺野但馬守等に申合せ、越度なき様に相働くべき旨上意ありけり。

或記に、至鎮穢多ヶ崎を攻めんと言上しければ、家康公、彼城は馬喰が淵・阿波座・土佐座と、砦四つ並べり。淺野池田に牒じ合せ、之を屠るべしと仰あり。蜂須

穢多ヶ崎
に於て大
坂方敗軍

賀則ち彼兩家に此事を告げければ、各間諜をして窺はしむ。淺野が使節は、此砦
編小にして、大兵を費すべからず。蜂須賀一軍にて攻むるに足れりと、兵を發せ
ずと云々。

或記に、穢多ヶ崎・穢多ヶ城と二ヶ所なり。穢多ヶ崎の壘は、渡邊といへる地の内

にて、野田・福島と續けりと云々。

穢多ヶ崎の壘は、大坂西濱町にあり。本願寺光佐上人築けり。慶長の役、樋口雅兼これに據ると云々。

扱穢多ヶ崎の砦には、大坂より明石丹後守全延、白赤段々の旗に、赤き暖簾の馬印
を押立て、守り居たりし處に、蜂須賀阿波守至鎮は、十九日の未明に、他の勢を交へ
ず、卍字の紋付きたる旗を眞先に押立て、四半の上に、烏毛付けたる馬標ウマジロシを朔風に

翻し、敵の番船を急に攻めければ、大坂方も、身命を惜まず戦ふと雖も、至鎮が家人

稲田修理・中村右近・山田織部・樋口内藏助、舟手には森甚五兵衛・同甚太夫、舟を乗込
み、無二無三に掛れば、城兵も今は堪り兼ね、立足もなく敗北せり。蜂須賀大

に勝利を得て、即ち使を住吉に遣し、本多上野介に就いて言上せし處、大御所御感

ありて、使として眞田隱岐守・安藤治右衛門

一本渡邊治右衛門

を遣はされ、御感の趣を申渡す。

扱彼地は、至鎮が家人中村右近に侍を添へ、柵を附けて守らしむ。其後御使あつて、
 彼地の人數は拂ふべき由仰下されける處に、阿波守は、上意身に餘り、忝く存じ奉
 り候。さり乍ら彼所を、敵再び圍むべきかと、捨て、歸らんにも口惜しく存じ奉り
 候。某に於ては、是より伯樂が淵に赴き申度候間、御前然るべく頼み存ずると返答
 するにより、使者立歸りて此趣を言上しければ、大御所倩御思案あつて、今枝葉たる
 敵の砦を、悉く攻落さんには、果つる期あるまじ。阿波守が如きは法令に及ばず、
 其餘は戒むべしと宣ひけり。今日加々爪甚十郎忠澄・豐島主膳・信満・日下部五郎八宗
 好^{一本}重好・山上彌四郎・田上右京村田權右衛門を、假に御使番に列す。未だ五の字の指
 物は免許なかりき。

或記に、御使番といふは、御譜代武功の衆計りのやうにて、取分け小栗又市など
 は、仲間嫌を致し候故に、人數を相増し候事もなされ難く、依之御使役と仰渡さ
 れしが、家光公の頃より、御使番と號し、五の字の指物御免ありきと云々。

一本に、今十八日、陸奥守政宗が使者山岡志摩重永伺候して、四五日中に、陸奥守

着陣すべき故、屯の地を伺ふ處に、木津今宮の間に備ふべき旨、御詔を蒙ると云云。

同廿日、畿内に大雪降ると雖も、攝州には降らず。

或本に、同日大御所、本多上野助正純を召され、城中織田有樂並に大野修理亮方へ、内狀を遣すべき由仰付けらる。是は先月より、大野壹岐守氏治を以て、御和談の儀を仰入れられしが、重ねて秀頼公御合點あるやうとの上意にて、後藤庄三郎を城中へ遣はされし處に、御承引の御請無之に依つてなり。庄三郎には、御褒美として銀子卅枚を給はりぬ。然るに其後、大坂方の落人を擲取れり。彼者に、様子を御尋ねありし處に、大野修理亮が足輕の由を申す故、大野壹岐守に引合はせ給ひしに、氏治が曰、舊好の者にて、名は與介と申候由言上せしにより、速に繩を許して、氏治に預け給ひ、城中の御使には、此者を仰付けらると云々。

城中反間之使被_二生捕_一并野田・福島合戰の事

十一月廿一日の夜中に、男一人、住吉の御陣所に來つて、營中を窺ひ徘徊す。夜番之を怪みて尋ぬる所に、途に迷ひ候といふに依り、人々疑うて彌推問しければ、秀吉公の印書を以て、藤堂が陣所へ參り候所、途に迷ひたる由白狀して、其後懷中より一封の書を取り出す。其詞に、

重而申入候。今度其方以調議、兩將軍此表江引出候事、令満足候。此上者關東勢申合、不日後切可被致候。於事成者、如約束可被行恩賞之者也。

十一月廿一日 秀 頼

藤堂和泉守殿

彼者が申すは、藤堂和泉守、淺野但馬守は、寄手にありと雖も、故太閤恩顧の者故、密に志を城中に通じ、或は酒肴を獻じ、或は衣領を送るといへり。大御所の仰に、彼者藤堂が叛逆の事をいふは偽なり。和泉守が陣所は天王寺にあり。城中の者共、何ぞ渠が旌旗を見知らざる事やあるべき。斯様の書を送るに、途に迷ふ程の不知案内なる者を、遣すべき様なし。況や此文に、高虎が調議に依つて、兩將軍を關東より

引出すと書きたる淺智、淺ましき事なり。凡そ斯の如き書は、印封を以て通路する事古實なり。城中の老兵、何ぞ之を知らざる事のあるべき。是れ皆修理が如き者の謀る所なりとて、和泉守を召され、件の書を給ひぬ。高虎甚だ恐れて迷惑せり。大御所の仰には、其方、我に忠を盡す事の年ある事、皆人之を知る所なり。故に此の如き謀書を調へ、君臣の間を隔てんとする、渠等が淺々しき嬰兒の謀に陷されんや。推量するに、其方京都に於て予に告ぐるに、高虎一人、先づ大坂に馳向ひ、敵の動止するや否を見て、城中へ消息を遣し、其返報に随つて、兵を出すべしと申したりし事を傳へ聞きて、此手段に及ぶかと仰せられ、彼使をも、和泉守に給はりけり。高虎、御上意の旨を甚だ悦び、則彼使を連れ歸りて拷問せしに、元來和州の土民に、吉川瀬兵衛或は新藏と申す者に候が、兒子多く家貧しきにより御奉公仕り候處、命を城外に捨つるに於ては、子孫に厚く恩賞を給はらんとこの事に候故、此御使に參り候。彼書は、武田榮翁より受取りて罷出候と申せば、高虎尙も問はせけるに、大野主馬助が従者なりと申すにより、藤堂則ち彼者が手足の指を切り、鐵印を以て、秀頼と

いふ二字を額に焼付けて、紙旗を作り、大野主馬介治房が紋の鉦を附け、戸板に載せ、城外の側に捨てけり。秀頼公之を見給ひ、甚だ怒らせ給へば、治房も臍を噬むと雖も、其甲斐なく、諸軍勢の物笑とぞなりにける。

或説に、秀頼の二字を、額に鐵焼にせし事、敵ながらも、大將の首を實檢するには、對面すといふ古實なるに、高虎が身として、高官なる秀頼公の諱を穢せる事、謀は賢けれども、神妙ならずといへり。此高虎は、斯る事も多かりけるにや。夏陣に、加藤左馬助・黒田筑前守兩人、酒井雅樂頭の陣所を過ぎがてに、今朝八尾若江にて、藤堂和泉守・井伊掃部頭、敵と戦ひしと物語あり。長政聞きて、和泉守は、常に人を支へて世渡る者なり。今朝敵をも能く支へしかといはれしに、左馬介、筑前守を制して、筑州は、人を惡くいはるゝ人かなといはれしに、我等は由縁もなく、人を譏るにあらず。ありの儘に申すと返答せられきと云々。

東國の船奉行向井將監忠勝は、去ぬる十六日兵船に取乗りて、轉法に着岸せり。同十八日には、九鬼長門守・守隆・千賀與八郎政次・且小濱民部少輔・光隆等の水軍着岸し、

向井と共に轉法口に舟を進む。此外南海・中國諸侯の水軍、野田・福島に續けり。東兵は新家村を乗取らんとて、大坂の番船に火炮を發し挑み鬭ふ。然れども新家は葦原入江にして、船寄せられず。其上城兵陸地に兵を賦つて、鐵炮を放つ故に、其功遂げ難かりけり。九鬼向井・千賀・小濱は、野田・福島・新家各西成郡に屬す三ヶ所間に陣取りて、日夜相戰ふ。此所には大野修理亮治長、大安宅丸といへる大船に、兵を添へて守らしむ。其外海面に、大船十艘を乗泛め、色々の船印船幕等を、潮風に吹靡かして居たりけるが、同廿一日或廿日の未明に、九鬼長門守が家人眞裸になり、脇差を口に啞くはへて泳付き、修理亮が用意したる大安宅丸に乗上る。船手の輩なる九鬼長門守が從兵共、すは人に先をせられしとて、胴壁付けたる艀舳の所々に、狭間切りたるより鐵炮を打懸け、鎗長刀を以て突掛け、敵船に近付き、已に大刀打の勝負程になりし時、敵の船の取梶を目懸け、逆櫓を以て急に押廻し、手頃になれば、胴壁武者を出さしめ、戸を三方より俄に開き、船鎗を以て、敵の舟に打懸け、番船に乘移り、関を咄と擧ぐれば、城兵思も寄らずや、周章騒ぎて、防戰の手段を忘れ、唯呆れたる體に

て、太刀打すべき方角を失ふ所を、突伏せ切伏せ、城兵數輩を討取る。残る兵共は、大半水に入りて逃走る。又向井將監は、郎等相續かざりけれども、只一人敵の番船に乘移り、九鬼が家人は、又我船の左の方に立ち乍ら、九鬼長門守一番乗と名乗れば、向井は大に怒りて、一番乗は某なり。長門守は爰に來らず。何ぞ一番乗といふやと申せば、九鬼が家人冷笑ひて、御邊は東國の船奉行なれば、軍法不案内の人にあらす。我々城兵を追立て、敵船を乗取り勝鬨を擧ぐる事、長門守が軍士の外になし。殊更に舟印舟幕まで、敵船に立てたる事、諸人見る處なり。然るに貴殿一人、番船に乘移り給ふ。一身の功、匹夫の勇なり。長門守は、船手の大將なれば、匹夫の働は士卒を以てす。されば常家の大勢、敵船に乘移るを見て敗北す。夫に何ぞや一身の功に誇り給ふ。恐らくは驥尾に附く蠅、虎の威を借る狐の如しと欺けば、向井之を聞きて大に怒り、過言千萬の奴原かな。我一人にて利を得ざるか、受けて見よと、刀の柄に手をかけ、既に事あらんとす。九鬼が家人も一處に集まり、取圍まんとする處へ、小濱民部・千賀興八郎兩人、中に割つて入り兩方を鎮め、九鬼殿は、番

船數艘乗取られけれども、大將自身來り給はず。將監殿は、自ら乗移つて一戦す。其軍功莫大なる間、向井に相渡すべき由を扱ふ。長門守が家臣は、我等が量見に及ばずと申すに依り、然らばとて、此段九鬼に相斷りし處、是體の事論するに足らず。番船の事は、一艘も二艘も、各の指圖に任すべしと申すにより、漸く鎮まりぬ。向井は、九鬼が兵より少し遅かりけれども、自身船に乗移つて、一番乗と高聲に呼ばはりしを、殘る船手の大將、其聲を確に聞きたるにより、斯くは量らひけりとなり。

大御所再び茶臼山御登覽の事

十一月廿二日午の刻、前將軍家康公は、茶臼山に御出あつて、此山を御本陣とせらるべしとて、繩張の御沙汰あり。山頂狹少にして、近臣の外居るべき地なく、御番士は、一心寺を以て屯とすべしと仰あり。此時老臣及び井伊掃部頭・藤堂和泉守・本多美濃守・松平下總守等伺候せり。茶臼山に御移りあつて、後の陣所、大樹を始め、夫々に定め給ひて、住吉に還御あり。

或本に、茶臼山御本陣、艮の麓、柵門の内の番所西向にて六疊、外の番所東向にて十二疊、御立關は、三間に五間にして床あり。御寢所は絶頂にして、南北十二間の外に、三間に一間の床ありて、五尺の縁を付く。西の麓に四疊半の茶亭、南の麓に二間四方の納戸、東向に二間四方の浴室を建て、東の麓に庖厨を設け、總臺盤所は、乾堀の外たるべし。其南に後備の陣營を經營すべき旨、工匠の長中井大和正次に命ぜらる。平均の後に、勝山と稱せしは、此山なりと云々。

同日晩景、大坂方より、久保田文左衛門・足輕與左衛門兩人、秀頼公の書翰を以て、池田武藏守利隆が陣營に來りけり。利隆封を披かず、兩人を擒にし、書翰と共に、大御所の御前へ引出す。一本に、城兵監江甚助、秀頼公の書翰を、秀頼公に授かりしとありて名を載せず。則兩使を拷問せり。然れども

城中へ志を通ずる者の姓名を聞き給はず。一本に、聞き給へりと作る。彼書翰の趣は、諸大名關東土

木の役繁を厭ひ、志を城内に通ずる者數輩に及ぶ。利隆早々反忠あるに於ては、大

國三ヶ所、増封あるべしとの事なり。彼兩使をば鼻を削ぎ、城中へ追返せり。一本に、大野修理

より、池田忠雄に、大坂へ屬すべき旨を申送りしに、忠雄、大野が使を虜にし、書狀と共に、住吉の御陣營に獻すと云々。

或記に、京極丹後守高知・同若狹守忠高が陣今里は、大坂の城に近し。是に依つて附城を築きて、松平伊豆守信一、本城を守り、新莊越後守直定は、二の丸を守るべき旨台命を蒙り、翌年正月に至る迄、信一此所を守ると云々。

同廿三日、大御所又茶臼山へ成らせ給へり。諸大名御譜代の面々參向して、御目見あり。還御の砌は、御馬に召さるべき旨にて、秀忠公より進せられたり。驪騮の御馬を牽き來る。然るに此馬、城の方へ向ひて嘶きければ、敵陣に向つて勇む馬は、珍しき由の上意なり。其時藤堂高虎、御吉事の由を申上ぐ。之に依つて御機嫌よく此馬にて、地道一返し二返し乗り給ふ。諸大名悉く平地に蹲踞して拜見せり。

記に、此時家康公の仰に、若年の時は、馬上に於て鷹を合せ、或は馬上より捕へたる事も度々なりしが、今は馬計りさへ不自由なりと、上意ありきと云々。

高虎慎みて、御剛勢の由を感じ奉る。此日伊達陸奥守政宗が兵一萬五千餘にて、木津・今宮の間に着陣す。其攻口十五丁に、鐵炮の卒三千人を賦す。弓を帶する者なし。同廿四日、宮城丹後守豐盛、備前島にありて、鐵炮に當り疵を被る。秀忠公よ

り、朝比奈源六郎正重をして之を訪はしめ給ふ。榊原遠江守康勝は、其部下の兵を率し、城京北の間大和川邊稻田村邊に、陣を移すべき旨を命ぜらる。

記に、間宮權左衛門尉、長崎より歸り來つて、高山南坊並に内藤飛驒守、其外耶蘇宗門の輩を相具し、長崎より船一艘に乗せて、南蠻へ流し申す由を言上すと云々。或記に、此日大野壹岐守に被仰付、先達つて捕へし與介を、御使の者とせさせらる。其御使の趣は、兎角書狀にては埒明き申さず候。口上にて申入れたき事候間、有樂修理方より、慥なる者一人づつ差越すべき旨、本多上野介口上にて仰遣され候處に、織田有樂より村田吉藏、大野修理亮より米村權右衛門といへる者を差越したり。本多上野介立向ひ、御和談の儀、口上にて申渡し、其上今度秀頼公より、諸大名へ給はりし廻文と、各より遣し、御請の留書を集め、彼兩使に相渡し、何れも斯の如く被致候上は、秀頼公へ忠節仕候衆としては、一人も無之。諸大名の別心などを、頼み思召候儀、詮なき事に御座候間、右の御廻文御覽の爲め、之を進じ候とて、残らず城中へ遣されしと云々。

同廿五日、大御所、池田越前守重影を召され、今度尼ヶ崎表の仕様油斷なき旨、神妙に思召す由御感に預かる。且伊奈筑後守一本に備前守を奉行とし、諸侯の人夫を以て、葦荻を切拂はせ、鳥飼の堤を築き、水の中津川一名長柄川へ流し入れ、天満の水干る様に致すべき由仰出さる。且松平主殿助忠利今野州宇都宮城主、七萬石を領す。松平氏の家系是なりを召され、攝州茨田郡仁和寺堤築かしむべき命ありけり。

或本に、住吉の御陣所へ、本多三彌參り候へば、兄佐渡守、今朝鳴野の方にて鐵炮打ち候。何事か三彌などは見ぬかと御尋ありし程に、見て參り候へと申しければ、三彌がいふは、何ぞや鎌倉の比丘尼寺などにて、鐵炮の音など致し候はゞ、不思議なれば參るべし。陣場にて大炮の音、何の珍らしき事候かと申し、行かざりしと云々。此頃の事なるにや。

安藤・伊藤・屋代三人欲攻鳴野之柵事

さる程に上杉中納言景勝卿の向はるゝ京橋より良の方、青屋口より一町半計り先に、

信貴野堤といへるあり。城方より、彼堤を掘切る事、其間一町半程を置きて、都て三ヶ所、各俄に柵をふる。然れども堤の上なれば土地狭く、多勢備へ難ければ、炮卒の隊長兩人、小勢にて之を守れり。然るに安藤治右衛門正次・伊藤右馬允正世記に祐則とあり同下皆・屋代越中守勝永、十一月廿五日の晩景に、信貴野を巡見しける時に、伊藤が申すは、此所を見るに、柵の構疎略にして、守兵微なり。只今此三人が手勢を以て之を破らん時、若し敵方多勢を以て、青屋口より發せば、上杉の軍卒、必ず跡を詰むべければ、危ふからずやといへり。屋代勝永心中に、尤なりと思ひけれども、嫡子甚三郎忠政後に越中守といふ、此場にありける故、今晚を延し、明朝之を攻破らせ、初陣の功名を遂げせんと心底に含んで、今日は、日已に西に沒せんとす。明日になしても、又遅からじと申しけり。又安藤治右衛門が曰、此三人の士卒にても、柵は打破るべしと雖も、微勢を以て、其地を取挫ぐ事難し。然れば上意を伺うて後に破らんといひければ、伊藤正世色を變へて、我は元坂東の素生なり。總て東八州の士の習は、戰場に至り、いかな大敵堅營と雖も、必ず進んで破らんと欲す。況や此柵に於てを

や。某一人して之を破らんと罵りければ、安藤が曰、吾本國の勇士は、一旦の利を貪らず、功を遂ぐるを肝要とす。されば敵城に向ひ、能く其理を計り、永く持泳ふべき理ある時は、忽ち之を落し、敢て身命を厭ふ事なし。此柵の如き、今晚破る事難からずと雖も、夜中城より多勢を發するに於ては、持泳ふべからざる事必定なれば、勞して功なき勦を好まずと答へければ、伊藤口を箝んで、三人共に歸れり。斯くて安藤・伊藤・屋代は住吉に參り、信貴野堤にある敵の柵、其虛實及び地勢、且上杉が陣所の北の方信貴野川を隔て、佐竹右京大夫が向ふ今福堤も、同じく城方より三箇所掘切り、三重に柵をふり、微勢にて相守る旨を演説す。時に大御所、明早・天信・貴野・今福兩所を、上杉・佐竹が勢を以て、攻破るべき旨を命ぜらる。是より先に上杉の斥候の者、此處彼處向城になすべき地を窺ひ計る所を、秀頼公・天守より見給ひ、後藤又兵衛基次を召され、疾く馳向ひて此敵を追拂ふべき由仰ありければ、又兵衛即ち青屋口より櫓に打登り、熟覽しけるが、全く斥候の兵にして、營を設くる敵ならずといひ、兵を發せざりけるが、果して上杉の物見、大和川の岸なる藤堂和泉守が舊館

の跡を、向城となせば可なるべき旨を評定して、忽ち退きけるとかや。

或説に、佐竹右京大夫へ、安藤治右衛門・屋代越中守・伊藤右馬允を遣はされ、上杉へは、佐久間河内守政實一本頼勝・小栗又市忠政を以て、鳴野今福兩方の柵を、攻破り

申すべき旨なり。其時上杉の元老直江山城守兼續が返答に、當陣は、後軍一昨日參着し、疲勞未だ甚しく御座候間、暫く人馬の足を休め候上の事と申しければ、河内守が曰、上杉家は御亡父以來、着陣其儘にも、雌雄を決せらるゝ御家法の由承り及び候がと詰りければ、直江一言にも及ばず、鴻命重ければ、明朝攻破るべき旨承諾せり。又佐竹が陣にては、澁江内膳命を受けて、明朝必ず今福の柵を抜かんと申しけると云々。

又曰、城將後藤又兵衛は、鳴野表を見て、北東の寄手、前備と跡備と繰替はる體なり。一定明日此口を攻むべきかと申しゝと云々。

今福合戦の事

抑大和川といへるは、東より西へ流るゝ川なり。川の北を今福堤といふ。川の南を
 鳴野堤といへり。蒲生村に程近ければ、世俗に蒲生堤と稱す。此所は城中より堤筋
 を掘切り、柵を二重に構へ、二所に大野修理亮治長が番兵を置きて、替々に相守れ
 り。然るに去ぬる廿三日より、今福をば、矢野和泉守正倫が當番にて、新參の侍五
 十騎或は足輕大將ともあり正倫は侍大將なりを従へ、堤を掘切り、内二柵を付けて、終夜篝火を焚きて普請致
 させ、足輕の兵を二三町張出し、鐵炮を放つて備へたり。然るに同廿六日の明方に
 なりて、普請は終りけれども、未だ堀切の假橋を引かざる所に、之を幸として、佐竹
 右京大夫義宣が先登の兵、戸村十太夫以下五六十人、堤の陰より忍び寄つて、透間
 もなく切つて掛り、足輕を追散らせば、續いて大勢馳せ來り、堀切の邊迄寄せ來れ
 り。和泉守が手の侍十人計り、假橋を向へ渡り、火花を散らし相戦ふと雖も、關東
 方は多勢といひ、殊に出羽・奥州の荒者共に切立てられければ、城兵五人矢場に討死
 し、殘る五人の内、湯川庄兵衛・丸屋左太夫・佐々八左衛門は手を負ひ、殘る二人は、
 柵の中へ引取りぬ。依之矢野和泉守正倫、蒲生村に備へし飯田左馬允家貞父子、和

泉に力合せんと駈來つて、粉骨を盡し防ぎ戰ふと雖も、關東方の大勢後より續くを見て、雜兵より崩れ立ち、家真は、備前島を指して引退かんとす。和泉守も戰ひ疲れ素肌になり、小姓一人竝に若黨と、僅主從三人なれども、命を捨て、戰ひしかば、東兵是に辟易せしを、佐竹が家來戸村十太夫・梅津半右衛門、馳合せて戰ひければ、
可憐かな飯田左馬允父子、竝に正倫が若黨は討たれけり。されども和泉守と小姓一人は、猶も氣を屈せず戰ひけるが、佐竹が家來一本に、及川南に、一本に、矢野和泉守は、鐵炮に中つて死せりといふ、小姓も續いて討死せり。佐竹勢は愈勝に乗つて、澁江内膳・黒澤甚兵衛・小川刑部左衛門・江尻軍兵衛・小野織部・荒井甚兵衛等は、片原町迄押込みて、町口の柵と二三の柵を奪うて持堅めたり。大坂勢は、追々城中へ使を以て、和泉守討死を遂げ、敵兵勝に乗り、味方大に利を失ふ。其上疲れに及び候へば、只今敵寄せ來るとも、抄々しき合戰あるべしとも覺えず候。若し御加勢給はらぬに於ては、備前島を取らせ候はん事疑なし。然らば京道筋は、木村長州持口にて候へども、跡より取切らせ候ひなば、由々しき大事たるべしと申送れば、城中より援として、本郷左

近晴賢・山口左馬助・弘定・岡村宅之介定胤、其外七組の長を一兩人遣はさる。又木村長門守重成は、今朝より彼所へ、佐竹勢の押寄せ、合戦ある事を知りて、註進次第に馳向ふべしと登城して居たるに依り、是より先に、今福口破れ、寄手は早片原町迄押込みしと聞きて、川崎和泉上村金右衛門・根來の知徳院に、炮卒五十人を副遣はし、自身は物具して馬に打乗り、我門前を馳せ乍ら、此内の組の衆、悉く今福表へ懸けらるべしと、呼ばはり乍ら打過ぐれば、木村が宅には、大井何右衛門・平塚左介・同五郎兵衛三人ありしが、之を聞くと等しく、門外にてひたくと馬に打乗り、京橋指して馳せて行く。然るに木村は、片原町の眞中なる小橋の前に下り立ち、皆々先へ通られよと下知をなす。佐竹の勢は、城兵の嵩むを見、町口の柵を打捨て、引退き、二三の柵を抱へたり。木村が先手の川崎和泉守勝宣・上村一本に上杉に作る金右衛門盛泰・根來の知徳院等、使を長門守が方へ遣し、町口の柵は、無造作に取返し候間、加勢を給はるべし。二三の柵をも打取るべしといひ送る。斯る處へ、大井何右衛門・高松内匠・平塚左介・同五郎兵衛・日下五郎右衛門等都合十四人駆付け、鐵炮を手繁く放せ

ば、佐竹勢は怵へ兼ね、又二の柵を捨て堀切を越え、備を立つる處へ、木村長門守重成、堀田圖書助勝喜二人、馬に乗りて馳せ来る。然るに木村が與力松浦彌左衛門、堀田が從士淺野清兵衛高名して、巳の刻過ぐる迄、鐵炮競合あり。城中にては、後藤又兵衛基次、秀頼公へ申上げけるは、木村に佐竹は、よき相手とは申し乍ら、關東方より、他の勢を以て助けなば、危く候はんと言上すれば、秀頼公尤と思召され、又兵衛以下御供にて、菱矢倉へ上り御覽あつて、仰に、木村が陣所、敵合餘り程近ければ、小勢にては心許なし。急ぎ又兵衛馳せ向つて、長門に力を合すべしと命せらるゝに依り、基次畏つて候と御請申し、城より其儘使を立て、組の面々、早々蒲生表へ向はるべし。某は御城より、直に馳行き候と申遣はしければ、後藤が從軍は、取る物も取り敢ず、一騎駈に馳せ向へば、程なく大勢になりにけり。然るに木村長門守が勢は、川向に控へたる上杉の陣所より、打立つる鐵炮に打敷かれ、堤の陰に伏して、頭をも出し得ず。後藤基次之を見て、馬廻十人計りを召具し、木村長門守が備に來り、持たせたる鐵炮を取り、堤の上に伸上り、立ちざまに鐵炮二つ發し、汚し者共、斯く

せよと恥しむれば、此勢に引立てられ、東兵却て打敷かれ、堤の陰に平伏す。此時後藤基次は、左の手の小指に鐵炮疵付きて、血流れけるを、木村之を見、手を負はれたりやと尋ぬれば、又兵衛少しも騒がずして、是れこそ我が吉例なれといひけるとぞ。

一本に、此時川向なる上杉が陣の直江山城守、後藤を見て、茜の母衣張の馬符に、黒半月差して下知するは、大將分と見えたり。あれ討てと申せば、若き者共、さしつめて鐵炮を打掛けたるに、又兵衛が物具へも、玉五つ六つ中れり。其中に玉一つ、左の脇腕を打かするを、後藤少しも騒がずして疵を搜り、我君の御運は強しと申しけるを、諸軍勢聞きて、大坂には、後藤より外に人なしとする言分なりと、嘲る族も多かりけるとぞ云々。

重成は後藤に向つて、頻に陣所に歸られよといひければ、其時基次、足下の軍兵、數刻の迫合に氣疲れ、勇氣も懈むべし。某は荒手なれば、入替りて戦はん。其上御前よりも、貴殿に替り一戦を遂ぐべしとこそ仰付けられ候へと申せば、長門守聞きも

敢ず、是程に取詰めたる合戦に、入替る物ならば、人數騒ぎ備さだちて、味方の負を仕出さんも計り難し。其上さのみ疲れたる事もなし。時分を虞りて鍵を入れ、一戦に突崩すべし。御邊は老功也、某は若^{おと}なり。斯る時節に出合はすること幸なれ。入替らんとは長氣^{おと}なしと申すにより、後藤は理に伏し、木村が後陣に備をなし、横矢を射んと支度をなす。復、又兵衛、手の者共に下知して、堤の曲目へ寄せ來る敵兵に、柵際より打つ鐵炮は、中らずと相見えたりとて、片原町より川舟を取寄せ、鐵の楯を並べ、足輕を舟に乗せ、深田の中へ横合に、佐竹が陣へ打入りけり。木村が兵士柳名右衛門といへる者、水舟を堤の北に入れ、是も同じく横合に鐵炮を放ちければ、佐竹が軍勢大に騒ぐを、重成勝に乗り、堤の上を進んで柵を破る。基次もよき圖を計り、鍵押取つて攻懸れば、佐竹が勢之を見て一同に崩れ、柵の中へ逃入る所を、佐竹が家臣秋田兵庫・戸塚九郎兵衛・戸村十太夫以下二十人計り、鍵龕を作り、甲を傾けて待懸く。木村が組の佐久間藏人といふ者は、銀鍬形打つたる甲に、烏毛の引廻を付けて、黑白段々の簗をさし、北の柵の木戸口より出で、堤の上を走り行

き、一番鍵と名乗りて懸れば、佐竹方の戸村兵太夫、立向ひ鍵を合す。續いて山中平右衛門も鍵を合せ、戸村・山中の兩人は、其場にて討死す。佐久間も爰にて戦死せり。又木村長門守は、中白の旗を正先に立て、銀瓢箪の本に、白熊付きたる馬標を引添へ、會釋もなく突いて懸る。佐竹方にも、黄色に丸の内に扇付きたる旗數十流、川風に吹靡かせ、金の三本扇の馬標を押立て、相懸りに懸りて、互に鬨の聲を擧ぐれば、其聲、百千の雷の、一度に鳴落つるが如く、天地も忽に動き、坤軸も碎くるかと疑はる。之を見て、後陣に控へたる後藤又兵衛基次は、總白の旗に、黒半月の馬印を正先に押立て、相繼いで入亂れ、命を限りに相戦ふ。木村が組の中に、長屋平太夫といへるは、長門守に由緒ある者故、重成と同じく白母衣掛けて、堤の上より北の水涯に、佐竹が兵七八人控へたる所へ鍵を入れければ、續いて高松内匠・大野半治・大塚勘右衛門・齋藤加右衛門・若松市郎兵衛・目下五郎右衛門・小川勘右衛門・青木七郎兵衛鍵を入る。又木村が與力松浦彌右衛門・堀田が郎等淺部清兵衛は正先に進み、佐竹が軍士を討取り、首掻切つて城中へ提げ行く。

記に、松浦は首を持つて城中に歸り、帳面に記さん事を請ふ。然るに祐筆白井甚右衛門、筆を取つて果さるる故、彌右衛門怒りて、早く記せと責めける處へ、淺部清兵衛首を提げ來り、戰場に於ては、最初に首を得たれども、歩行なる故遅かりしと申せば、其時甚右衛門、松浦に向ひ、一番首は必ず論ある者なれば、二番目を見て記すが故實なりといひけり。然れども事急なるにより、一番二番を決し難く、二人の名を記せりと云々。

大坂勢は勝に乗り、我劣らじと攻入りければ、佐竹が勢は戦ひ疲れ、二の柵をも打捨て、奥の柵に於て戦はんとす。木村は氣に乗り、柵の内に込入りて自ら鍵を合す。大將自身働く上は、從軍何れも身命を惜まず攻め戦ひ、高松内匠・大井何右衛門・長屋平太夫・牟禮彦四郎等、佐竹方の首を取る。井上與左衛門・智徳院・大野半治は高名す。佐竹方は多く兵を討たれ、敗軍せんとする所に、家臣澁江内膳は、鹿毛なる馬に打乗りて、黒鳥毛の羽織を着し、今朝よりの戦に、疵を被むると雖、少しも怯まず、汚し返せと、士卒を勵まし下知すれば、此勢に引立てられ、秋田兵庫・横井右近・石田

内藏助・大塚藤兵衛・黒澤治兵衛以下、取つて返して攻め戦ふ。城兵是に辟易して、進み兼ねたる所に、後藤が勢の山中藤太夫・赤堀五郎兵衛・三浦彦三郎・山脇三郎右衛門・田中作左衛門・堀太郎兵衛・湯淺三郎兵衛・三浦將監・仙石勘四郎・井上源兵衛・山田外記・同八左衛門は、南の柵の振廻より起つて、奥の柵を突破つて鎗を合す。赤堀五郎兵衛・山中藤太夫・堀太郎兵衛・仙石勘四郎・田中作左衛門六人は討死せり。佐竹が家人梅津半右衛門・戸村十太夫・戸塚九郎兵衛・秋田兵庫は、朝晝兩度の合戦に、首十五級を得たり。木村が臣の大井何右衛門は、左右を下知して大に働き、引取らんとする時、鐵炮に打たれしを、重成怒りて、烏毛の羽織着て馬に乗つたるは、佐竹の内にて、大將分と見えたり。彼者を打落し候へと申せば、井上忠兵衛といふ者、心得候といふ儘に、鐵炮を木に持たせて、十匁玉を打放せば、過たず澁江が胸板に中り、馬より眞逆に落ちたるを、後藤が從士寺戸八左衛門、透さず押へて首掻落せば、大坂方は勇み進み、木村・後藤・堀田の三組、分捕高名様々なり。佐竹の勇士白土嘉一作喜右衛門・小野崎源左衛門・高崎兵右衛門一本、高垣五郎左衛門或は五郎右衛門に作る・小田部五郎左衛門等は戦

佐竹勢敗る

死せり。佐竹勢は甚だ疲れて敗軍す。然るに右京大夫は、只一騎馳せ來り、爰ぞ義宣が屍を晒すべき場なり。士卒我と共に命を棄てよと下知すれども、ひた引きに引立ちて、返す者はなく、剩へ旗本の備に崩れ懸れば、佐竹も爲方なかりけり。上杉よりは、之を救はんと思へども、大坂方に伏兵あらん事を危み、如何せんと猶豫する處に、彼家の臣杉原常陸介親憲は、老功の將なるが、景勝卿に申すは、某馳せ向ひ、大軍進んで可なる時は、輪乗をかくべしと相圖を定め馳せ出し、堤の上に駈上つて見れども、伏兵なければ、輪を三返駈けたるを、上杉勢之を見て、大勢にて馳付け、中にも鐵又右衛門は、孫虎之助を相伴ひ、金の鎌の馬印を押立て、横合に鐵炮を打懸く。又榊原遠江守康勝が勢は、先手雜兵三百計り、信貴野川の端に屯し、今朝より様子を見て、佐竹勢を救はんと思ひ、度々使を立てけれども、未だ援を入れよといひも越さず、卒爾に拘はるべからずと制しければ、只徒に詠め居たりけるが、味方の軍負色になりたるを見て、怛へ兼ね、川合三彌といふ者、康勝が下知をも待たず、信貴野川へ一番に飛入りければ、腰に付けたる土俵空穗に水入りて、浮きぬ沈

みぬしける處を、二番に續きたる貴志角之丞、鎧の石突を取延べ、三彌が總角付を突いて、向の岸に突付けて、相共に川の岸に上る。榊原勢の渡邊八郎五郎・清水久三郎・向井^{一本}吉太夫・同十左衛門・日根野在右衛門・佐野五右衛門・伴田外記・村上久兵衛以下廿三人之を見て、川水に飛入り、横合に懸りけり。木村長門守は、援の勢の來るを急度見て、今日の合戦是迄なるぞ。早日も西に歿したれば、速に人數を擧げよと下知すれば、佐竹勢は之を見て、跡を慕ひ討止めんとす。木村が殿の柏原角左衛門・堺金左衛門・三浦將監・同彦太郎、^{一本彦太夫}、踏留まつて防ぎければ、寄手もさまでは追はざりけり。

一本に、先に討たれし大井何右衛門は、此所にて引かんとする所を、鐵炮に中てられて死し、後藤又兵衛も、手疵を被れりと云々。

大坂勢は柵を振直し、竹束を付けて備へたり。佐竹方には、澁江内膳を始め、究竟の士二十餘人討たれ、其外手負死人若干なり。

或本に曰、佐竹義宣が軍難儀に及びし時、後陣に控へたる堀尾山城守に、援兵を

乞ひし所に、堀尾は心得候と返答す。御目附安藤治右衛門、此所にありて申しけるは、御下知をも伺はずして人數を出さん事、然るべからずと制しければ、山城守が曰、御下知のなければとて、目前に味方を討たせ、見物する法やあると、其勢二千計り左右にして、勝誇つたる木村が勢へ、會釋もなく駈入らんとすれども、堀越なれば、駈合ふ事叶はず、徒に見物せり。堀尾は今年十六歳にて、天下無雙の美男なりけりとぞ云々。

扱此手の斥候佐久間河内守政盛、小栗又市忠政、歸りて具に言上すれば、佐竹が家來高名の面々に、御感狀御褒美を給はる。或記に、御感狀は、翌年正月十七日に作る。

一、御感狀竝御腰物青江直次

戸村十太夫

一、御感狀竝御腰物信國

梅津半右衛門

一、御感狀竝黃金十兩一本、北外に御羽織

黒澤甚兵衛

一、同

戸塚九郎兵衛

一、同

信田内藏助

以上五人なり。

榊原が先手は、教令を背き川を渡し、により、康勝罪に行はんと思ひし所に、佐竹より使來りて、今日今福合戦に、味方難儀に及びし所、御加勢に依つて、城兵早速に引取り、大慶たる由申來りしに依り、先懸りの軍士等が、罪の沙汰はなかりけるとかや。

新東鑑卷之十畢

新東鑑卷之十一

信貴野合戰の事

鳴野堤の
合戦

さる程に鳴野堤の持口は、城兵山市左衛門尉吉正・足輕大將井上五郎右衛門記に、權右衛門に作れり。下賴次、步卒五十人にて柵外に出張し、鐵炮を段々に備へ、其外武田兵庫竝に皆同之。息大介・小早川左兵衛・岡村百々ど之助一本に、權之介に作る、彼所を堅めたりけるに、十一月廿六日の未明に、上杉中納言景勝卿の先鋒隔田大炊助長義時に卅七歳・長尾權四郎景秋・岩井備中守經俊以下押寄せ、柵を破らんと攻戰ふ。又此所の斥候として、安藤治右衛門正次・伊藤右馬允正世・屋代越中守勝永は、今朝も來りしが、屋代は豫て嫡子甚三郎に、初陣の手柄せさせんと思ひし故、密に呼びて、汝馬に乗り、足輕一人も携へず、手廻計りにて、疾く來るべしと言含め置きたりければ、暫くして甚三郎來りしを、越中守は

僞り呵り乍ら、馬上にて進みけり。

一本に、安藤伊藤は歩行なる故、治右衛門高聲に、越中守不法なり。馬より下立つべしと呵れば、勝永取敢ず、老人歩行に堪へず御免あれと答へ、甚三郎を先に立て、跡より靜に打たせ行きしと云々。

然るに三士、堤の下に至る頃、井上五郎右衛門が手の足輕、鐵炮三十挺を發せしが、東兵近く進みしに依り、玉越して中らず。安藤治右衛門竝に家人酒井左市郎は、衆に先立ちて、透間もあらせず進めば、井上が手の鐵炮を放し、足輕は、柵の中へ引取らんとする所を、安藤追付け、柵際にて鎧を合す。然るに城兵の中に、黒具足を着たる武者一人申すは、大勢かと思ひしに、敵は只二人なるぞ。取籠め討てや者共と下知をなし、踏止まりし處を、左市郎は、得たりや賢しと言りて、柵越に突伏せたり。屋代が家人東三右衛門は之を見て、彼敵の首を取らんと立寄る所を、伏せられたる敵、三右衛門が高股を拂ひ落して、味方はなきか、敵の鎧を切りて、我を救へと聲懸くれば、十七八計りなる若武者、心得候といふ儘立歸りし處を、甚三郎が家

人齋藤左内といふ者、透間もなく切つて掛り、彼武者と戦ひければ、突伏せられたる敵の首は、甚三郎こそ獲たりけれ。

一本に、井上五郎右衛門も、屋代甚三郎に討たれしと云々。

城兵四人之を見て、鎧を柵際へ突懸けしに、安藤治右衛門事ともせず、急に柵を攻破れば、城兵叶はず引取りしが、一人鎧鎧を柵に突懸け、退き兼ねたる所を、伊藤石馬允並に家人安西長右衛門駆來りて、此鎧を奪ひ取る。安藤・酒井は、退く敵を、勝に乗つて追懸け、其勢に、柵二重を打破り、敵一人を突棄つれば、残る者共は、跡をも見ずして逃入りけり。又安藤治右衛門に駆付けたる輩には、中丸七左衛門・西川傳右衛門・島本八右衛門等なり。此迫合に、屋代が家人石川右近・市川半右衛門、何れも首一級を得、東三右衛門は討死せり。林半右衛門・東權右衛門・林茂左衛門・大柴用之助四人は手を負ひ、安藤が家人酒井左市郎も、鎧疵の薄手三箇所被りけり。又治右衛門は、敵を城中へ追入れ、先陣後陣の面々へ、此所を持固めらるべし。城兵定めて打て出づる事あるべしと申渡し、敵の捨てきたる玉藥の箱を拾ひ取りて歸

り、軍を譲れり。上杉勢も競ひ進んで、一二の柵を攻破れば、城兵井上五郎右衛門・小早川左兵衛尉・岡村百々之介・竹田兵庫等、玆を先途と戦へども、如何ぞ上杉の勢に敵し得ん、四人は終に討死す。上杉の家中にも、北條清右衛門・上泉主水・櫻囚獄ひとやの助・大股八左衛門・同彦六も討死せり。又渡邊内藏助が隊長長山市兵衛以下は、三の柵へ急に引取りしかば、須田大炊助長義が隊長、鐵炮百挺を以て、二の柵を均しく守る所に、城將渡邊糺・木村主計助・宗重・武田永翁等は競ひ懸り、且後藤基次が、今福より放し、横合の鐵炮にて、隅田が先隊も色めく所に、城方より七組の長中島式部少輔・信重・堀田圖書助・勝喜・速水甲斐守時之・野々村伊豫守雅春・伊東丹後守長重・青木民部少輔、其外大野修理亮は、城中にありしが、渡邊等が跡を詰めければ、城兵は彌競ひけり。

一本に、眞野豊後守・伊東丹後守・青木民部少輔・速水甲斐守・中島式部少輔・郡主馬助等一萬計り、同日午の刻に出張すと云々。

大坂勢は、上杉が先手の隅田大炊助長義が備を目懸け、我もくと待物を提げ、得

たりやおうと攻め蒐り、一舉に死を爭ひて、討ちつ討たれつ馬の蹄を浸し、血は滾滾として、洪河の流るゝが如く、東兵城兵揉合ひて、東西に開き南北へ別れ、追つ返しつ相戦ひ、隅田大炊助も、粉骨を盡すと雖も、城兵は大軍なる故、終に押立てられて引退くを、大坂勢は勝に乗り、柵二重を取返し、攻め戦ひければ、上杉の市川左衛門關十郎兵衛針生市之介・原庄兵衛駒澤與十郎、何れも戦死す。又島津玄蕃允長峯は、沼の中へ突落されしが、起騰り力戦し、功名を得たりけり。大坂勢は勇み進んで、我れ劣らじと攻蒐る。上杉の二の手に備へし安田上總介順易よしのやすは、豫て三町餘り脇に、備を立てゝ居たりけるが、是も同じく杉原常陸介親憲が手へ、ひたゝと崩れ懸る。常陸介下知して、如何に隅田が軍兵、豫ての御意なるぞ。多勢の中へ入込む時は、左右へ開けと高聲に呼ばはれば、隅田が人數は之を聞き、兩方へ分れ退きけり。城兵益氣を得、雲霞の如く追ひ來る。然るに兩御所より御使立ちて、味方に手負死人多くありては如何なり。今朝よりの戦に、上杉勢も疲れたるべければ、一先づ人數を舉げて、休息せよと御下知あり。又左軍の堀尾山城守忠晴・後軍の

丹羽五郎左衛門長重は、上杉に入替はるべしと、是へも仰渡されけるにより、堀尾は
即時に軍勢を促し、先隊堀尾河内・同修理助・前田丹波等に、足輕の兵二百人を差添へ
て遣されけり。然りと雖も城中より、つるべ放つ鐵炮に打白まされければ、人を本
陣へ立て、鐵炮上手の足輕を、加勢に給はるべき由を申遣しける故、伊賀衆・甲賀衆
といへる鐵炮の上手八十人、選り立て、來りければ、是より互に鐵炮を打合ひけり。
又直江山城守兼續は、鐵孫左衛門安忠に、百八十挺の種々島を添へ、豫て南大和川の
界を掘切らせ、葦原の中に屯せしが、諸人は、其所以を悟らずして、勝誇つたる城兵の横を
打たせける故、秀頼公の兒小姓十人計り、軍を見習はん爲に差越されし所の、容顏
美麗なる高橋十三郎彌次右衛門か忠にし
て十四歳なりと云々・別所多門藏人が甥にて、十
七歳なりと云々を始として、多くの人
を打たせければ、さしもに勇める大坂勢も、啗と崩れて色めく處を、安田上總介四
百餘にて、横合より突いて懸れば、隅田大炊助も備を盛返し、横合に追討にす。島
津玄蕃允・鐵孫左衛門等も、勢に乗つて大坂勢を討取りければ、城方の杉森市兵衛・
湯川治兵衛・田邊八右衛門・幡枝勘解由・米村嘉右衛門・平田藤兵衛・茨木五左衛門等、

踏止まつて苦戦すれども、其備を立直す事を得ず。中にも同朋笛阿彌並に父兵介竹田兵庫の息大介等は討死せり。又秀頼公の劔術の指南する穴澤主殿助盛充記に、秀頼に作るは誤なるべしといへる者は、長刀の達人なるが、上杉の陣中に駈入りて、敵七八人討り、忽ちに薙倒し、長刀を杖に突き、踏跨がつて控へたるを、上杉の臣坂田采女といへる老武者、鎧提げて城兵を追行く處に、穴澤主殿助盛充と名乗つて蒐れば、坂田は之を見ると等しく、鎧を以て突懸くる、穴澤長刀にて鎧をはね、つか／＼と手元へ入り來れば、坂田はからりと鎗投棄てむずと組んで、上になり下になり、窪き所へ轉び落ちけるが、穴澤は大兵故、坂田を取つて引伏せけるを、采女透さず脇差を抜き、下より一刀刺し、怯む所を刎返し、終に首をぞ得たりける。直江が從士折下外記走り寄りて、長刀を奪ひ引退く。

或記に、折下外記は、後年穴澤主殿助を討取りしと申立て、土井大炊頭利勝へ仕へて、千石を領せり。然るに上杉景勝卿の息播磨守綱勝の代に、御老中招請の時、松平伊豆守信綱・阿部豊後守忠秋坂田が息五左衛門を呼出し、其方が父采女が、

穴澤を討取りたる首尾を聞き度山所望ありしに、五左衛門答へて、さしてもなき事にて、中々申上候事は尾籠に御座候と辭退せりと云々。

扱隅田大炊助は、初め敗軍の砌、家從五人と共に敵中に紛れ居たりけるが、太刀討の疵二ヶ所被り乍ら、首二級を得たり。其家人も亦、首を得て歸れり。又最前兩御所より、上杉へ早々人數を上げ、堀尾丹波と入替るべしと、敷波しきなみの御使なりし時に、景勝卿は、胡床に腰打掛け、城の方を睨み、例の青竹杖を揮ひ、逞兵三百計を揃へ、堂々整々として居られけるが、彼仰を聞きて、いやとよ上意にても、其儀は罷成らず。

弓矢の家に生れ、先陣を爭ふ時は、一寸にても増しといふ事あり。今朝より粉骨を盡し相戦ひ候を、今更他人に渡す事、存も寄らずと返答せらる。又丹羽五郎左衛門は、景勝卿に談せんと、上杉の旗本へ來りし所に、土地狭く、而も上杉家の軍旅の法令嚴にして、一人も其備に交る事を得ざりければ、上杉勢と揉合ひ、城兵を切崩せり。此時青木民部少輔信重は、四半の指物に、富士山を畫きたるを帶し、手ばしく兵を纏ひ收むる體傑然たり。丹羽長重は、如何にもして今日功名の數に加はらん

と思うて馳せ來り、青木と、其間四五丁程隔たりけるが、長重青木をきつと見て、哀れ今一町計りも進み來らば、討取らんするよといひければ、丹羽が臣大屋與兵衛頭を振り、いや某が存するには、青木は武功の士たり。多く場數を経たれば、機を見て速に兵を收むべきよと申しけるが、果して其詞未だ終らざるに、民部少輔は周旋して勢を引取り、三の柵を抱へ守れり。

記に、渡邊内藏助は、器量世に勝れ、力人に越えければ、今日の合戦にも、棟梁の臣と選ばれけり。兵法の達人にして、人を人とも思はず、日頃に廣言を吐きて、今日の合戦にも、眞先に進みしに、堀尾山城守が軍兵等、直に懸つて、前後に當り左右に激しける勇力に拂はれて、立足もなく追立てられ、持たせたる馬符も、一番に逃入りければ、皆人渡邊を惡しとや思ひたりけん、一首狂歌を書きて、内藏助が門の前に押したりけり。

渡邊が憂名を流す鳴野川敵に逢うては目も内藏助

敵も味方も、之を聞き傳へて、物笑とぞなりにけると云々。

或記に、昨廿五日景勝卿は、長臣直江山城守を呼びて、其備を問はれしに、安田上總介は老功に御座候間、先手を申付け、二の先は隅田大炊助に申付候と答へければ、景勝卿其時に、夫は悪しき配なり。二の手、功者になれば、軍の勝はなし。大炊助を先手、上總介は二の手に立つべしとあり。是に依つて直江山城守、備を繰替へしかば、隅田が備は、競うて二の先の安田に、一手柄して見せんと勇みけり。又安田の備は、繰替へられ口惜しく思ひ、先手崩れよかし、二の手にて盛返し、一手柄せんと勵みし故、兩備の勇氣十倍になれり。景勝卿の勇才、人の及ぶ處にあらずと云々。

或記に、景勝卿は小男にて、月代の鬢、櫛なりに剃り、顔は豊下^{しちみづくら}にして兩眼凄く、素性詞少なにして、一代笑顔を見たる者なし。常に刀脇差に手を懸け居られけるが、或時常々手馴らし飼はれたる猿、景勝卿の脱いで置かれし頭巾を取り、木の上に登つて座し、彼頭巾を冠り、手を授つて、座し居られたる景勝卿に向ひ、點頭しけるを見て、莞爾と笑はれしを、近習の者始めて見たりきとなり。長途の旅に

ても、馬に懸けらるゝ聲の外は是なく、嶋野にて、先手の仕寄見物に、非番の近習の輩が、忍んで來りし後より、景勝卿一騎にて巡見せらるゝを、見咎められん事を恐れ、鐵炮の降る程に來る竹栖の外へ、出でて隠れたり。敵よりは猶景勝卿を恐れけると云々。

或本に、御使番小栗又市郎、軍終りて住吉へ歸り、今日の合戰の次第を言上したる後、御次の間に於て各に向ひ、今日はよき討ち所ありし故に、上杉へ其段を申し、かども、日暮れたりといひて承引せられず。扱々残念なりと申しけるを、大御所聞召されて、其方が分際にて、景勝の武邊の事を申すは推參なりと仰せられ、叱らせ給ひけると云々。

或本に、直江山城守は、木曾義仲の臣樋口次郎兼光が後胤、越後國與板城主樋口與三右衛門尉兼政が子にて、謙信の姉仙桃院の小扈從なりしが、直江大和守實綱が養子となり、後に卅二萬石を領せり。然るに景勝卿三十萬石に減少して、米澤へ移られし時、六萬石となりしが、我身は一萬石を領し、五萬石を諸傍輩に配分

し、又我一萬石を分けて我が家中へ與へ、五千石となりしといへり。後上杉に新田を開き、又一萬石となれり。定勝の代迄も、萬事國の仕置公事沙汰迄なせりと云々。

或記に、今度の軍功により、翌年正月十七日、杉原常陸介親憲・隅田大炊助長義・島津玄蕃允久峯・鐵孫左衛門安忠等へ、御感狀を被下けるが、隅田・島津鐵の三人は、拜受して御前を退出せしに、常陸介、御書の上包を披き、熟拜見して、故の如く卷納め、本多佐渡守に向ひ、御感狀の御文言、残る所もなく難有仕合に候由を申し退きけり。秀忠公甚だ御感にて、其頃天下の美譚となれり。常陸介人に語りけるは、我等弱年より戰場に出でて、今日死するか明日討たるゝかと思ひし時だに、將軍家の御感狀を拜領せざりしに、思の外なる御惠を受けたりといひて、大笑せりと云々。常陸介は、壹岐守憲家が養子にて、故は一萬四千石を領し、奥州猪苗代の城主なり。

別記に、上杉の家人等、此度の合戦手柄たる由、大御所仰ありける處、常陸介頭を地に附け乍ら、輝虎武邊のあたゝまり、少しは残り申候と申せりと云々。

一本に、安田上總介順易としやすは、二の先にあつて城兵を引受け、鎧を入れ敵を突返し、比類なき働なれども、直江と年來仲悪く、將軍家より改の書付を押へて、軍功を載せざる故に、上聞に達せず。此故に御感狀なし。其後景勝卿、今般嶋野合戦に、何れも精を出し呉れ、満足たる由申されし所、安田答へて、皆々は仕合能く、稼ぎ働さ候段上聞に達し、御感狀を拜領致され、目出度存候。我等は誰も披露致さず、御感狀は拜領仕らず候へども、昔より數度の合戦に、随分御奉行申上、いかにも人には越すとも、人に越されず候。今度のやうなる合戦には、功に立つべき程の事御座なく候。就中御屋形への御奉公に、身命を抛つて稼ぎ申候。曾て公方への御奉公に仕らず候故、御感狀毛頭所望に存せず候と申しけりと云々。上總介は面にも手足にも太刀疵あつて、跣跣にて眼差光れりといへり。

別記に、杉原常陸介は、武功の者なり。景勝卿、一年江府より米澤へ歸城せられしに、常陸介其外大身輩、皆迎に出でたり。景勝卿夫々に詞をかけ、杉原が居たる處を、二三十間過ぎられしに、常陸介忽に頓死せり。人々藥を與へ、呼返せど

も甲斐なし。景勝卿も立歸り、保養の下知せられしが、終に死せり。景勝卿涙を流し、夜前夢中に、不識院殿鎌信の諡號なり枕に立ち給ひ、杉原常陸介を、此方へ給はれと宣ふ。夢覺めて、近習の者共に此事を語り聞かせ、常陸が死すべき兆を夢に見たるにやといひしが、其の如く只今相果てたりとて、甚だ惜しまれけると云々。

或曰、當時直江氏の後は、上杉家になし。彼家にては忌む事なりと云々。

扱夜に入りければ、本多出雲守忠朝、其部下淺野采女正長重・眞田河内守信吉舍弟内記信政・仙石兵部少輔忠政・秋田城之助實季・新莊越前守直定・松石見守重綱一本、此外に須賀攝津守勝政とあり等は、佐竹に代りて今福に向へり。又今日向井將監忠勝・九鬼長門守守隆・千賀與八郎政次・小濱民部少輔喜隆等は、葦島に移れり。

兩御所仕寄場御巡檢并斥候衆言上

附 本多正純取ニ扱小栗・山本口論ニ事

十一月廿七日、大御所は、寄手の仕寄場御巡見あるべしとて、片桐市正が寄口備前

島へ成らせられ、竹東の外へ出で給ひ、城中を御覽あり。本多上野介・永井右近大夫御前に立塞がる。小栗又市・横田甚右衛門・山本新五左衛門・山城宮内^{みやうち}・島彌左衛門以下、同じく御前に立覆へり。上野介・右近大夫等申しけるは、此所へは、城中より鐵炮を多く放し候間、御無用と再三諫め奉りけれども、御承引なし。御目見に來る諸大名、竝に御供の面々も、竹東の内に伺候せり。暫く城中の體を御覽の處に、鐵炮の玉一つ來り、島彌左衛門が草摺に中りしかども、身には中らず。其後大御所、竹東の内へ入り給へば、近邊仕寄の諸大名參向して、御目見えをなす。然る處に秀忠公も來らせ給ひ、即ち御誘引にて、仕寄の外へ御出あり。本多上野介・安藤帶刀・成瀬隼人正・永井右近大夫等、種々に制し奉りけれども、御挨拶にも及び給はずして、其後茶臼山へ還幸ありけり。御使番安部四郎五郎正之は、斥候として此中島へ數度赴きしが、今日平野に參候しければ、本多正信、北中の島新家居會根崎迄の間に向つて、附城とすべき所ありやと問へば、正之、地利を委しく演說しけるに依り、正信は四郎五郎を携へ、秀忠公の御前に出でて大繪圖を開き、正之が意味を具に言上す。

時に昨日、大御所と謀り給ふ所と少しも差はざるに依り、大に感じ給ひ、其上寄手の諸卒、寒氣を凌ぎ兼ね、手負多く出で來り、死歿する事を憐れませられ、附城を築き、兩公は伏見に暫く御歸陣あつて、來春暖氣を待ち、當城を攻めらるべき間、明日汝一人罷越し、砦の地面能く見分すべしと御誼あり。正之再三辭して、臣弱年にして、場所を見究むべき事憚ありと申せども、御許容なかりけるとぞ。同日千賀孫兵衛重親、斥候より歸りて、穢多村・新家村其邊六ヶ所船橋を渡され、蜂須賀阿波守至鎮・九鬼長門守・隆・戸川肥後守・正利等、諸勢の往還自由を仕る由を申上ぐ。同日午の刻、永井右近大夫・水野日向守・勝成・堀丹後守・直寄・菅沼左近定照、一本、定勝に作る、下皆同し。斥候より歸りて、敵勢七八千計り、野田・福島に出張仕る由申上げしかば、家康公上意に、明廿八日、様子御覽あるべし。御供は百騎計りにて出で給ふべき由仰あり。

異本に、千賀孫兵衛言上に、穢多村の葦島に、敵重なり候と相見え、ひたもの鐵炮を打出し申候。早々御攻あつて、然るべしと申す。依之大御所、明廿八日御巡見あるべしとて、本多・野介・菅沼左近・山岡主計、其外船奉行衆に仰付けらる。眞

田幸村は、豫て此葦島に足輕を出し、折々鐵炮を打たせなば、兩御所御巡見あるべしと謀り、若御出あらば、其時手利の鐵炮を以て打ち奉らんと思ひ、御本陣の邊に間者を置きて、兩御所の容體を窺ひ奉る所に、大御所、明日は福島・新家邊御巡見として御出あるべき由を聞届け、走り歸りて此旨を告げければ、眞田は翌廿八日、鐵炮の上手百人、小銃の上手五十人を選みて、小船に打乗せ、蘆間々々に深く隠し、大御所の御舟を、今や遅しと待懸けたり。大御所、已に御出あるべしと、御供の面々、各供奉の用意をして待ちし所に、本多上野介、南光坊を伴ひ御前に出で、今日は不吉の由を言上す。或説に、是れ内通に依つてなりといへり。家康公聞召されて、然らば止まるべし。然れども諸軍勢、此事を疑ふべしと仰ありけり。正純思廻らして、明廿九日、敕使御下向と御座候間、此儀に依つて御延引と、相觸るべしと申上ぐるに付きて、則本多上野介を以て、葦島の御巡見仰付けられけり。是に依つて眞田が謀、空しくなりしと云々。

同廿八日には、御下知として、野田・福島巡見の爲に、鐵炮三百挺を遣はし、城兵の

出づる方に向ひ、つるべ打に發ちける程に、其後は敵兵出です。此時大斥候として、本多上野介・成瀬隼人正・安藤帶刀等、福島・新家の様體を見て歸り、彼地の要害、多勢は備へ難し。且微勢にして兵陣を張らば甚だ危からんと申上ぐ。同日伊達陸奥守を以て、船場と木津の間、撞木橋に屯すべしと御下知あり。又淺野但馬守は、頃日今宮に向ひけるが、聊勵み戰ふべき體なければ、城中へ内應するかと謳歌するに依り、木津と今宮の間に、屯すべき旨仰あり。此日夕方より雨降る。伊達政宗より、家來山岡志摩といふ者を使者にして差越せり。野猪の指物を門外に立置きて、今日のしめり、幸ところ存じ候へ。其上風も城中へ吹懸け、時節よき折なれば、天満船場の地焼仕らんと存候と言上したりけり。使者を御前へ差出すべき旨、仰ありける處、彼者土足の由上聞に達す。然らばとて出御あつて、右の様子直に尋ね給ふ。志摩は此時、七十歳計りなるを御覽の上、汝に久々に逢ひしが、益々盛なりと上意の上、御前に於て、御湯漬食を下され、使者は歸りぬ。爰に佐久間河内守・山本新五左衛門は、普請奉行にて、御使番を兼ねけるが、小栗又市郎、新五左衛門に對し、今度御使

番の中に大臆病者あつて、諸大名の陣々へ御使に参り、竹束の外へ出づる事ならざる故に、城兵より笑はれ、我等迄面目なしと語る。抑此儀は、去ぬる頃佐久間と小栗と、佐竹の陣へ使せし時、佐久間は竹束の内を通りしにより、城中より之を見て、關東勢は、聞きしにも似ず臆病なり。あの様に命惜しむ者は、討取つても高名ならず。後世の爲なり、許せしといひて、笑ひけりとなり。山本と小栗とは、口頃仲も善かりしが、新五左衛門聞咎めて、此御使を承る者、誰か臆病を働かんや。武士の口より、左様の事は申さぬ物なりといへば、小栗冷笑ひて、御邊の事ならば、腹立もあるべけれど、君の御爲を存じ、殊に朋友の交に聞きし事を、押隠すは信友ならず。但し此事を御腹立あるは、身に覺ばし候やと申せば、佐久間は知らず顔にて聞き居たりしが、甚だ高聲なるにより、本多正純御前を立ちて、御次の間へ來り、何事ぞと尋ねけるに、傍の人、如此々々の由を申す。正純莞爾と笑ひ、各尤の吟味なり。何れも方左様に武邊の詮議厳しき故に、末々の者迄、手前を稼ぎ申す事、御前にも知召されたり。如此の吟味は、如何程もし給ふべしとて、酒宴に及びければ、互に口論

は止みにけり。

或記に、阿部四郎五郎、先手に使して歸るに、竹束の外を通れり。安藤對馬守重信之を見て、入らざる所の勇なり。合戦には勇み、用心には怯かれといふ諺、誠に理に當り候間、いつにても内を通れよといへば、四郎五郎が曰、先手の者、爰が道なりと教へ候に付、外を通り候と答へければ、重信重ねて、御旗本よりは先手に來る者に、斯く其心を試むるが習にて候へども、順和の儀ならず。御先手と旗本の、相勵むは強みになり、爭ふは弱みにて、敗を取るの基に候間、自ら能く戒め、斯る事を似せらるなといひきとかや。されば佐久間は、能く物見の役を心得、且御前を憚りし事を思召されけるにや、御加恩ありきと云々。

或記に、小栗又市は、初め庄治郎と稱せしが、いつも一番首一番高名を遂げけるにより、大御所の命にて、又市と改めたり。去ぬる關ヶ原合戦に、米津清右衛門清勝、敵の首を得て小栗に見せければ、又市之を見、我も高名せんと罵り乍ら馬を馳せ、島津が後殿に辭をかけ、馬上より突落し、首を得て歸り、米津に見せ、忽ち其首を

捨てたり。是は其時の手柄、名に應せざりし故とぞ。又曰、此時薩摩守忠吉朝臣頭を取らせられ、家康公の御前へ出で給ひければ、家康公を始め諸大名稱譽しけるを、小栗又市は、敵弱くして逃廻るを、足手を持たせて、首を取らせ参らせたるを譽め候へば、何でも敵は弱きと思召して、怪我あるべしと申し、により、忠吉朝臣も立腹し給へりと。斯様の者なる故に、高祿にはならざりきと云々。

或記に、島津以下鎮西の諸侯、秀頼公の調略に依つて、猛勢大坂へ渡海する巷説あり。大御所、使番の族を召して、攝州木津より泉州堺の津の邊に、大船繋ぐべき湊やある。監臨すべき由仰あり。各席を立たんとする時、汝等船繋の湊を察知する所以を心得たるかと、尋ねさせ給へば、何れも默然たり。時に御氣色損じ、凡そ船を繋ぐ磯は、見積る法あり。或は入江或は湊にあらずして、濱近き磯には、船繋ぐ事能はず。潮の干潟に船を止むれば、俄に着岸する事を得ず。又急に海上に押出す事も、叶はざるものなり。湊より五間船を出す時は、陸より又船を押留むる事ならざるものなり。入江渚の淺深石泥迄も、心を用ふる所を知らずして、

何を以て檢分すべきと、委細を教へ給ひ、大樹の使番も、相副へて往くべき由を命ぜらる。故に彼の來るを待ちけれども、如何なる事にや來らず。大御所の御使番巡見して歸り、木津より堺邊の間に、船繋ぐ湊なき由を言上す。大樹の使番も、往きけるかと問はせ給へば、如何してか遅參にて、路次にても逢はざる旨を言上す。大御所、弱年の奴原に、斯くの如き事見習はせんと思つて下知する處に、遲滞する條不届の旨、仰ありきと云々。

此日晚景、古田織部正重能御目見えの上に、先日今福合戰の時、佐竹が陣へ見廻に參り候處、敵不慮に取懸け、堤の蔭より打つ鐵炮、左の眼の邊に中り、玉止まる由を申す。大御所、右左の御挨拶もなくして、別の御咄になれり。此事を御近習の衆評しけるは、織部正、汝が役所に於て疵を被らば、忠義ともいふべし。教令を背き、他人の陣所に行き疵を付けたる事、不覺の第一なりとて、笑ひけるとなり。

或本に、古田織部は、好の道とて、佐竹が仕寄の付きたるを見、竹束の陰に入り、兜を脱ぎて積る物語せし末、風爐にて茶を飲みなどして織部後を屹と見て、此竹

東の中に、茶匙になるべき竹やあるとて、打傾きて尋ねけり。織部が頭髮禿げて日影に映りきらめくを、城中より見て打つ鐵炮に、吉田が頭に中りければ、肝を潰し頭を抱へ、前にありつる茶巾服紗物を以て血を拭へり。之を見し人々、好者に似合ひたる拭物かなと嘯きけり。せめて我仕寄にて手を負ひなば、少しの御威にも預かるべきに、あたら疵やとぞ申しけると云々。

或記に、此日先達つて秀頼公より、東武の福島左衛門大夫への使者雨森三右衛門、蒲生下野守への使者岩瀬長兵衛、歸らんとせし處に、蓮華寺村に陣する關長門守一政が屯に於て、取籠められしを、雨森岩瀬奮ひ戦ひ、三人を斬つて鼻をかき、城中に歸れりければ、秀頼公大きに感じ給ひ、故太閤の緘し給へる金札の鎧一領宛を給ひきと云々。

敕使御下向井福島正勝・島津家久不應大坂之招事

十一月廿九日、記に十八日に作る、敕使廣橋大納言兼勝卿・西三條大納言實條卿一本、飛鳥井に作る入來、今

日より諸軍勢に兵糧を増し賜はる。毎日三十萬人に、千五百石宛なり。遠國の輩には、一倍増に下さるとぞ聞えける。

記に、大御所の御前に於て、新家邊の蘆は、偏づつに葉ありて、相對せざる由申上げけり。則ち茹らせて御覽じけるに、申す如くなりけり。折節池田左衛門督忠繼、御前に候しけるが、此邊の蘆は蘆にあらず。悉く荻なりと申せば、家康公聞召され、汝知らずや、難波の蘆は伊勢の濱荻といふ事をと、仰せられきと云々。

同記に、廿九日、日野大納言飛鳥井一本
鳥丸中納言、頭左衛門督御見舞として參向あり。大澤少將基宿披露する處へ、日野輝資入道並に金地院の傳長老、伺候ありければ、禁庭の儀式、久しく世の擾亂せるにより、廢闕せると、因循して時に叶はざるとあり。今般諸家の記録並に歷代の記録、具に考へ合せ、有職の人と雖も、糺し極めて、禁中の儀式、時の宜を計つて、損益の考評あるべしと仰出さる。其後に各退出せらると云々

福島備後守正勝、大御所の御前に候し、秀頼公の廻文を獻す。則御覽あるに、味方

に屬し忠戰を致すに於ては、安藝備後二ヶ國の上に、周防・長門を宛行はれん間、故太閤の厚恩を忘れずば、急ぎ反忠を致すべき由を記さる。彼秀頼公の使をば、十指を切つて逐返し、由を言上す。又島津薩摩守家久が使者伊集院半右衛門來りて、薩摩守舟を泛べて、近日着陣すべき旨を言上す。

或記に、大坂より天滿を抱ふるに由あり。今度秀頼公より、諸國の大名に書を遣はされ、相頼まるゝ中にも、島津薩摩守家久本書に、薩摩守家久とあれども、傳寫の誤なるべければ、今改て下指同じには、自

島津家久
秀頼の招
を斥く

筆を染められ、正宗の脇差を給はり、島津同心あるに於ては、天滿を守らせんと
の事なりしが、家久承引なく、脇差を返進す。是に依つて後に天滿を自焼す。島
津の返翰は、御和談の後に、城中より出でて世に流布す。其詞に、

從秀頼様御書被成下、謹而頂戴仕候。抑今度大儀就被思召立、早々可致上洛
之旨被仰下候。先年石田治部少輔取起弓箭之時節、危父兵庫入道令在上方
候而、雖不能分別候、太閤様御一筋相守於關ヶ原盡粉骨候所、合戰相敗、天
下御所様御安事被成候。其後吾等身上可及迷惑之所、被捨御遺恨、數年御厚

恩之趣、世上無其隱候條、當代相背候儀不罷成候。就中正宗長銘之脇差被下置候得共、御斷申上返致進上候。御前可然様御披露所仰候。恐々謹言。

十月十二日

松平薩摩守

大野主馬首殿

一本に、今月朔日、島津薩摩守家久、使者を以て言上に、去ぬる頃、大坂より長崎へ往還の商人高屋七郎兵衛と申す者を以て、秀頼公の墨印竝に長銘正宗の脇差を持參せしめ、秀頼公の仰を演説して、今般一儀を企てらるゝに付、薩摩守を頼まんとこの事に候。返合は、關ヶ原以來流浪の所に、大御所の御恩を以て、本領安堵せしめ候上は、豊臣家へ同心罷成らずと申し、右の脇差を返し申候。彼七郎兵衛儀、買人たるを以て、命を助け候旨を述べ、則ち秀頼公より差越されたる書簡を、家久が使者持參せり。本多上野助披露せしむと云々。

一本には、去ぬる八月下旬、川北四郎左衛門或は勝左衛門を薩州に下し、正宗の脇差を給はり、御頼みありけりと云々。

拔_ニ伯樂淵之壘_ニ事_并乘_ニ取船場町_ニ事

伯樂が淵と申すは、前に大河二筋流れ、西は葦島にして南北に堀あり。或本に、伯樂淵の壘は、上伯樂町にあり。西國第一の要害なりしに依り、大坂にも、此所は一大事なれば、器量ある輩に守らせんと、薄田隼人正兼相に仰付けられ、六七百騎計り楯籠りけり。抑此薄田隼人正は、故太閤小姓立の者にして、其長飽迄高く心剛にて、力世の人に勝れり。常相相撲を好み、中國西國の中に手に立つ者なく、去ぬる頃も喧嘩せしが、二三人の相人を、或は胴切にし、又は弓杖二三丈計も投げけるに依り、時の人、鬼薄田と稱せり。人は類を以て集まる習なれば、相従ふ郎等浪人に至る迄、皆力量人に超えたる溢者共なり。又馬物具を嗜む事も、餘人に勝れたりしかば、薄田常に廣言して、君の御身の上、一大事あらん其時、御内外様の面々、某に超えて高名せん人、恐らくはあるまじと自讃する程の不敵者なるに依り、此所の大將にぞ選ばれける。故に郎等士卒等を相従へ、栖樓を上げ、大中白に耳付きたる旗を、鹽風に吹靡かせ、快氣の氣

を呑んで楯籠れり。

或本に、馬喰が淵の邊河波座には、阿州の商人常に住し、今度心ならず城内に入り、今更遁れ出でんと思ひ、寄手蜂須賀阿波守が許へ、此邊の外壘微勢にして、其守固からざる事を告ぐる故、蜂須賀は、其聲池田宮内少輔が兵を合せ、馬喰が淵竝に阿波座土佐座の敵の砦は、海河の咽なれば、之を抜かんと欲すれども、先達つて乗取る葦島へ、馬喰が淵より、時々輕兵を出し、叢葭の中に伏せ置く火炮を發する故、其功を遂げ難し。彼島へ一將を遣はされ、其伏兵を追拂はん事を、兩公へ願ふ所に、藤田能登守信吉も、監軍たる故、馬喰が淵を巡見して述べけるは、馬喰が淵の廻り十町に及ばず、方三町に足らず。籠る處の薄田隼人正が人數、内を取つて積る時は、二千八百計り、外を取つて積れば、三千六百計りに過ぐべからず。薄田が事は、信吉往年時々參會せしが、剛強にして野鄙なり。假令刀の柄は蓬くとも、目釘さへ強く、鞘は所々禿げたりとも、刃さへ銳利なれば善しといへる風俗にして、或は刀にて斬りたるも、棒にて打殺したるも、畢竟勝は同じ事

なり。旗竿は曲れりとも、鎗は揃はずとも、油斷せぬが肝要といへる類の者なるが、今度は旗を靡かし砦を飾る上は、寄手を恐れたるに究まれり。大方其身は事に託して、城内へ往けるかと申せりと云々。

然るに昨廿八日、大御所、永井右近大夫直勝・水野日向守勝成かつしげを以て、磯多村の城より、新家居迄の道筋、見分すべき由命せられ、一本、堀丹後守と三人に作る、兩人巡見して罷歸り、道筋

の様子、且、伯樂が淵の堤に、高く井樓をあげたる趣言上しければ、早々其所へ罷出で、江の小島の前なる川際に仕寄を付け、大銃にて井樓を打崩し申すべき山、本多上野介を以て仰付けられければ、即時に仕寄を附け終り、日向守、永井に向ひ、若し夜の中、城兵に淵を越させ、此場を破らせては如何なり。某此處を守るべければ、貴殿一人御歸あつて、右の趣言上せられよといひければ、永井は水野が我を提拔き、伯樂が淵の砦を乗取るべき企なりと邪推し、兎角一同に言上せんと申しけるが、石川主殿頭忠總此所を望むにより、相渡して兩人は歸れり。此主殿頭と申すは、相州小田原城主大久保相模守の二男にて、始め總十郎と稱せし處、廿八歳の時、外祖父

石川日向守家成が養子となり、濃州大垣にて、五萬石を領せり。然るに今度供奉仰付けられし初め、家の郎等を召集め、某は實父御改易の刻、同罪にも仰付けらるべしと覺悟を極めありし處、思の外に他家相續せしとあつて、御赦免を蒙り、剩へ御先手を承ること、時の面目世の聞え、何事か是に如かん。然れば命を限り忠戰して、養父の恩を報じ、且實父相模守が眉目を開かんと申しければ、並居たる家臣も、皆鎧の袖を潤して、命は義の爲に輕んずところ申傳へ候へ。恩を擔ひ德を戴く者、此節に臨んで命を惜みなば、誰か人倫といはんやと、聞くとすい冷しく申しけり。扨主殿頭は先達てより、何卒伯樂が淵の砦を乗取らんと思へども、城兵は井樓塀矢狹間より、鐵炮をつるべ放つに依り、石川が從士死傷する者多く、心は矢竹に思へども、潮差入りて水深く、舟もなく橋もなければ、徒に日を暮せり。

一本に、石川主殿頭は、父が虛名を雪がん爲め、向に永井水野が仕寄を付けたる葦島を守らんと思ひ、之を訴へしにより、永井即ち披露せし所、其忠志を御感あつて、許し給ひければ、忠總其兵二千三百人を率して、葦島を取敷きしに、海河を

請けたる地にて潮差入りしかども、少し高き所を本陣とし、葦萱を刳棄てさせ、士卒の脚を水に浸し、終夜馬喰の淵の砦へ、火炮を發しけりと云々。

一本に、蜂須賀が家臣中村右近といふ者、阿波守が前に出で、御旗本より水野日向殿を差越され、仕寄を付けられ候へば、明早朝、伯樂が淵を乗取るべき企と相見え候。御先手に居ながら、御旗本に取られては、先日の穢多ヶ崎の手柄、水になり候と申し、馬喰が淵の砦を攻めんと、夜中に仕寄を附けしと云々。

或本に、池田宮内少輔が從士北川久太夫は、小舟に棹し、馬喰ヶ淵を監察せしが、砦の内より之を見て、打掛くる鐵炮甚だ繁く、身を屈する内に、汐干て舟動かず。北川身を締め乍ら、腰より炮玉十計り取出して、砦より火炮を發する度々に、川の中に投入れて見せければ、敵は目當下りて、川へのみ玉陷つと思ひ、銃先を上げて發しければ、玉悉く舟の上を越えて、北川は難なく汐滿つるを待得て、漕歸りきと云々。

折節今夜は大雨降り、火繩も消ゆる計りなれば、隼人正は心を弛め、町家へ出でて

遊君を集め、數刻の酒宴に沈酔して、前後も知らず臥したりけり。大將如此なれば、

相從ふ者共も、大方は町家に出でて酒宴をなせり。一本、薄田は、城中にありて軍議をなせりと云々。然るに今晦日

一本に十九日未明に、蜂須賀阿波守至鎮が舟手森甚五兵衛村重・其子甚太夫氏繼・同藤兵衛

等、兵船にて押渡る。陸手は中村右近・山田織部・樋口内藏助等の總軍、是も同じく川

を遊び越えんとす。主殿頭は、薄田が此所に居らざる由、問者より告知らせけれど

も、舟なければ如何はせんとする處に、はや蜂須賀が人數、船手陸路兩口より押込む

を見て、石川が兵士中黒彌兵衛一本に彌右衛門・坂部金右衛門記に與右衛門・神田九兵衛・大河内木工

左衛門・淺井左治右衛門・佐川記に石川に作る・孫市一本佐川孫市を脱し平手市之丞に作る・鹽谷源五郎・坪井七郎兵

衛等八人は、破れたる小艦に取乗り、押出さんとする所に、松井角太夫といへる者之

を見て、孫市が鎧の袖を控へ、如何なる事をする事ぞ。その破れたる舟に、大勢取

乗りて渡らるべきか。假令渡り得るにもせよ、續く味方もなく、戰に利あるべきか

と制するを、八人の者共は、聞かず顔にて、鎧の柄を取延べ船棹とし、江の小島迄渡

付く。森甚五兵衛・同甚太夫・同藤兵衛等は、兵船に取乗りて押渡り、江の小島の前

伯樂が淵
合戦

に舟を寄せ、伯樂が淵を阻て、鐵炮を發すれば、城兵は、思ひ寄らざる事なれば仰天して、太刀よ物具よと周章て騒げども、大將なければ、誰か下知するといふ事なく、鐵炮少々打掛け、れども事ともせず、石川が家臣中黒彌兵衛進み出で、下立たんとする處に、森甚五兵衛聲をかけ、先の小川深くして、下立つ事は叶ふまじといひて、石川が方へ舟を寄すれば、伯樂が淵の岸なる敵兵、早ひたくと鑓を伏する。森甚五兵衛之を見て、眞一文字に乗懸け、互に鎗迫合をなす處に、石川が家士八人は此間に、向の岸へ馳上り、終に簀戸を押破る。城兵防戦すれども、俄の事にて、甲冑を着たる者も稀なりければ、叶はずして、大坂の城を指して引退く。八人の者共は、續く味方もなかりける故、取籠められては叶はじと、引返して栖樓に打上り、指物を抜替へ、味方遅しと待ち居たり。主殿頭は、川向より之を見て、先手の者共を討たせんこと、口惜しく思ふ處、笛吹の春日又右衛門といふ者、主殿に向ひ、此者共を敵へ討取らせ候はゞ、永き弓矢の御恥辱たらんと申すにより、忠總猶々いらち、身を揉んで押渡らんとする處、焼損じたる小船一艘流れ來れば、已に取乗り渡らんと

するを、叔父大久保權右衛門忠爲之を見て、大將たる者、斯る卒忽なる事やあると差止めて、忠爲主従三人計り、燒舟に打乗り、鎗の柄を舟棹とし、向の岸に打上る。

此時薄田隼人正兼相は、僅の兵を引具し、息を限りに馳せ歸りしが、多勢の敵、早入替りしとや見たりけん、牙を嚙んで怒れども力及ばず、城中へこそ退きけれ。又主殿頭は、九鬼長門守が野舩ひらた一艘を請得て、總勢を追々に渡し、土佐座の方へ走る敵を追討にし、蜂須賀が方へ使を立て、此所の砦は、某が人数を以て乗取候と申送りけり。斯くて城中よりは、此合戦の様子を聞き、援の勢を出し、所、東兵の勢を見て、叶はじと思ひけん、半途よりして退きけり。又薄田が組に平子主膳貞詮息茂兵衛門貞仲といへる兩人、此所已に攻破れるにより、小舟に取乗りて城中を志し、落行かんとせし所に、池田宮内少輔忠雄が家臣横川治太夫といへる者、よき敵と見てければ、大音あげ、黒くも敵きたなに後を見せ給ふものかなと恥しめければ、平子父子は取て返し暫く戦ふ。其間に、同じ家臣箕浦右近といへる者駈來り、茂兵衛と切結び、終に貞仲は右近に討たれ、治太夫は又貞詮が首を得たり。抑此主膳は、家

康公に對し奉り、三度迄御敵なしたる者とかや。爰に平子が從士の佐生甚之丞といふ者は、よき敵一人討取りて、首を提げて、城中指して落行く處に、初め追散らされたる平子が難人等、佐生を見て、平子殿は父子共に只今討死し給ふに、見捨てゝ落らさせ給ふかと詞を掛けゝれば、平之丞之を聞くと等しく、持ちたる首を敵陣へ投入れ、大勢の中に走入り、前後に當り左右を追卷り、終に討死せり。天晴由々しき侍やと、惜まぬ者こそなかりけれ。彼大將薄田は、器量人に超えたる故、容易く此場を攻落されじと、諸人末頼もしく思ひしに、戰もせず、東國勢に追立てられて逃歸り、寄手に利を得させけり。彼といひ此といひ、言葉と行、雲泥の相違かなと、城中の輩も興をさまし、薄田を憎しと思ふ者やしたりけん、

伯樂が淵にはや疾く身も投げずすゝきたなくも逃げて行くかな

と傳へて笑ひけりとなり。扱池田宮内少輔よりは、平子主膳父子が首を獻せし處に、大御所御覽あつて、高祖父以來貞詮迄六世、相續いで命を戦場に棄てたり。斯る勇士の首級は、弱年の者共よく見置くべしと仰せられ、又彼首を宜しく葬るべき旨

を命ありける。

或記に、伯樂が淵は、大坂第一の要害の地なる故、薄田隼人正に守らしむる所に、一戦にも及ばず、其上頼み切つたる平子父子を討たせし事、薄田が不覺より出でたり。殊に其夜は陣所に在らず、是れ關東へ内通たるべしと、秀頼公へ訴ふる者あり。依之大野治長を召され、糺明の上誅すべき由以外の外なり。大野仰を奉り、御前を立つと雖も、薄田は大剛の勇士にて、氣早き者なれば、卒忽の振舞あるべからずと、直に織田有樂が方へ立寄り、此旨を語りけり。有樂申すは、薄田隱謀の事は、全く虚説なるべし。去ぬる頃、平野を焼拂の功成らず、又此度の不覺により、東國より斯る事をいへるなるべし。怨を恩にて報ずといふ事あれば、貴殿御前を宜しきに執成し、御免を願はるべしとあれば、大野尤もと同じ、然る上は某一人にて申上ぐとも、御承引計り難し。貴公と諸共に御諫言申すべしと、兩人打連れ御前に出で、有樂理を盡して申し、により、御免ありぬ。其後大野が陣所出火の時、池田武藏守・同左衛門督・森右近大夫等の軍兵込入らんと進みしを、薄田

勇戦して防ぎしに、東兵攻倦み引取りけるは、全く隼人が働故なりと云々。

蜂須賀阿波守至鎮が勢は、直に船場の町へ乗込みて、雜人等が首を切取る中にも、森甚太夫は敵と鎗を合せ、首一つを討取れり。又森藤兵衛は深手負ひけるが、陣屋に歸つて死したりけり。森長左衛門・廣田加左衛門は、敵一人を相討にす。此外手負數多あり。森甚五兵衛は此所を守りしが、小川四郎右衛門と鍵を合され、小川が鍵を叩き落せば、軍は此場に限るべからずと罵りて、小川早くも退くを、甚五兵衛は聲を掛け、返せ〜と呼はるを、四郎右衛門振返り見て、本城の大事を忘れ、砦の小迫合に拘はらんやといひ乍ら、靜にこそは退きけれ。小川に續きたる渡邊金太夫・小川九郎右衛門・長野半右衛門・大野仁左衛門以上十人計り、蹈止つて鍵を合せ、或は討死し、又は城兵の首を提げ、本城へ引取る者もあり。其後に至鎮は、軍士に城兵の首二つ取持たせ、將軍家の御旗本へ差上げ、船場の町一番乗仕りたる由を言上せり。

或記に、蜂須賀の臣森甚五兵衛村重が父は、志摩守村春といへり。朝鮮征伐の時、

彼地に於て、敵の番船八百餘艘、大銃千挺を備へ、日本より釜山海へ、船の通路を止めん爲めに支へしかば、加藤左馬助・藤堂佐渡守後に和泉守・九鬼大隅守等、合戦に及ぶ時、蜂須賀家政の備より、森志摩は、大小の兵船數十艘を進め、諸將を諫めて、敵船に石火矢多し、夜に入りて押掛らば、勝利を得んといひければ、咸聞きて、此術尤然るべしと相議し、即ち夜討にせし處、敵船に大銃多しと雖も、暗うして更に益なく、森志摩守・同甚五兵衛父子押付けおしつけ、焙烙火箭を投入れ、騒ぐ所を、熊手に掛けて引落し、鎗を以て突伏せ、或は切倒し、又は生捕にし、即時に大船二艘を奪ひ、敵四十餘人を討取りければ、殘兵敗走しけるにより、味方は勝に乗つて追懸けたるに、敵返し合せ、再び軍起りし時、志摩守は討死し、甚五兵衛は難なく引取り、譽を顯せりと云々。

乗取福島之壘井道頓堀の壘放火の事

抑福島の新家居といふは、天満より西に當れり。大野修理亮治長が承にて番船を置

く。福島には、小倉作左衛門行陰といふ新參の侍に、大野が手勢計りを差添へたり。一本に、小倉作左衛門行陰、一本に行春とあり父は孫作とて、江州の者なりしが、蒲生氏郷に仕へ、會津南山城一萬石を領し、續いて作左衛門は秀行郷に仕へ、再び會津に移りし所、岡本平兵衛と不和にして國を立退き、今度大坂に籠城せりと云々。

又船奉行宮島備中守則救といふ者、舟を拵へ、相共に川口を支へし所、備中の戸川肥後守達安・花房助兵衛職之父子、新家居に屯し、連日野田・福島之敵と提を隔て、火炮を以て相挑みけるが、老功の花房助兵衛、敵の砦に旌旗動搖せず、烟僅に登るを見て、必定人數を引取りしものならんと察し、牒者を以て窺はしむるに、歸り來りて、敵は野田・福島の兩砦を抱へ、豫て疾く城中へ引取る旨を述ぶるにより、早速相備の池田左衛門督忠繼に告知らせければ、忠繼欣然として、戸川・花房を魁として、水陸より蜷江に進んで、野田の砦に至り、堀を破つて亂入するに、軍士一人もなし。戸川・花房等は舟を進め、上福島に赴き、宮島備中守が守りし大船二艘を、戸川が士岸原某乗取る所を、九鬼長門守・千賀與八郎・向井將監進み來つて之を得たり。岸原

大に立腹して、理不盡の所爲、早く退くべしと鎗を揮つて罵るを、肥後守之を見て、水上は船手の司る處なればとて、卽二艘共に渡して、上福島を放火し、敵の首七級を得て、此の所に屯せり。

或本に、淺野但馬守長晟は、今宮の陣に至りて、其地に兵を残し、早速野田・福島に赴き、備前勢を救ふべき仰に依つて、卽刻大船十餘艘を發し、旌旗を靡かし金鼓を響かせ、野田・福島に至らんと、馬喰が淵迄臨めり。早味方の大軍、兩所に押渡り充満せしかば、其臣淺野左衛門を以て、戸川・花房を救ひ、長晟は海上に船を浮め、敵再び野田・福島の地に出では、戰を解くべしと其用意をせりと。又曰、仙波口の石川主殿頭は、大銃を發し、堀塀を打崩せば、城内よりも火炮を頻に放ち、味方死傷若干なり。斯る處へ、安藤帶刀・成瀬隼人正來つて、先達つての大功、甚だ御感ありと雖も、敵地に深入して、死に陥らんとする事、御旨に應せず。早く馬喰が淵迄、人數を上ぐべしと下知す。石川は、御誼默止し難しとて、成瀬・安藤と共に、暫く攻口を退さけるが、兩使歸りて後に又張出し、夥しく大銃を發せしむ。

大御所は、主殿頭が氣象、一定引くべからざる事を察し給ひ、瀧川豊前守忠往・近藤石見守秀用を以て、騎士四十輕卒二百人を遣はし、石川を救はせ給ふ。是味方川を隔つる所に、忠總のみ城邊に進む故、城より夜駈せんかと思召すなり。主殿頭は大に喜び、夫より援兵をば、後の川際に備へさせ、吾輕卒を前に列し、終夜火炮を發せしむと云々。

同日秀忠公より、土井大炊頭利勝を御使として、大御所の御陣所へ遣はさる。密事なれば知る人なし。其後家康公より御使を以て、船場町へは、先手の諸將、時を移さず軍勢を押入れけるに、北口の寄手共、今に於て川を渡さる事は、如何と仰ありければ、城和泉守堅く制止するに依り、延引仕る由を言上す。

一本に、今晦日辰の刻、安部四郎五郎正之は、神崎の池田武藏守利隆が屯に至り、地圖を畫き、築山に登りて見れば、戸川肥後守先鋒の池田左衛門忠繼、蜷江村より野田に赴き、乗取る體なり。利隆指して、是れ力を合せて相救ふべき時なりと雖も、當手の御使番城和泉守、頻りに制する故、如何ともし難しと、拳を握つて忍

びたる體なり。正之も尤と同じ、和泉守を諭しければ、第一武藏守は、左衛門督
昆弟の親みなれば、共に力を合せて相救ふ事、道の道たる處、第二には、備前備
中の勢のみ、深く敵地に入りて、若し敗を取る時は、千悔すとも益なかるべし。
其期に及びては、御教令を守り過ぎたるが、却て兩將軍の台慮にも協ふべからず。
一部のみ克つ事を得て、野田・福島を抜きて之を取られなば、武藏守必ず怯弱の汚
名を蒙られん。早く兵を進め、弟忠繼を救はせて然るべき旨、再三諫めけれども、
和泉守生得我意を立て、是に應せず。四郎五郎牙を嚙んで去ると云々。

別記に、城和泉守昌茂が父は意庵と稱し、上杉謙信又は武田信玄に仕へ、雙方に
て被愛の勇士なり。此昌茂も、舊は織部助と稱し、勝頼の時に、英武の聞えあり
しが、小迫合の格を守り、勝を専らとし、敵を奥深く取りて、正之が詞に應せざり
きと云々。一本、此事は、去る六日、池田忠繼、神崎川先陣の時の事に作る。

大御所の上意に、最前城和泉守を、天満口の目附に遣す時、若輩の面々下知を得ず、
先登を爭ふといふにより、堅く制すべき旨申付けたり。其時を相守りて、川を渡さ

ざる事奇怪なりとて、和泉守御改易仰付けらる。其後に儒者道春を召され、御物語共あつて、軍中には、君命をも受けずといふ事、大將の器に當る者のする所といふを、和泉は知らずやと上意ありけり。

或記に、甲州侍の城意庵が弟小石二郎右衛門といふ者、度々戦功ある者故、夏陣の時大御所より、越後忠輝朝臣の武者奉行に仰付けられて、玉虫對馬守と稱せり。然るに忠輝朝臣は、五月六日の軍終る頃着陣あつて、其夜大坂へ掛らんとありけるを、玉虫が申すは、合戦の勝は、二の手にありといふ理を説くに依つて追討たず。越後勢は、刀に血を付けざりしを、大御所・林道春にも、書吳子の六國の風俗を讀ませられ、其座より追放あり。依つて逃虫と呼ばせられきと云々。此二條相類せり。追つて尋ぬべし。

或本に、向に阿部四郎五郎は、九鬼・小濱・向井・千賀が水軍の體を監察し、且備前備中の勢、味方を離れて深く敵地に入ると雖、海西の軍勢が、續いて之を救はざる事、大御所の御旨に應ぜざる故を聞かば、須臾も遅々せず、後軍忽ち野田・福島に至

らん事を按檢する趣を、秀忠公の御陣にて演説して、侍座する所へ、本多佐渡守、住吉へ御使に往きて歸り、相續いて土井大炊頭も住吉より歸り、海西の諸將、備前備中勢を救はざる事を、大御所の怒らせ給ふ由を聞きて、忽ち諸將野田・福島に押渡る旨を言上せり。其趣只今四郎五郎が推察して申上げしに、聊も違はざりければ、秀忠公、汝初めて戰場に臨んで、其工夫殆んど老功の士に劣らざる事を、感じ給ふと云々。

或本に、阿部四郎五郎、今夜仙波・天満の敵、引取るべきかといへり。本多佐渡守、其故を問ひければ、某察する處、第一に上福島を攻むる備前勢七千にして、後陣の續かざるを敵知らざるを以て、其愚昧論するに及ばず。第二は若し之を知り乍ら戦はずんば、弱敵にして恐るゝに足らず。第三は、備前勢を、味方の諸將救はざる事、大御所御怒の由を聞くと等しく、味方の勢中津川を越えて、南中の島に押渡る形勢を見るに於ては、仙波・天満の兩砦は、しかく壘壁の設なく、大河を後にし橋少なければ、死地に陥りて、大軍猛勢に圍まれん事を恐れざらんや。守

るに堪へずして、夜陰に城内に引取らんかと申せば、秀忠公、汝が察する處違はざらんと御誼あり。本多佐渡守・土井大炊頭も、四郎五郎が量る所理に當り、詳なる旨を稱美すと云々。

或本に、大御所、住吉の御陣より、花房助兵衛職之が四男柳原左衛門職直後に任二飛騨守一を遣され、花房父子が功を賞せられきと云々。

或本に、薄田隼人正は、馬喰が淵を乗取られ、其憤甚しく、殊に城中の列將大に嘲りければ、毛利豊前守に向つて、今夜蜂須賀阿波守が屯を打破るべし。足下後陣に相頼むべき由述べければ、豊前守が曰、予は新參の士、其勢而も僅に三百計なれば、先陣勿論なり。御邊は多勢にして、本座の士なり。是れ後軍たるべき所以なり。某何ぞ後陣にあるべきやとて、承引せざりければ、薄田が血氣の勇も衰へ、其事を黙止すと云々。

同日伊奈筑後守直次へ、先達つて春日井堤を築くべき由命せられし所に、今に至り其功成らざるにより、御腹立あつて、福島備後守正勝・毛利長門守秀就が歩卒を以

て、彼所を築切るべき旨を、松平主殿頭忠利並に片桐市正に仰付けらる。又家康公は、成瀬隼人正・安藤帶刀を以て、野田・福島・伯樂が淵の間に、然るべき所を、淺野但馬守が陣所に渡すべき由を仰あり。兩人罷向ひ、彼所には蜂須賀阿波守相對し陣取り申す旨、畫圖を以て言上せり。又石川主殿頭は、新町橋に在陣すべしと仰ありけるを、いやく、此所不可然と、大久保權左衛門が申すにより、高麗橋の南に陣しけり。扱最前破船に乗つて川を渡りける時に、制しける松井角太夫は、面目なき次第といひて浪人しけるが、又翌年兵亂起りければ、松平下總守忠明の手に屬して、五月六日の合戦によき首取つて高名す。さるに依り忠明之を感じ、領地二百石を與へけるとぞ聞えし。扱城中には打寄つて、所々の要害を攻落されたるにより、道頓堀を抱へたる大野主馬助治房が守砦は、如何あるべしと評議すれば、七組の面々、最前も申す如く、籠城に内の廣きは、失あつて得少き物なれば、言葉を盡し止めしかども、主馬介が計らひとして、言甲斐なく攻崩させ、敵に氣を付けぬることこそ口惜しけれとて、主馬が方へ、其段仰遣はされし所に、治房承引せず、殊に組の中なる塙團右

衛門直之も、爰は退き候所にては無之由を申すに付、主馬介が申すは、兎角某を棄殺すと思召され、此所に差置かれ候やうにと返答するにより、是非なく秀頼公の仰と稱し、早々登城すべしと申送り、三十日の夜半時、治房が登城の跡へ、城中の間者出でて、今橋の方より火を掛けて自焼せり。主馬組も他の組も興を覺まし、旗指物大銃鐵炮雜具等皆打捨て、我れ一に城内へ逃入る事引きも切らず。塙圍右衛門は其組を下知して、武具馬具等一つも残さず、皆城中へ取込めたり。其外の組は、指物鎗長刀に至る迄、悉く捨てたる故に、寄手に拾はれ、人口の嘲となれるに付、主馬が憤少なからずと聞えけり。

記に、城中には評議して、伯樂が淵・福島等の出城共破れぬれば、天満船場の兩町も如何あるべしとて、此上は兩町をも焼拂ひ然るべしと評議し、主馬が方へ引取るべき段言送りけるに、主馬之を聞きて、我れ萬夫に先達つて、横行の勇を振はんと志す上は、節に當り義に臨み、命を惜むべからず。然りと雖も、事に臨んで恐れ、謀を好みてなすは、勇士のする所なり。暫く船場の出城を退かんとて、十

一月晦日に、天満四町に火を放ちて、城中へ引取りしと作れり。

或記に、天満を自焼の時に、何れも旗指物等迄を、皆打捨て、城中へ引取る。塙團右衛門は少しも驚かず。自火か、但しは敵方より火を放ちしか見届くべしと、馬に乗りて出で、篤と見定め、自火に相違なし。雑具は捨つども、馬物具を捨つるは、武家の恥なりと下知し、心靜かに本町橋へ懸り、城中へ入らんとす。此所は織田左門頼長が持口なる故、家臣今中左馬助罷出で、人數を改むる所に、織田左門も一騎蒐に馳せ來り、團右衛門を見て、其方が所爲にて斯様に及ぶ事、言語道斷なる由を申せば、直之立腹して、如何程の軍陣を勤め候へども、陣拂も致さぬ先に、自火する法は承り申さず。諸軍の騒動にて、諸道具以下を捨置き、見苦しき有様は、是非なき事に候。さり乍ら某が組は、兵具少しも取落し不申候。向後斯様の儀は、御無用に候と申しけりと云々。

或本に、天満・仙波は、高家華麗に薨を並べし故、火甚だ熾にして明日に至る。後藤又兵衛が曰、備前勢續いて天満に入らん。壯士等烟の下に伏して不意に發し、功

名すべき旨下知しければ、壯勇の士、彼處此處に伏しけるが、備前勢猥に攻近付く事なければ、悉く後藤が武功に誇り、怒の下知を下す由嘲る色を見て、又兵衛が曰、何事も時に依つては、其積り相違す。備前勢必ず附入にすべき處、擬議するには故あるべし。忠繼の相備に、花房助兵衛が未だ存生にて來りけるか。然らば渠が意を加へたらんといへり。果して爾あり。御和睦の後に、戸川彌左衛門、後藤又兵衛を招き、宴會せる時に、某承り、今度城より天満・仙波の外壘を自燒して、其兵郭内に引取りし時、何とて備前・備中の勢、城兵を慕ひ討たざるかと尋ねければ、彌左衛門が曰、愚兄肥後守を始め、烟に紛れ附慕はんと進みけれども、花房助兵衛堅く制し、城には後藤といふ銳將あり。怒に慕ひ、不覺すべからずといへる故、之を討たざりしと答ふ。誠に又兵衛が察せしに違はずと云々。

城兵出張欲燒高麗橋之事

十二月小朔日辰刻、池田武藏守利隆・同左衛門督忠繼・森右近大夫忠政・有馬玄蕃頭豊

民、各天満の地に入り、此所焼失すといふとも、民家大半残つて、猶便ある由を、服部權太夫・島彌左衛門尉申上げければ、大御所微笑し給ひて、六日の菖蒲なりと仰ありけり。其後に中井大和を召され、來六日、大樹は平野より岡山へ御陣所を替へられ、大御所は、住吉より茶臼山へ移り給ふべきなれば、船場の町屋を壊ち、營を作るべき旨仰付けらる。又城兵は、本町橋と今橋との間に出張し、昨夜の自焼に災を遁れ、所々を焼拂ふ。石川主殿頭は、煙の下より競ひ蒐り、放火の爲に出張する敵を、高麗橋に追入れければ、城兵も、寄手を堀際に近付けまじき爲に、船場の方へ夥しく大銃を發す。船場と總郭の間に、橋多くありけるを、後藤又兵衛悉く自焼し、今橋と高麗橋とのみ残りけるを、石川は、高麗橋の前に備へし故、橋を焼かせじと、橋際に進みし所、城兵頻りに鳥銃を發し、忠總が士卒は、手負死人多かりけるにより、小栗又市・山本新五左衛門、住吉に至り、右の趣を言上す。時に永井右近大夫直勝侍座しけるが、石川主殿頭微勢なり、幸ひ蜂須賀阿波守近く屯し候。急ぎ彼勢を以て主殿頭を救はせ、橋を焼かせざる様に仕るべきかと伺ふ。大御所大に御氣色損じ、己等は

一向に軍慮に疎く、此の如く孟浪たる事をいふかと宣ひ、御傍なる長刀を執らせ給へば、永井・小栗・山本、皆恐入つて退去す。薙刀は松平右衛門大夫正綱

今豊州吉田の城主、七萬石

を領す。松平氏の家系なり

之を賜はり、元の所に差置けり。暫くあつて大御所仰せらるゝは、彼橋

は、味方より態と焼かせんと欲すれども、橋を焼かば、最早總攻をばせざるものと、敵の推量せん事を憚りて、其儘に差置く所なり。敵より橋を焼くこそ幸なれ。

日本國の軍勢を以て此城を攻むるに、橋一つを頼むべきか。橋を焼かざる時は、彼所の寄手は、心易く寝る事あるべからず。細に主殿頭に諭すべしとて、山城宮内少輔佐久間河内守を、高麗橋に遣はさる。此兩使馳行きて、制詞を加ふと雖も、斯の如く敵と挑み合ひ、中々人數を擧ぐる事難き旨、御請に及ぶにより、重ねて加々爪甚十郎忠澄・豊島主膳・信満を以て、汝微勢にして敵地に深入し、敗北する時は、却て味方の恥辱ならずや。唯船場の諸軍と等しく屯し、敵の消息を見るべしと、寛裕に命ぜられけり。主殿頭是に承服し兵を退く。城兵は又此石川が支に支へられて、遂に橋を焼く事を得ざりきとかや。

一本に、後藤又兵衛基次見廻りて、京橋より始め天満橋何れも焼落せり。然るに本町橋一ヶ所は、大野主馬介・塙團右衛門、夜討の望あるにより、焼かざる所に、後藤來つて、何とて此橋を焼かせざるか。早々焼き候へと申せば、大野主馬介之を聞き、此所は我等次第なれば、貴殿の指圖は無用なりと言切つて、既に同士討に及ばんとす。斯る所に團右衛門馳來つて、兩間に分入り、某意見して焼かせ申すべしといふにより、後藤も漸く靜まりけりと云々。

或本に曰、小栗家傳に、河野權右衛門道重は、傍輩鬭諍の時に荷擔し、御家を退去しけり。今般其科を償はんと、小栗又市に従ひ來りしが、是より先に、兩人橋際に至り、鐵炮を恐れず檢分しける處に、權右衛門は歩行立になり、橋を渡りて城門に至り、膚撓まず、目瞬かすして歸れり。後藤又兵衛・上條又八、門櫓より遙に見て大に感じ、此の如き勇士を妄に殺す事なかれと矢玉を止む。而して忠政御本陣に赴き、此儀を稱美し、橋未だ焼けざる旨を述べしといふ。

記に、去ぬる頃、大御所、備前島を御巡見の時に、家康公竹東の外へ御出ありしを、

城中の兵共鐵炮を揃へ、打ち申すべしと犇きけるを、後藤又兵衛、斯る勇猛の大將は、討ちても中らぬ物なるぞ。唯無用と制して止みきと云々。疑ふらくは此説は非なるべし。

今夜城中大野修理亮治長が家より出火し、猛火天を蔽ふ。城中の兵、之を消さんと騒動しける聲を聞きて、天満橋京橋口の寄手共、すはや城中に返忠の者ありて、相圖の狼烟を上げたるぞ。一番に攻破り、高名せよといふ程こそあれ、池田武藏守利隆は、中白の旗竝に笠に鳥毛付け、本に切先付けたる馬符、有馬玄蕃頭豊氏は、紺に釘貫の紋付けたる旗、竝に天突の馬符を眞先に押立て、城中に攻入らんと犇きけり。寄手の軍勢此形勢を見て、我れ劣らじと旗馬符を押立て、鬨の聲を上げ、山を動かし地を震はせ、既に此口を攻破らんと思ふ處に、城中は靜まり返つて、雨の降る如く鐵炮を打出す。中にも薄田隼人正兼相は此所に在つて、一身を恩に報せん時なりと、烈しく防ぎ戦ひしかば、寄手の輩鐵炮に中り、討たる、者若干にて、死生の間を分たぬ者數を知らず。血は草芥を染め、屍は路徑に横はる。城中の體たらく、中々攻破るべしとは見えざりければ、諸將皆螺を立て、軽く人數を引取りけり。

或本に、大御所、水野日向守勝成を召して、諸橋大略焼失し、天満橋も落ちたる聞えあり。然れども天満には商家多く焼残り、大なる材木等之ある旨を、島彌左衛門・服部權太夫言せり。之を取つて仕寄の具とし、火炮の卒を差置き、總軍の便とすべき旨を命ぜらる。勝成即ち天満に往きて、池田武藏守・加藤式部少輔・森美作守等に達せり。而して勝成、天満を遠きより窺ふ時は、焼落ちたる如く、立寄りて見れば、橋を三分に毀ちて、城の方三分の一は残し、其間に焼損じたる木を積み置きて、事急なる時は、俄に焼棄すべき體を見て、罷歸りて、其旨を言上せりと云々。

本多正信頼智の事井川田八助勇力の事

さる程に前將軍家康公の仰に依つて、四方の寄手、朔日二日より竹束を付けて寄する事、三四町或は五六町に縮む。豫て騒がしからぬ様に相鎮むべしと、御使番を以て、再三仰付けられける處に、井伊掃部頭直孝が手は、陣所定まると等しく、總鐵炮

をつるべ掛け、関を上ぐるに付き、城中も寄手も色のき立ちて騒ぎければ、秀忠公聞召され、大に驚かせられ、掃部頭は、兄右近大夫が軍代として、彦根の人数を召連れ、人珍しく事をばへ、斯る振舞をなす。大御所定めて御立腹あるべし。本多佐渡守御陣所へ参り執成して、家老共の中の落度に相計るべしと仰あり。正信承り、住吉へ参つて御前に出で、如何申上げんと思ひしに、大御所其時佐渡守は、何の爲めの使者なるか。定めて今朝の陣替に、井伊掃部が手より、總鐵炮を打懸けたる事にてあるべし。扱々掃部頭は、兵部が子程ありける。陣替に城中へ鐵炮を發せし事よと仰あり。正信莞爾と打笑ひ、其御事に御座候。御親子様とて、是程に思召の符合せるは、奇妙なる儀に御座候。將軍様も此事を御感悅の餘り、早々私に參上仕るべし。定めて御機嫌たるべしとの上意なる由を申し、扱大樹様の思召は、四方の寄手相圖を定め、一度に咄と攻入らば、落城すべしと仰ある旨を申上ぐれば、家康公此由を聞召され、さある上は、最も攻崩すべけれども、味方多く討たるべし。只智謀を以てするには如かずと仰あつて、總攻を止めさせ給へり。

或説に、本多佐渡守正信は、家康公も老祖父と呼ばせられ、名を稱せられぬ程の人なり。家康公怒らせ給ひ、侍臣を罵り給ふ時は、正信之を聞き御前に出で、殿には何をか立腹せらるゝといへば、家康公、御口に沫を嚙ませられ、如此々々の事ありと仰せらるゝに、正信謹んで承服し、誠に殿の御怒、理なり。汝如何なる馬鹿を盡すかといひて、傍より之を罵る事、家康公より甚しく、却て出し給ふべき御詞もなく、少しは笑止に思召す御心出来て、火氣や、靜まり給ふ時、やあ汝不心得にて、罵らせらるゝとな思ひそ。是則御教訓なり。如何となれば、戲言をいひて巷を過ぐる者は、心にも掛けず、是れ元より疎きが故なり。されば汝を、人がましくも召使はれんとの御意にて、此の如くは仰せらるゝぞ。汝が祖父、そのいつの合戦に、斯様の武功あり。汝が父、その何處の城攻に、斯様の忠義ありなどいふ事、何とて殿の御失念あるべきかと、祖父や父の働を、段々と立言つれば、家康公聞召され、實にもと思召あてらるゝ御氣色を察して、汝一旦の御意に違ひたるを憚るべからず。怒れば火氣昇りて、咽乾くものなり。御茶を點じ、持参りて

奉れといへば、彼者即ち御茶を奉る。家康公もすなほに取りて召上がらるゝを見て、其方今日より、愈進んで御奉公を勤めよ。少しも氣を屈せざれ。殿にもさ思召すぞといへば、家康公の御怒、自ら解け給ふ。斯る人故に、駿府へ御隠居の時から、秀忠公へ傳け給ひきと云々。

或本に、本多佐渡守は、誰よりも御意に叶ひしにや、大御所の御寢所迄、案内なく参り、頭巾を被り乍ら安座して、御物語申せりと云々。

或本に、大御所、本多佐渡守を見給ふ事は、朋友の如く、將軍家は、長者を以て待たせ給ふ。正信、常に大御所を大殿と呼ぶ。將軍家を若殿と申しけり。軍國の機事に至りては、詞多からず。一言にて究めて、諷諭に長せる人と見えたり。關が原陣の前、大坂に於て、大名七人申合せ、石田三成を討たんとせし時、家康公人々を制し給ひしにより、事平らぎぬ。其時伏見の御館にて、正信御前に参りしに、其夜亥の半なるに、早御殿籠りあり。佐渡守打咳きく参りて、今夜は早く御寢ならせ給ひしと申せり。家康公、何事があつて参りしかといひしに、正信答へて、別

の事にても候はず。石田が事、いかにか思召すと申す。されば今も其事を思ひ慮つてこそあれと仰せらる。佐渡守、扱は心易くなつて候。其事思ひ慮り給はん上は、何事をか申すべき。御暇給はるべしとて罷出づ。又仰せらるゝ旨もなしと云云。

同記に、石川丈山の物語に、正信、大御所の仰せられし所、吾心に得ざる時は、打眠りてのみ居て、申す旨なし。いふ所良しと思へる時は、譽め参らする事限りなし。我れ大御所に仕へ、年多き内に、正信と事を計らひ給ふと見えし事、二度ならでは見ず。世の人の計るとは、様變りて珍らかなり。一度は大御所、正信が座せし所を通らせ給ひしが、立止らせ給ひて、三と四と密に仰せらるゝ事ありしに、佐渡守、大に譽め参らせ、よしゝと申し。今一度は、大坂御和睦の後に、京に入らせ給ひ、何某を召され、大坂に行向ひ、將軍に申さん様は、家康は何れの目、駿河に歸らんと思ふといひし所に、正信が方を御覽あつて、佐渡守はいかにか思ふといひしに、例の打眠りて、申す旨もなし。大御所、大なる御聲にて、やあ佐渡

守と仰せられし時に、眼を開きて物をも申さず。右の手を差上げて、指を屈の物を數ふると見えしが、大殿よ大殿、未の年の前に、伏見の御館にて申し、事を、忘れ給ふなと申し、かば、大御所暫く案じ出させ給ふ御氣色にて、御使を承りし人に、先づ今日は使を參らせまじきぞといひしと云々。

同二日、大御所竝に秀忠公、茶臼山へ成らせられ、大坂の城を眺望し給ふ。

或本に、此時本多佐渡守正信は、飛路免の羽織を着し、裏付の袴にて、衛府の大太刀を帶し、山駕籠に乗りて來りしを、大御所、正信が來るを御覽あつて、其儘にて、坂の上に来るべき旨仰あり。藤堂和泉守立向うて、佐州早く來られしよといひければ、正信は、吾武者振奈何と戯れ乍ら登る。秀忠公御蹲踞あつて、大御所と城攻の事を議し給ふ。時に永井右近大夫直勝、痛める處あつて、杖によつて此所に來りけるが、大御所、直勝が杖を取り給ひ、本多正信と同じく、杖を以て攻口の得失を論じ給ふと云々。

然る所に畿内の代官喜多見長五郎重恒は、臺に蜜柑を載せて獻じければ、大御所

片手にて之を三つ取りて召上がられ、且命に依つて、近臣之を秀忠公に捧ぐる所、其二箇を取りて、御懷中に入れられ、而して兩公道筋を異にし、諸陣を巡視し給はんと、大御所より先に秀忠公、彼の山を退き給ふ。時に本多佐渡守呼返し奉り、扈從多勢を召連れ給ふべからずと諫めけり。是微意ありなり。大御所は、仙波より段々諸陣を見給ふ。伊達陸奥守政宗・藤堂和泉守等、御馬の後に附從ふ。諸將且迎へ且見送り奉り、石川主殿頭が陣所を過ぎさせ給ふ時、彼家臣、參州以來知らせ給ふ者多かりしかば、皆御詞を懸けらる。馬喰が淵・阿波座・土佐座を乗取り、殊に高麗橋の戦功を感ぜられ、尙も城邊を巡視し給ふ處に、城兵等見知り奉りけるが、鐵炮を放つこと雨の如く、御馬廻も散亂せり。御家人衆、御馬の七寸に取付きて、餘り鐵炮厳しく、御勿體なしと申す。家康公、始の程は御挨拶もなかりけるが、人々強ひて諫め奉りければ、運は天にありと宣ひ、尙城近く進み給ひ、舒に城の體を御巡見ありけり。時に横田甚右衛門一本、安藤治右衛門に作る進み出で、天性此殿は、斯様の鐵炮嚴しき所を好み給ふ、其所退き候へとて、近習の面々を追退け、是より西船場表一本信貴野とありは、城中より大銃

を揃へ嚴しく打出し候故に、味方陣をなし兼ねる由を承り候間、急ぎ御上覽あれかしと、御馬の鼻を西頭に向くれば、さらば其邊巡見あるべしとて、馬を進められしが、此所は城中より程遠くして玉箭來らず、横田、武功ある故に、鐵炮の急難を遁し奉りしとぞ。

一本に、仙波より天満の池田武藏守が陣營に到らせ給ふ。爰に於て御膳を獻せり。同左衛門督が相備花房助兵衛よりめさ職之は衰老し、座席も人に携へられ、漸く歩める體なりしかば、今度も肩輿にて攻口に臨み、從者に告げて、軍急ならば、吾肩輿を、敵の方へ向けて棄去るべし。吾一人を助けんとて、汝等が命を棄つべからず。我は爰を墓所と定め、出陣すといひけるが、大御所の巡視と聞きて、路傍に肩輿を置けり。職之其中に蹲踞す。戸川肥後守披露しけるは、助兵衛老屈正體なしと雖も、一大事の折柄故に、是非を棄て、出陣せしと演べければ、大御所怡然として、助兵衛日來武を好みし事至れる故に、老身進退の難儀を厭はず出陣し、素志を果す。實に大丈夫なり。尋常の者、何ぞ是に及ばんと感じ給ふ。夫より信貴野

筋に到らせ給ひ、未の刻、片桐市正兄弟が備前島片原町の攻口に着かせられ、今朝より仕寄竹把を付くる體を覽給ひ、兩公同じ道を還らせられきと云々。

或記に、明智光秀が舊臣並川喜庵といへる者あり。侍寄手の屯する形勢を見て計つて曰、橋々を燒きて、拒ぎ守る事を專にし、突出でて戰ふべき意なき事を著すが故、堀際二三町の間に、敵仕寄を附けたり。是城中の大なる憂ならずや。速に本町橋・高麗橋より軍を出し、涅際に迫り、屯する敵を撃退けなば、東國勢猥に城に近付くべからず。其後に、時々兵を進めて戰ひなば、敵兵安き事なく、城中甚便を得べし。某に逞兵五百を賦與せられなば、敵の虛を圖りて、之を討破らん事、掌の中にある由訴へ望む。然れども喜庵が子志摩は、當時加藤忠廣に仕ふる故に、大野兄弟相疑ひて、遂に評議を決せずと云々。

同三日、大御所は、本多上野介正純を御前に召され、城外寄手の陣屋を見て參るべき旨、仰付けられければ、卽鞭を揚げて諸陣を巡見し罷歸り、船場は廣く天満は狭しと申上げける所以に、池田左衛門督・森右近大夫等は、天満の寄手なれ共、船場に

向ふべき旨を仰出さる。玆に依つて今橋口に馳向ふ。天満寄手の陣場は、一萬石に付三間宛なれば、沓の子を打つたる如く、立並びたる寄手の中へ、重々に構へし高櫓塀矢狭間の陰より、鳥銃を打出しける程に、東兵浮箭なく、多く亡びける中にも、池田左衛門督忠繼は、先達つて大御所より賜はりし櫓の板厚さ一寸に、鐵の厚さ一寸にして合せ、廣さ四尺高さ五尺にして、下に車を付けたる櫓を三枚、足輕六人宛にて押立てさせ、其陰より大銃小銃を打出す。暫くして兵を引かんとする處に、大野主馬助治房が手の者、石火矢を打懸くる程に、彼の櫓を忽に打倒しければ、六人の足輕櫓を捨て、這々陣屋へ逃入りぬれば、城中より武者一人、櫓の上に上り、鐵の櫓は、城を攻むるの道具にてはなきか、何とて捨置き給ふと、一度に咄とぞ笑ひける。池田左衛門督は、年若き大將なれば、怒に堪へ兼ね、誰かある、あの櫓取つて來れよといひも果てざるに、忠繼が家臣川田八郎といへる者、黒糸絨の鎧に、同毛の星甲を猪首に着なし、舒に歩行み出で、城を後にして鐵櫓を押行く所に、主馬が手の郎等に、小畑源左衛門といふ鐵炮の上手、縦ひ樊噲が再來したりといふとも、吾

銃先に向はん者、打倒さすに置くべきかと、三十目玉の鐵炮を打掛くれば、川田が肩に中り、地に倒さると雖も、鎧厚く鍛よければ、敢て玉通らず。又起上りて楯を押す事元の如し。臼井十太夫・古屋嘉兵衛渡邊數馬相共に援けて、楯を押し入れけり。

一本に、楯を捨置きたるにより、城中より笑へる所に、川田八助といふ者、拙き仕方かなと引返すを、荒尾但馬押止め、此楯を給はる事、諸卒を援けん爲めならずや。戰場に兵具を捨てたりとて、恥辱とする事にあらずといへば、川田答へて、我等が事は人之を知り、君の爲にもあらず、只自己の恥なりとて、彼楯を取つて高聲に名乗り、靜に歩行みて引退く所を、小崎甚之丞といふ者、其場へ駈出で、川田殿某も助け申さんと渡り合ふ。誠に其形勢を見て、敵も味方も、剛勢なる事を、褒めぬ者こそなかりけれと云々。

別記に、川田八助が祖父を藏人と稱す。細川兵部少輔に仕へしに、永正の頃、洛陽東山より、手負の大なる野猪出でて、老若男女を駈殺し、創を被むる者數を知らず。人皆恐れて近附く者なきにより、心の儘に洛中洛外を徘徊す。將軍義晴公

一本に此旨を聞き給ひ、兵部を召して、彼野猪を退治せよとあるにより、細川君命義植公を蒙り、川田藏人に、討留むべしといひければ、弓にて射殺すは、誰もなすべき事にてあれば、我等に相應せず。忽きふつ彼奴を手取にすべしといひしが、詞の如く組伏せて縄を掛けたり。其孫なる今の八助も、祖父に劣らぬ大力なり。初め小早川隆景卿に仕へしが、或時狩場にて、隆景卿、彼八助を召して、汝祖父の力量傳はるるに於ては、今日野猪を生捕にせよとありしに、彼も亦、其日大猪を生捕りたり。關ヶ原合戦にも高名ありしが、秀秋卿隆景卿の養子なりの逝去にて嗣子なく、小早川家斷絶せしにより、其後池田家に仕へたりしと云々。

或曰、河田八助長繼は、毛利氏の幕下備中國淺江郡杉山城主千貫文を領せる河田紀伊守陸長の二男なり。嫡男は、彈正左衛門景政といふ。之も池田氏に仕へ、七百石を領す。當子孫代々伏見の留守居役たり。當時左助と稱す。

時八代に及び、池田氏の臣たり。此家代々女子を生めり。池田家の風にて、養子家督相續すれば、五千石宛減少す。さるに依つて河田氏も、今は五百五十石なり

と云々。河田氏に傳はる八助が胸當は、青石なり。鐵炮の玉跡多くありといへり。

或本に、秀吉公、北條家御征伐の刻、沼津に御宿陣ありしに、小早川左衛門佐隆景卿の從兵川田八助・猶崎十兵衛とて、大力の名を顯したる者あり。八助は大指物、或は五反又は八反といふ、十兵衛は十八端の母衣を掛けたりしを、秀吉公見給ひて驚かせられ、何某を召して、姓名を尋ねよとの命ありければ、彼者承り、馬に乗り馳出で、主將の仰に候、各姓名を申されよといへども、川田・猶崎顧みて返答もせざりければ、力及ばず馳歸り、斯くと申上げし時、秀吉公の仰に、扱は汝下馬せずして、名告れといひし者ならん。御教書など帶するか、兩陣勝負にかゝる時は、佛神の前にも下馬せぬ故實なり。何ぞ人に勝れたる大指物を差し、普通に超えたる母衣を掛けたる士に、下馬せぬ事やある。返答せぬこそ理なれと、餘人へ仰付けられ、下馬せしめて問はせられければ、川田・猶崎も下馬をなし、各其姓名をいへり。其後朝鮮陣の時も、彼兩人の母衣指物を、異國人も見て、眼を驚かしけりと云々。

南條中務大輔誅せらるゝ事

茲に南條中務大輔忠成といふ者あり。父は筑紫南條の城主中務大輔忠成或中務少輔光明とありと稱せり。去ぬる慶長五年關ヶ原合戰の時、石田三成に與せし所、合戰散じて後に、領地沒收せられ、浪人して死したり。忠成、豐臣家に舊功あるにより、二代秀頼公の臣となり、一方の軍將を仰付けられしが、藤堂和泉守が攻口に相對す。然るに中務が叔父南條讚岐といふ者、高虎と舊友たるにより、藤堂密に讚岐が方へ、貴殿今日返忠致され、持口を引拂ひ、人數を城中へ引入られ候はゞ、大御所へ其旨を沙汰し、急度御恩賞あるべしと申送れば、讚岐忽ち心を翻し、忠成を進めて終に逆意をなさしめ、夫よりは病と偽り引籠りて、堀柱の根を斷ち、大狹間を開きて、時日を定め、和泉守に矢文を以て通せり。然るに天王寺口なる西の隅の矢倉は、根來の知徳院等が持口なり。此手より南條が持口の柵の木を見れば、逆茂木の頭に紙の付きしあり。各不審に思ひ守り居たる所に、藤堂が攻口より一人出で、南條が持口の向に、指物を一本突立て歸れり。彌不審して、木村長門守より、右の趣を言上せしに、秀頼公聞召され、南條が事は、元より由縁あれば、よも二心はあるまじけれども、斯

る時節なれば、心中計り難しとて、十二月三日記に十一月十六日に作るの事なるが、密に様子を窺

ふべしと、渡邊内藏助に仰付けられけるにより、渡邊案内もせず、南條が陣に行きて見しに、申すに違はず、役所の堀に作りかけ、四尺四方の大狹間を明け、掛簾を掛け置きける故、其狹間より柵の木を見れば、人の往來の跡あり。叛逆疑なしと思ひ、渡邊微笑して、籠城には不用心なる大狹間なり。今少し狭く致さるべしと挨拶して罷歸り、此段詳く言上す。其時秀頼公より南條を召され、又大野修理亮よりは、貴殿の人数、京橋へ、早々御加勢あるべしとの仰なりと申せば、南條は、畏り候とて、手の者共を残らず城外へ引出し、扱中務は、御前に出でんと行く所を、廣間に於て、薄田隼人正・渡邊内藏助兩人して押へ生捕り、叔父讃岐は、事顯れけりと思ひ、役所に於て自害したれば、諸士は所々にて討たれけり。

或本に、南條死刑の後、彼持口を後藤又兵衛請取り、中務が旗を押立て、相圖の関を待つ所に、其曉藤堂は、心安く攻入らんと支度をなし、軍士を進め、堀底へ飛入り飛入り押寄せけるを、後藤之を見、近々と引寄せ、鐵炮を入替へ、散々に放

ちければ、死する者數を知らず、疵を蒙る者亦多し。高虎は、南條に謀られけると、無念に思ひけりとかや。翌日南條以下の諸士五十餘人が首を斬つて、域中に梟首しけりと云々。

或本に、忠成が息忠次郎は、秀頼公に近仕しけるが、父中務大輔が逆意を歎きて、諫むれども容れず。忠次郎進退窮りて、秀頼公に訴ふ。依之中務を賺し寄せ、糺明を遂げられ、竟に誅せらる。忠次郎も續いて自刃すと云々。

張守が子左馬介の所行に彷彿たり。未詳と云々。

此文際謙と異なり。北條家滅亡の時、松田尾

一本に、南條は、城中の不和なる評議を聞きて、情つらくと思案し、我れ關東に降参と偽り、大御所に近付き奉り、鬱憤を散じ命を捨てなば、當軍第一の功ならん。併、人質なくては叶ふまじと、譜代の家人に此段を申含め、本多正純方へ申遣はさんとせしを、關東より附置かれたる城中に在る所の問者、南條が手段に陥らん事を憂へ、中務大輔叛逆をなすと申觸らせしに欺かれて、無實の死を賜ひしにより、城中の諸將も、互に心を置けりと云々。

此説不可なりとぞ。如何となれば、南條僞りて關東に降參せんに、何ぞ豊臣家の古老に議せずしてなすべきや。叛逆疑なし。然るに忠成に死を給うて後、關東より城中へ入置かれし問者等が、虚名を蒙りて誅せられしと申觸らしゝにより、城中の兵、互に心を置けるものならんといへり。

此日戌刻、織田長益入道有樂が方より、本多上野介竝に後藤庄三郎へ返書あり。家康公の御前に於て、文筥を披きし所に、數度御和睦の儀を諫め申すと雖も、御許容なし。此の如く成行き候上は、兩人の力に及ばざる由を載せたり。大御所御覽の上、重ねて和睦の事、取繕ふべき由仰遣はさる。扱明後六日、大御所は、住吉より茶臼山へ、秀忠公は、平野より岡山へ、愈、御陣所替へらるべしとの事なり。又、此間より、兩所の御陣城、其外附城十一ヶ所を築かる。今宮に二ヶ所、穢多ヶ崎・轉法院に二ヶ所、大和筋・今宮・若江口竝に森口と天滿との間に五ヶ所なり。然るに岡山の土中より、小壺を掘出せり。中に黄金三十兩、金具の塊、南鐐銀子百兩あり。阿部備中守得たる由、伊丹喜之介康勝より捧げ奉る所、正しく五六十年以前、土中に埋める金色にて候

由、後藤庄三郎披露しければ、則ち此品を備中守に給へり。

新東鑑卷之十二

玉造合戰の事

さる程に眞田左衛門佐幸村は、策を帷幄の中に運らし、勝つ事を千里の外に決し、陳平・張良をも欺くが如き勇士なれば、其初め城の巽に當つて、百間四方に出丸を構ふる時に、西の方に寄手あれば、西の門より出でて働き、東の門に引くべしと、堅く約を定め、或は拔道を作り、思寄らざる方より、敵兵を討挫がんと謀れり。又東兵藤堂和泉守高虎・井伊掃部頭直孝も、越前少將忠直朝臣の攻口も、皆空堀を掘りて山を築き、去ぬる頃より、石火矢鐵炮を打掛け、毎日毎夜戰を挑む。城中よりも、石火矢鐵炮を隙なく發しければ、寄手は手負死人數多なり。豫て來る六日に、大御所は茶臼山、秀忠公は岡山へ御陣を移されんとの事なるに依り、尾張宰相義直卿・駿河宰相

頼宣卿も、同じく陣替と定まり、御先手の面々も攻口を守り、働かずして堅むべしと觸れられけり。爰に眞田丸と仕寄との間に笹山あり。一本に小橋山。城兵常に人數を此所へ

出して置き、鐵炮を打たしむる處、加州の先手木多安房守

記に奥村權津守

高名して、寄手の居

眠を覺まさせんとや思ひけん、十二月四日寅上刻、軍兵を率して押寄せしが、敵は

引きて一人もなし。竝の陣に控へたる山崎長門閑齋は、此形勢を見て、傍輩を出拔

き、安房守が拔駈すると思得、手勢ひたくと用意し、安房守が控へたる笹山を乗

越えて、城近く押寄せたり。折節、石川肥後守貞矩が持口の櫓より出火して、陣屋に

火燃付き、人多く損じ、矢倉迄も炎上しける處、寄手の軍勢は、此體を見ると等し

く、ずはや内々城中の將が、藤室と内通しける由の沙汰ありしが、一定相圖の火にて

こそあらめ。人に先をせらるなといふ程こそあれ、諸手ひしくと物具し、十二月

四日卯の上刻、横霧深うして咫尺も見えぬに、家々の旗を押立つ。越前の先手木多

飛驒守成次

一本に、成重作左衛門重次が息なり

が息淡路守重能は、眞先に進む。旗奉行藤木九左衛門は、

金の芥子殻の出付けたる白に中黒の吹貫、又金の棒の下に、黄色の暖簾付けたる大

馬印、大竹はしな棧に角取付けたる小馬印を押立て進み來れば、之を見て同家中吉田修理

亮・高尾越後守・山川讚岐守・多賀谷右近・萩田主馬始め上杉家の臣なり・梶原美濃守・太田安房守

・菅沼久彌・朝比奈無道、黑纒の使番原隼人・佐原平左衛門・石川佐左衛門・藤田大學・大井監物・長田四郎兵衛・長柄奉行眞瀨左衛門・同角藏、我れ劣らじと進み出で、岸の陰の塀際に寄せんとす。井伊が勢は、赤地の旗に、金を以て八幡大菩薩と書きたり。

馬印は、金の蠅取なるを、馬の脇に引付けて押寄せ、是も同じく堀に浸り、壘に上らんとす。又加賀の勢横山山城守、梅鉢の紋付けたる旗、金の髭籠の馬符を前に押立て、先に進みし安房守と共に堀際に附きて、加賀・越前・近江の三勢、雲霞の如く立重り、傾山川動天地、喚き叫んで攻掛らんとす。眞田が勢は、最前より之を見て勇み進み、突いて出でんとす。幸村制して門を閉ぢ柱に寄り、默然として睡るが如し。或説に、是れ兵氣を一にして、三ヶ國の軍兵等は、堀底に入り柵を押破り、仕寄を付け士力を儲くるの術なりと云々。眞田の軍兵等は、堀底に入り柵を押破り、仕寄を付けんと勵みけり。眞田左衛門佐幸村は、時分を量りて大に呼び、士卒を勵まし、敵を鏖にして、武夫の名をなすは、此一舉にありといひ、弓鐵炮を等しく放てば、堀に附

きたる輩は、一人も残らず打落され、堀も埋む計りなり。されども東國方の大勢、親は討たるとも子は救はず、命を塵芥よりも輕んじ、射れども討てども退かず、柵を破り、堀を乗越えんとすれば突落され、死骸を越えては乗騰り、息なつかせ攻めよとて、攻鼓を鳴らし、曳々聲を出して氣を勵ます。城兵も茲を破られては、何面目あつて、二度、人に面を向くべき。死して骸を曝すとも、生きて武名は穢さずと、互に恥しめ防ぐと雖、玉藥を繼ぐに暇なく、矢束を解くに隙なくして、防ぎ兼ねたる所に、太閤より以來、黃母衣衆と稱する其一人なる伊木七郎右衛門遠雄伊木が傳記は眞田が討死の所にありといへる者、前後左右に下知をなし、堀下の敵を討つ事勿れ。鐵炮を揃へ、二陣を打つて打斷てと、足輕の兵を勵まし、二陣を討たせければ、東兵九十餘人、忽に討殺されければ、寄手の同勢、續いて攻むる事能はず。堀の中なるは、一足も退く事を得ざりけり。越前の家臣野口靱負といふ者は、柵に取付きしが、鐵炮中つて、手を放たずして死したりけり。其外、先鋒の足輕頭伊達與兵衛定鎮を始として、多く命をぞ落しける。依之本多飛騨守・同淡路守・同四郎太夫、白旄を取つて下知をなし、

人數を上げんとす。然れども家來の討死十六騎、手負上下百六十人計りにて、殘る者共は、鐵炮に打竦められ、進退途を失ひ、皆背をたわめて居たりけり。然るに越前少將忠直朝臣の舍弟松平庄五郎直政、或出羽守に作る其頃漸く十四歳なりけるが、同じく先鋒に進みて、堀底に下らんとせられし所を、其臣天方山城守前に立塞り、大將たる人は、兵卒と共に働く者にあらず。暫く此所に居て、人數を下知し給ふべしと抱き留めければ、然らば我は此所にあるべし。馬印を堀際に押立てよと下知あれば、直政の臣、心得候として押立てたり。

或本に、出羽守直政は、諸人に勝れて進まれたる處に、何方より放つともなく鐵炮來りて、直政の胸板に中つて、落馬せられたり。郎等驚き、其儘引起しければ、直政はたと白眼みて、斯様なる狂はしき馬に乗せたる故、落馬もせりといひて、餘の馬に打乗つて進まれけり。後、直政が具足の胸板を見れば、玉の中りたる跡ありきとぞ。

又越前よりは水谷兵部、續いて小栗五郎左衛門正高を以て、早く上意に任せ兵を上

げんと、紺地に蛇の目を畫きたる指物にて、二の手より堀端に至る間に、炮玉二つ身に中り打倒れたり。されども淺疵故に起上れり。又井伊が先手岡本半助宣就へも、使來りて、諸卒を上ぐべき旨下知すれども、耳にも入れねば、堀端に馬を立て、御錠重し、人數を上ぐべしと、直孝が旨を傳へけり。抑此合戰、今朝卯の初より午の刻に至る迄、越前前田・井伊の軍勢、堀底に打竦められしにより、御旗本の御目附衆馳廻り、早々人數を上ぐべしと下知すれども、並伏したる軍勢共、引く程ならば、其退くを射立てられ、一人も助かる者あるべからず。其上、加州勢は、近江勢が引かば引かんと見合ひ、又近江勢は、越前勢を見合ひ、互に引くべき氣色なし。御目附衆より、合戰の次第、追々御旗本へ告ぐる事、櫛の齒を挽くが如し。兩御所甚御忿怒ありて、安藤帶刀直次を召され、急ぎ彼所に向ひ、人數を上げよと上意あれば、直次畏つて承り、朽葉色の母衣掛けて、鹿毛なる馬に鞭を打ち、戰場に至つて申すは、何れの攻口より軍令を犯しけるぞ。早々人數を上ぐべしと、上意の旨を觸廻れども、城中より鐵炮を發する事、雨の降るが如くなり。されども帶刀事ともせず、乘廻りく

て下知しける程に、申の刻に及ぶ頃、越前の萩田主馬來り、本多飛驒守が馬符を引取り、小栗五郎左衛門は、本多淡路守が馬符を引取りければ、物頭岡部淡路守を始として、加州の物頭大河原助右衛門一本討死に作る以下、段々に引上げたり。身にも指物にも、鐵炮の中らぬはなかりけり。中にも井伊掃部頭直孝が先手木股右京亮、早く進んで、最初より堀下にありけるが、引取りざまに、鐵炮にて高股を打たれたり。されども舒に後殿せし故に、敵も味方も、目を驚かせりとかや。

或本に、加賀の手にありし才伊豆守入道道二、始め小田切所左衛門といひて、甲州の四奉行たりし大隅昌吉が二男にて、家康公に仕へし所、長久手合戦に、拔蒐して御勘氣を蒙り、蒲生家に仕ふ。蒲生家領地減少の後、上杉の家臣となり、其後前田家に仕へしが、進み出でて曰、道二が家は、後に斷絶せし處、其兄治太夫昌重、關ヶ原の役に命を墮し、故に、大隅が三男新右衛門昌次、家督を繼ぎ、御家人となりきとぞ、今人數を上げなば、眞田、後殿の微勢を見て突出づべし。然らば、鍵を合せ、附入に此出丸を抜かん事、掌にあり、早く胴勢を押詰めらるべし。其至るを見て、引取る體をなさんと答へ、晩に及んで堀下に堪へけり。前田の臣山崎長門

守・吉永入道閑齋が曰、丘の上に備へたる機を見るに、必定眞田突出すべし。其時に後を斷ちて、附入にせんと積りけれども、幸村之を察しけるにや、士卒に下知して追はざりしと云々。

又兩將軍も、此所へ御出馬にて、御下知を加へ給へり。凡そ寄手の手負死人、筆を執り記すに暇あらず。其後、本多飛驒守・同伊豆守を召して、法を背き合戦を始めける仔細を尋ね給ひし處に、本多佐渡守・同上野介謹んで、若輩の者共、卒爾の合戦仕る。是畢竟兩人が誤なりと申上ぐ。又、掃部頭が魁首木股右京亮、軍令を犯したる者なれば、罪に處せらるべきかの由を、秀忠公より仰せられけるに、大御所聞召し、斯の如き折節、先を駈けて命を惜まざる振舞も、多くはなき者なり。不知顔にてあれかしと仰せられし御内意により、御詮議なかりけり。次に直孝も、木股が陣小屋に見廻られ、看病ありしを、同家老川手主水成次記に、主税とあるは誤なり。主水は主税が養子にて、實は松平石見守康安の子なりと云々之を聞きて、最前より下知を守り、御法度を背かざる某には御褒美もなく、拔蒐せし木股を介抱ある事、堪忍ならず。某も一備にて、城に攻入り討死せんと申しけれ

ば、直孝聞きて主水を呼び、此儀は某が誤なり。重ねては其方を先手に申付くべき間、堪忍致せよと詫びける故、主水漸う鎮まりきとかや。

或記に、前田筑前守利常の仕寄場見分として、井上外記・安藤治右衛門罷越す所に、玉造口邊より、敵兵十人計り相見えしを、井上鐵炮を以て、敵一人を手際よく打倒せば、間數も遠きにより、諸人之を譽めたりしを、治右衛門は、貴殿鐵炮の達人に似合はず。其仔細は、明日より此邊の仕寄附け難かるべし。只今敵を討取られしに依つて、城兵間數を考へ申すべきかといへり。果して其翌日、大御所御巡見ありし所に、御小姓北見長十郎後に五郎左衛門御供たりしに、城内より鐵炮を打出せり。其玉長十郎が振袖に中りしを、少しも騒がず、其袖を御覽に入れ、此の如く鐵炮の玉參り候と申せども、聞かぬ顔して、御座ありけりと云々。

或本に、越前の本多飛驒守成重は、息淡路守重能を備に差置き、大御所の御陣所へ參りし處、御前に召出され、若者の蒐りは蒐りても、引きたるは見苦しき者なりと、上意ありける時に、御法度の由を觸れられ候に付、本陣へ打入り候へども、

我等一人備を立て、城中へ鐵炮を打掛け申候。御目附に御尋ね下さるべしと、兩度まで申上げければ、御機嫌を直されけりと云々。

或本に、此節の事にや、天王寺の鳥居に、

東武者破れ車の如くにて引くもひかれず乗りものられず

とぞ書付けゝる。先手の衆之を聞きて、急ぎ總攻せんとぞ進みけると云々。

同日永井右近大夫直勝・西尾丹後守忠永・松平右衛門大夫正綱・板倉内膳正重・昌秋元但馬守泰朝等を召して、面々は組持なれば、陣場を割つて渡すべき由仰付けらる。

又中坊左近を召され、大坂籠城せし者共の妻子等、大和國に隠し置ける由、其聞えあり。一々搦捕りて、大坂へ召連れ來るべしと仰出さる。其後本多上野介正純・安

藤・帶刀直次・成瀬隼人正成・土井大炊頭利勝・本多三彌・正重・其外老臣御使番六七人を召連れられ、御歩行にて、御供をも召連れられず、伊達政宗が攻口へならせられ、供奉の輩は、船場の橋より、住吉へ歸るべしとの上意にて、御長刀一振御馬の口取計りにて、御駕を早めらる。藤堂和泉守御目見えに、茶臼山へ來りけるが、御跡を

慕ひ、馬の口取計りにて、頓て追付き奉る。伊達陸奥守も、陣場見舞に出でけるが、路次にて御目見えをなし、其後政宗・高虎同じく供奉し、申の下刻に至り、住吉に還らせ給ふ。政宗、斯様の小勢にて出でさせらるゝ事勿體なし。君を計る者あらば、此の如き時節を窺ひ、或は毒害など仕る事あるべし。御用心あらせらるべしと申上ぐ。其節政宗の領地より來る生鱈を持參しける處、即ち住吉にて御料理あつて、政宗・高虎・正信等に下されけり。

一本に、先達つて和紀二ヶ國なる地下人、大坂へ一味し、紀州にては山口攝津守、和州にては前鬼名助・河井村の山室善五郎蜂起す。淺野長晟より、熊澤兵庫を大將として、討手に差向けし所、前鬼は此大軍に畏れ、新宮より西の山手へ逃れしが、雪に降籠められ、凍死せりとかや。山室は北山へ退きしを、熊澤透さず追蒐ければ、山室、一揆勢を下知し、二三度防戦せしかども、可ならずして引取らんとせし處を、熊澤兵庫、胴勢より抽んでて、大沼村竹原の間迄追掛けしに、山室は川を渡り岩に隠れ、熊澤を待受け、太刀打して、其上組打になり、熊澤下になり

しを、長田治兵衛といふ者駆付け、山室を突倒して首を取る。然るに兵庫と治兵衛は、山室が首を論じける處、溝口五右衛門中に入りて、兵庫は初より太刀打し、其上に組打せり。御邊は助けたる計りなれば、功名は兵庫にありといひて、其首を熊澤に渡し、一揆を悉く攻亡し、由、今晚申來れりと云々。

或記に、今日城中には、石川肥後守、施藥に身を焦す故、松田理助・小岩井藏人を以て、其守る所を代らしむと云々。

同記に、太閤恩顧の諸士の長臣等、質子を伏見の城に納む。各國郡に應じ、或は五人或は十人宛を獻ず。淺野但馬守は、十二人出せりと云々。

同本に、井伊家の書に、或人、不圖、掃部頭が陣營に往きて、面談を遂げんとする處に、只今寢所より出でたる顔色たり。或人怪しんで、今陣中にて、空しく晝寢する故を問ふ。直孝が曰、是れ夜討を慎んで、終夜臥す事を得ず。自ら陣營を巡り、其守り怠るを警むるに依り、晝は必ず睡眠すと答へきとぞ。

藤堂高虎攻豊志谷口事

十二月五日、前將軍家康公、九鬼長門守を御前に召され、今般番船を乗取り、數度の
勦神妙に思召す所なり。自今以後彌忠義を勵むべし。若し城中より夜々竊盜を出
す事あらん。汝兵船を構へて川口を守り、堅く之を制すべきの旨を仰含めらる。其
後に横田甚右衛門・間宮權右衛門を召され、天満船場の寄手等は、堤を前に當て、鐵
炮を打たしめよ。一人も手負死人無之様に仕るべし。手負死人數多ありては、縦
ひ城を攻崩すとも、勝の負たるぞ。是れ良將の好まざる所なり。此趣を諸大將に相
觸るべしと仰付けらる。兩人馳返り、上意の旨を申觸らす。又午の下刻、白銀千枚
を、住吉の社に獻じ給ふ。其後小堀遠江守・宗甫・別所孫次郎・友治等を召され、諸軍勢
住吉の中に於て、狼藉なきやうに相守るべき旨仰付けらる。同じく中の刻、一本六日、冑
山の莊官等、住吉の御本陣に來り、今日冑山の邊に、蛙幾千萬ともなく相集まりて
南北に分れ、各合戦する事半時計り、終に北の方の蛙、戦ひ負けたる由を言上す。

藤堂高虎
豐志口に
押寄す

家康公聞召され、蛙合戦の事、古來より度々ある事なれば、強ひて珍しからず。予も幼少の時、參州岡崎にても見たり。凡そ蛙は、冬は土中に蟄して、中春の末に出づる物なり。不慮に土中より掘出すとも、手足屈んで動く事不自由なり。然るに夏の如く手足強勢にして、合戦するは珍しと仰ありけり。同日、城中織田左門頼長有樂が息なり。一本、頼長は信益入道に作る。下皆同じ。記に、信益入道雲生寺と作るは誤なり。雲生寺は、頼長の諡號なりといへり。の豐志谷の口を固めたる組三上外記が下人と、徳原八藏が下人と、喧嘩を仕出して、切結びけるが、織田有樂が陣屋、軒を並べて居たる故に、兩方の傍輩駈出で、互に聲を揚げ、既に大勢になりて戦ひければ、陣中以の外騒動せり。左門も自ら出で、三上・徳原も共に鎮めければ、漸くに事納まりけり。兩方手負死人六七人あり。藤堂高虎が先手藤堂仁右衛門・同新七・同勘解由以下、此騒動を見ると俄に押寄せ、城を攻むる事甚だ急なりければ、左門も馬上百二十騎、早川九郎左衛門・木下左京・長曾我部宮内少輔・赤座三右衛門・三上外記・徳原八藏、其外寄合衆浪人、少々相雜りて防戦す。関の聲矢叫の音、天地を動かしかる程に、陣中忽ち備四度路に見えければ、高虎が兵勝に乗つて、攻破らん

とぞ揉んだりける。大將織田頼長は、此由を見乍ら、聊取亂さず、如何なる思慮かありけん、鐵炮を止めて發せざれば、藤堂が勢恐るゝ事なく、堀際へ近付くにより、此持口の危き由、軍士馳せ來りて、秀頼公に申上げければ、鐵炮頭山川帶刀賢信・北川治郎兵衛宣勝、其外羽柴河内守秀教・井上小左衛門時利・一宮助左衛門以下、近所持口の輩、追々來りて、嚴しく鐵炮を打たせけるにより、高虎が郎等渡邊勘兵衛は、堀際に近付きて下知しける所に、城中より放つ鐵炮に中つて、馬より眞逆に打落さる。されども薄手なりければ、死せずして起上れり。高虎も、敵に荒手加はり、此口の破り難きを知り、自ら螺を立てければ、士卒相圖の貝を聞きて、速に引取り、藤堂の士卒、其駈引の下知に隨ふ事、手足を使ふが如く、見る人之を妙とせり。同日九鬼長門守を、大御所の前に召され、城中より船にて落行く者あるべし。番船を以て川口を相守るべき由仰付けらる。又横田甚右衛門・間宮權左衛門を召され、諸手の前に土居を築き、鐵炮を打つべし。諸軍矢炮に中る事を、厭ひ思召す旨を仰出さるゝに依つて、其由を相觸る。

或本に、柳原遠江守康勝は、大和川邊より、陣を天王寺へ遷す。又關ヶ原の役に、大坂方として、尾州犬山の城を沒收せられし石川備前守貞清入道宗林、年頃尚をして在京する處、こゝに參向し、胴服を獻す。大御所、今度大坂へ籠城せざりし事を御感なりと云々。

同本に、五日暮方平野に於て、秀忠公、御旗奉行三枝土佐守昌吉を召して、明日陣替に依つて、旗を進むべき旨、御諚を蒙つて退去す。傍に太田善太夫列居しけるが、評して曰、三枝は甲陽の驍士と稱す。如何ぞ御旗を出す事、假初の如くにして大事たり。刻限並に御備よりは、何町計り先達つて御旗を進むべきと、悉く相伺ひ、先隊へも令を異に施さるべきと、言上すべき所なり。然らずして御旗の動くを見ば、總攻と心得、諸陣騒ぎて、城際へ押詰むる事あらん。若し令を下し給はざるに於ては、御旗奉行より、其旨を先隊へ傳ふべき由を下知すべきに、卒爾に御請して退去する事、大に土佐守が不覺の由、之を嘲りしと云々。

同六日、家康公、住吉より茶臼山へ、御陣替あらせらる。

或記に、大御所御陣を茶臼山へ移されて後は、侍臣常に甲冑を着用せり。又大御所只一騎、御陣を出で給ひ、城外の攻口を巡視し給ふ。秀忠公も、岡山へ御陣替ありしと、其様子を聞召され、忽ち駿馬を馳せて、大御所と同じく御巡覽あり。天満の攻口の柵外へ出でさせ給ひ、御馬を止められ、城上の形勢を見給ふ。扈從の族、追々馳せ至りしに、城中より頻りに火炮を發すと雖も、御身には中らず、御馬の先に進みし歩卒に中つて、忽ち死せり。嶋野堤の際に到らせられし時、火炮嚴しければ、堤の上へ登らんとする者一人もなし。斯くして見るものなりと宣ひ乍ら、忽ち堤の上に乗騰らせ給ひ、悠々と四方を見給ひぬ。是は衆人の思慮と大に違ひ、堤の上を通る者なくして、城よりも其筋を的にせざれば、却て堤の上は、危ふからざる事を察し給ふ所なり。時に供奉の士、落散る玉を拾はんとするを、大久保彦左衛門忠教、堅く制しけりとぞ。先年武州岩付の城攻に、鳥居彦右衛門忠元下知して、炮玉を拾はせけり。是に於て城兵玉の下りて至ると思ひ、筒先を揚げて放ちし故、玉既に寄手の頭を越して中らざりき。渠は玉を拾はせて得あ

り、これは玉を拾ふ事を制して、敵の的を違はしむ。各軍旅鍛錬の致す所なりと云々。

同記に、岡山に於て、秀忠公、阿部四郎五郎正之を召して、上杉景勝が信貴野の陣と、堀尾山城守が屯の間遙なる故、城兵青屋口より出で、大和川の堤に副ひて、岡山の後に至り、夜陰に吾本陣を撃たんと計る聞えあり。實とし難しと雖も、本多出雲守が組を牽して、上杉と堀尾が間を陣場とし、汝も同じく其屯にありて、城中の動靜を察し、疑はしき事あらば、急に馳せ來りて之を告ぐべし。自己の功を顯さんと欲し、危き事をすべからず。汝が註進に依つて奇兵を設け、城兵の出づるを鑿にすべしと、密旨を蒙ると云々。

異本に、眞田左衛門佐は、今日の御陣替ある事を知りて、途中に伏兵を設け、不意に御旗本へ突掛りければ、諸士大に亂れ、植村新六・丹羽勘助・山岡主計・頭藤堂將監・杯供奉して、平井を指して落ち給ふ。眞田透さず追掛けしかば、既に危く見えさせ給ふ所へ、大久保彦左衛門・稻葉淡路守・多賀谷左近など出合ひ、防戦する隙

に、大御所遁れ給ひければ、眞田遙に之を見奉り、今日の軍是迄なりと、引退きしといひ、或は此時尼ヶ崎にて、小船に乗りて落ちさせられ、百姓の内へ暫く入れ奉れり。或は、尼ヶ崎へ落ち給ふは、夏御陣、龜井村に於て、眞田幸村不意に討ち奉りし時の事なりと云々。さるに依つて天下平均の後、彼百

姓へ、江府にて二町の町屋敷を給はる。即之を尼店と稱す。又大坂天満に、彼百姓の子孫なる由にて、尼ヶ崎屋又右衛門といひて、主人は帶刀せざれども、手代に帶刀する家ありといへり。未詳。此尼ヶ崎屋といへるは、今に至り、關東より大坂へ來る御書の封を切る役なりといへり。

同九日、伊奈筑後守、茶臼山に參り、長柄川を築き、川水を城中の堀へ入れざる様に仕候由を言上す。又瀧川豊前守忠往、山城宮内少輔忠久伺候して、長柄川の堤、高さ一丈八尺幅十五間、之を築き、其功終りし處、長柄川北へ流れ、川水悉く尼ヶ崎へ落ちて、天満川淺く成候。今の如くにては、近日に水悉く干騰り可申由を言上す。

或記に、瀧川豊前守、山城宮内少輔伺候して、長柄川の堤成就して、其水北へ流れ差入候間、鳴野務田の邊にて、大和川の末を堰留め度旨を述ぶ。此に於て家康公、中井大和を召され酒を賜はる。沈醉に及べる頃、當所にて佳肴若干を得て衆

に施さんと欲すれども、綱計りにては、中々多く得難し。奈何せんと仰せければ、中井大和申すは、大和川の筋に佳魚多し。人夫一萬あらば、堰留めて悉く得候べしと答へければ、大御所黙して再び問ひ給はず。大和退出する所を、重ねて召され、毛利長門守秀就・福島備後守正勝が人夫一萬五千を以て、今福の末務田邊に於て、大和川の流を堰留め、綱を以て魚を得べき旨台命を蒙る。然るに中井並に右兩將の人夫一萬五千を以て、竹を編み石を入れ、或は土俵を集め、烏飼村の曲目に堰留むれば、總曲輪の堀に用ひける天満川東堀・大寶寺の橋筋、悉く干潟となりて、總攻あらば、總曲輪此度取出し、分は、忽ち陥るべき體なりと云々。

或記に、同日、城中青木民部少輔信重より、本多正純が許へ一書を贈る。上野介披露せし所に、永井右近太夫直勝・青木治郎右衛門可重を召され、御閑談に及ぶと云々。

又大御所御使番衆を召され、今夜より寄手の諸陣に相觸れ、一夜の内西亥寅の刻に関を揚げ、或は鐵炮を放ち、城兵を劫し、敵を心易く寝ねさせぬ様に申渡すべしと

の上意なり。依之夜毎に、三々度程関を作り、鐵炮を發し、只今攻入るべき體に見せければ、城中驚き騒ぎけりとぞ。

兩將軍御巡見並有樂修理亮之使來茶臼山

附所々仕寄の事

大坂方より和睦の使者來る

十二月十日、織田有樂並に大野修理亮等が使者村田吉藏・米村權右衛門二人、後藤庄三郎同道にて、本多正純が所に來る。則上野介庄三郎兩人の使者を召連れ、御前に出でて、秀頼公の心底を上聞に達す。是れ豫て御和睦の事を仰遣さるゝに依つてなり。時に家康公の御意には、今般諸浪人を招き集め籠城ある事、其謂なし。併し御和睦あるに於ては、浪人共の命は助くべし。右府大坂を立退き給ひ、大和へ國替し給ふか、又は城の總堀を埋め給ふか、此二箇條の内を以て、和睦の印とし給ふべし。是れ天下の民安穩なる様にと、思寄る處なり。右の趣を演說すべしと仰せられければ、兩使畏りて罷歸れり。

記に、使者罷歸りし所、有樂・修理亮、彼使者を閑所へ招きて、大御所御和融の事、虚實計らひ難し。汝等見及ぶ所如何思ふと尋ぬれば、有樂が家人村田吉藏は、虚實知り難しと申す。修理亮が家人米村權右衛門は、愚慮の及ぶ所は、御眞實たるべし。其所以は、兩人本多が宅に至る所、御座近く召出され、直に御返辭を仰出さる。よも御僞はあるまじきかと申すと云々。

扨大御所は、御使番を召され、味方の諸陣を馳廻り、城中の者共、寄手に向つて鐵炮を放たず、降參する者あらば免すべしと、矢文を書きて、城中持口の者共へ射込むべしと仰付けらる。又今日京都より鉛千斤を獻上せり。又秀忠公より、總攻をなさしめんと、兩度まで請ひ給ひしに、大御所、予是迄十九度の大合戦に臨みしが、萬事積ある事なり。暫く時の至るを待ち給ふべしとて、總攻を許し給はず。

傳曰、去ぬる文祿年中、朝鮮征伐の時に、秀吉公・家康公は、肥前國名護屋旅館に御座し、軍議の後に、太閤大坂城の圖を以て、此城を如何して攻落され候やと仰ありけり。家康公、良久くして、思慮に及ばざる由を仰せられける。時に秀吉公、此

城に籠り、南一方を堅むる時は、縦ひ日本國の勢を以て攻むとも、人のみ弊えて、落城する事難し。只總堀を埋むる工夫さへすれば、攻落すに心易しと、仰ありけりと云々。

或説に、秀吉公小田原の城攻に、和融の計策に依つて、遂に、北條軍門に降り、兄弟死を賜ふに至れり。素より秀吉公は、天のなせる英雄、凡人の能く窺ひ測るべきに非ずと雖も、大御所の明敏は、又秀吉公に倍せり。畢竟大坂の城を抜く事は、直に秀吉公の詞を以て、功を遂げんと御工夫ありて、大野修理亮が美男にて、驕慢血氣の勇者たるを以て、秀頼公の元老とせられしが、淀殿淫行を恣にし、頻に大野を忠誠の臣と稱譽し給ひ、片桐市正は、年を逐うて威を失ひ、今度の大亂起るに至る。彼の太閤の格言と、北條家和睦して忽ち亡びし、前車の覆るを顧みず、有樂修理、其臣をして和を請ひしと云々。

或本に、大御所近臣の中に、城方へ返忠の者ありと謳歌する旨、言上に及ぶ處、俄に席を立たせ給ひ、次の間に出でさせられ、侍座する族が容貌を熟々と見給ひき

と。是は萬一野心の者あらば、驚きて、必ずしも其色、外に顯るべき故なりとぞ。又岡山の御陣所にても、同じく流言せり。時に秀忠公、御劔を抜持ちて、叛逆の者は誰なるやと、昵近の健士等が顔色を、窺ひ給ひきと云々。

又曰、或夜敵の諜者、茶臼山の御陣營に紛れ入りける由を浮言せり。時に大御所扉を開かせ、庭上四隅を見給ひ、大に御聲を發し、誰か我が士卒を見知らざる事あらんやと仰せけるが、後に近臣に、假令敵の諜者忍び入りたりとも、我聲を聞かば潜り居て、間隙を窺ふ事を得べからずと宣ひぬ。寔に不測の雄謀といつつべしと云々。

御使番渡邊圖書宗綱

一本に、渡邊忠左衛門綱次の魚圖書助宗綱は、寛文五年四月十六日、八十一歳にて卒すと云々

は、堀尾山城守が攻口に至

り、仕寄何間迫るやといへば、山城守若年故、卒然として曰、其間數を知らず、足下度り糺さるべしといへば、宗綱忽席を立ちて、仕寄の竹を抜き、長さ六尺五寸五分に切りて、火炮雨の降るが如しと雖も、聊屈せず、自若として堀際迄の間數を躬ら糺し歸れり。觀る者稱譽せざるはなかりけり。横田甚右衛門は、堀尾若年にし

て、幕府の軍鑑を輕んじ、此の如き詞を發す。然るに足下、堀尾を携へずして糺されし事こそ遺恨なれと申せしとかや。記には、去ぬる四日の事にて、加州の陣所に作る。大同小異なり。

或本に、此説に相似たる事あり。去る慶長庚子年、金吾秀秋卿、伏見の城を攻めらるゝ時に、大島源次を以て、仕寄堀端迄何間に及べるやと尋ねに遣しければ、

村上三右衛門

此時は宇右衛門と稱す

答へて、凡そ十二間計りあるべき由申しければ、大島素より

豪士なれば、各の見分相違あるべからずと雖も、主人より、間數を打つて來るやと問ひ給ふ時、其儀に及ばざりしと申さんも本意ならずと、進み出でて之を糺さんといふを、村上頭を振つて、城中より發する鐵炮甚し。人の出づべき所にあらずと制しけれども、源次遂に承引せずして往かんとすれば、村上其時、旗本の軍士に、間數を打たする事あるべからず。某之を打つべしとて、卽竹束の外へ出でて、竹を一間の長に切り、心靜に間數を糺しければ、大島は其竿の先へくと廻りて算へしが、十一間半ありけりと云々。

又眞田丸黒門筋の櫓よりは、寄手の仕寄場と築山の間へ、頑に大銃を發し、其間を

往來する士卒を、多く打殺せり。然れども井伊直孝が隊には、其父兵部大輔直政以來、拵へ置きたる木綿柿色の幕、右の場所に幾重も打つて、往來見ゆる事なければ、死傷する者稀なり。榊原遠江守が仕寄は、竹把を二三間、大銃に打倒さる。其臣鳥居半六只一人進み出でて、改め附けゝれば、自他の軍兵大に感心せり。

或記に、淺野但馬守が長臣上田主水正重安は、大剛の部將故、仕寄先の大竹の上に跋扈して下知を加へ、城中の火炮烈しくして、傍なる者二人手負ひて、主水が冑の吹返を擦りしと雖も、敢て動せず。然れども一手の將として此の如きは、強に失する故、其隊の士卒手負數多なりとて、人々之を謗り沙汰せりと云々。

城中には、御和睦の沙汰を聞きて、兵氣緩まりけり。大御所の仰により、酉の中刻竝に亥刻、兩度鬨の聲を揚げけるに、城中少しも騒がずして、兩度共に鬨を合せ、松明を投出し、大銃小銃を打出しけり。同十一日、大御所は、間宮權左衛門伊治・島田清左衛門直時を召され、金堀の上手に相談し、攻口に右壁ある所を見て、掘らしむべしと仰せらる。然るに前田・井伊・藤堂三人の攻口に、掘入るべき所あり。

地の底に掘入り、鐵炮の藥を積み、指火を付けなば、石垣忽に崩るべしと申す。其後に井伊が攻口より掘らせけるに、城中にも之を知りて、同じく穴を掘り、穴中に於て戰はんと支度しけるが、掃部頭が攻口惡しくして成就せず。

一本に、天王寺口の矢倉より、鐵炮を多く發し、寄手は仕寄なり難ければ、間宮新左衛門を召され、仰に、但馬右見等の金掘を以て、彼矢倉を掘崩せと仰付けられ、金掘等と呼ばて上意を聞かせければ、要害の所、殊に案内を知らず候へば、數日を経べしといへり。又甲斐の金掘を召して尋ねられしに、五三日中に掘崩さんと申す。大御所聞召され、名將の持ちたる國機は、下々の者も其心ありとて御褒美あり。二三日過ぎて、彼矢倉より鐵炮を發せず、攻口緩くなりたり。是は城中の間者來りて、右の旨を通じけるにや。名將は一言を以て、天下を動かすと云々。或本に、甲州の金掘を、遙々呼寄せられしといふは非なり。傳に曰、藤堂が攻口より、遙か遠き方よりして、丹州の金掘共之を掘初む。幅二間高さ十一間に穿ち、兩方に柱を建て桁を亘し、其桁に檜を以て勾梁を入れ、間三尺宛に掛燈を設く。

之に依つて地中と雖も暗からず。城中にも、毛利家の浪人、土色の變するに心付きて、既に掘抜く事至らば、防ぐべき手段を整ふ。而して高虎が入れし金掘、西の方幅一間計り城中に掘込む時、不淨を流し、又塵芥を其穴に入れしがども、兎角して城中に入る頃、和議整ひしと云々。

一本に、城中には、藤堂和泉守が、無二の忠勤を、關東へ勵すを憎んで、城上より、渠は大坂に内應する由を呼ばはり、或は矢文發して、寄手の陣に至れば、必ず其隊よりして、高虎が許に贈る。是に依つて秀頼公を恨み、今度御誕を蒙りし丹波の金掘を呼寄せ、今十五日より、吾攻口湊底の地中より、城中へ掘り通し、壘壁を壊さんとすと云々。

同十二日、兩將軍天滿攻口御巡見あり。

或記に、有馬玄蕃頭寄口の井樓へ、將軍上らせ給ひし處に、御馬印を見知り奉りけるにや、雨の降る如く鐵炮を發するに依り、御近習諫め申すと雖も、井樓より下らせられず。水野日向守参りて、物見は一口の見物、巡見は總限の御見積の事

に候へば、一所計りは如何に御座候。鴨野の方へも御廻可被成と申上げければ、速に御下りありきと云々。

夫より前將軍は、上杉景勝卿の陣所に至らせ給へば、總軍一齊城に向ひ、火炮を發せり。大將御巡見の時、此の如くするは故實なりとかや。且、攻口或は道路、洒掃潔白にして、砂を所々に置けり。元老直江山城守一人の外は、御前を避けらる。景勝卿蹲踞せられける時に、大御所、足下の士卒、此間の軍、骨折たる由御諚あり。景勝卿、童部いさかひの如き迫合、勞するに足らずと、謹んで答へられけり。

或記に、島津薩摩守家久は、薩州を出船する所、海上風波穩ならず。僅兩日にして船を繋ぎ、日和を待つといへり。又先達つて肥後國主加藤忠廣、筑後國主田中忠政・豊前國主細川忠興は、島津が海路を歷るの告を聞きて、其跡より纜を解くべき旨、御下知ある故、此三將も未だ着陣せず。是れ薩摩に心あらんかといふ思召なるべしといへり。

關東大坂御和睦取組の事

十二月十三日には、大御所、中井大和を召され、總構を破る時に、土居石垣に掛けて乗込ましめん爲に、梯百挺或は五十本を作るべしと仰付けらる。大和上意を承り、工匠等に申含め、忽ち作り出せり。是は大坂の城郭總構、猥に梯を以て乗取るべきにあらざれども、其夥しき用意をあらはし、城中の兵勢を拉ぐべき爲の謀なりと聞えし。又淺野但馬守長晟・山内土佐守忠義へ、桴を堀に浮め、土俵を以て堀を埋むべき由を命ぜらる。同十四日風雨夥し。又京極家の後室常高院淀殿の姉なり、今般坂を始め給はんと
の事にて、京都より、阿茶の局を呼下し給へり。

或記に、初め駿府を御出陣の時に、阿茶局を召連れらるゝ事を、諸士不審せしが、今に至りて皆感心せりと云々。

別記に、阿茶局は、武田の家人飯田久左衛門が女にて、今川の家臣神尾孫兵衛が妻たり。家康公人質となり、駿州に在座せし時、神尾夫婦憐み奉りける處、義元

討死の時、孫兵衛も戦死せり。妻は折節懷胎たりしが、甲州に歸り、一男子を生み、名を猪之助と稱す。其後武田家亡び、家康公甲州へ御打込の節、彼母、猪之助を伴ひて御目見せり。公舊年の事を御失念なき由を宣ひ、即ち兩人を遠州へ召連れられし處、此婦、甚だ御意に入り、阿茶局と稱す。又猪之助は、秀忠公の御小姓となり、下總國東金の邊にて、三千石賜はり、神尾五兵衛と稱し、後に刑部少輔に任せり。阿茶局は、今般御和睦の御使として、城中に入りたる御恩賞により、刑部が子宮内へ、新知千石を賜へりと云々。此儀未詳。

別記に、今十四日、堺政所柴山小兵衛が職を免せらるると云々。

又九鬼長門守守隆は、盲船といへるを作れり。是は胴壁天井に、竹束を以て丈夫に圍み、舳と艫とに銃口をあけ、取楫面楫共には、四箇所の口あり。明りは引戸に拵へ、口に打鑰を附けたり。天井は竹束にて葺き、逆櫓を立て、打鑰の本六尺に重を付け、其先に細引を付けて、船の拵異形なり。茲に依つて船中の軍兵手も負はずして、味方の働自在なり。抑九鬼は、太閤秀吉公の時、朝鮮國に在陣して、大明の軍兵と船

大坂より
再び和睦
の使者來
る

軍をする事數年なれば、主人郎等に至る迄、調練妙を得たり。即ち長門守は、難波橋の船入より、此船を川へ入れ、鐵炮を城中へ打入る。向井將監忠勝、千賀與八郎政次、小濱民部少輔喜高等同じく相進む。今夜吹く風俄に砂を上げ、降る雨篠を衝くが如く、夜色溟々として、寄手皆帷幕を垂れたり。同十五日、本多上野介が陣所へ、京極丹後守高知、同若狹守忠高等、扱ひの談合とて寄合しけり。兎角淀殿の御心解けざりければ、大御所の命にて、阿茶局を、本多正純が陣所へ迎へ、城中より二位局を呼出し、淀殿の方へ、御和睦に於ては、誓紙を遣さるべき旨を仰あり。此使未だ城中へ通せざる所に、秀頼公の使者二人、正純が宅に來り、淀殿を人質に出し候儀は、仰に従ひ申すべし。然れども今般當家へ召抱へたる浪人を、今更追放せんことは、末代の誹謗、默し難く候へば、仰に従ひ難し。夫に付き、浪人に扶持いたすべき領知御座なく候間、御加増を賜はるべしとの趣なり。大御所聞召され、大に御氣色あつて、浪人共、何の忠賞により知行を遣すべき。此の如きこと重ねて申來らば、使者の首を刎ぬべしと仰せられ、則使を返し給へり。

或本に、此節城中より、和談の儀に就きて、人のいへるは、取扱にて事を延ばし、寄手を退屈させる謀か、又來る卯年は、秀頼公の大吉に當り給ふ由なれば、延引あるかと、取々噂をなすと云々。

其後に、牧野清兵衛・稻富宮内玆に中井大和を召され、鐵炮鍛鍊の者數十人を選び、城中の櫓を打破れよと仰付けらる。三人相談の上にて、備前島片桐市正が仕寄場、城中へ近ければ、兎角彼所より打入るべし。其上片桐は案内を能く知れりとて、彼の攻口に至り、市正に對し、城中の遠近方角詳に聞届け、母儀の御座所を志し、大銃數十挺を揃へて打ちけるに、忽櫓一つを打崩し、剩へ淀殿の侍女を打殺しければ、記に七人あり、残る女房達、周章騒ぎて歎き悲めり。

一本に、十二月十八日、秀頼公には、毎月山里なる豊國の祠へ詣で給ふにより、片桐之を知りて、火炮の妙手田村兵庫具定を招き、備前島より鐵炮を放たしむと云云。

淀殿は、今日の鐵炮にて、侍女の打殺されたるを見給ひ、御心も弱りけるにや、二位

局・阿茶局を以て、秀頼公へ、一時も早く御和睦あれかしと、被仰遣けれども、御承引なかりけるに依つて、織田有樂・大野修理亮並に七組の番頭、種々に諫言しければ、秀頼公聞き給ひ、今度一戦を企つる事、全く運を開くべき覺悟にあらず。先考の遺命に任せ、當城を墳墓に定むる所なり。然るを面々何の故に、和睦の事を諫むるやと仰ありければ、皆々言葉もなくして退去せり。

諸浪人諫言の事

十二月十六日、或は十五日、織田長益入道有樂・大野修理亮治長、御和睦の事を、秀頼公へ申

上げけれども、御承引なきにより、兩人密々に相談して、御和睦の事は、新參の人々より諫言あるべしと、長曾我部・眞田・後藤・明石等へ、様々の理を付けて相談するに依り、諸浪人も、頼み少なき事に思へども、秀頼公の御爲め宜しきと申すにより、止む事を得ず、長曾我部・眞田・後藤・明石等以下の新參、秀頼公の御前に出で、中にも後藤又兵衛進み出で、今度御籠城に依つて、先君の御厚恩を戴かれたる諸大名へ、力を合

すべき旨仰遣さるゝ所に、恩を忘れ義を捨て、或は御使を誅し又は擒として、終に返答をだにする者なし。又玉藥兵糧は、限ある物なり。然れば重ねて兵糧を入れんとせば、敵數十萬人通路を取切り、烏だにも翔け難からん。又後詰の勢來つて、敵を追拂ふべき方便もなし。何の頼あつて、御和陸承引御座なきやと、皆人不審し奉る由申上げけり。眞田が申すは、只今後藤が言上せし處、誠に理に當り候。總て籠城と申すは、士卒心を一にして防ぎ戰ふとも、後詰の勢これなき時は、落城する習に候。然るに頃日、南表の持口に心を付けて見候處、敵兵急に攻寄すれば、味方は色を變じ、後足を踏み、落支度をなす體に相見え候。且、織田頼長の持口に立つ所の白き吹貫を、三ヶ度迄色を變へられたり。是謀なるかも知れず候へども、邪推するに、旗印を敵に見知られまじき爲にて、後難を恐るゝ者かとも覺え候。其上去ぬる頃、藤堂和泉守に、豐志谷口の柵を攻破らせ、敵兵門塀に附きたる刻、城中鼓躁し、力を盡す所に、彼持口は鐵炮を止め、大將頼長防戰の勇なく、剩へ風氣と稱し、婦女と酒宴して居られたる由承り候。大將斯る振舞なれば、士卒に勇を勵む者も無之候。

斯様の人を、敵とやいはん味方とや申さん、辨へ難く候。御家門の人すら、此の如くなり。況や其他に於てをや。御推量可被成候。今の體にては、長き御籠城は如何に候。幸ひ敵より、和睦の事を申出候。早く御許容あれかしと言上すれば、此儀尤なりと、座中一同に申しけり。諸浪人諫言の事は、記に依つて記せり。未詳。淀殿へは是等の事を、有樂修

理より申上げければ、淀殿即ち秀頼公へ仰遣さるゝは、傳聞く頼朝卿は、朽木の中に隠れ命を全うし、終に六十餘州の總追捕使となり、威名を天下後世に耀かせられたり。御前にも亦其如く御命を全うし給ひ、時の到るを待ち、諸浪人の命を救け給はば、など積善の餘慶なからんや。此度御承引ましますば、其身も家も亡され、我にも憂目を見せ給はんこそ、返々も悲しけれと、御心弱く宣ひける故、有樂修理は、再び秀頼公の御前に出で、母儀の御心底細々と申述べ、且有樂重ねて申すは、兩將軍家より、御和睦の事を再三仰遣さる。其上御疎意あるまじと、神文を進せられんとある御事なり。抑此度の御合戦に於ては、日本國中の軍勢、雲霞の如く馳集り、晝夜攻め戦ふと雖も、さまでの御負も無御座候へば、君の御威光は天下に秀で、皆人恐

るゝ所なり。然れば又重ねて時節到來の期に及びては、味方に屬する者も多かるべし。且大御所も、己に七十有餘なれば、御餘命も久しかるべからず。薨去に於ては、必ず變あるべし。其時は天下の大名二に分れ、合戦自在を得べき事疑なく候と、詞を巧み申上げければ、秀頼公聞き給ひ、面々の申す所、一々道理ありと雖も、此趣は、最前片桐市正が、余を諫めし所なり。然るを其諫をさか編し、今度の難儀に及び、漸漸やうやう片桐が諫に従はん事運の極なり。又運を天に任せ、討果さんと思へば、何れも和睦を好む。今に於ては恥を忍びて降を請ひ、士卒の命を繼ぐを以て、軍勢の恩賞とすべし。早く和睦を調ふべし。片桐が忠言此時に顯れ、末世の嘲哂、其恥辱を雪がんに所なしと仰せられ、御眼に涙を浮べ給ひければ、有樂も修理も、面を赤め乍ら、喜悅して退出せり。

一本に、十二月十六日、大御所の御下知として、備前島菅沼織部正の寄口より、大銃百挺を揃へ、城中へ打入る。其外玉造口の寄場よりも、千疊敷目當に、大銃を發しければ、則ち淀殿の御屋形の内三の間に、女中多く集まり居たるが、玉落ち

て茶簞筥を打碎く。女中各肝を消し、淀殿の御居間も震ひ動けり。淀殿は流石女性
の事なれば、其砌より、御心弱くなり給ひ、御和談の爲めなれば、江戸へも御下
向あるべしと仰せられけるにより、有樂修理亮承りて、秀頼公へ段々諫むと雖
も、御承引なし。此上は出頭の近臣に、諫言致させ然るべしとて、其人を選む所
に、渡邊内藏助は、去ぬる鴨野合戦以來不首尾なり。又薄田隼人正は、廣言に似
合はずと、城中の沙汰惡しきに依り、木村長門守宜しかるべしと、此趣を申しけ
れども、重成諾せずして、今各の宜ふ處は、最初に片桐が申せし處なり。只今に
至りて左様の儀、此重成は得申上問敷候。各兩所肱股の臣とし、左様に惑ひ給
ふ事、御連の末を歎き入り奉る旨を相演ぶるに付、兩人も汗顔赤面して、重ねて
の言葉なし。其後淀殿より、色々仰進せられければ、稍秀頼公にも、御和睦の評
議ありけりと云々。

今日晩景敕使として廣橋前大納言兼勝卿一本兼豐・三條前大納言實條卿、住吉へ下向あ
り。寒氣の折節、長々の在陣、宸襟を惱まさるゝ所なり。陣所以下の事、諸大將へ

申付けられ、大御所には、先づ上洛然るべしとの敕諭なり。且和融の事を、禁中より御扱あるべきかと御内意あり。日野輝資入道唯心一本雄心。

或本に、侍從晴資朝臣の息正二位權大納言輝資卿、始め兼保卿といへり。元和九年閏八月二日、六十三歳にて薨すと云々。

金地院傳長老、右の趣を披露ありければ、大御所閏召され、先づ渥く聖恩を荷ふの有難さを謝し給ひ、和融の儀、御取扱の事は然るべからず。若し秀頼同心なく、敕諭違背あらば、帝位の輕きに似たるべし。必ず差置かせられ候て然るべき由を、仰せられけるとぞ。

一本に、敕使として兩卿來らせられ、綸言の趣は、秀頼、禁裏へ對しても、緩急のこゝと數多あり。然りと雖も、太閤秀吉、廢れたるを興し、絶えたるを繼ぎ、無二の忠臣たる遺烈をば、叡慮に忘れ給はざる所なり。然る上は今度佞臣賊士を懲らし、軍を收めて秀頼を助け給ひなば、永く太平の基、理世安民の創業たらんかと、宸襟を惱まさるゝ所なり。依つて遙に敕使を給へり。大御所謹んで拜聴し給ふ。兩

卿即ち座を替へて、私に大御所を拜し、御老體寒氣の時分、長々の御在陣、自然と御病氣の元たるべし。只速に敕に従ひ、御和睦の御思案庶幾せしむと申し給へば、大御所具に御納得あり、秀忠公も御來會なり。大御所よりは板倉内膳正、將軍家よりは安部備中守兩人、御馳走として奉仕す。義直卿・頼宣卿配膳を勤め給ふを、兩卿固く辭せらるゝに依り、御小姓衆配膳たり。翌日敕使御歸洛あり。大御所敕答に、只恐入り奉り候。猶委細は、近日の凱旋の刻參内を遂げ、愚意を奏達せしむべき由仰上げらる。其上に、船中御不自由無之やうにと、小濱民部少輔を以て、上下の御船の點檢せらるゝと云々。

蜂須賀陣所へ夜討せしむる事

さる程に本町橋筋は、大野主馬介治房を總大將として、其組塙圍右衛門直之・米田監物・貞安或は長岡氏に作るは、騎馬五十騎宛を預かり、彼口を守りけるが、去ぬる頃打寄つて評定しけるは、長々の籠城に、一度も夜討もせざる事こそ言甲斐なけれ。本町橋の南

蜂須賀阿波守、

本陣は西本願寺にありと云々

北は池田宮内少輔が陣所にて、兩勢堀際にて仕寄を付け

たり。いざや彼陣へ夜討せんと議し、大野主馬介に此段を申せし處、治房も然るべしと許しければ、直之は監物に示合せ、其用意をなせし處に、同組なる石川外記岡部大學等之を聞き、一手になりて打出でんと望み、石川・岡部も其支度をなしける程に、何となく騒動するを見て、團右衛門が申すは、斯の如き大勢になり、城中動搖しては、夜討の手段叶ひ難し。凡そ夜討をするに、互に面を見知り合ひ、物馴れたる小勢を以て教令を定め、入らば敵に紛れ、出でては敵に紛れざる様に人數を立て、合言葉を極め、進退金鼓に従つて、吾手足の如くせざる時は、却て敵に利を得せん。然るを斯様に大勢になりては叶ひ難し。其上主馬介も、米田と某兩人とこそは定められたれ。御兩所は、相組とはいひ乍ら、持口も違へば、無用たるべしと強ひて申しければ、石川・岡部大に怒り、御邊の軍勢のみ物慣れ、我々の軍勢は、盲目の寄合にて、夜討の役に立つまじと思はるゝや。吳子孫子が書も、今世上に遍く流布せり。汝等が分として、人を蔑如にするは奇怪千萬なり。然らば此方の持口より、夜討に

出でんと惡口し、其用意をすれども、今橋は先達つて燒落ちて、其事叶はざれば、狹間を斷明け、材木を川へ入れ、筏にして出でんと犇きけるを、此口の寄手戸川肥後守・池田左衛門督其體を見、用心嚴しく、晝夜鐵炮を發しければ、石川が手筈相違して、此儀を止めけり。依之圍右衛門も、夜討を延引せし處に、此節御和睦の取沙汰頻にして、其本意を失はん事を思ひ、十二月十五日の夜打より、明十六日夜、蜂須賀・池田が兩陣に打入らんと申せし處、大野主馬介下知して、小勢を以て、兩方を攻めん事惡しかるべし。蜂須賀には船場の意趣あれば、阿波守が手へ討入るべし。然りと雖も、強ひて合戦を好むべからず。只敵の仕寄場の柵を攻崩し、竹束の竹一本にて、も、取つて歸るを高名とせん。其分相心得られよと申渡せり。扱夜討の面々は、白手拭を以て冑の鉢を巻き、白布を鎧の綿嚙に結付けて印とし、合詞を定め、敵陣近くなれば、淺野但馬守裏切すと名乗るべし。其時に至り、裏切するといふ者はなかりけると云々。又門の外橋の向詰に、鐵炮を百挺持たせ、足輕頭三宅久太夫・橋本平左衛門・安井庄左衛門・牧野右馬介等を差置きて、味方の人數を上ぐる時、敵兵慕ひ來る事あらば、打立てよと敎令を定めけ

大坂方蜂
須賀勢を
夜襲す

り。扱十六日の夜丑の刻、塙圍右衛門・米田監物を大將として、其外侍百二十餘人、上條又八・田積市郎兵衛二人は、自分の心掛にて馳加はる。豫て一番に門を出づるは圍右衛門が組、二番は主馬介が手廻、三番は監物が組と定め、戸を開かず、潜より一人二人づつ出でて、月影のある所にて、各待合すべしと約束しける處に、さはなくして、二宮與三右衛門一番に潜り出で、橋の北に突出でたり。其次には山川三郎右衛門立出で、四五十間計り行きし所に、堀切のある假橋の上に、蜂須賀が臣中村右近重勝が張番の足輕十人計り、痛く寝入りしを見て斬棄にし、簀戸を切落しけり。然るに竹束の際に臥したる雜卒、篝火を焚き乍ら、是も同じく眠りて居たりしが、小屋の戸を切落す音に目を覺し肝を潰し、皆々陣所に逃入りける時、城兵鬨の聲を揚ぐれば、何れも寢耳に之を聞き、馬よ物具よと周章騒ぎて、驚破さける處を、城兵驅入り馳抜け、彼所に顯れ此所に隠れ、火を散らして戦ひけり。蜂須賀方は大勢なりと雖も、俄の事にて、手負死人數多あつて、大坂方の松井治郎右衛門・柘植十太夫・上條又八等、高名しける中に、石村六太夫といふ者は、阿波守が家來と引組んで、上に

なり下になり、二三度轉んで、石川終に組伏せられ、叶はじと思ひけん、味方はなきか、我を助けよと呼ばはりけり。城兵梶原太郎兵衛は其聲を聞知りて、走寄り之を見るに、天搔曇り月暗くして、物の具の色も定かならねば、梶原太郎兵衛茲に來れり。上なるが石村殿か、下なるが石村かと聲を掛ければ、下なるこそ六太夫なれと答へければ、梶原忽ち上なる敵を刺殺し、首を六太夫に渡しけり。今度太郎兵衛、高名はせざりけれども、折よく來り合はせ、斯る働せりとなり。又蜂須賀が家臣中村右近は、鎧著ながら狹箱に寄懸り眠り居けるが、関の聲を聞くと等しく、左の手に冑を持ち、右の手に鍵提げ、小屋の外に出でし處、冑を着るに暇なければ、其まゝ抛棄て戦ひしが、薄手數ヶ所を蒙りけれども、猶も進んで蒐る所に、小屋の際なる溜水に足を踏込むを、木村喜左衛門・塙彥太夫透さず鍵付け、首を取らんと立寄りしを、稻田修理亮示植或は宗祐竝に嫡子九郎兵衛植次于時十五歳・岩田七左衛門・鶺飼七郎左衛門・四宮與兵衛・横井十郎兵衛、遁すまじとて追懸り、粉骨を盡して相戦ひ、敵六人を討取り、各首を得、右近が首をば渡さかりけり。城兵には木村彦左衛門・牧野右

馬助後に牛抱右近と稱すと云々・畑或は小畑角太夫・田屋右馬助・平田治部右衛門・蹈留まつて相戦ふ。中に

も平田は、比類なき高名して首取り、若黨に持たせ城中へ遣し、我身は猶も戦ひけるが、終に討死せりとなり。其外脇坂又右衛門・竹村新之丞・坪井喜右衛門以下十餘人も、枕を並べて命を殞せり。蜂須賀方の勇士は、二十餘人討死せり。城兵高名の面々には、二宮作右衛門・加田理右衛門・車加兵衛・大桑九右衛門・田積市郎兵衛・津田半三郎・梶原兵部・成田彌太夫・松田理兵衛・荒川源五・池田左近右衛門・森島清左衛門・都築茂左衛門・鈴木半左衛門・二宮與三右衛門、夏陣に討死、並に塙團右衛門が若黨岡本長右衛門等なり。已に城兵は利を得て、靜々と引取りけり。石田記に岩田七左衛門は、猩猩緋の羽織を着し、士卒に引下り殿を勤めけるが、蜂須賀勢、よき敵と思ひけん、追懸け來りし時、我は石田七左衛門と名乗りけり。蜂須賀が方には、岩田七左衛門といふ者あつて、是も猩々緋の羽織を着しければ、味方のと心得猶豫する所を、稻田修理亮も、寄手の指物其外弓鎗などを、城兵等が奪ひ歸るを、味方ぞと見誤り、餘りに長追して、擒になるなと下知するうちに、城兵敢なく引取りければ、蜂須賀勢

は、臍を嚙むとぞ聞えける。今夜塙園右衛門直之は、吾姓名を木札に記して、道に捨てたる故に知られけれども、米田監物は其事なきにより、夜討の將と、寄手は思はざりけるとかや。

或本に、城兵蜂須賀が陣へ懸る時、本町橋の北なる池田宮内少輔忠雄より、横を氣遣ひ、米田監物は、彼陣の押へに控へたりしが、池田より人數を出さゝりけるにより、是も蜂須賀が手へ懸りけると云々。

又曰、稻田修理亮が老父宗心は、當時隱居してありけれども、嫡孫九郎兵衛が初陣故、心元なく思ひ、阿波守へ申して、大坂へ向ひし所、十六日の夜、不圖九郎兵衛を呼起し、修理方へ使を遣し、外へは沙汰せず、手前の人數は支度すべしと申して、孫九郎兵衛に鎧を着せ、其用意をなして居たりけると云々。

或本、御和睦の後に、塙園右衛門が古傍輩知音あつて、見廻り音信する中に、水野日向守勝成が家人黒川三郎右衛門訪ひ來れり。直之物語の序に問うて曰、我舊知林半右衛門は、必ず訪たづねに來るべき者なるが、今に音信なし。若し今度此表へ出で

ざるが、不審なりといへば、三郎右衛門聞きて、半右衛門は、今池田武藏守に奉公し、天満口にありといふ。團右衛門即ち黒川を以て、林が方へ、古傍輩皆訪ひ來るに、御身遂に音信せず。其心如何と申送れり。半右衛門が返辭には、我等貴殿へ無音の仔細は、若年の時に、未來大名になるとも、自身鍵を取り、太刀打を致さずば、勇士の本意にあらずと申合せり。然るに先達つて夜討の體を聞くに、本町橋の上にありて、床几に腰を掛け白旄を取り、其身手を下さりしとかや。貴殿年は今年四十八にて、未だ勇力の衰ふる時にもあらず。武邊に年を寄せ、勿體を付けたるを聞くも如何なれば、使も遣さずといひおこせたり。黒川、此旨を團右衛門に達すれば、塙涙を浮め、林が心中尤至極せり。夜討の時に、大將の仕方を致したるは別儀にあらず。關ヶ原御陣に、足輕の備へ張出し、出過ぎたりとて、古主左馬介、以ての外に怒りて、己は一代、人數を引廻す將にはなるまじと叱りしを、無念に思ひ、一生に一度塵を取り、將帥の功を、古主に見せたまき念願により、夜討の時、痒きを忍んで塵を取りしなり。最早望み足る上は、重ねて事あらば、

太刀は目釘のこたふる迄、鍵は端食抜ける迄働きて討死を遂げ、林に見せんと申せりと云々。

或説に、蜂須賀は、代々武功の家なれども、未だ軍術に練習せざる所あるか。敵より橋を引きたる時に、阿波守が手計り残せるは、夜討せん爲と心を付けざるは、不覺に似たり。橋の上に、足輕十人計り番に置きたるを、城兵悉く切捨て通るに、之を知らず、其頭の戒嚴重ならば、豈此の如くならんや、最も不審なりと云々。

夜討の次第註進の事

十二月十七日、秀頼公は、千疊敷へ出で給ひ、昨夜高名したる面々二十餘人に、各褒美を給はりけり。又討死したる平田治部右衛門が息、三歳になるに、家督を繼ぐべしと仰せられ、且褒美を給はりければ、米田監物名代として頂戴す。木村彦左衛門・牧野右馬助・畑角太夫・田屋右馬助四人は、御和睦の後、互に穿鑿を遂げられ、御褒美を給はりけるとかや。

或記に、蜂須賀が陣へ夜討の時、手柄せし木村喜左衛門は、落城の時に討死す。畑角太夫は、稻葉美濃守正則へ抱へらる。牧野潮太は、本多中務大輔忠勝へ奉公す。

田屋右馬助は、五郎左衛門後又菊右衛門と名を改め、紀州頼宣卿へ召出されたりと云々。

別記に、同夜に、木村喜左衛門、畑角太夫、牧野潮太、各鍵を合せり。田屋右馬助は

長刀なり。塙團右衛門、御宿越前守・米田本書に長岡に作る監物兩人に向ひ、田屋右馬助が働

鍵を合すといふべからずと申せば、御宿答へて、鍵長刀何か差別あらん。却て長

刀は鍵より短ければ、勝るといふとも劣るべからずと申しければ、直之信服せりと云々。

又鈴木半右衛門は、昨夜首一つ提げて來りしが、奪首なりといふ者あり。團右衛門改めし處に、甲には太刀疵なく、首には二三所々の太刀疵あるにより、是疑もなき入子首なり。誠に珍しく候と申しければ、諸人目引き鼻引き笑ひきとかや。又蜂須賀阿波守至鎮は、今朝早々、兩將軍家へ使者を以て、昨夜丑の刻計り、大野主馬介が次將塙團右衛門直之といへる者大將として、夜討に入りけるを、早速出合ひ、敵

數十輩を討止め候。味方も中村右近を始として、廿三人討死を遂げ、手負少々出来仕候。家來稻田修理、鍵を合せ疵を蒙り、修理忰九郎兵衛、高名。岩田七左衛門、長谷川小左衛門鎗を合せ手柄仕候。四宮與兵衛、横井十兵衛、鶴飼七郎左衛門以下、首を得たる者數多有之候。七條與三右衛門は、上條又八に討たれたりと言上す。兩將軍聞召され、御感斜ならず、在江戸なる至鎮が父蓬庵へ、御書を下さる。其文に、昨十六日之夜、於大坂船場口、敵將爲夜懸雖差出、阿波守番所堅申付無異儀、即時出合、隨分之者共討取、皆無比類、寔以感思召候。委細者本多佐渡守可申也。

十二月十七日 家康

蓬庵江

其後に板倉内膳正重昌を以て、夜討の次第御尋あり。午の刻阿波守を召され、夜討不慮の處に、手柄の段御感に思召すと上意あり。時に稻田修理は手負ひ乍ら、御前に出づ。大御所御覽あつて、伯樂が淵を破る時、森甚五兵衛、同甚太夫は鎗を合せ、

廣瀬加左衛門・木村長左衛門等は首を得。又今度の働神妙なり。御穿鑿の上、感狀を給ふべしと仰出さる。同十八日、秀忠公、東の陣所悉く御巡見あつて、安藤對馬守重信を召され、鳴野御上覽の次手なれば、大和川を御越あるべしと仰出さる。對馬守承りて、由なき御事と思ひ乍ら、御請申しける所へ、本多三彌正重御見廻の爲めに、岡山の御陣所より不圖來りけるを、重信招き寄せて、只今大和川を打越え給ひて、御巡見あるべしとの御事なり。足下如何存ずると、仰向いて空を見ければ、三彌も同じく空を見、日已に傾き、日没の期に及び候。御本陣も遠く、如何に御座候と申上げければ、安藤、即ち三彌が申す如く、今日は御還あつて、明日御慰に、今福御上覽然るべしと言上する故、歸らせ給へり。此時未だ未刻計りなれば、今福御巡見以後に、岡山へ還らせ給ふとも安かるべきに、鳴野と今福とは、敵出で易き地形なれば、兩人此の如くは計らひけるとぞ。

或記に、眞田伊豆守信幸が家來矢澤但馬守・半田筑後・榊原石見が輩は、度々武功ある者共なれば、敵の鐵炮、雨よりも猶繁かりけれど、一番に進んで仕寄を付け

ける處、今日將軍家御巡見あつて、眞田河内守が仕寄他に異にて、甚だ城に近しと御諛ありけり。御目附衆畏りて、此事私共先達つて批判仕候處、河内守申すは、此手は城中木村長門守が持口に候。若し只今にも總攻との御觸あらば、木村手痛く働くべし。彼長門守と左衛門佐とは、刎頸の交なる由承り候故に、一番に攻入り、長門守と勝負を決し申すべき覺悟にて、諸陣に勝れて仕寄を附け申候。若し御咎もあらば、此事を言上し、切腹仕らんと欲し居申候により、我々共も、其儘に差置き候と、言上せりと云々。

記に、木村長門守重成は、河内守が軍兵共、仕寄を付けて勇み勵む形勢を見て、重成、眞田左衛門佐に問ひて、只今仕寄を附けたる、六文錢の旗指したるは、貴殿の一旗か、又他の將に候や。城攻の體、妙を得たりと申せば、幸村其時、只今軍兵に先達つて下知仕る二人の若武者、一人は河内守と申して十五歳、今一人は内記と申して、十四歳に相成候。皆某が甥にて候と答へければ、木村大に感じ、兩人常に物具は、何色の鎧を着し申さるゝか。慥に承りて、味方の士卒にも知らしめ置

き、用捨致すべき事なり。少年にして斯る奇特の働、前代未聞の事なれば、鐵炮にてやみくゝと打たん事、武の冥加にも盡きぬべしとぞ申しける。又此時柳原遠江守康勝が兵の附けたる竹束二三間、城中より大鐵炮を以て打倒しける處に、康勝が郎等、鳥居半六といふ者、鐵炮も曾て恐れず、只一人進み出で、竹束を本の如く附直しければ、敵も味方も之を見て、誠に不敵の勇士やと、譽めぬ者こそなかりけれと云々。

同日大御所、京極若狹守忠高の母堂常高院を召されて、命せられけるは、秀頼弱年故、猥に姦佞の臣等が勸を容れ、兵を舉げらると雖も、予に於て聊か疎意なし。然るに將軍は壯勇の餘り、此城堅固にて、如何ほど掘深くとも、山城よりは掘易からん。掘入りたる跡へ、厚板の箱を段々に入れ、隧道を作りて郭内に掘通り、疊壁を崩さんと奇巧を企て、金掘の人夫を數多相集め、諸將に令を下し、若干の工匠を驅寄せ、樋或は梯等を作らしめ、遂には櫓多門を鑿倒すならば、其時一同に攻入り、城中を塵にすべしと議定あり。予が疎意なき心底からは歎かはしく、色々と制詞を

加ふれども、今に許諾なし。秀頼早く先非を悔い、誠實を顯し、和儀をだに入れられなば、何とて將軍を熟諫せん。此儀相調ひなば、何事も昔日に易らずして、泰平の基たるべき間、宜しく淀殿を諫むべしと宣ひ、阿茶局へも其趣を細に諭し給ひ、彼樋竝に梯等、攻具の用意にせし大なる材木、山の如くに積竝べ、工匠數千人群集して、晝夜を分たず造れる有様を、常高院に見せ給ひ、城内へぞ遣されける。扱秀頼公は、城中の役所々々を御巡見あつて、諸將士卒に至れる迄、寒氣の節に晝夜相守り、勤勞の段を諸軍士へ仰せられ、其後に酒肴を給はりければ、諸人大に悦び、興を催しける所に、大野主馬助が組なる石川外記は、寄手の池田宮内少輔・同左衛門督へ内通する由風聞し、城中騒がしきに付、上條又八を遣されて之を伺はしめ、且鈴木半右衛門を以て目附とし、之を糺さしめ給ひし處、虚説たる由にて、兩人罷歸れり。然れども御和睦の時に、疑はしき事あつて、終に誅せられたり。

記に、淀殿は、侍女數多召連れられ、城中の様體は如何と、出でて見給ひければ、豊臣家の御旗金の切裂十二本、郡主馬介が預かりなれば、己れが陣所に押立てた

り。又津川左近は、茜の吹貫五十本金の瓢箪の馬符を、白日に耀して、光渡りたる其陰に、透間なく鎧武者六七萬人、冑の星を耀かし、鎧の袖を連ね、雲霞の如く並居たり。其外櫓の上、矢狹間の陰には、射手と覺しき者共、弓の弦喰しめ、矢束を解いて押寛げ、中差に鼻油引きて、敵近付きなば、射落さんと待つもあり。鐵炮に玉藥込めて、火繩に手挟みたるもあり。其勢は、暴水漲り來つて、平地忽ちに江河となり、泰山崩れて瀬を埋むとも、敢て此城を動かすべしとは見えす。巍巍たる有様を御覽あつて、行末頼もしく思召し、夫より敵の軍勢を見給ふべしと天守に上り、四方の寄手を見給ひしに、其勢百萬騎もあらんと思ふ程にて、見物相撲場の如く打圍み。尺寸の地も餘さず充滿して、堀際まで攻寄せたるを見給ひ、織田有樂・大野修理亮を召され、寄手は斯る大軍にて、稻麻竹葦は愚、錐を立つべき地もなければ、終には此城攻崩されん事、疑あるべからずと御落涙あつて、天守より下り給ひぬ。抑此淀殿と申すは、心剛におはしまし、常の詞に、我は女的身なれども、心は男に劣るまじ。自然の事あらば、冑を着、劔を取り、一方の大將

ともなるべし。各も随分忠節を勵み、名を後代に留めよと、由々しげに宣ひけるが、斯計り敵の大勢あるを見て、一向に御心弱り、今は御前の御身の上さへ、恙なく渡らせ給ひなば、人住まぬ野邊へ身を容るゝとも、思あらしと詫び給ふ。修理亮之を承り、秀頼公の御前に参り、母儀の御愁歎を申上ぐれば、秀頼公莞爾と笑はせられ、女儀は度なき者なれば、さも思召されんは理なり。今にてもあれ、敵若し總攻をするに於ては、予も郭外に打つて出で、華やかなる軍して、名を萬代に残すべしと、潔く仰ありけりと云々。

關東、大坂と御和睦の事

さる程に常高院は、城中に入りて和睦の事取繕ひけれども、色々異議あつて、未だ否やの返事なかりければ、將軍秀忠公には、茶臼山へ成らせられ、家康公に御對面あつて、近日總軍勢に觸れ、總攻を仰付けられなば、落城せん事、掌の中にあらんと仰上げられければ、大御所聞召され、城を攻めなば、尤落城疑なし。然れども味

方若干亡ぶべし。其所以は、昔本願寺の上人顯如、此城に楯籠りしを、織田信長、數萬人の軍勢を以て、三ヶ年攻められしが、終に落城せず。其後に太閤、多年に此城を思ふ儘拵へ、其上大勢楯籠れば、容易には落つべからず。敵に依つて轉化すといふ事あれば、手段を替へて攻崩すを良將といへり。苦んで攻むるは、愚將の所爲なれば、予に任せ給へと仰せらる。夫より本多佐渡守正信を召して、秀頼は若年なり、淀殿は女性なれば、大方籠城にも退屈あるべし。家中の輩は、或は小身或は新參の集勢なれば、今は早心區々になつて、善道に守る者は少なからん。然らば和睦を整へんや否や、常高院が歸り來るを待つて、又方便如何程もあるべしと仰出さる。其後に秀忠公は、岡山へ歸らせ給ふ。又大御所去ぬる頃、本多美濃守忠政を召し、予茶臼山に陣す。汝は茶臼山の下木津口に移り居て、本陣を守護すべしと仰付けられし處に、今十九日、秀忠公の仰にて、忠政又天滿に赴き、仕寄築山等の事を沙汰し、且戰の備をなす。扨城中には、母儀、扱の事を、頻に秀頼公へ歎き給ふにより、是非なく和睦の事御承引あり。さらに依つて常高院竝に饗場局・阿茶局竝に京極若狹守、是

關東大坂
和議成る

等の人々、京極丹後守高知記に高廣に作るは誤ならんが陣に來れり。本多正純も亦參向す。秀頼公御返答に、城中總掘を埋め、石壁を破壊し候事は、御所望に任すべし。母儀並に北方を人質とし、關東御下向の儀と、當城を立退く事は叶ひ難し。有樂と修理が忤は、人質に差出すべく候。然る上は浪人共へ御祟なく、且右府へ御疎意あるまじと申す御誓紙を賜はらば、御和睦あるべしと仰遣されけり。兩將軍即ち御許容あり。其後正純、常高院に對し、總掘御埋めなされたき仔細は、異國まで隠れまします。大御所御動座ありし甲斐なく、御和談のみにて歸らせられては、御若年より御弓矢の譽れ、此時に至り宜しく相成候故、總掘を御埋めなされたき思召に候。又秀頼公にも、兩御所へ對し、御禮儀に候間、能々御申あるべしといへり。其後常高院並に二女は、城中に歸りしが、竟に御和睦は相整ひけり。

一本に、二十日の朝、本多正純より、有樂・修理方へ、上々様方一旦御矛盾となり候へども、御親子の御契約、御重縁ちなみの御因淺ちなみからず候へば、御内證は御和談相濟み候。然るに表方より、只今までも御延引は、御兩所の御分別にて、御和談の儀滯

り候やうにも、御兩所の思召に候。早々仰分けられ然るべく候。御内證より相極まり候はゞ、御兩所の御身上相立ち申すまじく、御爲を存じ、申遣はすの由なり。兩人驚き、村田吉藏・米村權右衛門を以て、上様方御内意相濟み候はゞ、下々の兎角を申すべき儀に御座なく候。我々如在之なき段、追付申上ぐべしと申遣はせりと云々。

同二十日夕方、常高院二位局・饗場局三人、城中より來り、被物三・緞子三十卷、秀頼公より進せらる。此由阿茶局・本多上野介披露す。同時に織田有樂の息男武藏守尙長大野修理亮が二男彌十郎を人質として參向せり。卽上野介に召預けらる。又城中破壊の事は、大坂の人數にて、仰付けらるべき旨、三人の女房等申上げられければ、然らば奉行を遣すべき旨仰出さる。

或説に、城中の人質を取りに參るべき由、後藤庄三郎仰を蒙り、本多上野介家臣寺田將監を差添へ遣さる。其時、有樂・修理亮が兩息を出せし處に、大野が息は幼稚なるに依り、庄三郎が申すは、御嫡子をば、何として出し給はぬと刻を移す。

稍あつて嫡子信濃守治徳于時十七歳なりを出す。依之織田武藏守尙長、

于時十九歳なり。今和州芝村一萬石を領する

織田氏の家系なり、

兩人を同道し、罷歸りて其趣を言上す。幼少の人質を取らざる事甚だ御

感あり。其上武藏守は本多正純、信濃守は小出吉英に預け給ふと云々。

此時、母儀の扱にて御和順になりければ、

茶臼山引分にする扱は京極殿の袋茶ときく

と、何者か詠みけるとなり。今日、

或は廿二日

九州の軍悉く兵庫に着す。薩摩船七百餘艘

・豊前船四百餘艘・肥後

加藤・筑後・田中

の船、都合二千餘艘着岸の由、正純披露す。時に兩將

軍早速の出船、御喜悅の處なり。然れども御和睦の上は、各歸國致すべき旨を仰出

さる。さるに依つて上野介より、上意の段申渡せり。西國の軍勢共は、遙々風波を

凌ぎ罷上り、敵の旗をも見ずして歸國すること、無念の至なりと呟き乍ら、皆々歸

國しけりと云々。

新東鑑卷之十二畢

新東鑑卷之十三

木村重成・板倉重昌・雙方へ使者に立つ

井 青山石見守内通露顯の事

木村重成
家康に對
面

さる程に御和睦の儀も相調ひければ、十二月廿一日、記に廿二日互に御誓紙を取交さるべきに定まりければ、大御所にも、其御用意ありける處へ、秀頼公の使者木村長門守重成、家康公の御陣所へ來りければ、則ち御前へ召出されけり。

記に、郡主馬介良州と兩人、使者に來り、主馬介は、次の間に差控へたりと云々。

重成は、御側近く寄りて、演說せんとしけれども、本多上野介正純・安藤帶刀直次・成瀬隼人正正成・松平右衛門大夫正綱・秋元但馬守泰朝・板倉内膳正重昌以下、御座の左右に候しけるに依つて、木村は座の中央に跪き、秀頼公の御口上を述べ、其後に退

き、謹んで拜禮せり。其立振舞器量骨柄、天晴無雙の勇士とぞ見えにける。大御所は、御誓紙に御血判をなされんと、御指を刺させ給ひし所に、御血の出でざりければ、年老いたるに依り、血虚せりと仰ありけれども、長門守は偶然として、耳聞かざるが如くにして申すは、淀殿いぶかり給ふべし。重ねて御血を洒がせ給はらん事を乞ひけり。左右する内に、御判形も出來しけるにより、長門守に渡し給へば、重成押戴き、篤と拜見せり。右御誓紙の趣は、秀頼公に對し不可有御疎意、且御所領並に浪人等に御祟あるまじとの詞なり。時に大御所、去ぬる頃、信貴野今福へ、軍勢幾許か出しけるやと御尋ありければ、重成答へて、三千程の由を述べけるとぞ。是れ其時に、小栗又市が見積りし所なり。

或本に、家康公御和睦の證に、御誓紙を書かせ給ふ時に、木村長門守、御筆元を見に來れり。然るに大御所の御血判薄きにより、長門守之を返上して請けざりければ、家康公其時に、予年老いて血少なく、眼霞めば、小刀を立つるも分明ならずと、お萬の方或は阿茶局を召され、是を突けよと御指を出させ給へば、於萬の方、大御所の

御指の間に、我指を接まじへ、小刀にて我指を刺しければ、血淋りて、家康公の御指に流れしを、誓紙に押して、大御所の御指を巻きて、其品を紛らはせりと云々。

或説に、去ぬる慶長三年、太閤薨去の折、家康公の御認ありし御擔書は、秀吉公の御棺中に、納むべしとの御遺命なりけれども、密に盗出せりといふに相類せり。

或本に、家康公御誓紙終りて、木村に向はせられ、汝は常陸介が子とや、或本に、常陸介は、重陸半人正と稱すと云々。實にも面體父に似て、天晴の器量骨柄たり。昔關白殿の全盛の時、北野

松梅院に於て、汝が父と茶に會せし事あり。常陸介は、惜しき大將なるを、石田が讒言を信ぜられ、罪なきに死を給へり。弓矢取る身程、はかなき者はあらじ。

汝が父の仇石田以下の奸臣は、皆予が討亡せし上は、相構へて疎くな思ひそと仰ありければ、重成稽伏して、往事を存じ出せしにや落涙せり。時に御祐筆曾我左衛門、文臺に御硯を添へて、御前に置けりと云々。此事、實なりや否や覺束なし。

別本に、木村長門守、大御所の御前を退きて後に、本多上野介を召され、其方は、

あの長門守が年を存せしかと御尋ありければ、正純答へて、廿三四歳計りと承候由言上しければ、美男故か、夫より若年に見ゆ。あの者が年長けたらば、如何やうになるべきぞと仰ありけりと云々。

其後に、秀頼公の血判を見届けん爲に、永井右近大夫直勝或は本多上野介正純とありを遣さるべし

と、御誕ありけるを、本多上野介承りて、之を不審し、御前の御判形を見んとて、若輩なる長門守を越されしに、此方より老臣を差遣し給ふやと述ぶるに依り、尤と思

召しけるにや、板倉内膳正重昌于時廿六歳。一本に寛永十五年正月元日、從五位下板倉内膳正重昌肥前國島原に於て戰死す。于時五十一歳なりと云々。此説に據

る時は、此時廿七歳なりを召して仰付けらる。重昌上意を承り、京極若狹守を案内として城中に

入り、大御所の仰を述ぶ。是亦關東に對し、御恨あるべからず。又重ねて浪人を抱

へ、叛逆擾亂をすべからざる事を載せられたる擔紙なり。時に秀頼公、あてな常名は何と

すべしと尋ね給へば、重昌謹んで、大御所よりの御使たる由を返答するに依つて、さ

らばとて、家康公と書かせ給へり。大御所も、此儀を覺束なく思召され、早速に御

尋ねありければ、右の趣を言上せしに依り、大に喜悅ありけるとぞ聞えし。或本に、板倉重昌な、

世の人臙脂内膳と名づく。周防を蘇芳と見て、兄より色の勝りたりとの心なり云々。

或説に、片桐市正より小島左兵衛、舍弟主膳より金田宗右衛門といへる者を使として、本多佐渡守・同上野介に付きて、最前より御懇の上意を蒙り、遁れ難く候故、御陣所へ罷出で申候。此上は兩人共に逼塞仕候やうに、兩御所へ御執成を頼み候由を申すに付、本多父則ち披露に及びし處、大御所聞召され、片桐兄弟、世上への憚なし。御奉公相勤むべしとの上意に依り、兩人共に御請申せりと云々。

此日城中寄手、互に火炮を止めけり。

或本に、此時眞田左衛門佐、秀頼公を諫めて、御和睦なつて、敵味方甲冑を脱ぎ萬歳を唱ふ、今宵敵の虚に乗じて之を討たば、勝利必然にして、兩御所を討取らん事、掌の中なる由を申せども、淀殿の仰に、今日和議を約し、言下に違變すべきやと、御承引なきにより、眞田再應諫めたれども、織田有樂・大野修理亮等も、頻に制止す。而して眞田間牒を以て、兩將軍の御陣營を窺ふ所に、兩御所も豫め之を慮り給ひ、三軍の守御嚴整なり。若し誤つて城兵夜蒐せん時は、必定塵にせらるべ

き由を聞きて、眞田も大に感じ、豊臣家二世にして、亡ぶべき時至る事を歎せりと云々。

同廿二日、安藤帶刀・成瀬隼人正・永井右近大夫等を召され、諸軍勢の仕寄を、悉く本陣迄引取るべき旨を仰付けらる。又城中堀を埋むべき奉行として、松平下總守忠

明・本多美濃守忠政・本多豊後守康重等を遣され、城中四方の門を警固し、並に甲乙人の亂入を制するには、瀧川豊前守秋益^{一本}佐久間河内守政實・山城宮内少輔忠又

^{一本に}秀宗・山本新五左衛門義一なり。壘壁破却の監使奉行として、御使番山田重太夫重

利・渡邊圖書宗綱・青山石見守清長等を遣さる。抑此青山石見守は、去ぬる慶長庚子年、濃州關ヶ原合戦の砌は、祖父江五郎右衛門定輸入道法齋^{大橋與左衛門重賢の二男なり}とて、福島

左衛門大夫正則が手に屬し、武功を顯し、其外度々の高名ありし故、左衛門大夫頻

に執成申すに依つて、家康公へ召出され、青山常陸介忠成が組に屬し還俗せり。大

御所は、福島に仕へし時より、御心易く思召し、御寢所迄も召寄せられたる者なり。

然るに今日山田・渡邊等と城に入りける時に、女房一人立出で、青山石見守殿にては

なきかと呼びければ、清長赤面して、迷惑の體に見えしが、彼女房高聲に、御城中にて、上様方御機嫌よければ、御心易かれといひて内へ入りけり。時に石見守は、山田重太夫・渡邊圖書二人に對して語りけるは、兩所の思召近頃面目なし。某が聲並に親類共、籠城仕るにより、彼女房も能く知りて、斯様に呼掛け申すにや。定めて御耳に達しなば、御糺明あるべしと申す。兩人聞きて、縦ひ内通ありとても、御和睦なる上は、仔細あるまじと挨拶しけるが、山田・渡邊、覺束なくや思ひけん、密に御耳に達しければ、返忠顯るゝ上はとて、終に翌年閏六月に死を給へり。青山伯耆守忠俊、檢使たりと云々。されば前方、不慮に閨の聲を上げしに、城中少しも騒がずして聲を合せ、松明を投出し、大銃小銃を發せしは、青山が内通せし故とぞ、後に聞えける。

諸大名追々御目見、總湊埋の事

十二月廿三日、伊達陸奥守政宗・藤堂和泉高虎以下の諸大名、本多上野介を以て、密に申上ぐるは、今般豊臣家と御和睦の事、然るべからず。行末の礙たらむ事、必定に

御座候。堀石垣を破壊せられ、平城とならん上は、攻むるに心易く、畢竟天より給はる處に御座候間、早々御攻あつて、然るべく候はんと言上せしかども、大御所には、御承引なかりけるとぞ聞えし。今晚日野輝資入道唯心・金地院傳長老を御前に召され、先達つて諸家の記録を校合して、官家古法の儀式相違の事共、奏せらるべき條を仰含めらるゝ所に、今に至りて其註進なし。其所以如何と仰せ難せられければ、記録等、未だ考へ終らず候。追つて申上ぐべき由を申さる。同じく廿四日、將軍秀忠公、茶臼山へ成らせらる。御閑談の上御還あり。同日織田有樂・大野修理亮御目見えに來り、小袖三領づつを獻す。本多佐渡守・藤堂和泉守、御前に於て申達し、今度正しく御孫婿にて、殊に御若年の秀頼公と、御弓矢に及び給ふこと、異國迄の御外聞悪く思召さるゝ所、御和談に相成り、御満足の由を挨拶す。且母儀よりは、大角與左衛門を御使として、御夜の物御蒲團を進せらる。又御歸洛の御祝儀として參る大名には、前田筑前守利常・福島備後守正勝・淺野但馬守長晟・池田武藏守利隆・舍弟左衛門督忠繼・同宮内少輔忠雄・鍋島信濃守勝成・寺澤志摩守廣高・細川内記忠

利・森右近大夫忠政・有馬玄蕃頭豐氏・稻葉彦六郎典道（記に一道とあり）・京極丹後守高知（記に高知とあり）・山

田土佐守忠義・堀尾山城守忠晴・加藤式部少輔明成・南部信濃守利直・毛利長門守秀就・

毛利甲斐守秀元卿・吉川藏人頭廣家・蜂須賀阿波守至鎮・柳原遠江守康勝・本多出雲守

忠朝・松平下總守忠明・本多豊後守康重・石川主殿頭忠總・水野日向守勝成・越前少將

忠直朝臣・舍弟伊豫守忠昌・其外班々の輩・算ふるに違あらず。又長崎奉行長谷川左

兵衛藤廣（或は政貞）・夏秋の間、肥前國に於て、耶蘇宗門裁判の功成りしを御稱美あつて、泉

州堺の津は、長崎へ渡海の商賈住居の地たる故に、堺の政所に仰付けらる。

或本に、御使番にて、鷹匠組を兼帶せし小栗忠左衛門人次、頃年御勘氣を蒙りて

居たりし所に、天海並に傳長老の愁訴により、免せられしと云々。

今般井伊掃部頭直孝、大御所の御召に依つて御目見す。本多上野介・安藤帶刀・土井

大炊頭等、井伊掃部頭こと、御先手に於て、油斷なく忠戰仕候由を言上す。家康公

聞召され、掃部頭儀、彦根へ歸り、仕置等を申付くべしと上意あつて、御服を賜は

る。其上に土井大炊頭を召して、此趣を、大樹へ申上ぐべき旨を仰付けらる。是は直

孝兄右近大夫直勝、病氣に依つてなりとぞ聞えし。扱夜に入り、茶臼山御小姓衆の小屋より出火し、陣屋五六軒焼失す。此時松平右衛門大夫・板倉内膳正・加賀爪甚十郎、堅く門を守りて出入を止む。諸陣は備を堅めて本陣を守る。大御所には、豫て廿五日の朝五つ刻に、大坂御出門と仰出されしが、如何なる御思慮にか、此夜俄に茶臼山を御出あり。

一本に、此砌本多正純を召され、當城の總構は勿論、二三の丸に至る迄、寄手の人數を以て破却し、堀の埋め様は、三歳の童子の上り下り致すやうにすべしと仰せられ、御笑ひありけると云々。

本多上野介・成瀬隼人正・安藤帶刀等は、大坂に残れり。さて家康公は、夫より京橋に至らせられ、守口の少し前にて、夜はほのくと明けしかば、牧方に於て朝御膳を召上られ、申の上刻、二條の城に入らせ給へり。是より先、板倉伊賀守勝重は、御迎に出で供奉せり。

記に、大御所、大坂を御出門の前に堀を埋めなば、註進すべしと、度々仰せらるゝ

に付、秋元但馬守馳行きて下知をなし、横幅二間餘にして、足の立つ程に、堀の真中に堤を築き、道一筋附けさせ、則ち御本陣に参り、堀を埋め申候由を言上しければ、御機嫌宜うして、御上洛の時は、乘輿に召され、彼道を御通りあつて、京橋へ出で給へりと云々。

將軍秀忠公には、城破壊の間は御在陣あり。又、今日、織田有樂・大野修理亮・伊東丹後守・青木民部少輔・堀田圖書助・速水甲斐守等、岡山に來り、大樹に御目見す。扨一昨廿三日に、本多上野介正純は、城外に來つて申せしは、總堀を埋め石壁を毀つ儀は、御城中より仰付けらるゝ筈に御座候へども、果しなくして、遠國の人數在陣致す事、甚だ迷惑に存候間、御手傳を申すべしといひ、直に總人數をかけ、何いふ間もなく、ばた／＼と取掛り、終に二三の丸の堀矢倉迄、悉く崩して堀を埋む。此時大野修理亮治長、奉行に對して、初の御契約は、總堀とこそ定められしなれば、僅に東南外郭の堀の事なるを、此の如く二三の丸迄破却して、平地とし給ふ事は、甚だ所以なき儀と制しければ、奉行等答へけるは、兩將軍家も、總堀を破壊すべしと仰付けら

れ候。然れば堀のある限は、埋め申すべしと心得て候。總構の堀とは承らず。殊に幕下と秀頼公は御親戚たり。天下無事の日、御當城内郭の堀を残されん事を欲し給ふ段、不審なきにあらず。客將浪士、再舉の御志ありやと答へければ、修理亮口を閉ぢて、詞なかりけるとなり。

一本、本多上野介、總堀を埋むる奉行として、外堀一重を埋め終り、又内堀を埋むるにより、堀一重の約束なりと、城中より制すれども、耳にも聞入れず。こは如何にと驚き、淀殿より、於玉の方を使として、先づ堀を埋むる事を止めよと言出されければ、正純は、於玉の方に對し、左右とかくの返事をいはず。哀れ美女なるかな。願はくは盃を給はらんといふにより、於玉の方、野州は狂するか、何ぞ無禮なると怒りけれども、猶も徒口を申す故、爲方なく城に歸り爾々と申す。淀殿京都に使を立てられ、成瀬隼人正に就いて、大御所に訟へんとす。成瀬申すは、我等は始より此事を不存候。本多佐渡守御下知を承りて、上野介に申渡し候。正信に就いて達せられよとて、取合はず。使則ち大坂に歸り、佐渡守が宅に至れば、病と稱し對面

せず。彼此と日數を経る間に、堀は残らず埋めたり。其時正信之を見て、驚きたる如くに、愚子壯年なるに由り、何の思慮もなく、斯る粗忽を仕候。老臣折節病みて、此事を詳に承り届けず、後悔今は益なく候。又改めて此堀を掘るは、埋むるより十倍の費に候。既に御和談の上は、再び兵を動かさずとの吉瑞なるべしと申して歸りぬと云々。

大御所參内井池田・酒井・有馬・伊達・片桐等へ

恩賜ある事

同十二月廿六日、二條の城にて、前方、御尋の書物を獻す。所謂、舊事記・古事記・續日本紀・文德實錄・三代實錄・江家次第・明月記・續文粹・菅家文集・西宮記・釋日本紀・内裏記・山槐記・類聚國史・三代格式等なり。同廿七日、土井大炊頭利勝、大坂より來り、坂城破却の事を言上す。大御所聞召され、其上に諸大名三ヶ年の間は、公役を免許あるべき旨を仰出さる。利勝承つて、大坂に赴きけり。

一本に、五萬石以上の大名は、一萬石に付雜兵廿人宛、大坂に残すべし。五萬石以下、其事に及ばずと御内意ありしと云々。

又板倉伊賀守を召され、明日巳刻參内すべし。例の如くに天酌は御無用たるべき由宣ふ。又傳奏衆よりは、明日參内あるべき由申來る。

記に、長柄の輿は、築地の内へ罷成らす。肩輿は長橋の局の前迄、至るべき由の旨ありと云々。

家康參内

同廿八日、家康公參内し給ふ。禁裡へ銀子千枚綿千把、院御所へ銀子百枚綿百把

を獻せらる。女院御所

近衛關白前久公の御女。一本に、暗嗣公とあるは誤か

へ同上。長橋に於て諸卿と御雜談あつ

て、申の刻に還御し給ふ。晚景に及び、院御所より、阿野彈正大弼入來にて、今度一亂早速に鎮められて、參内の御事、叡感淺からざる段を申述べらる。次に來春、年號改元あるべき御沙汰あり。大御所の御受には、只古、善政善教ありし時の年號を用ひられ、然るべしと仰せられけるとぞ聞えし。又伏見殿の御薰物千年菊の方を書寫し給はるべしと仰ありしにより、板倉伊賀守より之を奉れり。扱泉州堺の政所長谷

川左兵衛並に後藤庄三郎より、湊川を船入に致し候はゞ、堺の町繁昌にて、船五百艘程の出入は、自由ならんと言上す。此日池田武藏守利隆の軍功を賞せられ、白銀三千枚を給ふ。酒井讃岐守忠勝へ、下總國に於て、采地三千石を給はる。有馬左衛門佐直純、今越前丸岡城主、五萬石を領す。有馬氏の家系なり。日向國に於て、采地一萬三千石を加賜せらる。同廿九日、廣橋前大納言兼勝卿・西三條前大納言實條卿、目錄七箇條持參あり。其由は、正月・節會・白馬・踏歌・准后親王の位階・官位の次第なりけり。愈古今異議なくば、猶も律令格式を考へての上、駿府へ御相談あるべき旨を仰返さる。其以後、納屋家號伊丹屋宗薰參上す。大御所甚だ御機嫌よく、御物語の次、陸奥守政宗なりは無異なりやと御尋ねあり。格別御懇意の趣なりけり。彼政宗の嫡男伊達遠江守秀宗は、五歳より秀頼公に仕へて、大坂にありし處、慶長五庚子年の亂後、政宗遠慮を廻らし、秀宗を廢し、二男虎菊丸忠宗と諱すを家督とせり。然るを今度豫州宇和島城主富田信濃守信高或は知治が關地十萬三千石を秀宗に給ひ、別に一家を起させ給へり。

或記に、坂崎出羽守此時對馬守と稱す成正が甥に、左門といふ者ありしが、國政を背く事あ

つて、出羽守之を誅せんと欲する處、逐電して行方知れず。然るに富田信濃守が妻は、左門が伯母なり。富田は其頃、勢州津の城主たりしが、其許に至り蟄居す。出羽守之を聞きて、探り求むるに得る事なし。富田は此時伏見に居たりしに、坂崎密に信濃守が家臣を一人質に捕へ、國政を背きたる罪人を、富田は抱へ置く由、頻に家康公へ訟へけれども、御裁判なく、天下の政務は將軍にあり、予が預かるべきにあらず。江府に赴き、將軍に訟ふべき由を、命じ給ふにより、坂崎は是非なく怒を押へ、年月を送りけり。然るに左門は、津の城に隠れ居る事、已に現はるゝにより、高橋左近大夫長行といへる者の許に行きて住せしを、信濃守が妻之を憐み、富田に隠して密書を遣はし、米三百石を左門へ送る。其頃左門と同意して逐電せし出羽守が家人、志を變じ、件の書を盗み、坂崎に授け、吾咎の赦免を乞ひければ、出羽守大に喜び、其罪を許し、其後成正江府に至れり。折節家康公も、江府にましませしが、坂崎及び富田を召され、兩君訟を聞かせ給ふ。老臣等御前に列座す。富田・坂崎互に爭論して數刻に及び、其甲乙を決せず。其時成正、信

濃守が妻の書を取り出し、御前に捧ぐ。富田之を知らずと雖も、其罪遁れ難くして誤となり、本人左門は斬罪せられ、高橋左近大夫も、知行沒收せらる。是去年十月八日の事なりけると云々。

同日片桐市正且元參上して、駿府へ下向すべき旨言上に及ぶ。則ち之を許し給ひ、且采色一萬五千石を加賜せらる。同舍弟主膳正貞隆に五千石を増封せらる。又安藤治右衛門が、信貴野の功を賞し給ひ、五百石を加賜せられしとなり。

記に、此頃武田信玄の家人原田隼人正一本貞胤と諱すとありといふ者ありしが、勝頼滅亡の後、

浪人して居たりしを、越前少將忠直朝臣聞かれ、渠は無雙の剛の者なればとて召抱へられ、黒縄の衆に加へ、軍使とせられしが、城中眞田左衛門佐幸村と舊友なり。今度御和談になりしかば、眞田頻に招きけれども、私として叶ひ難しと、忠直朝臣に伺ひけるに、行きて對面すべしと許されたり。原田隼人正喜びて、眞田が陣屋に至れば、左衛門佐種々に饗應し、往事などを語り、互に袖を沾し、酒宴も終りて幸村が曰、某今度討死を遂ぐべきと思ひし身が、不慮の御和睦となり、今日

迄命を永らへ、二度見參仕ること悦入候。身不肖なれども、一方の太將を承ること、生前の面目、死期の思出と存候。御和睦も一旦の事にて、終に又一戦あらんと推量致したれば、某も一兩年の間に討死せんと思定め、臨終の晴に、あれなる床の上に飾り置きたる鹿の抱角打つたる冑は、某が先祖重代の家寶なるを、父安房守より譲り請ひ候へば、之を着して討死を遂ぐべく候。若此冑を御覽に於ては、某が首と思召され、一遍の御回向に預かるべしと語りける。隼人正聞きて、戦場に赴く身は、誰か生残り申すべきなれば、後れ先立つとも、互に冥途にて再會すべしと笑へり。其後に白川原毛の馬に、白鞍に金を以て六文錢附けたるを曳出させ、自ら騎りて地道を乗り乍ら、今度合戦あらば、城郭は破却せられぬれば、平場の戦なるべし。然れば平野邊に駈出で、東國の大軍に馳合せ、此馬の息の續く程は戦ひ、討死を遂げんと存すれば、一入、此馬祕藏に候とて、馬より下り、又酒宴になり、暮に及び、隼人正は歸りしが、翌年五月七日に、眞田は彼冑を着し、件の馬に乗りて、討死せしこそ哀なれと云々。

扱大御所は、二條に御越年ましゝて、來正月三日には、駿府へ御下向あるべきに定まりける。將軍秀忠公には、猶浪花に御在陣にて、城郭破却の事を仰付けられ、或は非常を戒め給ふとかや。又諸大名其下々に至る迄、寄合ひゝ、茶會或は酒宴をなし、頃日の辛勞を忘れけるとぞ。

大御所二條の城御出門

井御道中御泊々御使者等の事

抑去ぬる慶長五庚子年の秋、濃州關ヶ原の大亂より以來、東風靜にして、人皆弓箭を忘れたるが如くなりしに、去年不慮に大坂の一戰起り、旌旗風に翩翩し、狼烟天を掠め、鯨波地を振はしゝかば、萬民居を安んぜず、財寶を山林に持運びけるが、幾程を経ずして御和陸調ひ、庶民家財雜具を元の如くに返し、憂かりし年も暮行きて、新玉の年立ち、大内の朝拜謹嚴に、武家の儀式も相整ひ、元日には諸大名御旗本の諸士、悉く禮服を着して出仕す。然るに前將軍家康公は、元和元乙卯年正月大三日

家康二條
府を出て駿
府に向ふ

の午の刻過に、二條の城を御出門あつて、江州膳所戸田左門一西が居城に御泊なり。
水野監物忠元は。此所迄供奉せり。或は名古屋迄あり 四日矢橋を御船に乗らせらる。申の刻
水口に御着。松平右衛門大夫以下近臣五六人片山與庵法印、後藤庄三郎供奉す。五
日勢州龜山。六日には四日市一本桑名より御船に召され、尾州名古屋に着せらる。城主
義直卿、大坂に在番故、其臣淵田民部原田右衛門奔走す。夫より御放鷹あり。七日
には參州岡崎。一本名古屋に一日滯座といふ。城主本多豐後守康紀なり。本書に、美濃守康重とあれども誤なるべければ今改之。此所に
入らせられ、中八日御滯座あり。十日將軍の御使番永井信濃守尙政此所へ來り、大
坂本城の外は、二三の曲輪迄悉く崩せり。二の丸堀幅五十間或は四十五六間、其深
き所は水底三四間、淺き所も二間有之候。多勢を以て、矢倉堀多門亭宅迄打破り、石
垣等を崩して埋め候へども、未だ功を終るに至らず候。大概埋め候に於ては、大樹
には來十六七日の頃、御出門あるべき由言上す。同十一日、大坂に於て、岡山の御
陣へ、蜂須賀へ舊冬の功を賞せられ、御感狀並に左文字の御腰物を給ふ。

今度攝州大坂穢多崎並船場之兩所、竭粉骨勵軍忠候條、無比類勳、御感御覺

候。因之賜松平氏者也。

慶長二十年正月十一日 秀忠

松平阿波守殿

其臣稻田修理に、御感狀竝に長光の刀、同九郎兵衛に、御感狀竝に延壽の刀、稻田宗心・林道感到各黃金百兩、山田織部・樋口内藏介に、御感狀竝に時服を給ふ。池田宮内少輔が臣横川治太夫・箕浦玄蕃にも、亦御感狀を賜はりける。十二日、秀忠公の御使佐久間河内守政實・安藤治右衛門正次、岡崎に至り、坂城二の丸の堀、今以て其三分一を埋むるに至らず候故、千貫櫓竝に織田有樂・大野修理が家屋を毀ち、凡て地形の高きを削り、夜を以て日に繼ぎて、相勵まし候旨を言上す。十三日、最上駿河守家親が使坂上紀伊守參向して、駿馬白鳥等を獻する處に、御前に召出され、駿河守心底律儀なる故、江府本城の留守たらしめし由、御懇意の御意を蒙り、其後に退去す。彼家親が江都の宅は、大手御門の外なりしが、假にも歸宅せず、本城に宿衛せり。同十九日に、紀伊守御暇を給はり、且御内書を遣さる。扱大坂には、東國勢猶も彼

地に充滿して、總堀を埋むるにより、先達つてより大野修理亮、御相對と相違の段を申せども、耳にも聞入れず。故に是非なく秀頼公へ申上げけるにより、御使として、岡崎御逗留の中、伊東丹後守・青木民部少輔兩人御下向せり。則ち御前に召出さる。本多上野介或は安藤帶刀披露すと作る。兩使秀頼公の口上を述ぶ。其詞に、去年給はる所の御書付にも、

總搆の堀計り、破却あるべきとの御事なりしに、二三の丸の堀石垣迄破却し給ふは、如何なる御儀に候やと仰遣さる。大御所聞召され、總堀と仰渡さるゝ所に、間違ひて、卒爾の事是非なき所なり。定めて大樹より、昔の如く普請仰付けらるべしと御返答ありけるにより、兩人すべき様なく罷歸れり。此日土井大炊頭利勝も、秀忠公より御機嫌伺として、此所に來りし所に、大御所、堀を埋め候事捗行かざるかと御尋あり。利勝承つて、御前常に御物語の序に、凡そ堀を掘るは易く、埋むるは果てざるものと御諍ありしが、相違無御座候由申上る。同十六日には、參州吉良に着御。此所に亦出入八日御逗留あり。都て御道中舒に御出あるは、大坂の様體を聞召されんが爲なりとぞ。同十八日、將軍の御使青山善四郎重長來る。尾張義直卿駿河頼

宣卿には、一昨十六日京都へ出で給ひ、大樹は明十九日、大坂より伏見の城へ御凱旋あるべし。尤も坂城二三の曲輪迄、大略破却すと雖も、尙又成功を竟らん爲に、本多上野介・安藤對馬守を監使とし、本多美濃守・松平下總守は岡山に残し、松平安房守は、今宮の附城を去つて、伏見の城衛に再び加へらるべき旨を言上す。又此所にまします中に、大樹より御機嫌伺として、井上主計頭正就參向す。其後に成瀬豊後守正武此家系今は絶えたり御使として來る。是は大坂の城破却相濟む由、言上せるなり。

兩將軍家還御の事

正月十九日、將軍秀忠公は、大坂を御出門あつて、伏見の城に入らせらる。廿三日家康公は、參州吉田の松平主殿頭忠利今下野國宇都宮七萬石なりが居城に御入あり。廿四日秀忠公は、二條の城に入御なり。家康公は、遠州中泉に御滯座なり。此日安藤帶刀直次、大坂より京都に來つて、坂城破却の旨、並に豐臣家再び舉兵の企ある由を言上す。同廿七日、秀忠公御參内あり。廿八日京都御出門にて、膳所の城に入らせらる。

秀吉二條
の城に入
る

秀吉參内

一本に、此日備前國より飛檄到來す。去ぬる廿二日、池田左衛門督忠繼頓死す。時に十七歳なり。

同日江州長濱城主内藤豊前守信正、

一本に、紀伊守に作る。父を信成と名乗り、慶長十七年六月、攝六十八にて卒す。今越後國村上城主、五萬九千石を領す、

州尼ヶ崎に至りて、松平主殿頭忠利に代り、

建部三十郎と、暫く代り居たりしと云々、

彼城を守る。三宅越後

守康信

今參州田原の領主一萬二千石を領す、三宅氏の家系なり

息大膳亮康盛、仁賀保兵庫介舉誠等は、城州淀に赴き、

彼舊城を守るべき旨を命ぜらる。廿九日大樹は江州水口、晦日には勢州龜山に着かせらる。

一本、此日秀忠公の御使内藤右衛門督重

〔脱字ア〕ルカ

中泉に參着して、大坂城郭破却の

爲と、並に岡山の附城を守れる大小名、來る四日五日の間に、悉く歸國すべき由を演達す。且大坂城中より、今以て浪人一人も離散せず、再び軍を舉げんと計る由を告げ奉る。依之大御所は、放鷹と稱せられ、日を重ねて當所に御滞留ましまし、大坂の告を待たせ給ふと云々。

二月小朔日、秀忠公勢州桑名に御止宿。二日には尾州宮、三日には同國名古屋に入

らせらる。義直卿は、先達つて歸城せられし故、御響應善盡せり。四日參州岡崎、五日には同國吉田に御止宿なり。賴宣卿は、一日先達つて中泉に到り、大御所に御面謁ありし處、仰に、早速駿府に到り給ひ、將軍を御待あつて、御響應あるべしと宣ふ。六日は遠州濱松、七日辰の刻、中泉に着御なり。御休息後、大御所に御對面あり。本多正信父子・土井利勝伺候す。將軍の近臣七十餘輩、一人宛出でて拜謁す。午の刻中泉を發し給ひ、掛川城藤枝の南にあり〔此間脱字〕此時御番城なり〔アルカ〕此日板倉より羽書來りて、池田輝政卿の後室良正院殿、痘瘡を患へて、四日死去の由註進す。

一本に、良正院殿は、家康公に御目見えあらん爲に、先達つてより、京都に逗留せらる。則ち京師に於て卒去なり。良正院殿に賜はる處の攝州米粟六萬八千石は、

忠雄の弟石見守輝澄に賜はると云々。此家系今は絶えたり。

同廿日秀忠公は、御朦中故、駿府の城に入り給はず、清水の旅館に到らせ給へり。

十日大御所は、中泉を發し給ひ、遠州相良今掛川より六里計ありに着御なり。十一日甚雨により

御滯座。十二日田中の城に入らせられ、翌日御滯留あつて、十四日駿府の本城へ入

秀吉江戸
到着

らせ給へり。秀忠公は、十六日に、江城に歸らせ給へり。

記に、秀忠公は、三日に岡崎、四日吉田、五日濱松、六日掛川、七日田中御止宿。駿府へ御立寄りあるべきかとして、種々用意あれども、田中より直に清水へ御通あつて、中泉に着かせ給へり。成瀬豊後守此所に來れり。翌九日、外様の面々駿府に歸る。中泉に三日御滞留あつて、兩將軍家御一座にて、御鷹の鳥料理あり。本多佐渡守正信御相伴に候す。又秀忠公供奉の面々は、此所に於て大御所に拜謁す。其後仰出さるゝは、御鷹野の御供に出でざる面々は、早く駿府に歸るべしとの事なり。家康公は、夫より田中に御逗留あり。秀忠公は、十六日江戸に着御あり。家康公は、廿八日駿府に御歸陣ありと云々。

東國の輩士農工商、共に萬歳を唱へける。將軍家の御簾中は、御和睦の事を聞召され、喜ばせ給ふ事、限なしとぞ聞えける。

記に、觀世・今春・金剛・保生四座の面々、御前に於て御能を仰付けられ、諸大名見物す。又幸若八郎九郎も、御前にて舞をなす。其美曲なる事、聞く人感を催せり。

抑、幸若太夫といふは、越中國の守護職桃井播磨守直常が末葉なり。彼直常は、元弘建武の大亂に、足利尊氏卿の手に屬し、度々武勇を現はし、軍忠を盡しけれども、させる恩賞もなかりければ之を恨み、後は宮方となつて、新田義貞に謀じ合せ、度々合戦して、能登・越前・越中三州の主となりし處、天運至らざるにや、何となく衰微して、直常死去の後、子孫は浪々の身となり、故郷の安堵叶ひ難く、諸國に分散せり。其中に幸若丸といへる兒一人、叡山に登り、光林坊に入りて學問せり。此兒音曲に器用にて、雙紙に節を附け、謠舞其面白き事感に堪へたり。其子孫相續いて彼業をなし、舞太夫となる。故に元祖の名を取りて名字とし、幸若太夫と稱せり。又若松二郎經家が末葉に、幸若丸といふ者も、其頃ありて舞をなせり。今に至り、桃井・岩松の兩氏族の、舞太夫となりたるこそ哀れなれと云々。

或本に、舞を舞ふ者の傳に、幸若與太夫といふは、清和源氏の末流岩松二郎經家が後なり。與太夫が父蜂屋といふ者、安祥殿・岡崎殿二代に仕へ奉り、度々の高名を顯はし、近習に召仕はる。心や狂しけん、岡崎殿を討ち參らせんとして

誅せられぬ。人其故を知らず。其子與太夫、此年生れて襁褓むつきにあり。岡崎殿不便にや思されけん、蜂屋は、我に仕へて終に二心なし。今何の故あつてか、我を失はんと思ふべき。狂氣の至り疑ふべからず。されば彼が年頃の奉公に怵へて、其子が命を扶くべし。只成人の後に、法師になすべしと仰ありて、針崎の正満寺に預けらる。是妻帯の寺なるに依つて、住持の僧にせんも不便なりとて、幸若が弟子になし、舞を習はしむ。家康の御時に、針崎を始めとして、寺院悉くに背く。針崎にて人となりしかば、其恩は深しと雖も、寺を去つて味方に参り、度々の戦忠を致す。秀忠公・家光公、此由を知召され、與太夫が子與三太夫を、御咄の衆の末に召出され、舞ひ舞ふ事をも許させ給ふべかりしに、程なく薨じさせ給ひしかば、其事も止みぬと云々。

同月廿三日、一本に廿八日井伊掃部頭直孝を駿府に召され、其方兄右近大夫、常々病氣にして其任に堪へず、父兵部大輔が家督を、直孝相續すべき由を仰せらる。掃部頭拜辭して、兄弟の倫を亂し、弟として家を繼ぐ事、不義の至りなる由、安藤帶刀を以て、

再三之を固辭すと雖も、上意已に決して許し給はず。終に台命に従ふ。依之直孝が領地上州安中の采地三萬石を分ち、兄直勝に給はり、掃部頭を、江州彦根の城主とし、廿萬石を賜はりける。

或本に、井伊掃部頭を召され、兄直勝に代つて、彦根の城主になされんとありければ、直孝涙を流して、兄にて候直勝、年頃病に冒され、關東の勤めに堪へず。然りとは申せども、大御所、昔、父にて候侍從に附けさせ給ふ古き者共、猶多く候へば、家の事を沙汰し申すべし。又直孝斯くて候上は、天下の御事あらんには、兄が代官として、彼の手の者を引具し、馳せ向ひ候はん事、今般の如くにこそ候べけれ。如何なる仰にても、兄にて候者を退け、父が家を繼がんこと、望む所に候はずと辭し申しけれども、御免なければ、重ねて安藤帶刀に付いて、頻に歎き申しけれども、終に御免なかりけり。斯くて佐渡守が座の頭に就く。其體誠に優なり。事終つて後に、御前を罷立ちて正信に向ひ、今日の振舞、無禮にこそ侍れ。御免あれといふ。佐渡守、さればこそ今日の御舉動、正信は喜びて候へ。斯くあ

らんと思召されし將軍家の御心の程、有難しと答へけり。之を見し人、打寄り打寄り、昨日迄も大番頭として、僚の末座に伺候せし人、今日は一龍の上に立ちし有様、優に見えしとぞ申してけり。

白石先生曰、政事録に、慶長十九年十一月廿四日、將軍家、直孝に澤山の城を給ふとあり。家忠日記に、元和元年二月、大御所、直孝を駿府に召して、此仰ありといふ。思ふに政事録の記す所は誤るべからず。

記に、去ぬる十五日、木村長門守重成は、去冬今福に於て高名せし者へ、或は刀或は金銀を遣しける。又秀頼公よりも、舊冬の武功ある者に、御感狀又は金銀を給はりければ、各頂戴して退出せり。同廿八日、木村長門守を召され、去年今福に於て、東國の猛勢を追靡けしこと、日本無雙の勇士といふべし。このゆゑ以に御感狀竝に正宗の脇差を給はる由仰渡さる。長門守謹んで頂戴し、扨御前に差置き、舊冬今福合戰の事、聊か武勇にあらず。御預の軍士竝に手の郎等が、身命を捨て、相戰ふ故に、利を得候ひき。殊に大野修理亮後藤又兵衛七組の番頭、各粉骨を盡しけ

るにより、今福嶋野の兩所、味方利を得候。如何ぞ某一人が高名とせん。又感狀の事、臣が心に應せず。今度に於ては、兩種共に、恐れ乍ら御藏に預け置き奉るべし。凡そ感狀は、他家に仕へんと思ふ時に、戦功を顯はし眉目に充つ。愚臣に於ては、二君に仕ふべき由縁の者にあらねば、毛頭其望なし。君御運を開き給ふ時は、御前に於ての合戦なれば、御感狀に及ぶべからず候。萬一御果報拙くましましても、黄泉の御先手を承るべき身なれば、閻魔の廳の訟にせんより外は無之。然れば恐れ乍ら返上仕るべしと申しければ、秀頼公を始め、聞く者木村が實を感じけると云々。

或説に、城中に於て戦功ある輩、嶋野今福兩口、其外手に合ひたる者、面々の頭を以て、御感狀を望むと雖も、秀頼公は、關東へ御遠慮あつて下されざりける。其内に、夜討廿三人の高名、四人の鎧に褒美あり。嶋野口にても、杉森市兵衛と相良罕人兩人へ御褒美を給はりぬ。又木村が申すは、今福合戦の日は前方なれば、我等組へ先づ御感狀を給はり候様にと言上す。大野主馬介は、某が組の相手へ

は、兩御所より御感狀下されたる由なれば、萬事を差置き、組下へ給はり候へと申すに付、兩方共御延引あるにより、長門守は、假の感狀を出せし處、人によりて請けざるものもありける。又後藤又兵衛は、今度の様なる小迫合に、御感狀相願ひ候事、罷成らずと申しけると云々。此説、是なるべきや。

大野主馬介軍議并大坂の使者駿府に到る事

城兵小幡勘兵衛景憲は、此頃江州へ赴くと稱し、大坂を拔出でて、密に伏見の城代松平隱岐守が家人酒井三右衛門と、所司代板倉伊賀守が家來金子内記に談じて曰、豊臣家の再舉發覺せば、兩大臣御發向あるべし。然れども坂東の大軍、長途を経る事日を重ぬれば、今度は先の失策に懲りて、敵、兵を洛陽に發し、勢田の橋を引かんことこそ一大事なるべけれ。何とぞ貴殿智辯を以て、五十日之を延さるべしと申せば、景憲之を肯んじ、然らば淀・大渡に木戸を作り、番兵を設け、石山寺・宇治・鹿飛邊の間道、又勢多の橋の西より、東に赴く所の左に、和州より出づる小逕あり。委曲に

僉議あるべし。城兵は右の間道を経て、膳所・大津へ働くべしとの内談あり。且兩御所再び御入洛の路次、御旅館の井戸毎に蓋をなし、急度守兵を備へらるべし。大坂に於て、密に毒藥を井中に入れんと企つ。又伏見・洛陽共に用心の色を顯はし、近兩御所御上洛の體を、敵に知らしめ給はん御計略第一なるべし。其所以は、城兵、外には、大御所を侮る色目を見ずと雖も、心裡に恐れ慄く事は甚し、御出馬と聞かば、忽ちに色を失ふべしと、機密の事共談じ合せ、景憲重ねて曰、大坂より書牒を以て、註進すべしと雖も、道にて奪はるべき恐あり。往事を以て、敵の謀略を知り給ふべしと申して、三月大十一日、大坂に歸れり。

或本に曰、小幡家記に、大野主馬は、燒殘りたる平野町の市店を繕ひ、景憲を入置き、自己の水軍の長、橋本彌右衛門方より、朝夕の食物を調へ送らしむ。又來月よりは、毎月扶持米卅石宛、授くべしと申せしと云々。

今夜主馬介が營にて、景憲と軍議をなし、同十二日の夜、治房が宅に於て、小幡勘兵衛・景憲・新宮若狹介・行朝・岡部大學行綱・布施左馬助・武藤丹波・吉川權右衛門等出會し

て軍議をなす。時に新宮行朝進み出でて曰、大御所進發の日數を計るに、奥羽の勢を催さるゝの用意、凡そ十日計り、又彼勢共、國々より江府へ到着する間、凡そ十五日、江府に勢揃の日數、亦十日計り、其上京着迄の間十五日、彼此五十日を経る間に、御當^{〔家ヲ入ルベキカ〕}より洛陽を取固め、勢田の橋を刎ね、國限の迫合に光陰を送るべし。其中には大小名心を變じ、味方に屬する者あつて、御當家御利運必定たるべしと演べければ、小幡勘兵衛頭を振つて、抑天正十二年四月、徳川、家尾州長久手に於て大なる勝軍あり。依^レ之、故太閤、瀧川將監一益を、蟹江の城に加へ給ふ。其時の仰に、東海道之士風は、向上にして手重ければ、家康急に出馬はすべからずと測りしに、思の外其告を聞くと等しく、井伊直政等と唯三騎、速に馳向ひ、瀧川勢の半を、蟹江の城に入れやらす、其間を乗切る。依つて瀧川の後軍は、暫く擬議し控へる所を、一二町後馳^{おくしほせ}なる徳川の勇士等、瀧川勢に追番ひ、忽ち城を落させたりと宣ひぬ。此事よくも上世に知れり。況や今度大切の場所に中りて、いかで油斷あるべきや。故太閤御取立の諸將などは、若しや返忠すまじきにもあらずと遠慮して、むざ／＼と引

率せらるまじ。其所は綿密にして、裏釘返す大將なり。察するに此度は、徳川家譜代の勢計を以て、急に發向あるべしと申せば、新宮重ねて、關東譜代の勢、目に餘る程の多勢とも思はれず。其上、前將軍は客齋にして、士卒飢に及ぶと沙汰す。然れば奥羽・北國、又は藤堂などが勢を除きて、如何ぞはかゝしき合戦なるべきやと申せば、小幡又陳じて、關東譜代の持分、近江・美濃・伊勢・尾張・越前・越後・佐渡・三河・遠江・伊豆・駿河・甲斐・信濃・坂東八州、共に廿一箇國の大小廣狹平均して、一ヶ國八千宛にて、十六萬計なり。其軍勢を四分一、國郡に残すとも、十萬に越ゆべし。其内五萬は、關東に叛逆の輩あらん事を恐れ、將軍に屬して武陽に残し、前將軍は、五萬の勢を引具して上洛あるべし。夫に勢田の橋を刎ねたりとも、元來、彼近邊の地理をよく知る事なれば、決して坂本に陣を移して軍あるべし。其刻、味方の勢は、何方に屯すべきや。新宮答へて、志賀・辛崎に屯し、上方に柵をふり、大津の米穀を以て糧食とせん。景憲又曰、然らば東國勢、叡山の後なる山中越に出で、帝都に亂入せん頃、前田・藤堂が勢馳登つて手合せば、如何して戦はるべきや。新宮答へて、いふにや及

ぶ、彼坂を登る所を、後より打立つべしといへば、小幡冷笑ひて曰、志賀・幸崎の狭き所に、味方の大軍、何と陣せらるべきや。關東勢は、山の半腹、或は山王・八王子・山中越に、便ある嶺々に、一備づつ陣所を設け、過半は京に到り、兵馬の勞を休むべし。其時味方京に押入らんとせば、東國勢は陣所を上げ、浸々と山岳の間へ味方を入れ、高みより落しかけ、矢石を以て横に撃たば、味方は卑きより高きに望む故、突蒐に自由ならず。恰も北條家の先手武田信玄の爲に、三増峠にて敗北せしが如くなるべし。總じて彼老功大將の軍旅、始めは異なる様なれども、畢竟する所は、信玄の仕方に違はず。是を以て後詰の戰に及ぶ時は、勝利を全うするの備肝要なり。其備といふは、柔兵を去て剛兵を抱へるに過ぐべからず。籠城の一つの利には、女童容貌外へ見えざる故、塀矢倉の内より放つ鐵炮玉藥の得にて、寄手恐れ退く。平場の軍は之に異なり、其備の厚薄兵の弱強にて、勝敗明かに分る。然れば去年以來、籠城する銀細工の拙輩桶結の下手などが、事々しき姓名を偽り居る者を選んで追却し、猛士銳卒を召抱へられんこそ、第一なるべけれと申せば、是城中無勢にならしめん謀なりと、岡部大

學が曰、仰の如き手遠き軍議よりも、今にては洛陽の所司代を攻亡す事、最第一の評議なり。時に景憲、伏見の城は如何すべしといへば、大野治房答へて曰、伏見に於ては、只今にても印章を給はると其儘出張し、之を壓おさふる大名あり。依つて彼城は有れども無きが如し。其上打つて出づる敵にあらずと申せば、小幡、大野に向ひ、當二月以來、伏見の城には、關東より掟あつて、一切出づべからざる由なり。然れども井伊を以て、援將とせらるゝ聞えあり。彼井伊が父は、天下無雙の英雄にて、故太閤にも、赤鬼と稱美し給ふ。然れども勇なるに任せて、剛強に失せし者とも謂つべし。其二男掃部頭、當年廿六歳なれども、勇敢は父に等しく、奇正變化、十度二十度の武功ある者よりは、甚だ優れたり。殊に彼家には、武田家の山縣・一條原・土屋四組に、關ヶ原浪人の譽ある者を選び、父兵部へ、前將軍より附屬せらるゝ、孕石備前・脇坂五右衛門・三浦與右衛門・庵原助右衛門・海老江庄右衛門・三浦重右衛門・長坂十左衛門・長野民部・早川彌三右衛門、中老軍配者に岡本半助あり。此の如く武者鍛鍊なる兵は、上杉・島津兩家の外に、一人も持ちたる諸侯はあるべからず。殊に

去冬以來、掃部頭が采配、父に優れて向上なりと舌を振ふ輩、密に洛外醍醐・山科の郷里に五六人づつ、葛籠に鎧指物等を入置き散在して、主君の代替に、一忠節勵まさんと欲する由を聞けり。然れば誰人か伏見の壓に向ふと聞かば、刹那の間に來

り、大手治部少輔・曲輪武者溜などに屯して、大略三千計の人数もあるべし。此勢他家の三萬にも超え、晝は斥候を出して、足輕迫合を仕掛け、味方の兵糧運送を絶ち、或は味方より夜懸朝込の働をなし、又は亂妨放火をなすと見ば、間諜斥候武略を盡し、之を見切つて半途を撃ち、又大敵と見ては、弱兵と見せて引懸け、夫に乘らざる味方の勢には、敵より仕懸け、味方の大軍之を追返さば、豫て地利を計り、古屋敷・湊溝のある處を取堅め、日夜に味方を悩ます内に、彦根の朋勢上着すべし。兎角伏見の壓の將に、御前の御墨付を給はる事を、姑く延引あつて、只軍を鍛鍊し謀を決し、出軍の宵に、御墨付を、壓の將に贈られて然るべしといへば、主馬介は之を承引せり。新宮・岡部は、心服せずと雖も、當分の理にいひ負けて、各手段を空しくせり。扱京都よりは、先達つて駿武の兩城へ、飛檄追々到來し、豊臣家再び反逆を企

て、大坂に於て米大豆を買調へ城中へ取入れ、舊冬以來埋め候堀の土を上げ、淺き處は腰長、深き所は己に肩を越す計りになり、且つ京都を頓て焼拂ふべしとの風説、頻の由を言上す。同十五日、重ねて板倉伊賀守勝重より羽書到來し、大坂再舉の企頻にして、諸州の浪人を招き集めらる。故に亡命落魄はいふに及ばず、郷民野武士等悉く馳集る事、雲霞の如しと申來る。同日大坂より御使として、青木民部少輔竝に大藏卿局・二位局三人駿府に來る。其後御前に召出されし處に、先づ以て御機嫌の事を賀し奉り、次に去年の兵亂に、攝河兩國の百姓共退轉し、一圓に所務なし。此故に大坂にて給ふべき知行なく候間、仰付けらるべき由を言上す。時に大御所、予は隱居の身なれば、江戸表へ下り、大樹へ申上げよ。定めて其御心得もあるべしとの上意により、民部少輔は江府へ赴けり。又二女には、尾張宰相婚禮に付、予は彼所へ行くべし。幸の折なれば、尾州へ隨ひ來るべしと、御懇意格別の上意により、大藏卿局・二位局は、有難く御受を申して、駿府に止れり。

別記に、大藏卿局・二位局は、四月三日駿府を發す。同十二日戌刻、尾張宰相殿の

簾中、熱田より御入興ありしと云々。

或記に、淺野紀伊守幸長之女、尾張宰相義直卿に嫁す。則ち今年四月二日、御婚禮ありしと云々。

小幡勘兵衛浪速を退く附神踊停止の事

三月十六日、板倉内膳正京都より歸參し、豐臣家の召に應じ、浪人十五萬人計り相集むるの風説ある由を言上す。

或本に、小幡家記に曰、同日卯の刻、勘兵衛は、大野主馬が許に至り、治房並に布施左馬助・新宮若狹・岡部大學・吉川權右衛門・日蓮宗の墮落隨雲院等に會す。時に主馬介、忍の達人を駿府に遣し、城中閨房の床下に入置きて、大御所を刺すべきかと申せば、景憲答へて、婦女の居所は、庭より上り易かるべき爲に、床殊に卑ければ、其事成るべからずといひける。主馬介之を信用すと云々。

同十七日、去冬より大坂に在陣せし伊達陸奥守政宗、駿府に下向せり。同十八日、土井大炊頭利勝駿府に來る。將軍より密旨ありといへり。同日大野主馬介は、小幡勘兵衛こと、關東より謀者たる事を漏聞きて、治房が家臣橋本彌右衛門を以て、小

幡が許に遣し、其體を窺はせ、直に誅すべしとの次第なりしが、景憲聊か驚動の趣なく、小鼓を取出し、謠曲して樂めり。同日申の刻、景憲を主馬が館に招く所、其使と共に、奴僕一人を召連れ來りければ、岡部大學・武藤丹波・隨雲院出向ひ、妙心寺の爾長老竝に弟子佐藤主が贈る書束あり。其詞に、小幡勘兵衛といへる浪人、東武の間者たり。大坂にては、先月江州へ下向する由を披露して、廿四日伏見に來り、松平隱岐守へ、密書を悉く演説し、同廿八日、大坂に歸る由を載せたり。景憲に此書を見せて、色々三人にて問説す。時に景憲、某が往返の日限相違す。察する處板倉伊賀守、佐藏主に此狀を書かせ某を疑はせ、殺さんと計るかといひて、少しも動せず、一々申開きければ、三人其旨を主馬に達しけり。實は小幡、從者を市中に残して、伏見の腰曲口酒井三右衛門が宅に潛居し、當十一日、大坂に歸りて主馬に對面せり。彼妙心寺の僧徒は、往來の實を知らずして日限相違せり。是に於て虎尾を蹈むの憂を遁れて、又治房が、小幡の計略に陥りける。其仔細を尋ぬるに、一昨十六日、景憲に騎士五十人を附屬し、勘兵衛が家來杉山八藏・村上庄治郎に、弓銃の卒三百人を組

となし、軍功を立てさせんと思ひ、秀頼公の命を傳へて、舊好所縁の勇士輕卒を召抱ふべしとあつて、小幡に黄金二百枚を授けんとするに、固く辭して曰、某が候は、大將に當るべからず。唯軍鑑斥候を職分とし、戰の道を三軍に施すべきなり。然る上は、臣が隨兵村上杉山、共に十四五騎輕卒百人を以て、已に事足れり。先づ以て天下一統する迄は、貴殿の臣に等しかるべしとて黄金を返し、又昨十七日には、小鼓を鳴らし、泰然として驚き恐るゝ體なく、今日は奴僕一人にて、速に治房が宅に來り、愈動轉せざるを以て、主馬介竝に武田榮翁等も疑を散じ、景憲に盟を遂げさせ酒宴して、足下當時の旅宿、長く住すべき所にあらず。治房が領内に營作して、彦根の老母を移し質とせば、反間の妄説も起るべからず。普請終る迄、堺の津に住すべしといへるにより、勤兵衛は幸に危難を遁れ、早々堺に赴けり。

一説、泰平の後に、爾長老より、小幡が事を大野に告げたるを、大御所深く憎ませられ、渠等を捕へしめ給はんとす。然るに佐藤主は、今年四月下旬に、病死しける由聞えたり。景憲元より浮屠を信じ、且武田信玄は希庵和尚を殺し、其年より

齒瘡といへる病を患へて、翌年逝去せられ、織田信長公は、甲陽の快川和尚を焼殺し、百日の内に弑せられ給ひし事を思出して、景憲がいへるは、佐藤主已に歿する上は、爾長老を助けらるべきかと、板倉伊賀守へ申しければ、小幡勘兵衛が、戦鬪の世に生れ乍ら其慈愛あり。殊に例を推して、大御所の興福を願ふ志を感じ、遂に爾長老・佐藤主、共に死亡する由を言上せりと云々。

同廿五日景憲は、堺の津より再び大坂に來り、大野治房に謁せし所、明後廿七日、彼領内に移り住居すべしと約する故、是迄は目附二人を差置きし處、治房愈疑を散じ之を止む。是に於いて勘兵衛は、其夜京極備前守が従者の許に宿し、曉天を待つて堺へ歸り、同廿六日の夜半の頃に、家僕は陸地より尼ヶ崎へ遣し、小幡は堺の津を船出し、同廿八日午の刻伏見に着し、城代松平隱岐守定勝に、大坂の謀を悉く洩れ達し、夫より南都に赴きけり。其後大坂より、奈良へ討手を遣す聞えありし故に、定勝下知して、坂本に移らしめたり。又去ぬる頃、神踊といふ事、上方より流行して、諸人風流を盡しけるを、大御所、彦坂九兵衛に仰付けられ、同三十日、堅く之を

禁せられたり。

一本、今年三月廿五日、駿府に於て伊勢踊と號け、諸人風流を盡す。同三十日、此踊頻にして、禰宜共大神宮の飛去り給ふ由をいひはやらせ、唐人を頼み花火を飛ばす。依之御禁制仰付けられしと云々。

或記に、一本廿一日頃日井伊掃部頭・本多美濃守・松平下總守、近江・伊勢の國士を率ゐて上洛し、東寺に屯し、藤堂は淀の舊城に據つて、大渡の橋際に柵門を構へ、往來を糾すべき旨を命ぜらる。泉州岸和田城主小出大和守吉英よしよさへ援兵として、同伊賀守吉親・金森出雲守可重・伊藤掃部助治時を遣し給ふ。其外諸國へ、老臣より奉書を以て、大小名出馬の用意して、駿・武に參向し、或は直に大坂へ向ふべき旨を告げらるゝと云々。

城主錄に、當時淀の城は、元和九癸亥年、台命によつて築けりと云々。

家康公御出陣附大野治長難に遭ふ事

四月大朔日、執筆^{〔政カ〕}の輩、畿内の大小名へ廻文す。其詞に、

急度申入候。大坂より落人の男女、幼稚の者に不限召搦、可被差上候。若隱置人於有之者、曲事に可被仰付候間、可被入御念儀肝要に存候。恐々謹言。

四月朔日

土井大炊頭

酒井雅樂頭

或記に、供奉の次第、一番、酒井左衛門尉家次が組松平甲斐守忠良・山内對馬守^本

^{に豐}前守忠豐・小笠原若狹守^{一本に右}

政信・水谷伊勢守勝隆・仙石兵部少輔忠政^{本書に}・仙石

大和守久隆・相馬大膳亮利胤^{本書}・二番、本多出雲守忠朝が組眞田河内守信吉・秋田

城之介實季・淺野采女正長重^{本書}・松下石見守重綱・六郷兵庫頭政乗・植村主膳正康

明・須賀攝津守勝政^{一本}

^{忠政}・三番、榊原遠江守康勝が組松平丹波守康長・小笠原兵部少

輔秀政・諏訪出雲守忠恒・保科肥後守正光・成田左衛門佐長忠・北條出羽守氏重・丹

波五郎左衛門尉長重・藤田能登守信吉^{一本}

^{信芳}・四番、土井大炊頭利勝が組堀美作守親

吉・佐久間備前守安政・佐久間大膳亮勝之・谷大學頭衛政・北條久太郎氏利・由良信

濃守貞繁・溝口伊豆守宣政。本書重政。五番、酒井雅樂頭忠世が組、牧野駿河守忠成・鳥井土

佐守成次・新莊主殿直好・杉原伯耆守長房・細川玄蕃頭興元・土方掃部助雄豐・稻垣

平右衛門重辰・脇坂主水正安信。以上五組の面々、旅行程を倍し、急に上京して、

將軍家の御着陣を待ち受くべき條、驛路にても段々令を傳へ、相違あるべからざる旨、江府より、御使番近藤右衛門尉用政もちまさを登せらると云々。

同二日、片桐市正且元は、本國茨木より、駿府に來つて登城す。さる程に大御所は、尾張へ御越あらんと、同四日駿府を立たせ給ふ。麾下の兵五百餘騎なり。舊冬の如く水戸鶴千代君の御留守たり。今日申の刻、大御所は田中の城に着御、五日懸川に御止宿なり。

一本に、今日大坂より此所迄、大野修理亮竝に常高院禪尼より、一書を以て申す。其趣には、秀頼公郡山へ御立退き候様に仰下され候へども、何とぞ此儀は御恩免を蒙り申度由を、吳々歎き訟へけり。大御所聞召されて、是非なき旨を仰ありけりと云々。

同日伏見の町奉行長田喜兵衛方より、大坂に於ては、再び叛逆の色を顯され、伏見の市中迄騒動する由を註進す。永井右近大夫直勝之を披露せり。同六日、中原の旅營に御止宿あり。秀忠公よりは、板倉周防守重宗並に伊丹喜之介・鎮目市左衛門等を附けられ、御容體を伺はしめ給ふ。又東海道の諸將は、淀・鳥羽迄兵を率ゐて參るべき旨、本多上野介正純、奉書を以て之を告ぐ。七日は吉田、八日岡崎、九日名古屋へ御着あつて、徳川家の功臣平岩主計頭親吉親吉は、家康公の御子仙千代君を養子とせし所、早世にて、義眞御遺蹟を繼ぎ給へりが舊館にて御滯座あり。此日或は十三日ともいへり大坂に於ては、大野兄弟・木村・渡邊・薄田等列座し、客將の長曾我部・眞田・毛利・後藤を招き、秀頼公の御前に於て軍議をなす處に、眞田左衛門佐進み出でて曰、御當所は要樞の名城たるを以て、去冬の籠城は堅固たりしかども、今已に本城の外は壘壁なく、且味方へ志を通ずる諸侯更に之なし。剩へ豫てより返忠を約諾し、恩賞の御直書を受けし族も、今度は此四人が許へ、彼御書を返し送る上は、君には早く御入洛あつて、參内を遂げられ、伏見の城は、毛利・豊前・守・渡邊・内藏・介並に七組の兵、彼此五千計を以て壓へ置き、總軍宇治・勢多に向つて

橋を刎ね、志賀・辛崎の邊にて、對陣するに於ては、味方に加はる族も出で來り、御開運に及ぶべしと、頻に勧め奉れば、長曾我部・後藤なども、之に同ずと雖も、大野治長は、諸將の中より、關東へ通する事を疑へるか、又は城中の空虚になるを臆せるか、此儀を容れざるにより、眞田重ねて曰、味方洛陽を取敷き、江州の地へ押出すならば、多勢には變ある習なれば、關東方、必ず其禍蕭牆の内に生せん。然るに安閑として、壘湟敗壞の地に籠り、大敵を引受け居ながら、滅亡を取り給ふべき事如何ぞやと、再三苦々しく諫め申したり。秀頼公、一期の安危、爰に極まる時と雖も、御幼年より華奢風流を事とし、軍事に馴れ給はねば、如何して良からんと思召しけるにや、一言の御應對もなく、元より大野修理亮不承引たるにより、客將各眉を顰めて退きける。玆に於て七組の隊長等が申すは、御當所は、東方に深泥、西方に海あり。北方は川を帶とすれば、必定關東勢は、南の方より攻め來らん。今已に壘壁無ければ、十萬の勢を兩翼とし、郊外に出でて、兩將軍の旌旗至らば、眞鷲に懸り、戰を一時に決せん。彼東軍は、猛勢を頼みとし、死を必すとすべからず。味方は

窮兵なれば、萬一を僥倖として、勝利を得んといひければ、秀頼公悦び給ひて、太閤の金の切裂の御指物を免許ありし。水原町司を兼る・布施屋飛驒守並に經營の吏長等を召寄せられ、天王寺表の高低を平均し、井溝を埋め、戰場となすべき旨を仰含められる。扱大野治長は、殿中の評定終り、夜に至りて宿所に歸らんと思ひ、樓門の外迄來りし所、何者とも知らず、修理亮を一刀刺して、東に向ひ逃げ走る。治長聲掛け、狼藉者逃さじと、刀を抜いて追懸くる。淺手と雖も手を負ひければ、歩行心に任せぬ故に、郎等山岡久右衛門之を見て、透さず脇道を走り抜けて、彼者に出合ひ、一刀斬付けゝる。狼藉者も、叶はじと思ひけん、取つて返し、本道指して逃行きけり。又治長は、平山内匠といへる者に助けられ、跡を慕うて追來りし所、彼者にはたと行逢ひしかば、平山得たり賢しと斬倒せば、修理亮も聲をかけ、二刀刺したり。扱彼死骸を吟味せしが、誰れ見知りたる者もなき所に、翌十日、大野主馬介が組の成田勘兵衛が忍の者に、服部平七一本に中村權介或は今倉孫治郎ともありといへる者なりと申すにより、主馬介が亭に、彼勘兵衛を呼寄せ擒にし、糺明せんとしける所に、成田は我家に

立歸り、火を放つて死しけるにより、遂に其故は知れざりけり。同十一日尾州にては、大御所の御前へ、大藏卿局二位局を召され、右府諸浪人を集め、再舉の企頻にして、洛中を放火せんとせらるゝの由を風説す。依之人心恐懼して安からず。予不日に上京し、大坂の實否を糺すべし。第一、舊冬和睦以後は、早速諸浪人の扶持を放たるべき所に、却て數多召抱へられたる由、何の用ぞや。大坂の勝手彌不自由たるべし。若し世上流布の趣、全く由なき事ならば、一旦和州郡山へ御移りあるべし。其内に大坂破壊の堀石垣は、大樹より御普請もあらんとの上意により、大坂の二女は名古屋を發せり。

記に、三月五日、大坂より御使として、伊東丹後守竝に大藏卿局二位局正榮尼の四人、駿府に來つて、御家人に給はるべき采地の事を申せしに、家康公聞召され、尾張宰相婚禮に付きて、名古屋へ行くの間、三女も、幸の事なれば來るべし。東國の女は、諸事不調法なれば、名古屋に參り、宰相の母竝に成瀬隼人・竹腰山城守等に談じ、遠慮なく祝言の沙汰すべし。丹後守は先に罷歸るべし。予も様體により、

尾州より直に上洛し、攝河の百姓等穿鑿の上にて、申付けんと仰せられ、御暇を給はり、大御所名古屋を發し給ふ日に、伊東丹後守又來るとあり。

扱去ぬる正月廿六日、織田有樂が使者村田吉藏駿府に參向し、有樂父子大坂城中を退きて、洛中に閑居せん事を願ひし處、大御所之を許し給ひしが、今日有樂名古屋に參り、大坂には、諸軍を三部に分ち、七組の頭並に後藤又兵衛一部となり、大野修理亮之を領し、眞田左衛門佐・渡邊内藏助・明石掃部助一部となり、木村長門守之を領し、長曾我部宮内少輔・毛利豐前守・仙石宗也一部となり、大野主馬介之を領する由を言上す。

或記に、去ぬる正月、織田左門賴長、大坂城中總軍の指揮を望みし處に、衆議區々にて、其事を果さず。依之、某も御家門の事なれば、指揮仕るまじき者にあらず。然るを其甲斐なく、籠城しては益なしといひ、大坂を立退き、京都に隱居せしと云々。

賴長の墓は、京東山左阿彌にありと。

或曰、左阿彌以前は、良阿彌又貞阿彌ともいへりと。

將軍御動座附大坂より大御所へ御返答の事

四月十日、將軍秀忠公は、麾下の兵三百騎を率ゐて御首途あり。

或記に、御旗奉行は、三枝平右衛門昌吉

後に土佐守

屋代越中守勝永

一本に島田清兵衛重次といふ。

御鍵奉

行には、米津梅干之介康勝・小林勝之介正次・多門縫殿之介信清・永田善左衛門重

利。

一本に小坂新介勝吉・小宮山又七郎二人に作る。

大番頭、阿部備中守正次・高木主水正次。御書院番頭は、

青山伯耆守忠俊・水野隼人正忠清・松平越中守定綱。花畑番頭は、水野監物忠元・井

上主計頭正就・成瀬豊後守正武。持弓頭は、青山善四郎重長。總弓鐵炮頭は、近藤

登之介秀用・久永源兵衛重頼・本多太郎左衛門・山角亦兵衛正勝・加藤喜介正次・森

川金右衛門氏信・細井金兵衛勝吉・布施孫兵衛重次・駒木根右近利政・兼松源兵衛正

成・倉橋内匠久次。

御使番、

中山勘解由昭守・村瀬左馬助重治

一本守政

近藤勘右衛門用

政・青山石見守清辰・石川又四郎政拾・鶴殿石見氏長・牟禮郷右衛門勝成・今村彦兵

衛一本庄兵衛

重長・中川半左衛門直勝・渡邊半四郎宗綱・久見忠左衛門正俊・小澤瀨兵衛

正重・溝口外記常吉・安藤治右衛門正次等なり。

一本に、中山勘解由・石川又四郎・中川半左衛門・渡邊半四郎・久見忠左衛門・溝口外記六人を脱して、川口長三郎・朝比奈源六郎・服部與十郎・三宅半七郎重勝・山田十太夫・石川三右衛門・阿部四郎五郎正之・村田權右衛門・由良太四郎・太田善太夫とあり。

内藤右衛門正重も、亦御使番兼帶す。御目附山岡五郎作景長・永井彌右衛門白元・高木九兵衛正次・木村源太郎元正・加藤伊織則勝。步卒頭は、阿部左馬介忠正・松平半四郎重則後内膳正又大隅守・同左馬介乗次・三井左衛門。諸道具奉行は、神谷與七郎清正・小野治郎右衛門忠明・荒川文六郎忠吉と云々。

御留守には竹千代君御舍弟國松君なり。次に蒲生下野守忠郷・鳥井左京亮忠政・奥平美作守忠昌・内藤左馬介政長・酒井河内守重忠。

一本、此外に、御本丸には、牧野内匠・日下部兵左衛門・大番頭松平丹後守重忠・土

岐山城守定吉・町司等の族と云々。

福島左衛門大夫正則・平野遠江守長泰は、江府に残さる。越後忠輝朝臣・黒田筑前守長政・加藤左馬介嘉明等、今年は大坂に向へり。今晚大樹は、神奈川に御止宿。十一日藤澤、十二日小田原、十三日三島、十四日清水に御止宿なり。大御所は此日巳の刻、名古屋を御立ちあつて、清洲を歴給ひ、大垣に着御。十五日彦根の城に入らせらる。秀忠公は、今日、田中に御止宿にて、十六日懸川の城に入らせらる。大御所は永原なり。尾張義直卿は、旗本四百五十三騎・雜卒一萬五千餘を引牽し、名古屋を發にせらる。十七日は、大御所膳所に御着。將軍は荒井の驛に御止宿、十八日岡崎に御泊なり。此日、大御所は御入洛なり。拜見の貴賤、其勢行粧の、常に異なる事なきより、却て不審し奉るとなり。越前少將忠直朝臣は、西岡向日明神迄出張せらる。

一本、大御所は、十四日名古屋を御立あり。佐屋を歴て、申の刻、桑名の城に着かせ給ひ、又本多出雲守忠朝は、將軍先鋒の任を免許せられ、玆に參陣し拜謁す。

十五日龜山、十六日水口なり。駿河頼宣卿は、永原に御泊あり。然るに將軍の御

使成瀬豐後守、水口に來り、大樹は廿四日迄の内に、御入洛あるべし。夫迄は大坂へ御手遣を、御待ち下され候様にと言上す。

別記に、秀忠公は、荒井の驛にましゝ、藤堂高虎へ御書を以て、將軍の着御迄は、大坂への御手遣、御延引下され候様に御頼みにて、直の御書を遣さると云々。此に略す。其文

さる程に大藏卿局・二位局は、先達つて名古屋より、大御所の仰の趣を、秀頼公竝に淀殿へ申上げける處、則大坂にては、老臣を召集められ、先達つて攝河の百姓退散して、御家人に給はるべき知行の事、青木民部少輔竝に大藏卿局・二位局を以て、駿府へ申達せし處、前將軍は隱居の身なる故、關東へ申達すべしとの差圖に任せ、青木は江府に赴けり。其上に大御所より、二女へ、當城を立退き、一旦和州郡山に移りて然るべき段を、申含め歸されたり。此事如何あらんと、御評議ありければ、其時老臣等、舊冬の御合戰の砌も、先君恩顧の大名等、兩御所掌握の威權に恐れ、御味方に參る者もなかりしなり。又當分御下知に従ふ御家人は、小身或は新參なり。且

御當所は名城と雖も、關東の計策に依つて、只今にては郭外竝に二の丸三の丸に至る迄、破却せられたる上は、再び籠城心に任せず。又廣場に出でて戦はれんには、無勢にして、東國の大兵に敵し難し。然れば此度は、大御所の仰に従ひ給ひ、一旦和州に御移あつて、時の至るを御待あるべし。大御所も御老衰なれば、御餘命久しかるべからず。薨去以後必ず變あるべし。其時刻を計り、御旗揚あらば、先君の御恩を蒙りたる族、大身小身に限らず御味方に屬して、御合戦、御利運たるべしと申すもあり。又中にも深く憤り、速に決して、他を顧みる志なき輩あつて、御當城を開かれ、和州に移らせられ、御小身にならせ給ひては、御本意ならず。先君御遺跡たる所を御立退あつて、萬一他國に於て御不慮の事あらば、豊國の御神靈、如何計り口惜しく思召されん。且は後代の謗を受け給はんこそ、無念の事なるべければ、唯一筋に思召定められ、御當城を御立退あるまじき旨を、急度仰遣され、事の破れとならば、大軍を引受け、華やかに御一戦を遂げられ、叶はざる時は、御城に火をかけ、各竝居て切腹仕らんこそ、世の聞えも潔く候はんと申上ぐれば、秀頼公も、此

辭を是なりと思召されけるにや、浪人等を集められ、御相談ありける所に、一統に申すは、御當城を立退かせ給はん事。甚だ然るべからず。去秋以來、關東よりの爲^し向^{むか}を見るに、終には御當家を滅し奉らんとの謀とこそ存候へ。第一、舊冬御和睦の砌は、外壕の塀を埋めらるべしとの御約諾なりしに、東國より附置かれたる普請奉行、總堀の契約なりとて、押して二三の丸迄破却し、御斷を仰入れらるゝに及び、奉行人、事を聞誤り、卒爾の儀、是非に及ばず、追付御普請仰付けられんと約し、其上に又他國に御移りあつて、浪人追放せよとの事は、是皆勢を微にして、自然に亡さんとの謀なるべし。然れども我々共の口より、彼此申上ぐるは、如何しく思召さるべし。若し和州へ御座を移され、御扶持を召放たれし上に、關東の罪に行はれんより、臣等は皆心を一致にして、御當城を受取に來らん東國の勢に向ひ、一箭射て、尋常に腹切らんより外なし。若し亦思召定められ、御一戰に御極めあらば、三萬餘騎の軍兵を御當城に残して、君を守護し奉り、七萬餘騎の勢を以て、伏見の城を乗取る體に見せ、京都に逆寄して、不意を攻むるに、及ぶはあるまじく候。傳へ聞く、將軍

家も大軍を率して、武江を發せられしと申せば、上着に於ては、悔ゆとも益なしと、異口同音に申しけるに依つて、彌合戰に極まりけれども、京都へ攻上る事は、遂に果さず。種々の雜説あつて、其謀空しくなれり。

或本に、去冬籠城の時は、七萬五千ありけるが、今年に至り、六萬餘加はつて、十三萬八千五百になりしと云々。

關東大坂
和破る

然れば重ねて、伊東丹後守長實並に二位局・正榮尼三人を御使として、故太閤粉骨を竭し天下を治め、日本國の人力を費し、取立てられたる城を明渡し、和州に移らん事思も寄らず。殊に只今迄扶持せし浪人を、俄に追放せんもいひ甲斐なく候へば、此兩條は、曾て承引し難く候。若此事御意に入らずば、定めて當所へ御軍勢を差向けられん。然らば運を天道に任せ、一戰仕るべしと、手切を仰遣されける所に、家康公聞召され、猶、御和睦の事を二女に仰遣され、丹後守は京都に留まり給へり。

或記に、伊東丹後守は、城中に火掛りける時、岡山表より、家人森島權右衛門一人を相從へ、高野山へ落行き、五月十四日に、切腹仕るべきやの由を伺ひし處に、御

免を蒙り、剩へ本知一萬石を給はり、嫡子喜三郎は、將軍家へ召出されしと云々。

今備中國岡田領主、一萬三百石を領する伊東氏の家系なり。

一本に、伊東丹後守長實は、落城の後に關東へ召出されたり。關ヶ原合戰の時も、家康公へ心を傾けしかば、其臣木崎彌兵衛といへる者を、順禮に出立たせ、書牒に合印をなし、之を編笠の緒に撚結びて東國へ下し、關西の様子、逐一に言上せしを、家康公、木崎を御前に召され、大に御稱美ありける。諸人之を讚美して、往昔赤松圓心、其子則祐が方へ、密書を送りけるが、路次敵地なりければ、其狀を切つて繩に縋ひ、竹杖の中へ引込み、郎等一人乞食に作つて、彼書を遣せしが、難なく則祐が方へ相達しけるとかや。今の伊東が謀も、是に劣るべからずと、口々に申しけると云々。

新東鑑 卷之十三 畢

新東鑑卷之十四

將軍伏見へ着御并法隆寺炎上

附青木民部少輔の事

既に關東と大坂御手切あつて、御合戰と定まりければ、如何なる妖魔の業にや、大坂より大軍を率して京都へ逆寄し、堂塔伽藍に至る迄、一字も残さず焼拂ふと申觸らすにより、京・伏見の町人等は、去年預け置きて、頃日漸々取戻せし家財を、又愛宕・鞍馬の方へ、車馬に積み、或は荷擔して運ぶにより、道も通り難くなりける處に、又京中は焼盡すとも、禁裏は別條なしと言出し、内裏・仙洞・女院・親王方の御白砂に込入り、日蓋などをして、妻子を入置きける程に、御所の庭は、錐を立つる地もなく充満しければ、勤番の侍等、是は如何なる事ぞと制すれども、多勢なれば、中々聞

入れざるにより、力なく御門を開いて入れたる。此事を家康公開召され、京童の今に始めぬ臆病、さこそあらめ。急ぎ伊賀守に下知すべしと、命せられしに依つて、勝重畏り、之を制しければ、速に鎮まりける。町人なればとて、餘り不覺なる形勢かなと、後の物笑とこそなりにけれ。四月十九日秀忠公は、尾州熱田に御止宿あり。

或記に、此日後藤左三郎を以て、大坂へ和融の事を議し給ふ。且、大野壹岐守氏治を召され、兄修理亮治長、不慮に創を被る旨、急ぎ大坂に赴き、其可否を訊ふべき由を命せらるると云々。或記に、氏治は今塵下にありて益なき故、大坂へ放逐の御思慮なりと云々。

或記に、昨十八日、大坂に於ては、豊國の忌日なれば、秀頼公、合戦の場所を御覽あつて、天王寺表に出張し給ひ、石の鳥居、太子堂の間を御本陣とし、御床几に腰を掛けらる。先手の御旗本備を定む。之は明石掃部介なり。虎の皮の投鞘百本は雨森出雲守、金の切裂の御旗、御馬印は津田左近たり。御床几の左右には二百人列す。其體嚴重たり。扱御盃を賜はり、先手の組一備づつ御目見えあつて、打蛇

を賜ひけると云々。

同廿日秀忠公は、土山に御止宿あり。上杉中納言景勝卿・伊達陸奥守政宗京着す。黒田甲斐守長政・加藤左馬介嘉明は、人の疑を避け、微勢にて武陽より來り、本多佐渡守正信の組に列し、上京せりと云々。

或記に、先達つて小幡勘兵衛が事を、大坂へ内通せし佐藤主を捕へんと、此日板倉勝重より、雜色を建仁寺へ遣せり。彼佐藤主、もとは團藏主といひしが、去冬籠城の頃は、後難を恐れ、佐藤主といへり。然るに城を出でて妙心寺に來り、又團藏主と改めしにより、塔頭より返答に、大坂に籠りたる沙門、曾て之なし。殊に佐藤主と稱する僧侶、境内に住せずと、爾長老頻に陳謝して、雜色を還せりと云々。

又同廿一日、秀忠公は、伏見の城に入らせ給へり。大樹の供奉甚だ無勢にして、道を急ぎ御上洛ありけるを、大御所聞召され、御機嫌惡かりけるとぞ聞えし。

或本に、今晚小幡勘兵衛景憲へ、板倉伊賀守勝重を以て、大御所より、大坂の事を

御尋ありしに、答へけるは、城兵武略を辨へずと雖も、其中に眞田・後藤・毛利・御宿等弱年にても、長岡監物は驍將に候へば、必ず夜蒐を好み候間、今度大坂に御着陣は、午の刻を過し給ふべからず候。諸陣古竹を以てなりとも、柵をつけ火炮を備へ、夜の守法令嚴密ならば、敵、夜蒐する事を得べからず候。且、小荷駄は雜卒のみにして、敵之を侵略せんとする時は、大に崩るゝ故、諸陣紛々し、敗北の基たりと、故老の物語を承り候。今般は糧を裹みて、小荷駄をば三日跡より遣されん様に御下知あつて、敵出づる事なくんば、御陣所を厚くし給ひ、四日目に小荷駄着かざるに於ては、危き事更に無かるべし。既に十萬を超えて、軍卒大坂に集り候上は、敵の兵糧續くべからず。而も大野兄弟、互に權を爭ふ事、敗形既に歴然たる由申しければ、勝重此旨言上せりと云々。

同廿二日、秀忠公、二條の城へ來り給ひ、大御所に御對面あつて、軍事を議せられ、其後に還御ありし。

或本に、諸國の軍勢、昨今殊に參着する事夥し。兩公二條の城に於て、初鹿傳右

衛門正備まさもと米倉主計忠繼を召されしが、兩將軍家御發向、御陣營の事を沙汰すべき由なり。但し市店民家を除き、信玄流の野陣たるべき旨、其監察として、伏見在衛の大番頭石丸六兵衛深津彌左衛門正吉を遣し給ふ。森美作守竝に木下宮内少輔利定は、山崎の要路を守るべき旨、命せられしと云々。

或記に、昨廿一日、大樹は、伏見に御着陣の上、直に二條に入らせ給ひ、大御所に對面し給ふ。時に大御所、來る廿八日、大坂へ御出陣あるべしと宣ひければ、秀忠公は、御意に隨ふべしと仰あつて、其後、藤室和泉守を以て、加賀・越前・出羽・奥州の軍勢相揃ふ迄、五七日も御延引あつて然るべきやと仰せらる。大御所、大樹の思召を察せられ、御意には、今度の儀は、城邊不要害の事なれば、大坂勢は籠城の防を相止め、叶はざる迄も出張すべき事疑なし。然れば遠國の勢を待合するに及ばず、縦ひ敵兵如何程ありとも、野合の軍に於ては、片端より追崩し埒を明くべし。彌廿八日に出陣すべしとの仰に付、秀忠公は、伏見に歸らせ給ひ、今廿二日の早天、二條に入らせられ、昨日申上げたる通、廿八日御動座の儀は、御延引下され

候様にと、直に仰ありける時に、大御所、昨日和泉に申せし通、今度の合戦は手間取らず。予も老年に及び、最早、打止の戦なるべければ、先手をすべしと仰あり。秀忠公の仰に、思召を相背く様に御座候へども、斯様の儀は、諸家の記録に書記し、末代迄相残り候。然るに御前の御後より参り候ては、天下の人口に懸り、甚だ迷惑仕候間、此儀に於ては、幾度も御斷申上、御先手に仰付けらるべしと申給へども、大御所御聞入もなく、本多佐渡守に向はせられ、大樹は只今の通り申給へども、今度の儀は、偏に予が身の上に懸り候事なれば、是非とも先手せんと宣ひける。其時本多は、左様に御親子様御意あつては、相濟み申すまじき間、先後の事は、古法の通りこそ然るべく存候へと申上げければ、大御所の仰に、其方が申す古法とは、如何心得たると宣ひければ、佐渡守謹んで、私の承り候は、先手の儀は、少しなりとも敵方へ近き方が、相勤むる由に御座候。然れば將軍様、御先手然るべく候。御前の仰は、御無理に御座候と申しければ、大御所御笑ひあつて、佐渡守は古法知りかなと仰せられ、遂に秀忠公は、先へ進み給ひけると云々。又

佐渡守言上して、彌來る廿八日御出陣に御座候や、遠國の軍勢集まり不申候は、來月朔日迄、御延引あつて然るべく候。今度の御合戦は、御手間の入り候事はあるまじと申しけると云々。

法隆寺焼
亡

同廿三日、大坂より大軍を和州に遣し、法隆寺を放火せしむ。頃日早續きたる檜皮に火燃付きて、黒雲天を覆ひ、猛火雲を卷きて、金堂・鐘樓・經藏並に八十六間の廻廊迄、一時に灰燼となれり。されども不思議に堂塔は焼残りける。抑法隆寺は、古斑鳩寺といひて、人皇卅四代推古天皇九年、聖德太子初めて建立の伽藍にして、最貴むべき靈場なるを、今何故に焼かせ給ふと、其意趣を聞くに、去年、秀賴公、關東を亡さんと思召す時に、和州番匠中井大和、秀賴公叛逆の事を、關東へ一々に告げけるを、甚だ憤り給ひしが、大和が親屬彼所にあるを以て、斯く計らひ、僧侶男女を、切殺し突殺しけるとぞ聞えし。一本に、法隆寺の炎上は、廿七日の事に作る。

或本に、法隆寺の學頭は、中井大和が親類にて、彼寺に住居するに依つて、放火せられしと云々。

別記に、中井大和は、秀吉公以來、大坂より御目を掛けられたる所に、關東へ、豊臣家の様子を密に言上せしにより、一門悉く斬殺され、其後に法隆寺を放火せられしと云々。

又、泉南堺の津は、舊冬關東の軍勢入込みて、自由を得たりしかば、今年放火して、敵に居を安からしむるなど、大野道犬一本に、治長・治房が弟なりと云々。長尾氏曰、治長が叔父なりと、是なるべし。異本に、治長・治房が父とするは誤なるべし。に、軍士數百人を差添へ、堺の津へ遣し、彼地に火を放ちければ、町人ども周章騒ぎ、東西に逃迷ふ。斯る處に、東國の船奉行九鬼長門守守隆・向井將監忠勝・小濱民部少輔光隆・同久太郎喜隆等、此事を聞き、兵船に取乗りて堺の浦へ廻り、道犬が後陣へ鐵炮を打掛け、鯨波を揚げて刼しける故、大野が軍勢は、思寄らざりければ、燒畢せずして逃歸りける。

一本に、四月廿八日に、堺の津を放火すとあり。兩度に燒きしか未詳。

初、一昨廿二日、大御所は、常高院並に町人後藤庄三郎を使とし、秀頼公、淀殿の方へ仰入れられけるは、舊冬一戰の砌、討果すべかりしを、故太閤の舊好、且は縁者の好

捨て難く思ひ、和睦しける處に、未だ半年も過ぎざるに亂を好み、萬人を惱まさんとせらるゝ條其謂なし。故に將軍家大軍を率ゐ伏見に到り、近日合戰あるべしと議定す。予此事喉に迫れり。此上乍らも御和睦ありて、七ヶ年の間、和州郡山に移り給ひなば、總堀等を故の如くになし、國民を安住せしめ、右府再び御歸城ある様に相圖り、且諸浪人の命に於ては、聊御構ひあるまじき旨仰遣されし所に、秀頼公を始め淀殿大に怒り給ひ、様々の惡口し給ひける。又城中の諸將等も、舊冬の和解に懲りて、聊常高院の事を承引せざれば、爲方なくして、兩人共に、同廿四日京都に歸り、右の趣を言上しけり。大御所此節に至り、御和睦の事を仰入れらるゝは、未だ諸國の大名も、悉く參着せざるにより、事を延ばさん爲の謀なるべしと、私語く人もありけるとなり。

異説に、常高院竝に後藤庄三郎を御使として、大御所より、秀頼公の母儀へ、先日青木民部少輔・伊東丹後守、手切の使に遣さると雖、萬端其意を得ざる事有之故、先づ此方に留め置けり。然るに將軍は、大軍を催し上洛あつて、其地に向ひ給ふ。

我之を止むべき様なし。願はくは和州に立越え給ひ、五七年の間、郡山にましますべし。諸浪人を抱へ置かるゝ儀、別條なしと仰遣されし所に、母儀以ての外に立腹あつて、御返辭なく、後藤庄三郎は、商人かと思へば、人商人にて、我と秀頼公を賣らんとするか。常高院は、受戒の比丘かと思ひしに、破戒の賣僧なり。夫とは知らず、此年月、師と頼みし事の悔しさよと仰ありしにより、兩人肝を消し、鼠の逃ぐる如くに城を出で、京都へ歸りけると云々。

初青木民部少輔一重は、大御所の御差圖により、江府へ下り、大坂の御家人に賜はるべき知行の事を相演べけれども、將軍より耽と御返答もなかりしにや、又京都へ上りし處に、大御所、渠が驍勇を惜み給ひ、再び大坂へ返し給はず。是も後には徳川家に奉仕せり。今攝州麻田にて、一萬石を領する青木氏の家系なり。

或記に、青木一重、始め所右衛門と稱し、今川氏直に仕へし處、今川家没落後に、家康公に奉仕せり。元龜元年六月廿八日、江州姉川合戦に、父加賀右衛門は、眞柄十郎右衛門直澄、所右衛門は、直澄が嫡子十郎を討取つて高名せり。其後に徳川

家を退き、丹羽五郎左衛門長秀が許にありしが、秀吉公に召出され、黄母衣衆の
其一人にて、七組の頭となりしが、今年秀頼公の御使にて、大坂の御家人に賜は
るべき知行の事を申して、駿府に下りし處、家康公の仰に、京都に於て御返事あ
るべしと宣ひける故、罷登りしを、京都に抑へ置かれ、旅宿の邊を、所司代の家來
に、市人を交せ遠く圍ませ、大坂へ返し給はず。若遁れ去るに於ては、麾下に奉
仕する弟次郎右衛門可重を誅すべき旨、命あるが故、京に止まりしが、落城の後
に剃髮し、高野山に隱る。後に召出され、本領安堵せりと云々。

或本に、次郎右衛門は、始め池田家に仕へし所、台命あつて、慶長十五年駿府へ召
出され、元和八年六十二歳にて死去す。青木縫殿頭家系なりと云々。

諸大名追々到着并筒井兄弟の事

さる程に諸國の大名小名は、夜を日に繼ぎ馳登り、其勢雲霞の如くにして、京伏見
に居餘り、在々所々に充滿し、木の下岩の陰迄も、軍勢ならぬ處はなかりけり。扱

攝州高槻には、當時城主なきにより、石川主殿頭忠總、之を守るべき旨、板倉勝重に就いて所望しければ、敵地に近き要地に籠らんと欲する事を、大御所御感あつて、直に許し給ひければ、主殿頭、高槻に籠り、急に三島口に土居を築き番兵を置き、折節大坂より出づる者を、十五人捕へ、秀忠公へ奉れり。且、早野長太夫といへる徒士を間諜とし、大坂の城内に入れて、敵の奇謀を聞届け、言上に及べり。同廿六日巳の刻、將軍秀忠公は、二條の城に入らせらる。又毛利甲斐守秀元卿は、今長州府中五萬石を領する毛利氏の祖なり、長府より纜を解き、大坂へ渡海せんと、播州室の津に至れり。大坂より此所へ、番船を出して待設けたりしが、秀元卿の船を妨げんとせし處に、勇猛なる甲斐守なれば、屑ともせず押通り、明石の岩屋の津に來りし處、敵船より火炮を放つ。然れども秀元卿は之を追拂ひ、海西の諸軍に先達つて、轉法院口に入津せらる。又毛利長門守秀就は、海上に遲滞しけるが、先鋒の福原越後守廣俊兒玉豐前守は、既に兵庫に着船す。淺野但馬守長晟も、泉州にて兵を進め、其外藤堂和泉守は、河州牧方に進み、井伊掃部頭は橋本に至り、池田武藏守竝に舍弟宮内少輔は、御下知に依つて、

尼ヶ崎西の宮を守れり。

一本に、四月廿六日、藤堂高虎は、淀を立ちて、河州須南に陣を取り、二の手井伊直孝は伏見を立ち、榑原遠江守・本多出雲守は、竹田より河内路へ押す。此時大御所伏見へ成らせられ、將軍家と共に、船入の矢倉より、軍勢出張の體を御覽の處に、井伊の旗奉行孕石・豐前・廣瀬左馬介、旗を伏せて押行けり。直孝之を見て、般若野宮内を遣し、兩御所御上覽の前にて、何とて旗を伏するぞと下知すれども聞入れず、旗の事は、旗奉行次第たりと申すにより、重ねて馬場藤左衛門を以て、是非に押立て候へと申遣はせども、夫にも構はず御城下を打過ぎ、肥後橋を越え御城を後になし、始めて旗を立てしとなり。其故を如何にといふに、六地藏より旗を立て、は、御城へ旗の向くを忌みて、斯く計らひしとなり。後に兩御所聞召され、御感ありけると云々。

同日水野日向守勝成を、大御所の御前に召され、大和口の先鋒は、一方の重任たれば、譜代の中に、誰か其任に當らんと思惟する所、其方に過ぐる者なし。今汝をし

て、先鋒の將と定むるぞと仰付けられ、大和勢松倉豐後守・神保長三郎・別所孫次郎・桑山伊賀守・同左衛門佐・本田左京亮・多賀左近・秋山右近・藤堂將監・村越三十郎・甲斐庄喜右衛門・山岡圖書・奥田三郎右衛門を相備に定められ、丹羽勘助氏信本書に、氏次とあれども誤なるべければ、之を更む。氏次の事は第十五卷目の細註に載す。堀尾丹後守直寄を召連れ候べき旨、命せられけり。

或本に、氏信が父氏次は、慶長六年三月十九日五十三歳にて歿せりと。

一説に、大御所、水野日向守勝成を召され、大和口先鋒の將に定められ、和州の兵松倉神保・別所・桑山・本田左京亮・秋山・藤堂將監・山岡圖書等を、汝が部下に屬せしむ。丹羽勘助氏信本書には稱號を脱せりを以て、汝が副將たらしむ。其方往きて大和口より入

り、藤堂和泉守・井伊掃部頭と手を合すべしと宣ひ、重ねて仰に、大和口の部將、若し汝が言を用ひざる者あらば、一人も二人も殺戮して警むべし。汝此度は將帥の任となり、衆軍を指揮せよ。昔日の一本鎧の癖を出し、躬ら健闘するは、予が好まざる所なれば、若し左様の働せば、其方を罰せんと仰せられけると云々。或説に、

一本鎧と仰ありしは、天正年中、勝頼と合戦の時を指し給ひしにやと云々。

或本に、氏次の息勘介氏信は、元和三年、式部少輔に任ぜられ、寛永十五年、一萬石加賜あつて、都合二萬石となる。正保三年五月十二日卒すと云々。

爰に和州添下郡郡山の假守護筒井主殿助定慶・舎弟紀伊守慶之といふ者あり。

或本に、主殿助本書に主殿頭とあり、始め藤五郎と稱し、紀伊守は藤六郎と稱せり。共に順慶

法印が養子にて、實は兩人筒井家の麾下和州福須美の城主兵衛尉順弘が息なり。今年三月上旬、定慶を従五位下主殿助、弟慶之は、従五位下紀伊守に敘任し、兄弟に一萬石の領知を賜はり、二百石宛の寄騎廿六人を附屬せられ、郡山の城主に仰付けられしと云々。

養父を陽舜房順慶といひ、和州に於て六萬餘石を領せり。

或本に、順慶は、天文十八己酉年三月三日、和州添下郡筒井が城に於て誕生す。

小字藤勝と稱す。廿二歳にて剃髪せり。父は榮舜房法印順照といひ、母は山田道庵といへる者の姉なりと云々。

然るに其頃和州を領せし松永彈正久秀と數度合戦せしが、後に順慶は織田信長公

に屬し、松永亡びて、竟に十六萬餘石となり、其外親類麾下廿萬七千五百石を領すと云々、信長公弑せられ給ひ

てより、秀吉公に従ひ其功あつて、天正十一年柴田勝家滅亡後、二萬石加賜せらる。

或本に、同年六月中旬、順慶大坂に到り、豊臣家へ候す。船場に於て宅地を賜へり。即、修營して旅館とす。今の順慶町是なりと云々。

同十二申年八月十一日卒去せり。嫡子藤四郎定次實は順慶が叔父慈明寺左門順國が息なりと云々家督相續し、

同十三酉年二月伊賀國に移り、彼國十二萬石並に勢州五萬石、城州三萬石餘、凡て廿萬石を領す。

或說、和州は羽柴大納言秀長卿の領國となり、郡山に在城せらる。筒井の從士、山田太郎順知・十市縫殿助忠之・同舍弟太郎右衛門忠次・越智太郎利國・同次郎利政・同三郎利秋・箸尾宮内少輔高春・長男太郎重春・箸尾九兵衛秋定・小田切喜太郎春行・舍弟喜助次清・秋山右近直國・澤藏人治之・芳野又右衛門清兼・猶原小太郎光秋・井戸十郎太夫國秋・慈明寺左門順之・福須美兵衛順元・片岡彌太郎春之・吉村小兵衛秀之・萬財備前守友興・布施太郎左衛門春行等、其他筒井の麾下、多く秀長卿の家士

となれり。又主殿助紀伊守は、兄定次と不和にして、福須美に留れりと云々。

斯る所に、其臣中坊左近秀行と、桃谷與太右衛門國之・河村與六郎正之・松浦左内祐次等と不和なりしが、去ぬる慶長三戌年六月、中坊は其息忠右衛門秀政と、筒井家を立退き駿府に便し、侍従定次酒色に溺れ、政道に僻事多き條々と、河村・松浦が奸佞の至惡等を、家康公へ訴へければ、定次も此由を傳聞き大に驚き、桃谷次郎國仲、息與太右衛門並に松浦・河村を召連れ駿府に赴き、左近が勇功に誇りて主人を蔑如にし、朋輩を猜み讒訴して、獨立せん事を欲すと訟へ、雙方對決數日に及べり。然る處伊賀守は、養父順慶以來、二代共に故太閤の厚恩を蒙るにより、密に大坂へ近仕する様に相聞え、且酒色の遊に溺れ、河村・松浦といへる奸人を用ひ、政道正しからざる由に沙汰極まり、遂に定次非に陥り、同廿日、伊賀國並に勢州・城州等の領地悉沒收せられ、伊賀國は藤堂高虎に賜はる、侍従定次・嫡子宮内少輔順定、共に藤堂へ預けられ、桃谷與次郎は、酒色の遊には預からざるとも、老臣職として非道を諫めざる咎により、御預となる。

與次郎は、慶長十六年六月廿日、伊賀上野に於て病死す。時に六十四歳なり。

桃谷與太右衛門・河村與六・松浦左内三人は、誅

せられたり。中坊左近は、從五位下飛驒守に任じ、息忠右衛門は左近と改め、將軍家に仕へ、和州吉野郡に於て、三千五百石を領す。

飛驒守秀行は、同十五戌年六月、伏見に來り住せしを、同卅日夜、何者とも知らず殺害す。時に六十三歳なり。或說に、桃谷與次郎、服部平七郎といふ者に通じ、伊賀の忍の者を語らひ、刺殺させて、主人の怨を報ひしと云々。按ずるに是れ其頃の風説か。

其後左近秀政は飛驒守に任じ、父が遺跡を領し、同十八年五月十一日、和州南都の奉行職となれり。其性質溫和にして、諸人悉く懷けりとかや。

一本に、筒井中坊は、元來興福寺の衆徒の棟梁たりしが、させる戰功なきにより、信長公の時に二千石を賜ひ、秀吉公に至り、千石加贈せられ、筒井の與力に仰付けられしを、中坊日頃口惜しく思ひ、連々に讒言をなして、終に筒井家滅亡せりと云々。

然る所に舊冬大坂騒動の頃に、筒井舊功の浪士箸尾宮内重春・秋山右近直國・箸尾

九兵衛秋定・片岡彌太郎春之・布施太郎左衛門春行・同小太郎春次・萬財備前守友興・同太郎友滿・巨勢孫介正言・吉村小介之敬・細井兵助武春・服部平七郎貞次等城に入り、大野主馬介治房が組となり、勇功を勵ましけるが、暫く御和睦となりし所、侍從父子配流の身乍ら、内通の聞ある様に沙汰し、今年三月五日、侍從父子、伊賀國に於て遂に生害に及べり。定次は五十四歳、順定は十五歳なり。南都の傳香寺は、筒井家の菩提所といひ、殊に住持照珍和尚は、定次に縁ありし故、伊州へ馳來り、父子の死骸を乞請け南都に歸り、大安寺に於て火葬し、則石碑を傳香寺に建て、拾遺宗用大居士と法號し、息宮内少輔を、宗連大居士と法號せり。斯くて去ぬる四月十五日、大坂方の箸尾宮内重春・布施太郎左衛門春行共に筒井家の浪人なりといふ者の方より、大野主馬介治房が下知を受け、細井兵助武春を、秀頼公の御使として、筒井主殿助定・慶・弟・紀伊守慶之へ、御亡父順慶法印御舍兄伊賀守殿、共に故太閤の御厚恩あれば、今度味方に来りて、東國勢を防がるゝに於ては、加勢一萬餘人を遣さるべし。且御利運の上は、主殿助へ御亡父の遺跡、和州紀伊守には伊賀國を賜はり、家兄の如く太守

筒井定慶
兄弟大坂
の招を斥
く

たるべし。若し同心なくんば、筒井家舊功の士を案内とし、不日に大軍を向け攻落すべしと、申送りし所、筒井兄弟、細井に對面して曰、老父家兄二代、故太閤の恩顧を蒙りしは、二代の大勇功を以て報じ候。我等兄弟に於ては、關東の御厚恩、山よりも高く海よりも深く候へば、御請申上ぐる事なり難く候。然る上は、速に大軍を向けられなば、當城を枕とし、兄弟共に討死を遂げ、父兄の孝養に致すべしと申すにより、細井再三勸めしかども、同心なければ、武春は大坂に歸れり。扨主殿助は、細井を返して後、明日にも大軍寄せ來るべければ、桑山伊賀守貞晴本書に貞時とあり、板倉豊後守重正・同十左衛門重宗兄弟及藤堂將監高久・奥田三郎右衛門尉忠一等に謀じ合せ、大軍を以て相待つべしといひければ、舍弟紀伊守が曰、我等兄弟、筒井の流を酌みて當城を守る身の、他の勢を假りて戦はん事も口惜し。唯領下の野武士等を馳集め、關越の嶮難に待受け、弓鐵炮を以て打亂し、漂ふ所を切下し、一戦に利を得んと勇みければ、主殿助之を聞き頭を振り、大坂勢定めて大軍にて向はん事必せり。然るを味方の小勢を以て、危き軍をせんより、此名城に取籠り、弓鐵炮にて寄手を惱

さん内に、松倉を始め大和勢、後詰して來らん。其時内外より揉合せ、悉く討取るべし。必ず峠に發する事勿れと制しければ、慶之止む事を得ず。然らば勢を集め、籠城の用意をなさんと、卅六人の與力並に筒井家舊功の浪士、其外野武士商賈農民等に至る迄、健なる者を擇上げ、上下千餘人、門々を請取り狹間を配り、弓鐵炮鐵薙刀を備へて、廿日の夜迄相待ちけるを、大坂に於ては、區々の評議にて、速に兵を出さざる故、郡山勢は待飽み、氣疲れ勇緩まり、大に油斷して、從兵等も在所々々に離散しける處に、同廿六日、大坂より箸尾宮内重春を大將とし、布施太郎左衛門春行・同小太郎春次・萬財備前守友興・同太郎兵衛友滿・細井兵助武春等を先として、大野主馬介治房が手の者少々差加はり、上下二千餘人、大坂より郡山迄七里餘の處を、終夜闇越の嶮所を來れり。郡山にては松明の數を見付け、驚破大坂の大勢寄せ來るはと周章騒ぎ、主殿助は肝を潰し、斥候を三度遣しけれども、如何見損じけん、敵三萬人に餘れりといひければ、定慶は、此小勢を以て、籠城は叶ひ難し。一先づ福住へ退き、松倉兄弟を始め、一國の味方に謀じ合せ、重ねて戦はんと申しければ、紀伊

守怒りて、假令小勢なりとも、當城を立去らば、大臆病の名を取らん。此所を枕とし、討死を遂げんといひけれども、從兵等も臆してやありけん、各主殿助が詞に従ひ、一人も残らんといいふ者の無かりければ、紀伊守は涙を流し、筒井の家運窮まり、兄弟の別れ今日にありと、役兵四五人計にて、其夜の子の刻、南都の方に行き、興福寺妙喜院の住侍は、緋於なれば彼寺に籠居し、兄主殿助が様子を聞き居たり。主殿助は、其夜丑の刻計りに、我所領福住へ歸り、敵寄せ來らば戦はんと相待ちけれども、大坂勢は峠々を打越え、平地に着きしかば、先の手始に、郡山を放火せんと議して、同廿七日の未明に、鴻の島といふ所へ據り、二手に分れ、九條口へは箸尾宮内・細井兵助、奈良口へは布施太郎左衛門・萬財備前守等、從兵共に押込み、町口にて鐵炮をつるべ打ちて、関を上げければ、心の儘に、城内及諸町を、悉く放火亂妨しければ、逃後れたる雜兵並に商賈農民等、卅餘人を討留めたり。夫より奈良へ働かんと支度せり。

一本に、南都を放火せんと、大橋の北六條繩手を、二町餘り出向きし所、南都の總

年寄六人連にて、名酒十荷竝に美肴を持たせて出迎へ、南都は春日大明神の御地にて、無敵の郷なれば、御憐愍を蒙るべしといひければ、布施萬財等、心得たりといひ乍ら、兵を進めしにより、總年寄等急ぎ馳歸りければ、南都の者共、我先にと春日山に逃籠り、家々の印を立て、終夜篝を焚きたるを、大坂勢は、關東勢とや思ひけん、暫く控へて居たりけると云々。

此時大坂より、軍使頻に來つて、味方小勢にて、終夜長途を経たり。殊に東兵着陣の事もあるべければ、速に人數を上ぐべしと申來りしに依つて、郡山より南三四里計なる今井郷へ押懸け、近邊を放火し、夫より百濟南江寺田邊或は田村等を放火せり。

一本に、此時大坂勢、法隆寺表に到り、大工の棟梁中井大和正清が宅を亂妨して焼拂ひ、寺院少々放火し、此所より關屋に懸り、國府へ引取れりと云々。

或記に、大和衆は、多く法隆寺上太子に陣所を置きたりしが、如何せんと、僉議區區なりし所、多賀左近分部左京以下、此敵を目前に通とほしなば、弓矢の恥辱、後難の程も如何と申しけれども、桑山伊賀守・同左衛門佐・同左近、同心せざりける故に、

桑山が家來吉村次郎九郎進み出で、我等に鐵炮二百挺騎兵五十騎御預 被下な

ば、各様向はれずとも、大坂勢を討留め申すべき旨を、再三申せしかど、何れも承
引せざりけると云々。

又筒井主殿助定慶は、福住に歸り、大坂勢續いて寄せ來らば、此所にて一戰すべし

と、舍弟福須美兵衛順元（としもと）・從弟福須美兵助弘高・山田太郎順知・越智太郎利國・同次郎

利政・同三助利秋・芳野又藏清之等、上下千餘人にて相待ちける處、大坂勢は、思の外

輕く引取りける故、定慶は、世上の嘲哂武道の瑕瑾、後難遁れ難くや思ひけん、竟に

切腹せり。定慶が切腹は五月十日、或は十一日なりとぞ。 弟紀伊守慶之は、主殿助が自害せしを聞くと等しく、

興福寺の中妙喜院とかやにて、腹搔切つて失せにけり。慶之が切腹は、五月十二日なり、同日の晩に、白毫寺山の墓所に送葬せ

りと。見る人聞く人、紀伊守が信義の勇と清白の志を、甚だ惜みけるとなり。さる程

に松倉豊後守・舍弟十右衛門は、筒井主殿助が、郡山を引退きしとは夢にも知らず、

豫て約せし事なれば、所々に斥候を差置き、大坂勢郡山へ押蒐るといふより、人數

七百計にて五條を出で、郡山より十五里を隔てりといふ。一本、松倉は和州二見の城主と作れり。 近邊に控へし東兵に或本に、桑山伊賀守・藤堂

筒井定慶
自盡

將監・奥田三郎左衛門・本多因幡守とあり

軍使を馳せ、大坂より出張したる軍勢を、進み討つべしと申送りけ

れども、大坂の勢は次第に重なる由を聞きて、其返事快からざる處に、藤堂將監高

久、手勢を引連れて出向ひ、板倉に馳加はる。一本に、馬上七十餘騎上下三百餘人とあり。奥田三郎右衛門は、奈

良にありけるが、是も同じく加はれり。さる程に水野日向守勝成は、兩御所の命を

請け、今廿七日兵を發し、長池城州久世郡に屬すに舍らんとせし所に、松倉十右衛門・奥田三郎

右衛門方より早馬を以て、大坂勢は郡山に火を放ち、陣場と致候。奈良は未だ燒か

せ申さず候へども、貴下の勢遅はり候はゞ、抱へ難からんと告げたりける。勝成此

告を聞くと等しく、一騎馳に馳せて、行程五里計りの所を、日の沒せんとする時に、

南都にこそは着きたりけれ。

一説に、奈良の代官或は奉行中坊左近・藤田市兵衛は、長池邊に逃來り、日向守に參り合

せ、大坂勢は、奈良・般若坂までも亂入り候へば、中々防ぎ難かるべく覺え候。此

邊に陣所を定めらるべしと申せども、勝成中々之に應せず、奈良を燒かせては、

兩御所の思召、弓矢の恥辱なれば、一騎なりとも、駈附なり次第に取堅め、討死と

相極めたれば、茲に陣取する事思も寄らず。各兩人も、南都の守なれば、不肖乍ら従はるべしと申しけると云々。

東國勢は、日向守が奈良まで來りけるに依つて、色を直して持固めたり。又大坂勢は、勝成が鳥毛の傘の馬印、竝に松倉豐後守・藤堂將監・奥田三郎右衛門等が勢を見て、國府越を引取らんとする所を、松倉が家臣山本權兵衛義安、一番に乗出し、續いて井村助兵衛・田中藤兵衛・松山五郎兵衛竝に藤堂・奥田の勢共追掛ると雖も、討つ事叶はず、漸々と後れて逃ぐる雜人六人を、松倉が手へ生捕り、一人の首を刎ね、家康公に奉りければ、大に御感ありけるとぞ。

或記に、松倉豐後守は、今度一番首を得たりしに依り、大御所御感斜ならず。使者には黄金を賜はり、松倉は、後年五萬石加賜せられ、肥前國島原の城へ移されしと云々。

同日、高力攝津守忠房・鳥井土佐守成次を、南都の守衛として差向けらる。又本多伊勢守忠利は、豫て二條の勤番たりし處に、今廿八日御下知改まり、河州讃良郡松原

村に到り、奈良口の防として、屯すべき旨を命せらる。松平和泉守乗壽、

始め源治郎と稱す。父を家乗和泉守と稱す。濃州岩村城主、二萬石を領す。去年

二月十九日に卒去せり。乗壽、家督相續す。承應三年正月廿五日に卒す。今參州

幡豆郡西尾城主、松平氏の家系なり。

美濃・信濃二ヶ國の小祿の士を率ゐて、河州牧方に至る。其組稻葉佐渡守正成或本に、

守は、始め羽柴秀秋卿に仕へしが、斷絶の後に御家人となり、二萬石を賜はり、内匠頭となる。是れ本多佐渡守を避けしといふ。今城州淀の城主、十萬三千石を領する稻葉氏の家系なり。は、老功の士

なるが故に、大御所より、豫て制策を授けられ、即、牧方に札を立つ。其詞に曰、

大坂に籠者の妻子、何方に隠れ有之といふとも、相改之、斬罪せしむべし。但し

城中より罷出づるに於ては、御赦免たるべし。其上忠節の功に隨ひ、御知行又は

御褒美可被下置者也。

四月 日

或記に、二條の勤番は、松平隱岐守定勝、菅沼左衛門範貞一本菅沼は、伏見の勤番なりといふ。 伏見の

城番は、松平河内守定行隱岐守定勝の息なり。 大番頭は渡邊山城守一本に謙を茂と記せり。 炮卒の長根

來右京盛次・愛染院・柘植三之丞廣次。且加番の族は小笠原若狹守・一色宮内少輔なり。泉州岸和田城番・小出大和守吉英・金森出雲守重頼・小出伊勢守或は信濃守吉親・伊藤掃部助。攝州多田莊の番は、能勢攝津守頼次。橋本海道番は、能勢治左衛門頼重・北條出羽守氏重・本多縫殿助康俊・遠藤但馬守廣隆。丹州龜山の在番は、岡部内膳正長盛・向美濃守宣勝長盛の息なり。寛文八年七十二歳にて卒す。松平周防守康重。相州小田原の城番は、西郷若狹守正員第六卷目に碓氷の關所とあり。河州牧方の押は、松平和泉守乘壽・妻木雅樂助頼忠・平岡平右衛門重勝。

一本に、平岡石見守重常、父は重定・石見守と稱す。金吾中納言秀秋卿に仕へて三萬石を領す。秀秋卿逝去にて、家斷絶の後に、重定を御家人に召され、美濃國德野にて、一萬石賜はる。重常父に嗣ぎて、大坂前後の戰に従ひ、首卅三切つて奉る。寛永年中、狂疾により所領沒收せられ、息男市十郎に二千石を賜はる云々。首帳に平岡平右衛門首卅三とあり。此時、平右衛門といひしなるべし。諱は何れか是なる。追つて可考。

稻葉佐渡守正成・遠山勘右衛門方景・小里助右衛門、其外大島一黨・伊奈の一黨・高木一黨・那須左京大夫資景・

父を資晴修理大夫と稱す。始め那須太郎、其後大膳大夫に任じ、七千石を領す。慶長十四年、五十七歳にて卒せり。資景家を繼ぐ。寛永元年正月に卒す。此家後に斷絶す。

大關彌平治政増

父を増時土佐守と稱す。慶長二年五月八日に卒す。祖父を右衛門佐高増といふ。慶長五年正月十四日、七十二歳にて卒せり。此時政増幼し。依之高増の三男右衛門佐資増、家を繼ぎ、慶長十二年四月、卅一歳にて卒す。祖父高増の遺言に任せ、政増、家督相續せり。元和二年五月、廿二歳にて卒す。今下野國那須黒羽一萬八十石の領主、大關氏の家系なり。

太田原備前守晴清

下野國那須郡太田原城主、一萬二千四百石を領せり。父は山城守綱清、始め備前

守と稱せり。後に所領を分つ。今は一萬千四百石なり。

福原雅樂介資保・岡本宮内少輔義保・伊王野又治郎資友・蘆野藤五郎資泰・千本大和守義定・太田原出雲守増清。

未詳。備前守が嫡男に、左兵衛政清と稱し、後に備前守といへるあり。是れ寛文元年三月、五十歳にて卒すとあり。然れば今年僅に三歳なり。追つて可考。

古田織部正の事

さる程に板倉伊賀守勝重は、豫て小幡勘兵衛が密旨により、二條に侍大將を差置かるべき由言上せし處に、大御所は、當時洛陽に何の用心あつて、警固に及ばんやと御諚あり。然るに尾張義直卿の臣甲斐庄三郎・今井猪兵衛といふ者、火付の賊を見出し捕へ置き、成瀬隼人正正成に此事を達しければ、則板倉伊賀守、之を糺明する處に、勝重が屋舗の市中に、伴類四十三人潜居しける旨を白狀するに依り、忽ち搦取りて獄に下せり。右の賊徒は、古田織部正重能が茶道坊主宗僖といへる者を頭

とし、今廿八日、兩御所御動座の路に於て、禁闕を放火し、十文字の旌旗を靡かせ、島津薩摩守が兵と偽り、二條の城を始め、洛中を皆焼失すべき巧なり。依之兩將軍御出陣、來る五月三日迄、御延引し給ふべき旨を、俄に本多上野介を伏見に遣され、此事を告げ給へり。又宗信は、此咎により、今年閏六月廿九日、下粟田口にて礫にこそ掛けられ。

或本に、今廿八日の晝、一條岩神に住する町人岡村喜左衛門といへる具足師二條に來り、神泉苑の邊に、怪しき者十餘人隠れ居る由を板倉へ訴ふ。依之雜色を先立て、與力十騎・同心廿人を遣し、十六人迄搦め來れり。板倉之を糺明せしに、其中に一人年寄りたる賊白狀するは、將軍廿八日に御出陣と承り候。其時節洛中に火を放つべき旨、大野と約を定め、十餘人罷上り候ひし處、今に御出陣の御沙汰なし。依つて皆々落失せ、今此十六人計りに相成申候。一兩日は食に飢勞し、勢力も御座なく候故、働き得ずして、やみ／＼と繩を懸り候。哀れ御慈悲を以て、命を御助け被下候様にと申せば、伊賀守が曰、下薦の事なれば、有體を申すに於

ては、上へ伺ひ命を助くべし。併、一兩日食に飢うるとは其意を得ず。如何ぞ買求めて喰はざるやと尋ねければ、賊答へて、如何にも代物あらば、買調へ申すべく候へども、一錢の貯も御座なく候由を申すにより、板倉不審して、斯様の大事を思立つ者、何ぞ用意をせざるやと申せば、賊重ねて、我々共、何れも廿日餘の圖を以て、金銀を用意仕候處、古田織部正が茶道宗僖と知音に御座候故、渠と相圖を定め、城中に狼烟を上ぐるを見ば、所々に火を掛けんと約諾仕り、一兩日の糧を貯へ置き申候。残りの者は、皆々古田織部正に隨ひ申候といへば、板倉仰天して、渠とは何の由縁かあると尋ねれば、博奕の友なる由を答へけるにより、板倉彌驚き、始めて見參せしやと問へば、十年以來の知音たる由を申しければ、板倉篤と聞きて宗僖を捕へ、雙方を禁籠し、此旨言上に及べり。依之織部正も、其後に切腹仰付けられけると云々。

一本に、四月廿六日、戸田八郎右衛門といへる浪人、兄の仇たる由にて、江州の御代官鈴木左馬介を、日岡に於て討果し、江州三井寺の方へ立退きし由なり。依之

左馬介が持せたる狹箱を、所司代板倉へ持出せし處、其中に大坂城内よりの密書、竝に一揆企の廻文等有之故、伊賀守、二條へ獻せし所、御吟味仰付けられしに、織部正が茶道宗僖を始め、其同類廿四人有之、則、糺明に及びし所、渠等が白狀に、兩御所御動座の御跡にて、主上を供奉仕り、二條の城を攻崩し、京中を燒拂ふべき企なり。依之五月二日の御出陣は相延べ、其後、宗僖を始め同類廿餘人、日岡に於て磔罪せられ、織部正は、申譯立たざる仔細あつて、切腹仰付けられたり。斯様の儀により、京都の儀を、心元なく思召されけるにや、上杉景勝卿は、大坂出勢に及ばず、八幡に在陣仕り、京都を可相守旨を、仰渡されけると云々。

或記に、古田織部正重能は、茶道を好みて世に鳴り、嫡子山城守は、秀忠公の御師範として江戸にあり。二男左近も召出されしが、今年五月七日に、戦死を遂げたり。父重能は野心を挟み、己が宅に寓居せし連歌師如玄を以て、秀頼公の命を、兩度迄島津家久に達し、其上織部が甥左介といふ者、大坂に籠城し、去冬も重能が方より、關東方の謀略を城中へ通せり。依之今年十一月十四日獄に下れり。

又渠が宅堀川三條の南へ、藤堂が兵を遣し、闕所して所持したる俊成・定家兩筆の掛物、且一山・一休・春屋等の墨蹟、其外陶器珍物の諸品を官庫に收められ、同六月十一日、洛外小幡にて切腹仰付けらる。檢使は鳥居土佐守成次・内藤右衛門政重なり。又重能が遺體は、大徳寺玉林庵に納む。吉田、屋鋪は、今四條坊門の南。藤堂和泉守屋鋪地なりと云々。

又嫡子山城守は、同十二月廿七日、江府本誓寺に於て誅せらるると云々。或家記に、伏見の城にて切腹す。内藤兵衛尉檢使すと見えたり。

或家記に、古田織部正重然、後に重能と改む、父は勘阿彌といふ。或記に、祖父を信勝兵部少輔と稱す。信勝が弟を民部と稱せしと云々。

太閤秀吉公の同朋なりしが、後に重定主膳正と稱し、三千石を賜はり、從五位下に敘し、太閤薨去の後急死す。依つて重能、家督相續す。關ヶ原合戰の時、秀頼公を守護しけるが、叔父兵部少輔重勝、關東に屬せし故、心を變じ重勝と一手になり、西國方を追拂ひける忠賞により、一萬石に至れりと云々。

或本に、白石先生の曰、古田織部正は、古き珍寶の全きをば、餘りに思ひ所なしとて好まず。されば書畫やうの物をも、彼處を斷り此處を斷ち、凡ての茶具をも多

く損ひ破り、又補ひ綴りて用ひける。世の人皆興ある事に思ひ學びて、世に全き物無からんとす。松平伊豆守信綱の實父大河内金兵衛久綱、常に側の人にいひしは、此人必ず禍に罹りて死すべき者なりといひき。其後此人、罪被りて誅せられしかば、人々大に驚きて、いかで豫てより斯くは相しけるぞと、久綱に問ふに、古の寶物と聞えしも、世々の亂に失せて、今ある所のもの、皆神佛の護持してこそ、世には残るらめ。夫に我一人の好みに隨ひ破る事、必ず鬼神の惡む所にやあるべき。さらば其人も、又身を全くして終る事を得べからずと思ひきといひしなり。さる金言たる由、古き人の物語を承り、又此年、萬に附渡りて、心得あるべき事にや云々。

榎井合戰^附塙團右衛門・淡輪六郎兵衛戰死の事

さる程に紀州和歌山城主淺野但馬守長晟は、八千の軍勢を引率し、大坂へ向はん爲に、四月廿八日國を打立ち、先陣龜田大隅高總・淺野左衛門佐・上田主水正重・安・多湖

助左衛門等は、泉州日根郡安松・櫛井・信達の邊に屯し、長晟が旗本は、山口

信達を去る事
三里計なり

に陣を取る。又大坂には、豫てより大野主馬介治房が兄治長が家人北村善太夫・大

野彌五衛門兩人を以て、多賀羅兵衛

一本多賀
羅右兵衛

戸津川八藏・大會孫四郎・淡總左衛門・湯

川五兵衛・山口喜内・堀田村若狹・高石村の吉田治郎兵衛・脇村半左衛門・竝に吉野・熊

野の郷士を語らひ、都合三千人計り驅催し、但馬守が出馬の跡へ、味方の勢討つて

出でなば、長晟必ず引返すべし。其時主馬介二萬計を以て、挟んで之を討たんと相

議したり。又昨廿七日、高石村の治郎兵衛は、尾崎村の九右衛門を、大坂に一味さ

せんと、彼所に行きて企を語りけるを、九右衛門は、さあらぬ體に會釋し、治郎兵衛

が歸ると其儘、泉州安松

山口を去る事
三里半計り

に行き、龜田大隅・上田主水等に、此事を告げけ

れば、龜田・上田大に驚き、且、九右衛門を賞美し、農民なれども小賢き者なる故、大

坂勢と戦ふべき謀を尋ねければ、即ち答へて曰、天正十二年三年の頃、關白秀次公、

根來寺の僧徒泉州を侵しける時、度々の御合戦に、人數を立てられしは、船岡山

日根
郡岡

本村の西に濱手にて御座候。彼所には、一町四方程の池二つ有之候。其廻は悉く沼

なる故、人馬の進退自由ならず。守りて居るには然るべし。敵を捲り立て、強く働か
んと思召すには如何あらん。同じくは信達村迄御陣を上げられ、川を前に當て、切
岸の上に御陣を立て給ひて御一戦あらば、如何候はんと申しける。龜田・淺野・上田・
多湖は、此儀最も然るべし。先づ但馬守に知らせんと、一々申達しければ、長晟も
是に同じ、信達村に先陣を張りて、左衛門佐・主水正は、櫛井迄引取り、人馬を休め
んとす。又紀州の留守居は、一揆の事を密に聞付け、北村善太夫・大野彌五右衛門を
始め、卅餘人を擒にし、岡部彦右衛門を以て、但馬守に註進しけり。

記に、北村善太夫・大野彌五右衛門兩人は、紀州の獄屋に入置き、日を経て、板倉伊
賀守へ相渡しけると云々。

長晟は此告を聞きて大に驚き、寺西清左衛門・原勘兵衛に二千餘兵を授け、海陸より
賊徒を討たんと返しける。さる程に大野主馬介は、昨廿七日、一本に泉州佐野界を去る
未刻、事七里計といに陣しけるが、淺野が先手、人數を立直すを引返すと見て、修理が軍將赤座内膳

正直矩・宮田平七照定・槇島玄蕃・允重利父子を以て、泉州岸和田の守護小出大和守吉

英竝に金森出雲守重頼を壓へしむ

一本に、宮田平七を大將にて、石津表に陣を取りけれども、小勢にて如何と、堺の警固たる榎島父子、赤座を加へ、二の目に大野道犬齋、堺の濱に陣を取る。塙團右衛門を始め主馬が組は、東の山際に附き、大鳥越を中泉へ押す。大野道犬が下知にて、堺を残らず焼拂ひ、其光に、廿八日の闇夜なれども、人數を押すと云々。

先鋒塙團右衛門直之、淡輪六郎兵衛重政、岡部大學則綱以下、三千計りの勢を引率し、安松指して押來れり。然るに岡部大學は、去冬塙直之が蜂須賀陣へ、夜討の砌口論して、共に出でざる事を憤り居ければ、今日團右衛門に先をせられじと、さあらぬ體にて先へ乗出せば、直之聲掛け、約束の如く胴勢を揃へて蒐るべしと申すを、岡部は振返り乍ら、有無の答もせず進み行けば、直之は大に怒り、侍の義理を違へ、先を駆くるならば、今日必ず討死せよ。さなくば男は立つまじといひつゝ、塙も同じく駆出せり。

或記に、岡部大學は、自分の手廻計り三騎にて、阿部野街道を和泉路へ駆抜けし

が、團右衛門は之を知らずして、堺街道を來りしと云々。

又淡輪六郎兵衛は、某、泉州路の案内を蒙り乍ら、跡に残るべき様なしと、是も同じく乗出し、心々に馳行けり。扱淺野の先陣龜田大隅は、白黒段々の馬印に、鷲の簀毛を以て織りたる羽織を着し、三百人計りにて控へ居たりしが、大坂勢は、龜田が備を目懸け、一度に咄と蒐りけるを、大隅下知して、輕々と一町計り引退けば、短兵直に進みて、龜田を取籠めんと攻懸れども、龜田少しも疼まず、鎧衾を作りて待懸けたり。然るに岡部大學は、自己の功を立てんと川原を下り、川に添うて乗込み、淡輪も跡に續きければ、淺野勢は之を見て、其勢にや恐れけん、俄に崩れ立ちければ、龜田は町の東へ出で、必死になつて下知をなす。又上田主水は、櫛井の町口なる南の土橋に馬を立てける處へ、城兵坂田佐治郎は、名乗りも敢ずつと來り、主水を目掛けて突いて懸る。上田之を見て、其儘馬より飛んで下り、忽ち坂田を鎧付けければ、小姓横關新三郎、茜の袖なし羽織に、金を以て向ひ兎の紋付きたる羽織を着し、太刀を抜いて走り懸り、一刀斬る所を、足輕の小頭金右衛門、走り寄つて首を

取り、同頭彦右衛門に持たせ、本陣にこそ送りけれ。又龜田大隅は、最前より挑み戦ひ、敵二人を鎧付けて、家來菅野兵左衛門・吹田作兵衛首を取る所を、城兵松田作左衛門之を見て、龜田と鎧を合せ、大隅手を負ひ引退きけり。或は岡部大學に創付けられしと云々。然るに塙團右衛門は、今日の先陣なりと呼ばはり、上田主水と鎧を合せ、互に劊を被りけるが、塙が家來山縣三郎右衛門、記に坂田庄三郎とあり、入代りて突合ひける所、主水が鎧は中程より打折れければ、山縣と引組みしを、三郎右衛門は大力にて、上田を捕へて膝にひつ敷き、些しも働かせず。

一本に、主水は鎧を突折り、剩へ岩の間に足を踏込んで倒れければ、山縣、上田を抑へ、既に首を搔かんとせしと云々。

横關は之を見て、主を助けんと走り寄り、上なる敵の鑢を抓んで、引倒さんとせしを、山縣透さず横關をも捕へ、兩人共に膝に引敷き、首を搔かんとする所を、新三郎は、敵の刃を握つて放たぬ内、上田が從兵横井平左衛門、敵一人を突付け、振返つて見れば、主水が冑の金の半月の立物地に附きし故、横井は相手を其儘に打捨て、上

なる山縣が草摺を疊み上げ、片股を切つて落し、彼三郎右衛門を引退け、兩人を助けし所、主水は起上り、其首は新三郎に取らせよと下知しけるにより、横關則ち首を得たり。此時山縣が小者は、主人の討たれたるを見て、新三郎に打つて掛るを、横關同じく討留めけり。

或本に、横關新三郎は、主人の危き命を救ひし功に誇り、寛永九年の春上田氏を出で、加藤肥後守忠廣に仕へ、千石を領せし所、碍あつて、上田氏へ歸參せりと云々。

又敵兵は上田を討たんと、透間もなく馳蒐るを、水谷又兵衛満安・高河原小平太或は高尾氏に作る。後に助左衛門と稱せり。敵を追拂ひ、終に主水を救ひけり。玆に塙團右衛門直之は、人に勝れて下知せんとや思ひけん、鞍壺に立上りしを、多湖助左衛門は、究竟の弓の上手なりけるが、胡籙より、鴻霜降を以て矧ぎたる鋒矢を抜いて打番ひ、能引いてひやうと放てば、過たず直之が胸の直中に、ぐさと射込みたり。團右衛門は、元より剛強の士たりと雖も、最初上田が爲に創を被る故に、馬より眞倒に落つる所を、淺野左衛門が從

兵八木新左衛門が爲に討たれたり。生年四十九歳とかや。

一説、團右衛門は、多湖助左衛門に射られ乍ら蒐寄り、多湖が弓の弦を、十文字の鍵にて突蒐りしを、八木新左衛門鍵を以て渡り合ふ。直之重創なりと雖も、小家の壁に寄懸り、八木と鍵を合せ、首を新左衛門に取らせ、晴なる討死せしと云々。

別本に、龜田大隅が家記に、塙團右衛門を、鍵下にて討取りたりと傳ふ。即直之が具足も彼家にあり。然れども淺野家にては、八木新左衛門が討取りしに極れり。龜田が方には、之を憤りけるに、大隅が息半左衛門が曰、父大隅一代の軍功、舉げて算ふべからず。然るを塙が首一つを、兎や角と論するに足らず。如何様にも申候へ。憤る筈ならずと申せしと云々。別記に、直之實は龜田に討たれども、公儀の御吟味にて、八木に極まりしと云々。

或本に、團右衛門が死體を埋めし塚は、樫井村の北の方にありしを、紀伊國衆の小笠原作右衛門といへる人、直之が親類にて、其塚に五輪を立てしと云々。

別記に、此邊の土人が曰、毎年七月十五日には、加州金澤の人此所に来り、墓の塵を拂ひ、燈籠に火を揚ぐるといへり。然れば塙が子孫は、加州にあるかといへり。

淡輪重政
戦死

淡輪六郎兵衛重政も、榎井の町へ攻入りて戦ひけるが、餘りに深入し、續く味方も無く、敵に取籠められ、終に討死を遂げ、首を永田治兵衛に取らせしとなり。

或記に、永田治兵衛は、日頃病身なる故、駆走る事も不自由なりければ、若者共は内々にて、あの病身にて、何の用に立つべきやと笑ひけるを、治兵衛傳聞きて、侍は剛の者こそ役に立つべけれ、病身に依るべからずと申せしが、今度淡輪を討取り、其首をもぎ付にして持參し、病者に劣りたる息災人かなと、日來嘲りし人を笑ひ返せりと云々。

或本に、淡輪六郎兵衛は、舊小西攝津守に仕へたり。石塔は、泉州日根郡榎井村にあり。甥の淡輪新兵衛、之を立てしと云々。

然るに大坂勢は、榎井の町に込入り、関を揚げ天地を響かし、馬畑南北に靡き、入亂れて相戦ふ中にも、岡部大學則綱・金丸小傳次忠一、其外蘆田左内・横井治右衛門・山内權三郎・須藤忠右衛門・熊澤忠太夫・徳永淺右衛門・坂田庄二郎、命を塵芥よりも輕んじて攻戦ひければ、紀州勢も氣疲れ息絶えて、心ならず引退く。但馬守は、榎井

に合戦ありと聞き、旗本の先手を遣しけるに、城兵の競ひ蒐るを見て、長晟が先手の小野慶雲といへる老剛の兵、時分を計り、旗本の先備を一手になし、横合に突いて蒐れば、大坂勢是に遮られ、敢て進み得ず。此間に龜田大隅・上田主水・多湖助左衛門・安井喜内・岸九兵衛等が小返するを見て、紀州勢咄と返し戦ひける程に、大坂方の蘆田・横井・山内・須藤・熊谷・徳永・坂田を始め都合十一人、枕を並べて討死せり。然るに城將大野主馬介治房は、味方敗軍の事をも知らざりけるが、是より先、貝塚のト半といふ者、途中に出迎へ、酒宴に刻を移す所に、淡輪が家來、主人討死を遂げしといふ告を聞きて、急に檜井に詰寄る。長岡監物・上條又八・御宿・越前守以下、競ひ進むと雖も、紀州勢は、何しか人數を引取りしにより、力なく團右衛門が死骸、火葬にして、檜井の邊に火を放ちけり。然るに城兵は、一揆の相圖も相違し、日已に沒せんとし、且紀伊路は嶮難の上、卒爾に押入り難しとて、夫より直に引退けり。

或記に、淺野但馬守は、日出王寺に陣する所に、主水・大隅・捷軍して、首級を實檢に入る。然る所に、城方の後陣、檜井・河原を押來る由、註進するにより、仙石因幡、是

に向はんと申すを、種村肖推寺制して、今日の勝利は、敵の援蒐故、不慮に勝を得たり。然れば後陣の大軍を重ねて討たん事、六かしからん。其上紀泉の間に一揆あれば、人數を收めて可ならんと議する内、信達の東西に火の手見えければ、彌卒爾に押詰め難しと、談合區々なり。又池田宮内少輔が、吹飯に着岸せるを聞きて、但馬守より使者を立て、跡を詰められなば、城兵を追討すべき旨申遣す所に、宮内少輔も、所々に烟の揚るを見て之を怪み、馬船等未だ到着致さず候故、後詰なり難しと答へける。又蜂須賀阿波守も、田川に陣取り、豫ては淺野と謀じ合せ、大坂勢を待受けんと思ひけれども、是も近邊の一揆を氣遣ひ、田川邊なる百姓、人質を取り、池田が臣乾平右衛門に渡し、淡路の由良の城へ、彼人質を籠めければ、中々城兵に向ふ氣色はなかりける。偕但馬守は、山中迄歸陣せんとする故に、大坂勢盛返すとの沙汰頻なれば、組頭を一人、殿に残さんと議するに、誰れ残らんといふ者なし。時に熊澤進み出で、自分の組百騎にて殿をなせり。然れども大坂勢山手へ付き、残らず引取りし由、斥候告げ來りし故に、兵庫も共に山中迄引取

る所に、有田郡名草迄も、悉く一揆の色立ちたる由の註進により、昏に及び、淺野勢殊の外噪亂し、道橋より轉び落つる者もあつて、甚だ見苦しかりしと云々。

大坂勢は、昨廿七日の未刻より出馬して、夜通しに押續き、總軍殆んど疲れければ、人數を纏ひ、岸和田より慕はん事を恐れ、本道へ懸り、堺へは入らず、安倍野より天王寺へ出で、大坂へ引入りけり。此時岸和田より打つて出でなば、城兵は怵るまじきを、赤座内膳正・宮田平七郎・槇島玄蕃允能く壓へけるにや、岸和田より突出もせざりければ、槇島以下も、亦堺へぞ引取りける。

記に、見聞集・北川覺書等には、樫井合戰に、大野主馬介討死して、首を、櫻井といふ者得たりと見えたり。又東西合軍記・大坂鑑・徳川記・今本傳記・秀頼事記・石谷氏覺書・村越氏覺書・攝州記・慶長記・元和兩記等には、主馬介樫井にて討死の事見えず。卯五月、岡山に於て一戰を遂げ、味方の諸手敗北の後には見えず。又首を得たる者なければ、死生の間を知らずと云々。

或本に、此合戰終りて、米田盛物・御宿越前守・上條又八等は、安松にて岡部大學に

會ひ、團右衛門を捨殺し、男は立つまじと惡口せしに、岡部は返答もなかりける。依之何れも主馬介に、臆病者を組に被置事は、無用に候と申しけるを、治房聞きて、尤なる事ながら、今に至り、物頭を追放する事如何なれば、御利運の上にてと申すにより、皆々主馬介とは不和なりしと云々。

或本に、岡部大學は、塙團右衛門と古傍輩にて、加藤嘉明が甥川村權七が母方の叔父なり。大坂陣に、城を出でて剃髮し、愧世庵と稱せり。時の人、大坂陣の事を尋ねれば、某は隠れもなき者なるが、男のならぬ首尾にて、斯る身となれり。依之合戰の次第、曾て存せずと答へしと云々。

或本に、泉州岸和田より十町計り南貝塚に、卜半といふ一向寺の住持あり。紀州勢の來りし時、貝を煮てもてなゝし後、大坂より、大野主馬・塙團右衛門など來り候間、要害のよき所に御待ち候へと申せば、紀州勢悦びて、貝塚より引取りて陣を取りけり。又大坂勢の來りし時も始の如くして、紀州勢の待つ事を知らせければ、城將大に悦びしとなり。將軍家御歸陣の後に、淺野より、忠節の由言上しけ

るにより、卜半に五百石無年貢に仰付けられ、其上町を支配させ、地子を下さる。

代々卜半と稱すと云々。實説に於ては、外に所以あるべし。追つて可考。

上田主水の事

さる程に櫛井合戦の時に、紀州一揆の告ありける故、但馬守下知して、寺西清左衛門・原勘兵衛に二千餘騎を差添へ、海陸より二手に分れ、領國へ遣しける處、彼兩人鹿瀬・蕪坂などといへる處を越え、急に攻めければ、一揆は之を知らず、緩々としてありける故に、一戦に利を失ひ、悉く敗北しけるが、大將分の一揆等が首廿一計、其外數多生捕りけれども、張本人湊宗左衛門は、行方知らずなりにけり。兩御所此事を聞召され、但馬守は本國に歸り、仕置致すべしとの仰に任せ、大坂へ出陣せず。歸國して後、川鍋といふ所にて、一揆等卅餘人を斬罪せしとぞ聞えける。又櫛井にて討取りたる首の中を十三或は十一、家臣關藏人を以て獻じければ、本多上野助正純首を検め、御門外に差置き披露せし處、御感にて、則上覽あるべしと仰出されけれど

も、塙が首に仔細ありし故、正純答へて、暑氣の砌に御座候に付、思の外に損じ、上覽あるべき體ならずと言上せり。

一本に、團右衛門が首は、ほたれ首にて、見苦しかりし故、正純斯の如く申せしと云々。ほたれ首とは、切口の肉の、外へ巻くをいふとかや。

記に、淺野家の働を感せられて、兩御所より下されける御感狀の詞に、於其表及一戰、敵數多被討取之條、無比類仕合、御感に思召候也。

四月晦日

家康御墨印

淺野但馬守殿

今度於其表無比類働、因茲首數到來、神妙思召候。彌可勵軍忠事肝要也。

四月晦日

秀忠

淺野但馬守殿

就從大坂相働候則被及一戰、敵數多被討取之條、御註進之趣披露候處、無比類御手柄之旨被成御誼、御内書被下候。兩人御使者御前へ被召出之、御

感不斜候。依之御使者御馬被下、委細寺川庄左衛門一本左馬介、關市兵衛可被申達候。恐惶謹言。

四月晦日

本多上野介

板倉伊賀守

本多佐渡守

淺野但馬守殿

今度淺野が家士、何れも手柄ありし中に、上田主水正重安が事を、兩御所委細に聞召され、大に感じ給ひけるとぞ。抑上田主水正が祖父は、彌右衛門重氏、父は甚左衛門重光と稱せり。主水正初め左太郎といひて、岡田長門守に仕へたりしが、岡田滅亡の後、丹波五郎左衛門長秀の小姓となり、度々高名ありて、千萬人の舌頭を振はす。夫より秀吉公へ召出され、越前の國に於て、一萬五千石を賜はり、主水正と稱し、豊臣の姓を賜はり、小田原陣の時にも、渡邊勘兵衛と同時に、北條の城に乗〔脱字アルカ〕鍵下に首を取る。關ヶ原合戦の時は大坂に屬し、後浪人して髪を剃り、宗固と稱し、

茶にも亦其名高かりけり。

一説に、去ぬる關ヶ原合戰の時、丹羽長重卿は、豐臣家に屬し籠城すと聞きて、主水正は舊恩を思ひ馳行きし處、途中にて落城の事を聞き、彼國へ行かず。夫より攝州に赴き、兵庫の津に隱蟄せりと云々。

然る所蜂須賀が招をうけ客となり、三年を経たりしが、其後淺野紀伊守幸長に仕へ、或時家康に御目見えをなせし所、命を受けて還俗せり。

或記に、和歌山の城普請の時に、大身小身共に、家中の士は其役をなせり。然るに宗固が石を曳かする時、其身の出立は、柿色の木綿羽織の馬乗を明けたるに、大なる舟楫を紋に附け、澁手巾の鉢巻し、石の上に居て下知をなす。若侍等之を見て、殿も大名なり、一萬石の茶道坊主を御抱ありしと嘲りける。此事を家中一遍に沙汰せしを、幸長聞きて、上田が心底如何あらんと氣遣ひ、諸士出仕の所に、脇差を上田に與へ、其方事、家中に於て、何かと批判する者有之由、必ず氣に懸くべからず。一度大事の時に、役を勤めくれ候へと申さるれば、宗固則脇差を

戴き、何事も候はゞ、此御脇差に血を付けて、御恩を報せんと申し退出せり。家中の者又洒落れて、宗固が脇差に血を付けんといひしは、猶か鼠の血なるべしと申合へりしが、今般の合戦に、高名せしと云々。

兩御所御出門の事

五月小朔日、小幡勘兵衛景憲が御勘氣を免し給ふ。此景憲が事は、先達つて大坂を出奔せし處、大御所御入洛の後に、板倉伊賀守勝重より、先年、景憲御家を立退きし罪、御赦免の儀を再三吹舉しけれども、敢て拜謁を許し給はざりしに、今日漸く御赦免を蒙り、隊長日向半兵衛政長・島田清左衛門直時に従つて、軍に列すべき旨を命せらる。

記には、世靜まつて後、板倉伊賀守・松平隱岐守兩人より、景憲が忠節を、種々に大御所へ執成し申しける處、公の仰に、勘兵衛儀、忠勤を顯さんと思はゞ、城中に入らずして、軍功如何程もあるべし。只風に順ふ草の如しと宣ひ、敢て御許容し

給はざりしが、板倉頻に執し申すにより、御勘氣は御赦免ありけれども、強ひて

御賞翫はなかりけると云々

別記に、二千石賜はり、尾畑氏と改むと云々。

今日大小名、二條へ登城の處に、明後三日、兩公大坂へ御動座あるべき旨を告げらる。同二日雨天なり。夜陰に及んで、大御所より御使秋元但馬守泰朝伏見に至りて、明日の御出馬を延滞せられ、五日に、兩公河内路を御發向あるべき旨を演說しければ、秀忠公は、右の所以を察し給はずして、如何して明日を延滞し給ふぞやと、驚かせられしを、本多佐渡守、兎角大御所の思召に、任せらるべき由を諫め奉る。秀忠公より、安藤對馬守を秋元に副へて、二條に遣され、尙深慮の程を伺はせ給ふ處に、大御所は、阿茶局を以て、御挨拶に及び給ひければ、安藤も程なく伏見に歸れり。

一本に、今日大御所、御旗本の先隊本多佐渡守が組戸澤上總助政盛・六郷兵庫頭政乗・仁賀保兵庫助舉誠・立花左近將監宗茂・前田大和守利孝・日根野織部正吉明・秋元越中守富朝・那須左京大夫資影・大關・太田・原・福原・蘆野・岡本・伊王野・千本父子・甲斐の武川衆・津金衆・武藏東金の鈴木黨、洛陽を發し、綴喜郡木津へ、段々に進む

と云々。

或本に、秀忠公の御家人にて、先年立退きたりし岡本喜左衛門、密に大坂より來りて、板倉伊賀守に告ぐるは、臣洛陽に寓居すと雖も、兩公へ忠を盡さん爲に、態と大坂に籠城し、敵の謀略を窺ふ所、城内の計策俄に變じ、兩公御動座の後に、禁裏を放火し、去年の如く兩道より、兩公大坂へ御進發あるべき間、大和口に於ては、御旗本へ無二無三に突蒐り、一方にて必死の勝敗を遂げんとする旨趣を訴ふる故、俄に明三日、大御所は河内路、秀忠公は大和越の、御發向の事を延引し、五日は不就日と雖も、鎌倉柳營の時、大元國の兵船數千艘、筑前博多の沖に至り、本朝を覆さんとせしかども、神風起りて、異國船悉く破壊し、軍兵海底に沈みし吉兆の日なればとて、五日を御首途に定めらると云々。

或本に、四日には、大和口の先鋒水野日向守を、伏見の城に召され、大樹より黃金五十兩を賜はり、薄暮に退去し、終夜和州法隆寺の城に歸ると云々。

同五日、大樹は黒絲の御鎧に、唐人笠を召され、山鳥或はの尾を以て織りたる御羽織

秀忠大坂
へ向ふ

を着し給ひ、總白の御旗七本、眞先に押立て、御進發あり。一本に、將軍家は、三日に御動座と云々。

記に、御旗奉行は、三枝土佐守・島田治兵衛二行に列す。其外金の五本一本に七本骨の

扇に、日丸畫きたる大馬印、銀の繰半月の本に、金の切裂附けたる小馬印、並に銀の二瓢箪の本に、金の暖簾附けたる御馬印朝日に耀かし、其下に爽に鎧ひたる武者數萬騎、次第を追つて扈從すと云々。

土井大炊頭利勝、左部の軍將たり。佐久間備前守安次一本重政・含弟大膳亮勝之・羽柴美作

守親良本姓堀・高力左近大夫正房・溝口伊豆守政一一本善勝・由良信濃守貞繁・堀淡路守直重

等、騎士都て一萬。酒井雅樂頭忠世は、右部の軍將たり。細川玄蕃頭興元・北條出羽

守氏重・鳥居土佐守成・次杉原伯耆守長房・新莊越前守直定・土方掃部介雄重・脇坂主

水正安信等、騎馬都て一萬。次に本多佐渡守正信及び松平伊豫守忠昌・立花左近將

監宗茂・息主膳正直次實は高橋主膳兵衛鎮種の息なり・本多大隅守正吉一本忠純・前田大和守利孝・日根野織部

正吉明・秋元越中守富朝・菅谷左衛門範貞・那須衆・山利衆・蘆田衆・津金・武川、都て一萬

五千餘騎。次に六隊の騎將は、阿部備中守正次・内藤大和守・松平越中守定綱、左軍

たり。高木主水正正次、青山伯耆守正俊、水野隼人正忠清、右軍たり。軍士都て三萬餘騎。次に秀忠公、幕下の親兵二萬餘騎、弓手銃手圍繞し奉り、八幡山の社内を通らせられ、河州讃良郡奈須に着陣し給ひ、莊官八郎太夫が許に御着陣なり。家康公も、同五日辰の刻に、京都御發駕あり。

記に、家康公は、辰の下刻に御發駕あり。供奉の輩、皆具足を着す。總白の御旗

七本眞先に押立て、御旗奉行莊田小左衛門・朝倉藤十郎、一本に、莊田三太夫・保坂金右衛門とあり、其跡に

從ふ。金の扇子の大馬印、同銀の瓢箪差通し、本に金の切裂附ける小馬印、並に

白き布に、厭離穢土欣求淨土といふ經文を、參州大樹寺の登譽上人の書きたりし

御吉例の御旗を箱に入れ、御駕の脇に持たせらる。御使番は、四半に金を以て、

五の字を書きたる指物にて扨從しけり。御膳番御小姓衆は、白と紫との纒懸け、

或本に、母衣は着るといふといへり。又源家には、武羅と書き、藤原氏には綿衣と書く。平家には、神衣と書き、橘氏には母衣と書く。銀の切先に、出半月の前立

物、思々の鎧に、梨地に金紋付きたる鞍鐙に、厚總の鞆かけ、太刀刀に至る迄、皆日に映じて照耀きければ、天晴由々しき見物にてぞありけると云々。

尾張宰相直義卿は、成瀬隼人正・竹腰山城守を先手として一萬五千、駿河宰相頼宣卿は、安藤帶刀・水野對馬守を先手として、大御所の翼衛たり。

或記に、先手の諸將に相繼ぎて、藤堂和泉守高虎。二番井伊掃部頭直孝。三番柳原遠江守康勝・小笠原兵部大輔秀政・嫡男信濃守忠備・二男大學介忠政・諏訪因幡守頼永・丹羽五郎左衛門長重卿・成田左馬介・藤田能登守、左邊たり。松平丹波守康長・水谷伊勢守勝隆・相馬大膳亮義胤・六郷兵庫頭政乗・稻垣平右衛門重種、右邊たり。

四番に酒井左衛門尉家次・松平甲斐守忠良・松平安房守信吉・牧野駿河守忠成・松平將監成重・本多出雲守忠朝・眞田河内守信吉。本書に伊豆守倍次とあり・秋田城之介實季・淺野采女

正長重・松下石見守重綱。一本に松平石見守重次とあり・植村主膳正康明。六番に越前少將忠昌朝臣。

七番には前田筑前守利常等、皆河内路を経て、大坂に赴く。時に大御所仰せらるるは、大坂の軍勢十四五萬、相集まると聞けり。四面を圍み攻めなば、敵兵死戦して、互に多く亡びん。予之を見るに忍びず、不如天満口を解きて生路を開き、脱れ去る事を得しめよと、寛仁の御下知ありと云々。

今日申刻、河州友野郡星田に着かせ給ひ、百姓平井三郎右衛門が宅に御止宿あり。

今星田店といへる、是大御所の御陣ありし所なりと云々。

傳曰、今宵枚岡社司權頭御本陣に來り、御心得の事共を言上しける所に、大御所御氣色あつて、敵砂村に備へたる由、其場を如何して通り來るぞや。其上、將軍の御本陣を越え來る事、旁推參の至なり。急ぎ追返すべしと宣ひける。權頭恐れて申譯もせず、すごくと歸れり。

此時、大坂勢は、將軍家の御進發を恐れ、砂村へは出です。伯樂淵の邊に伏勢せし故、權頭が來る時に、砂村は事故なし。又將軍の御本陣にては、星田へ參る由を申せしにより、御咎なくして來れりと云々。

是は出陣に逆ひ來るを、軍中にて大に忌む事なり。殊に御本陣は、敵近き處なる故、御遠慮あつて、斯く御氣色ありしにやと云々。

大御所は、京都を出で給ふ砌、松平常慶を召され、御陣場に於て召上がらるゝ御膳米五升・干鯛一枚並に糟・鹽・味噌・鯉節・香物等。右に應じて持たすべし。此外は少し

も無用たる由仰せられける。依之御臺所の長持、只一にて仕廻りけり。誠に數年物馴れ給ふ故に、斯様に輕き御事なりと、皆人申しけるとなり。秀忠公は、卽刻渡御まし、御對顔あり。時に河内口の先鋒藤堂和泉守は、高安郡千塚の陣より來り、兩公御閑談の席に臨み、本多佐渡守・土井大炊頭・安藤對馬守と密策を遂げ、其後我陣に罷還れり。同二陣井伊掃部頭は、須奈より三里南の方松原村に陣し、近邊の在家を打毀ちて小屋を設く。總じて諸軍は野陣なり。今夜風雨に依つて、一入心を嚴密にせり。

一本に、大和路田尻越の先鋒水野日向守は、其部下を二翼に分つ。一方は堀丹後守直寄を一陣とし、神保長三郎相茂・桑山黨多賀左近常長・村越三十郎・別所孫治郎友治なり。一方は板倉豐後守重正を一陣として、本田左京政武後任左京亮・秋山右近充匡・藤堂將監高久・山岡主計景以・奥田三郎右衛門忠一・丹羽式部少輔氏澄なり。

此兩隊、一日宛相代りて、日向守が先陣たるべき定にて、今日は相備に當りし處、松倉が相組は、早法隆寺を發して、河内の國分へ向ふ由、堀が方へ刻を遷し告げ

來りしかば、丹後守は大に怒り、我れ今日魁に極り、渠に超えらるべきやと、郷人を呼びて徑を問ふ處に、龜が瀬越、順路といへども、守屋大臣、之を歷て河内に赴き敗亡せし故、上宮太子、後世軍に赴く駄馬匹夫も、此道を避くべしと戒めん爲に、石面に首なき龜を彫りて建置かる。依之此所を、首落つる里とも稱す。又藤井越より藤蔓道を遮る故、通る事を得ずといへり。丹後守が曰、龜が瀬、千歳の禁忌といふとも、今戰場に骸を晒さん事を厭はず、衆に抽んで敵地に赴く上は、押して彼の道を歷て苦しからず。守屋は利あらずして死す。我は勝つ事を得て活くべし。若しくは我れ敗れて死せば、後世此道を避くる龜鑑たるべし。豈近きを棄て遠く廻り、衆に後るべきやとて、豫て輕卒の指物鍬を標とせしかば、其鍬を以て道を開かせ、忽ち河州安福郡國部に至る。松倉等は、暫く程過て此所に着し、丹後守が濶達決斷を稱譽すと云々。

新東鑑卷之十四畢

新東鑑卷之十五

細川越中守參向附内室自害の事

豊前國小倉城主細川越中守忠興は、其勢を領國に残し、僅、馬廻の兵士並に火炮の長三人、近習計にて牧方迄來り、五月六日の曉方、星田の御宿陣に來れり。大御所、去年は島津を疑ひ給ひし故、彼動靜を、忠興に窺はしめられけるが、今年は子息内記忠利を、領國に残し來れり。玆に忠興が申すは、某、豊臣家に對し恨あれば、一矢射て積鬱を散せんと、間道を微行して、參向せし由を言上す。大御所、其微勢たるを以て、本多佐渡守が相添に列すべき旨を命ぜらる。抑越中守が斯くいへるは、去ぬる慶長五庚子年、石田亂の時、家康公は、上杉を亡さんと關東に下り給ふ。忠興も供奉し、妻子は大坂に置きて、河喜多石見・稻富伊賀・小笠原備前入道正齋をして、之

を守警せしめたり。扱大坂にては、諸侯の妻子を人質とするにより、忠興の内室も、御城内へ入るべしと申送りけるを、河喜多石見、彼使者に逢ひ返答に、先づ内室に申聞かせ、是より御請を申し上げんといひて使者を返し、其上に、稻富等へ相談に及びけるは、假令奉行の下知なりとも、粗忽に奥方を御城へ入れ参らする事は、如何なりと言ひながら、右の趣を申せし處に、内室之を聞き大に怒られ、凡そ人の妻たる者、夫の命に従ふを以て道とす。今、夫君東國にまします。然るを誰が仰を以て御城に入らんや。此由を幾度もいひ含め、御使者を還すべし。若御奉行中御宥免なく、押して召捕らんとし給ひなば、力なし。夫を一期とすべき由、一向申さるゝに依つて、稻富伊賀、奉行所に到り、件の理をいひければ、内室の願、誠に餘儀なき所なり。先づ其儘にとありけるが、夫より一兩日過ぎて、右左相渡すべしと、使三度に及びけれども、留守居同心せざるに依つて、奉行中より、其儘に差置くは、外の爲め惡しからん。押寄せて奪取るべし。然らずば悉く打殺すべしと、同年七月十七日、五百騎計を差向けられたり。正齋・石見兩人、内室の前に出で、右の由を申しければ、

内室は取亂さるゝ氣色もなく、思設けたる處なり。何故に驚くべきや。上様への恐れあれば、構へて手向すべからず。稻富伊賀は表にありて、防矢などを發せざるか。此方へ呼入るべしといひつゝ、今は是迄なり。正齋介錯致せよと、守刀を帷子越に、胸の中に突立てられしかば、正齋座を立ちて、内室の側へ近寄らんとせしが、無禮とや思ひけん、側に掛けてありつる長刀押取り、内室の喉を刺し、冥途の御供申すべしと、高聲に呼ばはり切腹せり。

細川忠興
妻自害

或記に、忠興の内室は、明智日向守光秀が女なる故、天正年中、織田信長公を弑せるゝ時、光秀、聲忠興此時は興一
郎と稱せりを招きし處、其不義を惡んで従はざりしと云々。

傳に曰、此時越中守、其室に言つて、汝が父主君を弑す。大惡狼戾の人なり。天下其罪を容るべからず。然るに今其女と室を同うせば、猶不義に興するが如し。我之を忍びずと、其臣一色宗右衛門をして、丹後國上戸といふ處に遣さしめたりしが、光秀伏誅せられし後に、迎返せしと云々。

或記に、此時忠興の息興一郎或は興
五郎忠隆の妻は、左右して大坂を通れ出で、加州へ

走り、兄前田利長卿の許に蟄居す。忠興之を怒りて、離縁すべき由を諭すと雖も、忠隆父命を背き、密に加州へ音問しけるを、忠興漏聞き、姑の急難を見て出奔せる不義の婦に、心を通はす段、柔弱とやせん不孝とやいはん。歎くに堪へたりとて、遂に忠隆を放逐せしめ、三男内記忠利を家督に定む。依之與一郎は、剃髪して立允^{一本}と改名し、洛陽に幽居しけるが、寛永の頃、家光公御上洛の砌、忠興夫婦が忠義を、思召付けられけるにや、立允を召出され、還俗あらしめ、父が勘氣をも免され、中務少輔に任せらる。^{一本に、立孝と諱すとあり。疑ふらくは此時改めしならん。}斯くて正保の頃、父の願により、三萬石の地を分てりと云々。^{今肥後國宇土城主細川氏の祖なり。}

又石見は表へ走り出で、茲彼處に火を掛けさせ、金澤庄二郎と一所にありて自害せり。稻富伊賀は、裏門より駈出で、行方知らずなりにけり。^{伊賀は、後に一夢と稱せり。鐵炮の上手にて、尾州家へ召出されけるといへり。}然るに此度の合戦に、忠興押して來れるは、此時の讐を報せん爲なりとぞ。

或記に、秀吉公御在世の時、營中に於て猿樂を催し給ひ、諸將の内室をして見せしめ給ひし時、獨り忠興の室は之に従はずして、太閤は我父を殺し給ふ。俱に天

を戴かざるの髻なり。目のあたり見るに忍びずといひて病と稱し、登城をせざりしと云々。

同記に、内室自害の前日に、

露をなどあだなるものとおもひけん我身を草におかぬばかりぞ

明日知らぬ我身と思へど暮れぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

といふ古歌を扇子に書付けて、侍女に與へられしと云々。

一記に、此時、内室、留守居を呼びて、我父、信長公を弑し給ひし時、夫君の離別にあひ、丹後の山家に隠れ居たりし頃、主君を弑したる人の女なりと、賤山かづにも譏られて、餘りの口惜しさに自害せんと思立ちしが、與五郎未だ幼少なりし故、成長せば夫君に返し參せんと、左右する中に又呼返されて、年月を送れり。近き頃諸大名の奥方、淀殿の方へ參る事ありけれども、自らは身を恥ぢ、參らざりしに、今又、御城中へ入りて、人に面を晒すべき様なし。只快く自害せんとあるにより、留守居も力なく、内室の心に任せたりと云々。此説未詳。

一本に、忠興の内室自害の時、十歳の女子と八歳の男子を、手づから害せられ、小笠原正齋喜多見石見細川平左衛門などいへる留守居は、門外へ切つて出で、數刻戦ひ、火の中へ飛入りて死せしと云々。

或記に、此儀は虚説なりと。且細川平左衛門といふ者、彼家にて聞きも及ばず云々。

又細川が關東へ忠を盡せる由縁は、關白秀次公御在世の時に、如何なる御思慮にや、諸大名に金銀を貸し給ひしが、其時忠興も、黄金二百枚を拜借せり。然るに此事太閤へ漏聞え、秀次公へ宣ふ旨やありけん、關白の金奉行より、越中守へ使を以て、右の黄金、今明日中に上納せらるべし。延引せば爲惡しからんと言遣せり。總じて拜借金、多くは返上の沙汰もなき者故に、忠興も油斷して居たりければ大に驚き、種々才覺をなせしかども、急なれば中々調へ難し。家臣松井佐渡興長或曰、松井佐渡長臣長岡帶刀なりとに、此旨を會議すと雖も、佐渡も手段なく、茫然として居たりしが、日頃本多佐渡守正信と睦しきに依つて、急ぎ正信が方へ行き、右の趣を相談せし所に、本多手を拍つて、誠に忠興朝臣の一大事なり。内府に達せんと則披露せし處に、公暫く御思案ありて、松井を召せと仰ありけるにより、正信、松井を携へ、御前へ出でけ

る時に、家康公、御鎧篋を寄せられ、御腰より鎰を出され、佐渡之を明けて甲冑を取出し、底を見るべしと宣ひける故、本多則ち命に従ひし處、黄金五十枚宛、四篋の底に入置かれたり。彼黄金を検め見るに書付あり。是二十箇年先に、參州に於て納まりし金なり。扱仰に、凡そ金銀は、遣へば遣ひ次第の物なり。參州にて、金奉行より、直に此篋へ入置かせたりしが、果して今度の大用を辨ず。之を越州に渡すべしとて、松井に授け給ひければ、興長甚だ悦び、明日脚力を丹後へ下し、黄金を返上仕るべしと、謹んで申上げければ、家康公の仰に、夫は汝が不思議なり。此體の黄金、此櫃より出して用立てしと、他聞に達しなば、越州の爲然るべからず。敢て返す事勿れとありければ、覺えず松井は紅涙を浮べ退出して、右の趣を忠興に告げ、彼黄金を秀次公へ返上し、危急を免るゝが故に、忠興は、家康公の御深志心に徹せしか、或時家康公、諸侯四五人を招き給ひ、饗應ありける時、細川も其席に列なりしが、各退散の期に至り、忠興は相殘りて右の謝禮を述べ、且曰、先達つての洪恩、何を以て之を報せんや。自今以後、御一大事あらん時は、一筋に忠を竭さん。然りと雖も日來御

入魂の形勢を風聞せば、却て緯整はざるべし。向後御疎遠に仕らんと、神明に誓つて退去し、夫より次第に遠のきしが、其後家康公、前田利家卿以下確執に及び、既に兵革起らんとせしに、忠興は御約諾此時なりと、前田氏は縁家といひ、殊に入魂なるにより、利家卿を頻に諫めし故、遂に家康公に伏せられず。且細川は、關ヶ原陣にも忠を盡されけり。

或本に、細川忠興が父は、兵部少輔藤孝といふ。剃髮して幽齋と稱し、從二位法印に敍任せらる。尊氏將軍十二代の後胤義晴公の四男なり。母は環翠軒義賢が息女、飯川妙佐の嫡なり。別記に、幽齋は、三淵伊賀守宗勳が子なりと云々。義晴公東山鹿ヶ谷に移住し給へる

時に、義賢が女寵せられ、程なく懷妊して男子を産す。嫡は義輝公。永祿八丑年五月十九日に、三好松永が爲に御生害なり。光源院殿と諡せりとぞ。二男は、北山鹿園寺の用嵩ようそうといふ。三男は南都一乗院の御

門主覺慶後に還俗し給ひ、將軍となり、義昭公と稱し、慶長二年八月廿八日、六十八歳にて薨去なり。靈陽院殿と諡す。四男は則ち藤孝なりしが、

彼母藤孝を連れて、三淵伊賀守に嫁せり。大和守とは、異種同腹の兄弟なり。或本に、三淵伊賀守時員は、剃髮して宗薫といへり。將軍義晴公に仕へしと云々。後年藤孝、細川右馬頭元常或は刑部少輔元有ともありの養子となれり。又細川家を長岡

る時に、家康公、御鎧篋を寄せられ、御腰より鎰を出され、佐渡之を明けて甲冑を取出し、底を見るべしと宣ひける故、本多則ち命に従ひし處、黄金五十枚宛、四篋の底に入置かれたり。彼黄金を検め見るに書付あり。是二十箇年先に、參州に於て納まりし金なり。扱仰に、凡そ金銀は、遣へば遣ひ次第の物なり。參州にて、金奉行より、直に此篋へ入置かせたりしが、果して今度の大用を辨ず。之を越州に渡すべしとて、松井に授け給ひければ、興長甚だ悦び、明日脚力を丹後へ下し、黄金を返上仕るべしと、謹んで申上げければ、家康公の仰に、夫は汝が不思議なり。此體の黄金、此櫃より出して用立てしと、他聞に達しなば、越州の爲然るべからず。敢て返す事勿れとありければ、覺えず松井は紅涙を浮べ退出して、右の趣を忠興に告げ、彼黄金を秀次公へ返上し、危急を免るゝが故に、忠興は、家康公の御深志心に徹せしか、或時家康公、諸侯四五人を招き給ひ、饗應ありける時、細川も其席に列なりしが、各退散の期に至り、忠興は相殘りて右の謝禮を述べ、且曰、先達つての洪恩、何を以て之を報せんや。自今以後、御一大事あらん時は、一筋に忠を竭さん。然りと雖も日來御

入魂の形勢を風聞せば、却て緯整はざるべし。向後御疎遠に仕らんと、神明に誓つて退去し、夫より次第に遠のきしが、其後家康公、前田利家卿以下確執に及び、既に兵革起らんとせしに、忠興は御約諾此時なりと、前田氏は縁家といひ、殊に入魂なるにより、利家卿を頻に諫めし故、遂に家康公に伏せられず。且細川は、關ヶ原陣にも忠を盡されけり。

或本に、細川忠興が父は、兵部少輔藤孝といふ。剃髮して幽齋と稱し、從二位法印に敍任せらる。尊氏將軍十二代の後胤義晴公の四男なり。母は環翠軒義賢が息女、飯川妙佐の嫡なり。別記に、幽齋は、三淵伊賀守宗勳が子なりと云々。義晴公東山鹿ヶ谷に移住し給へる

時に、義賢が女寵せられ、程なく懷妊して男子を産す。嫡は義輝公。永祿八丑年五月十九日に、三好

松永が爲に御生害なり。光源院殿と謚せりとぞ。

二男は、北山鹿園寺の用嵩ようそうといふ。三男は南都一乗院の御

門主覺慶後に還俗し給ひ、將軍となり、義昭公と稱し、慶長二年八月廿八日、六十八歳にて薨去なり。靈陽院殿と謚す。

四男は則ち藤孝なりしが、

彼母藤孝を連れて、三淵伊賀守に嫁せり。大和守とは、異種同腹の兄弟なり。或本に、三淵伊賀守時員は、剃髮して宗薫といへり。將軍義晴公に

仕へしと云々。後年藤孝、細川右馬頭元常或は刑部少輔元有ともありの養子となれり。又細川家を長岡

氏といへるは、昔日藤孝、京南勝龍寺の軍に戦功あり。故に信長公より、息忠興へ、別に長岡の莊を、采邑の地に拜領せるに依つてなりと云々。

後藤又兵衛戦死附神保長三郎討たるゝ事

大坂陣中
軍評定

去ぬる四月廿六日、或廿九日、秀頼公の御前に於て、新古の輩打寄りて、軍評定ありける處に、大野修理亮治長申すは、此度の合戦は、如何なる手段が宜しかるべし。皆々心底を遣さず、言上あるべしと尋ねければ、後藤又兵衛基次進み出でて、此間諸將の軍議を承るに、天王寺表に柵をふり、關東勢を待受け、引付けて戦ふべしと、御内談區々に御座候へども、情愚案を廻らし候に、味方に柵をふり引籠る體なりと、寄手へ相聞え候はゞ、術皆相違して、味方の軍略、徒事となり申すべく候。思ふに大軍なる東國勢を城外に引受け、殊に數年軍に馴れ、名將と呼べるゝ大御所に對し、蒐合の合戦を挑み決せん大將、恐らくは味方にあるまじく覺え候。御存知の如く、小軍を以て大軍に利を得るは、土地の善惡に依る習に候。敵勢は大和路より寄せ來

り候へば、多勢の取扱自由ならず。山中の切處に待受け、先陣を切崩さば、後陣は一先づ郡山奈良邊までも引取らん事、必定に候。然れば重ねて寄せ來り候とも、大軍の習なれば、五日十日は手間取るべし。其内には能き圖を見て、計略あるべく候。天王寺表にて、大軍を引受けん事は、然るべからざる由を申上げければ、秀頼公を始め、皆此議に同じける。然らば又兵衛先鋒として、道明寺表へ馳向ふべしと仰出されたり。

一本に、後藤又兵衛、大野に對して、大御所、大和越に發向の由なれば、敵兵山の半を下る時、一度に突蒐り、敵の不意を撃つべしと勸むれども、基次勇氣に誇り、自己の譽を立てんとするを憎み、大野を始め、之に應ぜざりしと云々。

同廿八日夜に入り、後藤は大坂を立つて、平野に陣をぞ取つたりける。

或記に、此頃本多佐渡守の親類相國寺の楊西堂を御使にて、又兵衛方へ、關東に従ひ、裏切仕候は、本國播州を可被下置旨を仰遣されし處に、基次、西堂に向ひ、先づ以て忝き仕合に御座候へども、御請は申し難し。其趣は、豊臣家の御威

光強く、關東御手弱くば、御味方仕るべきなれども、落城旦夕の内と相見え候間、御意に應じ難し。然れども御頼の儀を、水になす事も如何なり。某斯くてあらん内は、一日に埒明き候當家も、十日は持堪^{もちこた}へ申すべし。關東への御奉公には、一番に討死仕るべく候と、返答せりと云々。

五月五日に、兩將軍家御出馬の由、諜者歸りて告げければ、後藤は、衆と相議しなば、又異論ありて、難澁せんとや思ひけん、又は豫て又兵衛は、關東へ内通するの由風聞ありしかば、此事を無念とや思ひけん、六日の朝丑の刻、總白の旗に、黒半月の馬印を眞先に進め、水戸と名付けたる鹿毛なる馬の太く逞しきに、具鞍置きて打乗り、先陣は山田外記・片山勘兵衛以下三千餘、左備は岩澤三郎兵衛、右備は古澤四郎兵衛、左右の軍勢九千餘、後藤が旗本の勢五千餘、都合一萬四千餘にて、平野を打立ちて、數千の松明を擔がせ、大和街道へ向つて押出せば、薄田隼人正兼相・渡邊内藏介・糺・眞田左衛門佐幸村・毛利豐前守勝永・明石掃部介全登以下も、追々にこそ馳向ひけれ。

或本に、五月五日の夜、眞田左衛門佐・毛利豊前守は、大和口の大將後藤又兵衛が陣場に来り、今度の軍評定しける處、今宵の中に、國府の山を越え、三人の軍勢三萬を一手になし、山口に備へ、大御所の旗本へ、手懸りに突懸り、一時に雌雄を決すべし。鍵の柄の續かん程、太刀の目釘の怵ふるまで、命こそ限なれと、三人最後の盃を取交し、明日の一番鷄に、道明寺^{平野より二里餘}にて出合ふべし。命の内も、今暫くの間ぞと、互に暇乞して歸りけると云々。

或記に、後藤又兵衛は、六日の朝子の刻大坂を發し、胴勢の松明、葛井寺まで續きしかば、寄手の水野日向守勝成の炮卒長谷川三郎右衛門を以て、堀丹後守直寄が方へ遣し、敵一定夜蒐と相見えたり。今宵鎧を脱がず、馬に鞍置き張番を出し、油斷すべからざる旨を達せり。堀丹後守之を聞き、日向守は、場數の譽あるに似ざる未練の辭かな。夜蒐の勢、如何ぞ松明を焚きて來るべしと、私語きける處に、又勝成が使來り、松明皆消えたり。夜蒐するにはあらずといひ送りけるを聞き、直寄心に察する様は、必定場數の功者あつて、消させたるなるべしと、馬の鞭を

緬め、相待ちけると云々。

偕基次は、葛井寺^{平野}を打立ち、譽田の入幡を馳過ぐれば、夜も篠目に及びけり。基次心を急^せき、夜の中に山中へ入るべしと思ひしに、遲滯せし事の口惜しさよと、尙も馬を早め馳向ふ處に、關東勢三千餘り、山崖より葛井寺の方へ出で來れば、後藤之を見て、馬上にあり乍ら、甲を取りて打着、使番の中川左門を招き、後陣の將明石掃部介全登が方へ、關東勢三千計り山間に相見え候。何とて遲はり給ふぞといひ捨て、道明寺河原へ打出でけり。

一本に、後藤が斥候は、夜中たるにより、誤つて國分に出で、關東方微勢たる山を申上げければ、例の又兵衛、自己の功を遂げんと、後陣の大野が組を待合すに及ばず、忽ち勢を發し、夜中に片山に押上り、明くるを遲しと相待ちけると云々。

斯る處へ、左門は馳歸りければ、又兵衛重ねて中川を呼び、向の山の出口に張出したる敵の備は、持切か持續か、跡を見切つて來れよといへば、畏りて候と、左門は又馬に乗り、右手^{めて}なる小山へ登らんと思ひ、馬を早め筋違に乗揚げしに、東國勢の先

手より、左門が乗りたる馬を、鐵炮にて打殺しければ、頓て馬より飛んで下り、山上に攀り、敵陣を見渡せば、奥田三郎左衛門・松倉豐後守・堀丹後守・水野日向守・伊達陸奥守・松平下總守・別所孫二郎・本多左京亮等を始め、數萬の軍勢谷より峯に續き、寸地も残らず充満しけり。

或記に、水野日向守勝成は、國府に陣しけるが、前に片山あつて、道明寺の方見え兼ねるにより、是より先に、自身斥候に出づる處、相組も俱に出でんとす。其時日向守、物見は大勢出でざる者に候へども、望にて侍らば同道申さん。さり乍ら家來は、殘し置かるべしとて、諸將と共に片山へ來り見立てけるに、良き場所なる故、堀丹後守・別所孫二郎兩人、共に爰へ陣を寄せて然るべしと申せば、勝成聞きて、大和口の儀は、某に命ぜられたれば、方々の指圖は無用たりと申す所へ、二陣なる伊勢組本多美濃守よりも、使者を以て、日州、片山へ陣せられなば、美濃守は國分に相詰むべき由なり。水野聞きて、後陣より先手への指圖詮なし。某は國分に罷在るとの返答なり。猶も堀丹波守・別所孫二郎、並に檢使兩人の内なる村瀬左馬

介は、遮つて此片山に陣を取り、然るべしと申しければ、勝成氣色を損じ、今度二條に於て、兩御所御直の仰を蒙り、大和口御先手の御名代に遣はさるゝ上は、去年大和勢が、藤堂和泉守をあしらへるやうの我儘を致さば、届くるに及ばず、二人も三人も踏潰せよとの上意なれば、左様の我儘はさせ申すまじ。此片山を見るに、南に續き平場にて、菟能き處なれば、味方此山に陣せば、大坂勢平野を通り、葛井寺より直に譽田に到り、此山へ押上り、嵩より追下すべし。此所は足掛りなく、少しも抱へられ申すまじ。國分は片山と隔り、其間に田切川などもあつて抱へなければ、國分に宿陣し、明日小山村迄押すべし。國分より本道を、石河河原へ菟り、玉手圓明の方へ廻しなば、片山に上る敵は、真中に取籠めて討取るべし。敵に仕掛けさせると、敵に仕懸くるとは、格別の勝劣なり。村瀬殿は、御檢使の事なれば、理非の決斷せらるべき條勿論なり。陣取の御指圖は、御無用なりと口論に及びければ、相檢使中山勘解由或人曰、三萬石上總國、久留利城主是なり。近世黒田と稱すと云々中に入り、口州の指揮尤至極せり。某もさこそ存じ候と、雙方を宥めければ、日向守も心解け、村

瀬は多年の朋友なり、中山氏は、今日始めて對面すと雖も、存念一致する上は、事相濟めり。さあらば國分へ歸るべしと、各片山を引きて、國分にこそは陣しけれ。水野、片山に陣せば、彼猛勢の、後藤に忽ち攻破らるべき事必定なりと、後にぞ人も申しけると云々。

後藤又兵衛は、先に斥候に遣せし左門を、心元なくや思ひけん、再び使番の片山大介を呼び、向の山を此方へ取り、味方の備を立つべしと申し、其後に、使番の者を追追に差遣し、我身も河原へ押出せば、山田外記は、烏毛半月の指物にて、片山勘兵衛と共に、北の尾崎へ押行けば、山の峠筋に向ひ、古澤四郎兵衛進み行く。左備は岩澤三郎兵衛なり。基次は黒糸絨の鎧に、同毛の頭^づなりの兜鍪に、顰の前立物打つたるを猪首に着なし。黒き羽織に、熊の革の尻鞆かけたる太刀佩き、眞黒になつて、都合一萬四千餘騎、段々に備へ、寄せてや戦はん、待ちてや利あらんと、敵味方先後を見合せ、馬に白泡嚙ませて控へたり。寄手の方には、松倉豊後守が従士奥田三郎右衛門忠一、僅に三千石を領すと雖も、抱へ置きし譽ある浪人神子田四郎右衛門、下野

道二

一本に、才伊豆守入道道二とあり

阿波伊兵衛

或記に、鳴戸介が事なりと云々。或本に、阿波鳴戸之助は、始め佐々内藏助成次に仕ふ。度々戦功ある者なり。越すに越されぬといふ下心な

以て、付けたる名なりと云々、

岡本加介を相具し先に進み、此手の先登を、他の勢に越させては、末代

まで大和武者の名折ならんと、山崖を、西へ向つて馳出で、弓手なる玉手山に、後

藤が先手山田外記が備へしを見て、勢を立直し、直に南の山へ攻上らんとする所に、

桑山左衛門

本書に左門とあり

馳着け、今暫く相待ち、旗頭水野日州の續かるゝを見合せ、蒐らる

べしと制すれども、奥田が勢は耳にも聞かず、嶮路容易ならざるに、士卒は鎧を錫

杖持になし、曳々聲を出し攻上り、ひしくと下立ち、鎧をおつて押取りく、尾崎の方へ

掛り、向の中にも、赤堀五郎兵衛といへる者、鎧を逆に振擔ぎ、只今鎧を合せて見す

べし。我に續けや若殿原と、勇み進んで蒐りける。山田之を見て、如何なれば御預

の足輕に、鐵炮は打たせぬぞと、荒らかにいひしかども、約せよしき場なれば、續く炮卒

もなきが故に、山田大に怒りて、鐵炮二挺取寄せ、寄手の勢の正中へ打入れけるに、

奥田が郎等岡本半助、切岸の上へ馳上らんとせし處を、鐵炮にて眉間を打たれ、忽

に死しけれども、奥田が勢は怖るゝ氣色もなく、喚き叫んで蒐來れば、後藤が組の

足輕大將佐伯治良太夫は、今日の手始ぞと詞をかけ、切岸より飛下りければ、寺本八郎右衛門・湯淺三郎兵衛・金萬平右衛門・黒川安左衛門・山田八左衛門・片山勘兵衛續いて飛下りける。山田外記も、持ちたる鐵炮投捨て、是も同じく飛んで下もり、一同に立並び、鎧袈を作り、一戦せんと待かけたり。其時奥田が備の中より阿波伊兵衛、鎧を以て突掛り、之を軍の始とし、火を散らして攻戦へば、其聲天地に響きて夥しかりける。然れども伊兵衛遂に討死せし故、後藤が勢は氣に乗つて、爰を先途と突立てしかば、寄手は山下へ突落され、一度に咄と崩れ懸り、奥田三郎右衛門を始め、下野道二井上四郎兵衛・神子田四郎兵衛も、枕を並べて討死せり。或記に、奥田が墓は、河州安宿郡片山村にありと云々。山田外記・同左衛門父子、並に片山大介・金萬平右衛門・黒川八郎右衛門、各高名あり。佐伯治郎太夫は、敵に突伏せられてぞ死したりける。寄手の士卒は怵へずして、我先にと敗走す。然るに大和組の一陣松倉豊前守重政は、少しも之に氣を屈せず、奥田が討死を餘所に見て、山崖の西へ向つて押出し、後藤が家人井尾久左衛門が、種島三十挺にて、二百計も控へたる中へ、眞一文字に突懸り、天野半之介

可古よしひさといふ者、一番に鎧を入れ、大坂勢を捲り立て、山に添うて追行けば、後藤が胴勢に備へたる山川帶刀・北川治郎兵衛・古田九郎八等、三千餘を率し、近々と控へたれども、松倉勢に取切られ、猶豫してこそは居たりけれ。豊後守の舍弟松倉十左衛門重能は、士卒を下知して、一同に鐵炮を打ちかけし所に、後藤が勢の中より、青漆の鎧着たる武者、只一騎駈來り、重能と鎧を合せしが、十左衛門は兩眼に傷けられ、敵も手を負ひ、互に引退かんとせし所に、重能の家人山本權兵衛突入りて首を取る。是此手の一番首とぞ聞えける。後藤が手よりは、遠藤大隅といふ者、諸卒に抽んで、松倉が手に馳入りて、重正が家老井村助兵衛井村一本に村井に作る鎧を合せけるが、竟に井村は討たれにけり。此勢に乗つて、津田庄兵衛・吉村治郎兵衛・鷲見安太夫・小出八兵衛・佐藤忠兵衛等も、爰を詮と戦へば、松倉勢も突立てられて敗走する處に、天野半之介は、疼む氣色もなく、追來る敵と、火花を散らして攻戦ひ、持ちたる鎧も打折れ、前立物も突破られ、既に討死と見えたりけるを、堀丹後守直寄は、先陣の漂ふを見て、糟毛の馬の太く逞しきに打乗り、多勢の中へ突いて入り、自ら力戦すれば、豊後守

が勢も盛返し、前後に討取る敵の首、三十餘級なりとぞ聞えし。本多左京亮或記に、手、時、十六歳も、躬ら敵に當り、其臣本多外記・桑村勘兵衛・一色主殿會我作兵衛・牧村又右衛門・三田村市兵衛・近澤伊兵衛・寺田勝左衛門・古田十兵衛・竹内猪右衛門・小橋加兵衛・前田清十郎・堀口作兵衛等も、鎧を合せり。又丹羽太右衛門は、首級を得たりと雖も、さすが英武の譽ある後藤基次、且後陣より來りし薄田隼人正兼相渡邊内藏介・紀など、去冬の敗績を恥ぢて、身命を顧みず相戦ひし故、東軍大に敗軍し、松倉豊後守も、味方に離れ、扨從同齋三郎と只二騎、敵の中に紛れ居たる處に、山本權兵衛・天野半之介、馳入りて救ひ得たり。

或記に、松倉豊後守敗軍の砌、胴勢先立ちて裏崩せり。此時堀丹後守は二陣にありて、崩るゝ人數を左右に押分け進みしが、松倉が旗本の驗紺の幟に、朱筋附きたるを拾ひしかば、松倉は逃げたる由披露せしにより、堀と松倉出入になり、御歸陣の後に、京都の御前に於て、御尋ありければ、豊後守曰、備立の時、幟は跡に立て申候。裏崩致し捨て申すを、拾ひ取りて候は、我等より、丹後守は遅き事、分

明に御座候と言上す。大御所の御意には、冬陣に、藤堂和泉との申分も、能く其筋の立てり。何にても豊後は無理を申さぬ者なり。只今の申分も、尤に思召すとの御事なりと云々。

同記に、天野半之介は、始め中根左源太といひし御直參なりしが、門奈左門といへる者喧嘩の時、助太刀せしに依つて、駿河を立退き名を替へたり。今度の戰に、松倉の備を借り働ありし故、豊後守、大御所へ言上に、某の備追立てられ候時、天野半之介、敵を突返し候。其時丹後守は、河原の鼻を唯一騎乘廻し申候。堀が助は請け申さる由を言上せり。御内意に、半之助今度の働により、召返さるべくは思召さるれども、先年喧嘩の場所惡しきにより、以來御仕置の爲なれば、其事に及ばれず。諸大名の内、何方になりとも奉公致すべき旨仰ありけり。後に淺野但馬守長晟へ、二千石にて有付きけると云々。後年京師に住せりとぞ。

或記に、山本權兵衛義安が父は、義純七助と稱せり。去冬十二月四日、松倉豊後守重政・藤堂和泉守高虎は相備と定まり、道證口寄手の中に加へければ、豊後守、

七助に對して、今般勝れたる軍忠を勵むべき覺悟なり。汝が指圖にて、仕寄を附くべしとありければ、義純則ち手段を以て、隧道を掘り地中を往き、頼軍に抽んで、道證口の門近く進み、竹束を附けたり。城外の寄手、竹束迫合になりける處、諸手に越えて、既に墮際へ至りければ、城中より玉箭烈しく打出したれども、四日は終日持泳へし故、松倉大に感じけり。然るに其夜上意を以て、諸手の並に引入りしが、此時七助は、鐵炮にて左の腕を抜かれたり。此疵癒え兼ね、今度は大坂に向はずといふ。 此刻傍輩の岡崎與十郎は、墮際に於て、鐵炮に中り死せり。扱味方の人數を引取りし後、重政、軍士列座の中にて、與十郎が死體を引取りけるやと尋ねければ、近臣答へて、其儘に候と申しける故、豊後守大に怒り、自身行向ひ、引取らんと座を立ちけるを、山本權兵衛罷出で、某に仰付けられよといひさま、持楯提げ、堀端に進み尋ねけるに、城中より打出す鐵炮の玉、楯に二つ、腰刀にも中りしかども、恙なく引取りければ、同列の士天野半之助、吉岡九左衛門、岡野新左衛門を始め、家中の諸士、其壯勇を稱譽せり。義安、今年十九歳とかや。 然るに、重政の息長門守の時、寛永九壬申年、所以あ

つて祿を辭し、攝州大坂に住せし處、其後松平隱岐守定直豫州松山の城主に仕へ、寛文元年八月十二日、六十五歳にて死せりと。山本・天野の二男子の墓は、洛東黒谷にありと云々。

水野日向守勝成は、先鋒の大和勢、敗軍するを見ると等しく、備を崩し手蒐りにして、城將渡邊内藏介糾と、烈しき戰三度までなせしが、敵兵も若干討たれ、味方も死傷多かりける。爰に丹波式部少輔氏信、一本に、氏澄に作るは誤なるべし。父を氏次勘介と稱す。織田信雄公に仕へ、慶長六年三月に卒せり。行年

五十一歳とかや。今播州三草を領する丹羽氏の家系是なり、

僅に一萬石を領すと雖も、甲士八十計を具し、先達つて月山

を廻り進まんとしけるが、先鋒大和組の敗北を見て、旋て揮道筋を避け、道明寺の地方に兵を下敷き、七八挺の鐵炮を發し、敵を會釋し、能き圖を見合せ、勝成と共に戰ひ、敵へ横鎗を入れけれども、後藤が勢は、尙も盛に攻戰ふ時に、式部少輔下知して、鯨波を發しければ、城兵是に驚き、猶豫せし處を、勝成氣に乗り蒐りけるが、道明寺を過ぎ、左は深田、右は小橋ある處に於て、先陣の内なる本多左京亮、崩れ懸る中にも、栗尾角兵衛は、沼に乗込み命を失へり。水野日向守勝成、中山勘解山昭守、

村瀬左馬介良治は、馬より下立ち、鎧押取りて掛りける。本多が家老の山澄某は、
猩々緋の羽織着て馬に乗り、逃げ來りしを、勝成大音聲にて、卑怯者め能く見知り
たりと詞を掛け、鎧を伏するを見、本多勢も人數を踏止め、從士丹羽太右衛門は、晴
なる討死を遂げたり。又玉手主水・不破五郎左衛門・森將監・三田村瀬兵衛・畑水芒七・
杉四郎右衛門・西村六右衛門は、首級を得たり。水野が臣杉野數馬・竹本孫介・松田金
兵衛を始め軍功を顯す。物頭以下、死傷する者は夥しかりける。時に最前山田外
記が、打勝ち退かんとする處を、松平下總守忠明が勢、山田を目掛け押來りしが、伊
達家の勢と一手になり、後藤が勢を取圍みて、攻戦ひける中に、堀伊賀守利重父子
は、去年御勘氣を蒙りたる故、密に忠明が備に加はり、魁の功を顯す。下總守が家
來山田十郎兵衛は、一番鎧を合せ、戰記に、後討死すと云々、菅沼七郎右衛門後に討死す・奥平金彌以下、分
取高名せり。川北權兵衛は、後藤三彌を組打にす。又片倉小十郎景綱は、頻に兵を
進めて相戦ふ。隊長安藤權左衛門正勝、治右衛門正次の弟也といへり、未詳、冑付の首級を得たり。後藤薄
田・渡邊が勢は、大半死傷す。此時大野修理亮・眞田左衛門佐・明石掃部介等、其勢二

萬五千にて、基次を救はんと押詰むれば、後藤勢之を見て、芝居を踏まへたる中より、古澤四郎兵衛只一騎乗込み、敵と馬上にて引組み、山より下へ轉び落ち、終に討たれぬ。舍弟古澤小源太、其外豊田與右衛門・津田勘三郎を始め、大剛の者八人討死す。大將又兵衛も、數箇所疵を被り、片山の上にありて、井上四郎右衛門を、薄田が方へ遣し、某は爰にて討死を遂ぐべし。貴殿は今一戦あるべしといひ送れば、井上承り、馬を馳せて兼相に之を達し、歸路に命を殞せりとかや。又渡邊内藏介を始め、水野が爲に敗軍せしかば、眞田が方へ使を立て、我等既に創を被り大半討たれ、重ねて戦ひ難し。殊には眞田殿の駆引の妨たるべし。傍に屯し、横を撃つの體を見せ、敵の志を奪はんと申遣せり。扱又兵衛は、仙臺勢に、道筋の堤を取廻されければ、飽くまで戦ひ、主従僅十三人になりし處に、片倉が手に、荻野・岩村・梯崎・竹川とて、小銃の妙術四人の中、荻野又一郎が鐵炮に、後藤が内胃を打ちたり。一本に、腰の上とあ。基次齒嚙をなし、蒐らんとしけれども、深手にして働き得ざれば、家人吉村武右衛門一本に武兵衛を呼寄せ、我れ手を負うて、進退自由ならず。首搔落して深田に埋め、敵

に其色見すべからずといひければ、吉村泣々首を討ち、沼の中へ押入れける故、更に知る人なかりけるとぞ。基次時に五十六歳とかや。一本に、四十六とあるは誤り。家臣宇野十兵衛入道も、今朝より此所彼所にて戦ひけるが、既に基次戦死せしかば、戦はんとせせず、指物を地に突立て、村上天皇の後胤にて、數代播州に住したる宇野十兵衛宗味が首取つて、高名にせよと呼ばはり、討死せり。後藤が組の物頭長澤七右衛門も、大勢に渡合ひ、忽に討死す。其外の者共は、一返しも返さず敗軍しけり。又湯淺左吉は、山の下段に於て、父三郎兵衛に出合ひ、基次討死の由を聞きて、共に退かんと申しけるを、左吉が曰、主人の身近く御奉公致候我等なれば、父の御先途を見届け候事は、御免下さるべしといひ捨て、山上へ上りて討死せり。

或記に、豫州の人曰、以前、他邦より來りし軍談の旅客あり。同國道後に、浪速亂を談す。村民舉つて之を聴く。始めは信じて群參しけるが、終に臨み、虚談なりとて、皆人之を容れず。彼旅客が曰、我れ更に虚談を述べず。何が故に斯くいへるやと問ひしに、村民いふ、後藤又兵衛事は、大坂落城後當所の温泉に來り、劍を

療せり。所の別當之を怪しみて問ひしに、其切なるに愛で、又兵衛は實を以て答ふ。別當聞きて、其功名を崇み、且又兵衛が活氣に懷き、之を勞はり親めり。所の者共聞傳へ、公聞を恐れ、潜に黨を結び不意に後藤を襲ふ。基次立向ひ、奮迅して數人を斬ると雖も、大勢打圍み、既に縲紲の辱に會はんとするに及び、内に駈入りて自害す。則其首を取り、東武に獻せし處、御沙汰の上仰出されは、後藤又兵衛事は、道明寺に於て戰死せり。然るを再び後藤が首といひて捧ぐる事紛はし。さり乍ら眞偽を糾すに及ばずとの趣にて、其功空しくなれり。其後郷民、後藤が靈を恐れ、八幡宮の傍に、新に祠を立て、九月十三日八幡宮の例祭は八月十五日なりに、五斗の樽祭とて、彼小祠を祭る。然るを道明寺表にて、討死と講ずる事は虚事なり。然れば其餘も嘸あらん。故に信するに足らずと答へければ、旅客汗顔して口を噤みしと云々。

或曰、後藤二男、又兵衛と稱し、青山伯耆守に仕へたりと。當時は佐左衛門と稱し、知行百五十石を領すと云々。

或記に、後藤又兵衛は、死を遁れたりといへり。然れども、黒田長政は後藤が戦死を聞きて、重恩の家を去りたる者なるが、豊臣家の爲に死を遂げたるは殊勝なりといへるを、傍に居て聞きし野口左介が子孫にいひ傳へたり。又後藤が死體を泥中に埋めたるは、下熊平右衛門といふ者なり。渠、越前に居て、人に語りけると、老人のいひける。又兵衛討死とあるが、正説なるべしと云々。

或記に、後藤が嫡子隠岐守は、毛利秀就の御預にて、御歸陣後に、切腹仰付けられたり。二男又市は、細川越中守が方に居たり。別記に千石。其子を又左衛門と稱し、細川

家にあり。末子は後藤が小舅三浦主水が甥なれば、三浦治兵衛と稱し、松平本姓池田相

模守光仲に奉公せり。其子三浦左衛門は、松平伯耆守綱清に仕へしが、何れも御穿鑿はなかりけると云々。

寄手の神保長三郎相茂は、城兵を數多討取り引退きけるを、伊達政宗之を見て、度彼手先へ働きける事を、口惜しくや思ひけん。鐵炮を打掛けゝる程に、此は味方なるぞ、あやまち過すなと聲々に呼ばはりけれども、さなはいはせそとて、數百挺の鐵炮をつ

るべ打にしける程に、長三郎を始め三十七騎、忽ち味方討に遇ひける事こそうたて
けれ。一本、此事は
七日に作る。

或本に、神保長三郎を、仙臺より、鐵炮にて悉皆打殺せり。別記に従者一人と。長三郎
は別狀なしと云々。未詳。後
に大御所より、此事を御尋ありし處に、奥の兵、一偏の東夷たるを以て、大和武者
の美麗を見、我黨にあらず、城兵なる事必定せりと、思誤り候と陳謝しけるが、重
ねて台命なかりしと云々。

別記に、此時伊達方と水野日向守家令塚本彌兵衛・竹本左門・寺島助九郎三人、味
方討せりと云々。

薄田隼人正討死の事

後藤又兵衛基次討死より以前に、井上四郎兵衛を、薄田隼人正が方へ遣し、某戦ひ
疲れたれば、暫く息を繼ぎ申すべし。隼人殿には、思召の儘一合戦あるべしと申送
りければ、其時隼人正は、畏り候、御心靜に御休息あるべしと返答し、稻麻竹葦の

如く打圍んだる敵陣を、遙に見て申すは、敵は目に餘る大勢なれば、尋常の戰にては叶ふまじ。皆悉く討死と思定めよと、白地の旗一流正先に押立て、些つとも擬議せず突いて入り、喚き叫んで戦ひければ、徳永左馬介・遠藤但馬守が兵は、薄田が勢に菟惱され、若干討たれける處に、稻葉淡路守・通吉・西尾丹後守・忠永は、薄田が勢の進退を能く考へ、其弊に乗つて討取らんと、三階笠附きたる旗と、赤地に松の附きたる旗を正先に進めて責蒐れば、薄田が二陣なる井上小左衛門・時利・山本佐兵衛・宣勝、一本、此外に増田兵おつとりと、二三百騎にて蒐合せ二手に分れ、一人も餘さじと押取籠め、汗馬東西に馳違ひ、追つつ返しつ、旌旗南北に開き分れ、卷きつ卷かれつ、互に身命を惜しまず兩三度揉合ひ、西・尾・稻葉が兩勢も數多討たれければ、井上が勢も大半疵を被り、遂に小左衛門討死せり。

一本に、井上は是より先、從兵に謂つて曰、味方の勢盡きたれば、我れ將に此所に死せん。汝等我を救はんとせずして、自ら戦ひ功をなすべしと、呉々も申含めければ、士卒皆命に應じて進み、手痛く戦ひ、馳還りて覩れば、時利一本定利に作るは、言の如

く戦死して、多くの屍、既に野徑に横はれり。其首級は敵の爲に獲らる。從兵等
 力及ばず、竟に屍を擔つて歸れり。俱に死せる從兵は、筒井善四郎・木村源太郎・
 堀江長吉・森助右衛門なり。又遠藤大隅といふ士あり、與方、松倉豐後守が家臣村井
 助兵衛を討つて首級を得。福田庄九郎といふ者は、首を斬る事一級。然れども事
 急にして、泥中に置く。藤井寺前の田地。厥後、大隅と庄九郎、書を以て迭に其功を證す。庄
 九郎が末子源介、其書を傳へたりといへり。時利に二子あり、落城の時、其母之を
 携へて遁れ出でたりしと云々。尙附録にあり。又遠藤大隅が事は、後藤討死の條にも出せり。
 一本に、井上は、菅沼織部正定房が從士汀三右衛門に討たれ、大谷大學木下山城
 守も、戦死せりと云々。

隼人正も、今は是迄なりと覺悟して、大勢の中へ割つて入り、十文字に破り、巴の字
 に廻る。元來薄田は、力量人に超えたれば、馳寄る敵を弓手の方に胴切にし、或は
 尻居にどうと打据ゑければ、東兵之に辟易し、敢て近付き得ざりけるが、本多美濃
 守忠政は、段々の旗に朱の瓢箪の本に、金の罽連付きたる馬印を、馬の脇に引付け、

戰屈したる敵の中へ、横合に蒐入り、千變萬化して、揉合ひく攻めければ、大坂勢も防ぎ戰ふと雖も叶はずして、備四度路になりけるを、本多が家人濱名三郎兵衛・伊藤角之丞・太田新兵衛・伊藤八郎右衛門・長井九右衛門等、並に松平下總守忠明以下の勢、一度に咄と蒐りける故、城兵彌咏へ兼ね、竟に敗北したりければ、薄田隼人正・榎島玄蕃允・同左太夫・山川帶刀・北川治郎兵衛・大久保左兵衛・古田九郎八等も、共に崩れて引退きしが、敵さまで追はざれば、薄田は敗軍の士を集め、猶一戰して討死を遂げんと、譽田の入幡に陣取りて相待ちける時、水野日向守勝成之を見て、一番に進んで鐵炮を打懸け、自ら鎧を取り突いて蒐る。城兵も相蒐に懸り、榎島・水野は、互に鎧を合せける。勝成が兵懸隔て、防ぎ、玄蕃が從士も、主人を討たせじと挑合ふ。此時城兵百十餘人討死すれば、水野が兵も、手負討死許多ありける。一本に、三百餘人。中にも杉村數馬・竹本廣介・松田金兵衛等高名せり。又伊達家の茂庭周防物頭なりは、人々の高名するを、徒に見物せんも口惜しければ、一軍して、味方の眠を覺さんと望みけれども、政宗之を止めければ、周防は手勢を引率し、馳出でんとしけるを、片倉小

十郎急度見て、透さず八幡山に攻上り、三ヶ度まで相戦ひ、蒲倉仁兵衛秋保刑部父子・草川源内・牧野・大倉今泉・山城・小田部大學・松本若狹以下、比類なき働せり。片倉が手へは、首級廿八を得て、三十六人討死せしとかや。

一本に、伊達の家人は、後藤・薄田兩將との戦に、首數多く討取る中に、石川照光首五つ、伊達安房成實同七つ、茂庭周防守元同二つ、奥山出羽兼清同六つ、伊藤肥後信氏同三つ、黒澤文七郎常道足輕首三つ、原圖書定信同一つ、磯田作右衛門勝頼同一つ、大山助兵衛同一つ、佐々若狹元綱同二つ、原田甲斐親成同二つ、上田久入・佐藤右衛門・長尾主殿・片岡五郎兵衛・鈴木理右衛門・大内齋兵衛・菅沼源十郎・川口治左衛門・矢部久作・犬飼忠三郎・齋藤外記・成田小吉・荒川與治郎・富澤權内、各首を取る。其外片倉が手へ、都合首數二百餘。打拾ひし首百餘。政宗家來新妻太郎作・松本彌三右衛門等を始め、討死數輩ありしと云々。

水野日向守が息美作守勝臣、一本に勝俊、竝に中山勘解由・村瀬左馬介、其外本多左京亮が軍士等は、自餘の葉武者に目も掛けず、此所に開き彼所に攻合ひ、薄田一人を討取ら

んとしけれども、鎧良ければ裏かゝす矢も無く、打物達者なれば、近付く敵を切つて落し、暫く相戦ふ内、本多が勢を十人計り討取りけるが、其身鐵石にあらざれば、竟に討死して、首は水野が家人川村新八取つてけり。

一本に、薄田隼人正は、五月六日の拂曉、家人に向ひ、某は後藤に談ずる仔細あれば、先手へ罷越すべし。物前の儀なれば、能く備へよと馬に打乗り出でけるを、家人共は御供せんといへども、一人も來る事は無用なりと制しつゝ、鎧持計りを召連れて行きけるが、後藤が手に軍始まり、戦半の頃、馬を片山へ乗出し、水野が手に向ひ、川村新八と鎧組み、夫より組打になりしが、隼人正元來大力たる故、川村を組伏せけるを、水野が家人中川島之介寺島助九郎、折合つて討取りける。又隼人が家臣等は、主人の歸り遲きを氣遣ひける處、道明寺の方、頻に鬨の聲鐵炮の音の聞ゆるに付、侍共五七人計り、迎に參らんと騒ぎければ、我もく行かんと轟きけるを、並の備頭山川帶刀も、隼人正を尋ぬる所、牧尾又兵衛、爾々の旨を述べ、何分御差圖下さるべしと申せば、其時、帶刀、隼人殿は二の手の事なれば、

先手の勝負を見合せ居らるゝや、追付歸らるべければ、備を堅く守られん事こそ
專要なれといふ處、歩行士を預りたる權平本書に苗字を脱すが申すは、歩行士は備に相構ふ
まじき間、某迎に參るべしといひける故、山川も尤たる由を申し、則ち指圖して、
二十人の徒士、外に十人計り、都合三十人程、茜の羽織を着し、權平と共に走り出
でけるが、間もなく隼人正が乗りたる馬を牽き來れる中間が申すは、主人並に後
藤殿、最早討死にて、先手敗軍する由を申す處、敗兵は追々大坂へ崩れ行くを見
て、並備の面々、旗指物も俄に動き、總敗軍となれり。隼人正斯る粗忽の舉動は
舊臘伯樂淵の壘を破られし時、實は用事あつて城中に居たりしを、遊女を愛し、
沈醉して乗取られしと、惡説を申觸れたる故、豫て心憂き事に思ひ居たりしが、
今般の合戦始まると等しく、討死を遂げんと思詰めたる由、牧尾是休齋が物語な
りと云々。是休齋は、始め牧野又兵衛といひて、隼人正が近習の士なりしが、大坂の落居後、淺野因幡守に仕へしと云々。

記に、今六日雨降りける故、大御所は、星田に御逗留あるべしと上意の處、巳の刻
より天晴れければ、出御し給はんと思召されける處へ、秀忠公より御使として、

久貝忠三郎後に周防守

高木九兵衛後に筑後守

參向して申上げけるは、大坂勢、八尾・久寶寺へ

出張仕候。

さるに依つて藤堂和泉守・井伊掃部頭より、合戦を始むべしと註進仕

候間、早々御出勢あれかしと申上ぐる。家康公聞召され、敵兵城を出でて、遠く

郭外に働かば、軍は味方の勝利なるぞ。進めや掛れと星田を出陣あり。供奉の

面々悉く甲冑を帶し、我劣らじと勇み進めり。家康公は御馬にて、二三里計り行

き給ひ、暫く御休息あつて、猶先手の一左右を待たせらると云々。

眞田、仙臺勢と合戦の事

眞田左衛門佐幸村は、昨五日の朝、後藤が後陣より進んで來りけるが、先陣の渡邊内藏介糾は、關東勢と攻戦ひ、深手を負ひける故、人數を脇に引取り、備を立直し、幸村が方へ使を以て、某傷を被りて再び戦ふ事なり難し。さるに依つて貴殿蒐引の妨ならんと存じ、脇へ人數を立て候間、一合戦あるべし。某は横を撃たんとするの勢を見せて備へ候へば、聊貴殿の一助ともなるべきかと申送れば、幸村が返答に、

御働の程目を驚かし候。是より某請取り申すべしといひて、軍を進めけり。

或本に、昨五日の朝、眞田が斥候馳歸りて申すは、旗三四十本・人衆二三萬計り、國分越より來り候と告げければ、士卒一同に、是れ伊達陸奥守なり。すはや只今此備を押出さるゝかと、勇める氣色なり。されども眞田は片脇に靠り、片膝を立てゝ居たりしが、徐に應へてさあらんと計にて、外に言を出さず。午刻なる時、又斥候駈來つて、今朝も旗の色替はり候が二三本、人數二萬計り、松陰にて定かには見えず、龍田越を押下し候と告ぐ。幸村空睡して居たるが眼を開き、よし如何程も越させよ、一所に集めて打破りたらんは、大に快らんものと、一向是に取合はぬ體なれば、皆逸りたる氣も、稍靜まりぬ。夕炊畢りて後、此陣所は戰に便なし。いざ敵近く寄らんとて、一萬五千餘、正奇を亂さず、前後を混せず、騎士歩卒、次第を整へ押出しければ、敵縦ひ十倍なりとも、恐るゝに足らずとぞ思はれける。其夜道明寺表に陣を取りて、營注軍令嚴なれば、敢て侵掠すべからずと云々。

然るに幸村が勢は、野村一本にまで押出せり。此處の地形は、前後は岡にて、岡の上
平かに、中間十町計り卑く、道の左右田疇に列れり。眞田が先鋒は、岡の上半過押上
げたり。東兵伊達陸奥守政宗が陣法は、騎戦を好みければ、豫て諸士の壯健なるを
選み、駿足を勝つて騎隊となし、八百の鐵炮を、一放ちと定めて發するに、中らぬ
玉は稀なりければ、打立てられて敵の備の亂るゝ所を、鐵炮の煙の下より、直に乗
込みて駈散らせば、敵敗潰せざるはなかりけるが、此時仙臺勢は、眞田左衛門佐と見
てければ、靜に進んで彼鐵炮を發しければ、鉛子の飛ぶは電の如く、火藥の光は電に
似たり。烟は忽ち雲霧となりて、咫尺の間も見え分かず。されば岡の上に推上りた
る幸村が兵士は、多く死傷すと雖も、眞田は鐵炮の烟の中より、此所を怵へよ、大事
の場なるぞ。一足も引かば、忽ち馬蹄に駈立てられ、塵芥になるべしと下知する聲
の耳に徹しける故、其兵能く之を守り、彼鐵炮に打殪されて、歴然死を遂ぐる者許
多なりと雖も、眞田が勢は松樹を楯にし、鎗の柄を握り乍ら平伏になり、退く者は
無かりけり。

御働の程目を驚かし候。是より某請取り申すべしといひて、軍を進めけり。

或本に、昨五日の朝、眞田が斥候馳歸りて申すは、旗三四十本、人衆二三萬計り、國分越より來り候と告げければ、士卒一同に、是れ伊達陸奥守なり。すはや只今此備を押出さるゝかと、勇める氣色なり。されども眞田は片脇に靠り、片膝を立て、居たりしが、徐に應へてさあらんと計にて、外に言を出さず。午刻なる時、又斥候駈來つて、今朝も旗の色替はり候が二三本、人數二萬計り、松陰にて定かには見えず、龍田越を押下し候と告ぐ。幸村空睡して居たるが眼を開き、よし如何程も越させよ、一所に集めて打破りたらんは、大に快らんものと、一向是に取合はぬ體なれば、皆逸りたる氣も、稍靜まりぬ。夕炊畢りて後、此陣所は戰に便なし。いざ敵近く寄らんとて、一萬五千餘、正奇を亂さず、前後を混せず、騎士歩卒、次第を整へ押出しければ、敵縦ひ十倍なりとも、恐るゝに足らずとぞ思はれける。其夜道明寺表に陣を取りて、營注軍令嚴なれば、敢て侵掠すべからずと云々。

然るに幸村が勢は、野村一本にまで押出せり。此處の地形は、前後は岡にて、岡の上
平かに、中間十町計り卑く、道の左右田疇に列れり。眞田が先鋒は、岡の上半過押上
げたり。東兵伊達陸奥守政宗が陣法は、騎戦を好みければ、豫て諸士の壯健なるを
選み、駿足を勝つて騎隊となし、八百の鐵炮を、一放ちと定めて發するに、中らぬ
玉は稀なりければ、打立てられて敵の備の亂るゝ所を、鐵炮の煙の下より、直に乗
込みて駈散らせば、敵敗潰せざるはなかりけるが、此時仙臺勢は、眞田左衛門佐と見
てければ、靜に進んで彼鐵炮を發しければ、鉛子の飛ぶは電の如く、火藥の光は電に
似たり。烟は忽ち雲霧となりて、咫尺の間も見え分かず。されば岡の上に推上りた
る幸村が兵士は、多く死傷すと雖も、眞田は鐵炮の烟の中より、此所を怵へよ、大事
の場なるぞ。一足も引かば、忽ち馬蹄に駈立てられ、塵芥になるべしと下知する聲
の耳に徹しける故、其兵能く之を守り、彼鐵炮に打殪されて、歴然死を遂ぐる者許
多なりと雖も、眞田が勢は松樹を楯にし、鎗の柄を握り乍ら平伏になり、退く者は
無かりけり。

或本に、幸村始め兵を合せんとする時、令を下して、冑を着せず鎧を持たせず、馬の傍に引添へて、下知せん時を待たせたり。敵合十町計りになりければ、幸村使番を以て、冑を着けよといひける故に、皆持ちたる冑を取つて打着、忍の緒を締めたりければ、勇氣新に加はりて、兵氣盛になる。敵合已に二町計りならんと思ふ時、又使番を以て、鎧を取れと下知しけり。其後、手々に鎧を取つて、穂先を敵の方に指向けたれば、面々如何なる勁敵堅陣なりとも撃破らんと、別に魂を入れたるが如く、ひた／＼と鐵炮に打斃され乍ら、一足も退かざるは、冑を着、鎧を取つたる氣勢の壯なるに依つてなり。敵は累代恩を得て、義を守り忠を思ふの士なり。味方は元來撫順したるにあらず、新附假合の徒なり。勝算彼にありて、敗形我にあり。然るに斯る舉動は、幸村天然良將の器備はりて、大坂城中、勇智第一たるべしと云々。

然るに政宗が騎馬の士は、馬を入れんと駈寄せけれども、折敷きたりと見て猶豫する處に、幸村は其しほあひを計りけん、大音上げ、いざ蒐れよと下知すれば、詞の下

より皆起立ちて突いて蒐り、仙臺の先手を七八丁計り追崩す。

一本に、此時仙臺後備の將秋保本書に秋甫刑部と、幸村が兵士西村孫之進と鍵を合す。

刑部が息甚平、父を討たせじと中に隔つる處を、西村は初鍵に、綿嚙の外れを突損せしと思ひ、二の鍵に、草摺の間を突いて刎倒し、首を取らんとするを、甚平が従者二三十人計り、孫之進を斬る事、幾刀といふ事を知らず、されども鎧の上なれば、傷かざりしが、鎗にて腰の骨を刺され、痛手なれば眩き、既に絶入りけるを、幸村總軍競蒐つて追拂ひし故、西村は討たれず、又甚平が首をも取り得ざりしが、甚平は其創にて、陣屋に歸り死せり。西村は、馬取彌右衛門といふ者の肩に懸り、營陣に歸りけるが、幸ひ命助かりけると云々。

仙臺勢は、眞田と組まんと馳廻りけれども、幸村自ら闘ふを好まず、合戦する事三ヶ度及び、大坂の方へ引返し、傍の丘陵に馳上りけり。或本に、眞田が戦場は、河州丹南郡羽曳野と木瓜山間にありと云々。

一本に、是より先眞田は、本陣譽田の森の東の岡に歸れば、此處に歩卒は一人も無く、騎兵三百程ありしに向つて、駒を三度乗廻し、此足次にて、敵を乗敗るべし

と教を施しければ、片倉小十郎景綱が勢の、山際へ押出す所へ、轡を並べて馳蒐る。仙臺勢も鳥銃を以て、眞田が兵を多く打斃すと雖も、駿馬の足次を亂さず、遂に七八丁計り追立て、山の方へ引取る所を、片倉は、眞田と組まんと乗廻りけれども、眞田は躬ら戦ふ事を好まずと云々。

片倉小十郎は之を見て、彼所に奇兵を設けしかと疑ひ、再び兵を進めざりしが、伊達河内守の勢二三隊は、片倉を救はんと馳來りければ、幸村、奥州勢の動搖するを見澄し、岡の上より落し蒐れば、景綱が備思はず崩れて、北の沼へ馳込む者多かりける。然るに薄田隼人正討死せしかば、山川帶刀・北川治郎兵衛・榎島玄蕃・大久保左兵衛等は、眞田が勢に成合はんと引取りけるを見て、幸村之を救はんとすれども、伊達方若干の鐵炮に打竦められ、心に任せざれば、後殿して舒に引退く。其腕前尋常に異りしかば、仙臺勢、左右の備見物の如くにして、戦ふ事も無かりけるに、片倉が一組の者、輕兵跡を慕ひし處、眞田取つて返し、暫く戦ひしが、兩軍の死する者、數百人に及びければ、渡邊内藏介、眞田に代つて奮戦し、自身敵二騎を伐つて退き

ぬ。幸村再び渡邊に相代り戦ひしに、其銳卒、死する者二十餘人、眞田も手を負ひ乍ら能く下知を加ふ。又小倉作左衛門行蔭、六百餘を率し、眞田に代つて相救へば、片倉も戦ひ疲れ、互に分れて退きけり。此時水野日向守勝成より、伊達政宗方へ、城將毛利豊前守・大野修理亮が組は、葛井寺前に備へ、夫より遙か南の方なる野中の小高き處に、眞田左衛門佐備へて候。豊前守・修理亮を追崩す事は、容易く候へども、眞田が手より横を入れ、跡を取切るに於ては、一人も助かるまじ。貴殿より御人數を御出しあつて、眞田を押へ給はゞ、總軍一致して追立て、某が人數は豊前守へ攻蒐り申すべし。左候はゞ、明日一戦にも及ばず城は陷るべし。早く輕卒を蒐けて、喰留めらるべしと申送れば、政宗が返答に、我等の人數は、今朝よりの蒐合にて、手負死人過半に及び、玉藥を竭したれば、再び戦ひ難しといひければ、勝成牙を噛み、使を以て催促する事、三度に至れども、政宗得心せずして、本陣に歸りける。

或は政宗自ら勝成が陣所に來つて辭せしといへり。

記に、此時東國勢の蒐からざるにより、城兵は大坂へ入らんとし、人數を二つに分

け、前後は圍を以て定むべしといふを、眞田聞きて、某、後殿せんと申すにより、皆曰、眞田殿、後に留^{ある}り給は、我々も残つて討死を遂げんと申せば、明石掃部介之を聞き、何れも左様に宣ひては、事行ふべからず。某一番に人數を引上ぐべし。左衛門殿後殿せられ、慕ふ敵あらば、喰留め給へ。前を遮る敵あらば、各我等蹴散らして通らんと、二手に分れ繰引にす。一番は明石掃部介、其次には諸軍勢なり。眞田は只一人留まりけるが、諸勢五六町も引取りて後、工藤市郎右衛門を以て、眞田が方へ早く御人數を上げらるべしと申送る。眞田答へて、敵合餘り近く候。若し敵慕ひ來らば、味方の難儀なるべし。今二三町を隔て、人數を上ぐべしといへば、諸軍勢之を聞きて、眞田動もすれば己が勇を振ひ、人を蔑にする事奇怪千萬なり。此上は以前の評議を破り、面々の存分に任せんといひけるを、明石色々に申宥めて引取らせたり。其後、妹尾平三郎を以て、今に於ては、御人數を上げられ候へと申せば、眞田は、心得候と返答せりと云々。

水野は、中山勘解由方へ告げて、松平下總守忠明、本多美濃守忠勝と一つになつて、一

合戦遂げたし。其時眞田横を入らば、寄手の一組にて突崩し、二組は毛利・大野が勢に懸るべし。此旨總州・濃州の方へ、御出あつて申さるべし。御目附の儀なれば、兩人違背もなるまじと申せば、中山勘解由聞きも敢ず、此使存じも寄らず候。某参りたる後にて、貴殿一戦を始められなば、我等男が廢り申すべしといひければ、水野が返答に、尤至極に候。貴殿御出の後あとにて、いかなく備を出し申すまじと、詞を誓はせけるにより、中山も、然らば心得候とて、下總守が備に行き、其段を述べければ、忠明は、美濃殿次第に致すべしとの返答なる故、即ち本多が備に至り、右の趣を達しければ、下總殿は、如何いはれしやと尋ぬるにより、貴殿次第にせんと、申されしと答へければ、本多重ねて、必定勝つべき儀ならば、備を出し申さんといふにより、勘解由大に立腹し、合戦の勝負は、時の變に因る物なれば、請に立ち候事は罷成らず。今般の合戦に、討死はあるまじと、誰をか請に立てられ、桑名を御出で候やと言切つて歸り、水野へ其旨を申しければ、勝成も力なく、駒を控へて居たりける。

或記に、毛利豊前守は、前日の約束の如く、六日の曉、天王寺を打立ち、葛井寺迄押

着きし所、後藤は討死して、道明寺口より崩れ来る人數、引きも切らず、手段相違せる故、眞田を待つて一戰して、討死の外なしと、備を立つると雖も、眞田は見えざるにより、皆々力を落せし處、東の方より南へ引廻し、大軍次第に詰寄せしかば、毛利が手より足輕を出し、眞田を相待ちし處、已刻下住吉街道巴引野の北より、赤幟を押立て、眞田は七八千を率ゐて來りければ、豊前守の備は、是に力を得たる中に、眞田に押續き、福島伊豫守・同武藏守・渡邊内藏介・大谷大學伊木七郎右衛門押付け來つて、毛利の備と一所にならず、譽田の方へ押立て、鐵炮の先へ繰出すや否、仙臺の先手片倉小十郎・石母田大膳が人數と、駈合せ鎗を入れ、暫く相戰ふ處に、伊達勢は敗軍して、譽田の方へ崩れければ、眞田勢勝に乗つて、逃ぐるを追うて、譽田山へ追登せし處、片倉旌を取つて盛返せば、眞田勢は追返され、西の方へ七八丁計り崩れけり。此時大坂方に、手柄多かりし中に、柳田五郎介、晴なる高名す。渡邊内藏介は手を負ひたり。仙臺勢喰付きて追立てし所に、眞田は、池の有之所を便になし、再び返し合せければ、伊達勢は又追返されぬ。眞田は

押立て、譽田の町まで進みし處、片倉小十郎・眞木野大藏は、此所に於て手柄あり、松平信濃守家康公の御猶子も、旗本より拔蒐して、太刀打の高名す。其外分捕高名さまざまなり。眞田は勝を得て人數を纏ひ、舒々と毛利が備と一所になる。此時幸村が息大助子、時十六歳組打せし高名の印を、鞍の四方手に附け、高股に鏈疵蒙り、毛利が備に來りければ、皆々大に感じけり。左衛門佐諸人に對し、某時節を取損じて遅はり、後藤・薄田其外數輩討死と聞きし故、此上は手段も入らざる事と存じ、申譯の爲め一戦せりと申しければ、皆々いへるは、何れも拍子の違ひしは、豊臣家の御運盡くる所なりと悔みける。豊後守も、此上は一所に討死を遂げんと申合せけるが、日も早、未の刻になりし處、黃母衣の使番七八騎、竝に大野修理が自分の使乗り來つて、若江・八尾の口皆破らせ、寄手を大坂へ押込ませ候間、早々御人數を上げらるべしと申すに付、眞田・毛利之に隨へり。此時東國勢は、道明寺河原より、西は譽田迄立備へ、城兵は譽田の西より、葛井寺前まで、互に白眼み合ひける處に、伊勢組の一柳監物・菅沼織部が手より、足輕を出しければ、眞田も同じく人數

を出して打合ひ、敵味方守り合ふ時、前に足入と覺しき田のあるにより、一柳菅沼は、此所馬に乗らるゝや、左候は、乗込みて蒐らんと申しける。水野日向守、誰かある、ふけを押切るべしと、諸大名に申すと雖も、出づる者もなき處に、桑山左衛門佐が申すは、家來吉村治郎九郎、此所の案内者なれば、打切申さんといへる詞の下より、乗出せしが、本より足入ならざる故、敵前まで乗付けゝれば、毛利が備より、鐵炮を發する事、雨の降る如くなりと雖も、篤と見届け、徐々と歸りけると云々。

越後少將忠輝朝臣着陣の事

越後忠輝朝臣は、去年江城に御留守たりし處、此度は御先を望まれ、大和口の總大將たりしが、遅く着陣あつて、城兵の備しどろなるを見、是非とも蒐らんと、銀の御幣の馬印を押立て進まれけり。然るに伊達政宗が、家老片倉小十郎景綱一本、景綱後に景長と稱すと云を以て、日暮に及び、敵地へ入りての御合戦は、御大事に候間、御遠慮あつて然る

べしと申せしを、越後方には、弱敵さまでの事もあるまじと申す族も有之に依り、小十郎重ねて、天下を相手に引請けたる大坂勢、弱敵とは申し難く候。我等手廻の者共、今朝よりの合戦に、廿九人討たせ、其外手負數を知らず。近頃申し難き事乍ら、之を御覽候へと、刀を抜いて總様に見せし處、刀は鐔本迄のり慕ひ、總て鯨さくらの如くになれり。陸奥守、先手の裁判申付候我等、此仕合に候へば、總人數の儀は、御推量あるべしと申せり。

或本に、今朝伊達政宗

忠輝朝臣の舅なり

より、忠輝朝臣へ、使者を以て申すは、先鋒片倉小十

郎、河州國分に到る處、敵出張せり。早く御着陣あるべき由の一簡を送れり。越後の老臣松平大隅守重勝・同筑後守信勝・松平庄右衛門清昌も、次第を守り押行く處に、花井主水義雄は、如何なる事にや、脇道を歷て先へ廻り、越後の一陣溝口伯耆守等を押しめ、猶豫する故、軍終りて晝過に、忠輝朝臣漸く國分に到り給ふ。一柳監物直盛、彼所に列しけるが、元來壯勇の將なれば、頻に大野が引足を、慕ひ撃たん事を乞ふ。越後の臣篠瀬左太夫・小野淺之介等も、此事を諫めしと云々。

時に家老花井主水正・松平大隅守・山田隼人正・松平筑後守は、此旨如何あるべしと、

武者奉行玉蟲對馬守

武田信玄の家人、城意庵が弟にて、始め小石二郎右衛門と稱せりと云々

へ尋ねし所に、合戦の勝は、二の手

にある事に候。大坂方一の手敗軍、二の勝を待ち候間、幕ひ撃たん事々罷成るまじき旨を申せし内、申刻に下り、放火の烟見えて、眞田・毛利、共に平野を指して引取りし故、功者の申すは、危氣なき味方の勝なるものと、大に悔みけるとなり。

或記に、溝口伯耆守・村上周防守兩人連立ち、忠輝朝臣の前に出で、私共兩人道中の間は、御道先を一日代りに押上り候様に、仰付けられしにより、相守り候處、今日一戦に過ぎ申さず、殘念に候。然るに大坂勢と覺しくて、旗先相見えたれば、急に駈付喰止め申すべし。早々御旗本の勢を以て、御一戦然るべく候。私共は旗を絞り長道具を伏せ、押寄せ候はんと申しけれども、終に其事に及ばざりければ、伯耆守が申すは、自餘の大名は兎もあれ、堀丹後めが思ふ所、近頃殘念なりといひしと云々。

記に、忠輝朝臣は、昨五日の曉、漸く和州西の京に着陣ありしが、先手に合戦ある

事、未だ聞えざりければ、同六日の晝過に田尻を越えて、戰場へ人數を押付けられけれども、城兵は敗北して、合戦無かりける故、鬪諍過ぎての千切木かなといひて、人皆笑ひけるにぞ、越後の家人等口惜しき事に思ひけるが、花井主水正・皆川老甫・笹瀬左太夫・小野淺之介等一同に、御一戦あるべし、城兵未だ引色にも相見えす、備を立て罷在候へば、是非に一軍して、人口の嘲哂を止めらるべし。然らずば兩御所の御機嫌悪しかるべしと諫めけれども、忠輝朝臣は承引無く、玉蟲對馬守・林平之丞舊は堀左衛門督玄治が耶等なりと云々兩人を召され、意見を問はれし處、日も夕陽に及び、合戦を取結び給ひなば、夜軍になるべく候。敵は案内者、味方は不案内なれば、失多くして得少し。推量仕候に、此合戦如何様に早く勝負付くとも、五七日は掛るべく覺え候。然れば明日城際に於て、晴なる御合戦ましゝて、諸人に見せ給ひて宜しからんと申すにより、忠輝朝臣は、實にもと一戦を止められしが、翌七日には、城兵悉く敗軍して、越後勢は、敵の旗をさへ見ざりけりと云々。一本に、玉蟲と云ふ。故に將軍家より御改易となれり。又世人玉蟲とは呼ばずして、逃蟲と申しけると云々。

一本に、玉蟲議立し

或書に、皆川山城守入道老甫は、始め信州飯山の城主、四萬石たりしが、上總介忠輝朝臣へ附けられし處、度々剛く意見を申せしにより、遂に死罪に行はるべしとありて、將軍家へ伺はれし處に、仰に、山城儀は家人の事なれば、心次第の事なれども、上總介幼年の時に、彼者の才覺を以て、大御所の御前を調べ、源七郎康忠の跡目となれり。然るを左様の儀を忘れ、不調法あればとて、死罪に申付くる事は然るべからず。是非とも氣に入らずば、暇など遣し候は格別と、上意ありし故、改易せられたり。依之皆川法體して、侍分の者一兩輩を連れ、京都智積院の内に閑居す。息志摩守は、武州八王寺へ引込ませ置きたり。然るに此度忠輝朝臣は、大和口の總大將として、上洛ありしにより、老甫は、越後の陣へ罷向ひ、奏者に就いて、私儀は、重き御勘氣の者に御座候へども、今度大坂表へ御出陣の由承り及候故、存命の内、御勘氣御免を蒙り度念願にて、恐を顧みず罷出候旨を演ぶる。忠輝朝臣聞かせられ、其儘對面ありし所、以前に違ひ、衰老せる體なるにより、頻に落涙せられ、老甫を近く招き、昔今の物語の後に、老甫申すは、今度大坂

に於て御働の儀、定めて御評定も御座あるべし。愚老存するは、諸手に抽でたる御働、肝要ところ存じ候へ。其故は、大御所様御老年の御事なれば、御目通にて際立ちたる御働御座候と、末代まで御家の御繁榮と奉存候と演べければ、忠輝朝臣、我等も豫て其心懸なれども、總先手の儀は、藤堂井伊兩人に仰付けられたれば、如何あるべきやと答へらる。老甫重ねて、彼兩人が御先手の事は、豫て承り及び候。然れども大坂へ御着陣し給ひなば、御備を、總軍の先へ御進めありて、城中より突いて出づるに於ては、御一戦を遂げられ、敵若し打つて出でざる時は、能き場所を取らせられ、何時にても一番合戦なさるべしとさへ思召しなば、事相濟み申候。自餘の大名と違ひ、井伊・藤堂とても、御前に對し、先を諍ふ儀は仕るまじく候。若し兩家の者異儀に及び候はゞ、某に任せらるべしと申せば、忠輝朝臣も悦喜ありて、近頃過分なり。暫く休息せよと挨拶せられ、扱玉蟲對馬守・林平之丞、其外花井主水正以下の家老を呼集め、此儀を相談致されし處、各口を揃へ、夫は以ての外なる御不了簡に御座候。今度井伊・藤堂の兩家を以て、御先手と仰出

され候は、天下の御軍令なり。夫を御破りなされ、假令何様の御軍功を御遂げ候とも、御奉公は相立不申候。其上井伊・藤堂兩人の手前も如何に候。左様の御働は、御無用に御座候。大坂表に於て御奉公の儀は、如何程も御座候はんと申すに付、老甫に、右の由申され、其方は大坂表へ同道せんとありけるを、老甫承り、玉蟲・林などが儀は兎も角も、御先手を任す家老共の存寄、左様に御座候ては、爲され様もなく候。私儀右にも申上ぐる如く、御供仕るべき支度致し候へども、今朝智積院を罷出で、老足にて是迄参り、殊の外疲れ申候。御勝手にて暫く休息仕るべしといひて直に歸り、息志摩守が宿所へ立寄り、豫て存寄の段々を、殿に申せし處、不届者共心を合せ妨ぐるにより、其事成らねば、大坂表への御供に及ばず、只今歸れり。其方も支度を調へ、井伊掃部頭が陣へ立越し、直孝の備を借り、一奉公せよと申渡し、其身は智積院へ歸宅せり。老甫大坂へ向ひしとあるは、誤なりといへり。志摩守は後に召出され、山城守と稱し、大番頭に被仰付。老甫は御扶持下され、後に竹千代君の御伽に出で、御心得にもなるべき咄を致すべしと仰渡

されし處、物覺薄くなりしかば、今宵御咄申上ぐべしと思ふ事を、脇差の下緒に結付けて、御前へ罷出で披見せしを、人が見習ひ、西の丸付の面々は申すに及ばず、後は御本丸方の役人中も、品々御用有之節は、覺書にして下緒に結付くるを、其節老甫懸と、世上に申習はしけると云々。

或本に、皆川山城守廣照入道老圃は、山城守俊志摩守隆庸は、後に山城守と改む。
正保二年二月五日に卒すと云々。
或本に、皆川山城守廣照入道老圃は、山城守俊乘の息なり。
寛永二年十二月廿三日に卒す。

新東鑑卷之十六

木村長門守並内藤・山口等戰死の事

五月二日の朝、木村長門守・重成・山口左馬助・弘定・内藤新十郎・玄忠は、京街道を固むべしと、秀頼公より仰渡されけれども、兩將軍は、須奈・星田の方より、四條・暇手・手塚を越え、道明寺を下らせられ、平野・天王寺より御取詰の由相聞えければ、敵の無き方に向つて詮なしと、長門守が一組は、城中へこそ引返しけれ。

記に、五月朔日、秀頼公は、天王寺表を御巡見あつて、何れの所に備を立て、關東勢を防ぐべきと御評定あり。此時、木村長門守・長曾我部宮内少輔を召され、汝等兩人は、久寶寺表に馳向つて、相支ふべしと仰ありければ、兩人畏りて、御請を申せり。中にも木村重成が曰、去冬御和睦の砌、大御所の陣へ御使に向ひし時、側

近く候はゞ、是非の運を天道に任せ、御前の御鬱憤を達せんと存詰め候所に、關東の近臣、座の左右に伺候し、臣をして座の中央に差置かれたる故、豫ての思慮相違し、如何計り口惜しく存じ候。今案するに、去年の御合戦は、味方要害に籠り、防ぎ戦ひしにより、寄手若干討たれしと雖も、今度は夫に似るべからず。味方は小勢にして、然も平場の合戦なれば、最も御大事とこそ存じ候へ。凡そ勇士たる者、戦場に臨んで討死を遂ぐる事は、珍しからぬ儀に御座候へども、臣に於ては、全く合戦の勝負に寄らず、兩將軍の旗とだに見ば、一番に駆入りて、討死と覺悟を極め罷在候。御合戦御利運に於ては、忠を泉下に報ずと、思召下さるべしと申しけると云々。

同六日、木村長門守重成は、今日を最後と思ひ定め、金銀一枚交の小實の鎧に、星冑に鍬形打つたるを猪首に着なし、忍の緒を斷切り、鍬形の元は、菊唐草なりと云々白纒懸けて三間柄の鎧を、馬の平首に引添へ、黒の馬の太く逞しきに沃懸いつかけち地の鞍置き、紅の燃立つ計りなる中總の鞆掛けてうち乗り、卯の上刻に、河州若江に押付け、此村を本陣とし、

中白の旗一本に五色の旗五本

銀の瓢箪の馬標を立て、先手山口左馬助弘定・内藤新十郎玄忠本書に此

外に、眞野入道宗信とあり

以下一萬餘騎にて、二町計り東の方に小堤のありしに、鐵炮三百六十挺を

以て待受けゝる。

本書に、一度に出でたる長曾我部盛親は、八尾の方へ向ふとあり。

或本に、是より以前に、木村重成を、秀頼公の御前に召され、汝去年の吉例に任せ、

今福へ出でて備を立つべし。天守より御覽あるべきとの事にて、昨五日の朝、今

福に備を立てしが、重成は、山口左馬助・内藏新十郎に向ひ、上意により、是迄は出

でたれども、向の足場悪しければ、寄手は爰へ來るべからず。只今承れば、東軍

は東の山際より、平野へ來る由なり。然れども彼所へは、眞田・毛利・後藤等、段々

に向へる跡なれば、其益なし。所詮明六日には、能き場所を見定め、南を指して

押行き、兩御所の旗本を、西の方より横合に突掛つて、勝負を決せんと申し、其身

一騎、黒具足に金の塗笠を着て、葦毛の馬に打乗り、案内者只一人召連れ、同日午

の刻に、今福を出で、須奈表より松原・吉田・岩田・若江・山東・阿部野・西郡・萱振・八尾

の邊を乗廻しけるが、若江村の東の河原に廣みあり。此處は玉串川本書に玉越川とありの

流、大堤小堤引廻し、柳生繁りたるを能き場所と見定め、同日申の刻、今福へ乗戻り、明丑の上刻に、若江迄出でて待合せ、兩御所の旗と見たらば、一戦せんと申渡し、大坂へ引入りたり。木村が一組四千七百加勢として眞野藏人入道宗信・長曾我部宮内少輔盛親父子、五百餘加はりけるが短夜の事とて人數揃ひ兼ね、殊の外時移りければ、重成は氣を苛いちて、平塚五郎兵衛を先立て、提灯只一つを、總軍の目印に燈させ、又若江の莊屋を案内者とし、飯島太郎左衛門を、弓廿五張の頭として差副へたり。重成、平塚に申すは、道筋森陰の在家の傍に、伏兵あらんも計り難し。其方、預りの鐵炮を先に立て、見切つて押せよと申付け、大坂をうち立ちけるが、早七つの鐘の聞ゆるまゝ、彌心を急せき、大和橋をうち渡り、町口を出で、東の山際を見渡せば、北は八幡・飯盛・牧方・森口より、南は道明寺前國分邊迄、野々山も一面に篝火を焚きければ、寄手の大軍なるを見て、木村が勢も驚きけるが、夫より二三町計りも押出しければ、山々の篝火も、次第々々に薄くなり、夜はほのぼのと明けしかば、平塚が提灯を消させ、飯島が朱の短尺付きたる大矢筒の指物を、

目印として進みける所、はや道明寺表に當り、関の聲鐵炮の音山に響きつゝ、馬烟は天を蔽ひたり。東山際を見れば、南の方道明寺口より打續き、須南・星田街道に至る迄、東國勢色々の幟・金銀指物・馬符、幾千萬ともなく押集り、朝日影に映り引きも切らねば、重成は若武者故、大に氣を急^せき、以前の定めも打忘れたるか、若江より南に向つて進み、旗奉行糸目某に下知し、八尾の方へ押しけるが、木村、平塚を呼びて、若江に人影の見えたるは敵ならずや。其方、先へ行き見切るべしと申しければ、五郎兵衛は心得候とて、馬を早めて見届け來り、敵には候はで、村の百姓共雜具を持運び、大坂へ引退く奴等なれば苦しからず。早々人數を押付けられよと、使を先立て、我身も取つて返し、迎に來りし所、木村は、若江には來らずして南に向ひ、八尾街道へ向ふ故、案に相違しければ、平塚は重成に追付き、何とて若江には押出されずやと申せば、長門守は鞭を以て東を指し、兩將軍は早着陣の由、落ち來る百姓共の中せば、備定も入らず、早々敵前へ押付けよと申すを、平塚は、不了簡なる事とは思へど、早く行けよと罵る故、五郎兵衛は先へ乗^{のりとは}通し、

大堤の上にて乗抜け、八尾へ行き、先手なる高松内匠・目下五郎右衛門に、場所は能きかと尋ねければ、敵よりも蒐り難く、箱の中の様なる所にて、用心残る處なしと申すにより、平塚夫より取つて戻せば、木村と其間一丁計も隔てたるに、重成は耐り兼ねしか、歩行武者二人に、何事か申付け、れば、彼二人、平塚が方へ走り向つて、何とて先手へ御越なきぞ、御立腹に候と申せども、五郎兵衛は相手にならず、木村を待受け、備場を見受候に、敵付の方に、大沼の足入あつて、敵より懸る事も罷成らぬ用心よき所にて候と申せば、木村之を聞き、猶豫せる體にて、然らば進んで其詮なし。いざ若江に歸らん。さり乍ら諸人の思惑如何なり。若江へ直に参りては方角悪しき故、是迄人數を廻せしと申せよ。東道は、某が人數を進むべし。西堤は相組の衆押出せとて、二町が間を、二筋になつて向ひける。

平塚五郎兵衛は、平塚因幡守爲廣が甥なり。冬陣に働ありし故、物頭となりしが、今度木村が介副に附けられし所、大野治長が内意により、黄羅紗の羽織に纏持たせしといへり。又爲廣は、黄母衣廿六人の内なりしが、關ヶ原合戦の時、

卅六歳にて討死す。其時の辭世に、

名の爲に捨つる命は惜しからじ終に止まる身にしあらねば

と詠みしと云々。

此時、東軍本多豊後守・宮城丹波守・石川伊豆守・蒔田權助・遠藤但馬守等は、御旗本の警固斥候の備なりしが、須南を出で、高安の里四條繩手迄押出しける所、木村が南へ進みし勢、俄に西頭に立直すを、寄手の備頭なる本多豊後守之を見て、今日の軍功、此所に見えて候と、諸大將を勇めしかど、何れも左右の挨拶なかりし所、此手の檢使本多縫殿助進み出でて、御譜代の豊州、手柄立は勿體なし。其仔細は、我々は手柄を致せとて、御先へ立てられたるにはあらず。御旗本の警固を仰付けられたる身にて、役儀を捨て、敵へ蒐る事は如何なりと止むれば、本多聞きて、餘人はさもあれ、某は是非とも蒐らんと、旗を西向に押直せば、縫殿助は、豊後守が前に乗塞り、只今蒐りて利を得る時は、一段能き事なれども、小勢を以て多勢に當り、若し打負けなば、御旗本の備平明にならん。然れども懸りて來る敵ならば

餘儀無し。道明寺へ懸る敵を横取りし、攻損ふ時は、骸の上の恥辱なり。以來天下にて批判致す者あらば、我等が男は立ち申さずと、達つて止むるにより、木村が勢に蒐らざりけり。翌七日、此口の諸將、岡山邊に於て、家中何れも高名せしにより、皆々申すは、昨日詮なき合戦をせば、今日手に合ひ申すまじきを、是れ偏に本多縫殿助故なりと申して、何れも喜びけるとなり。

木村長門守重成は、後陣の長曾我部が手にて、合戦始まりしとは知らず、若江に入りて兵糧を使ひ、暫く休息せんとする所に、斥候の兵追々に蒐來り、只今將軍家の旗馬印等の相見え候由註進する故、木村は小堤に馳上る所へ、物見の士佐久間藏人、馬を疾めて蒐來り、只今攻來る由を申すにより、重成之を見るに、

此時藤堂新七・同玄蕃が方へ、木村が組の兵懸りける故、重成を制せるなり。次の卷にあり、關東の方の二陣の先手井伊掃部頭直孝は、赤地に金を以て、八幡大菩薩と書きたる旗を押立て、晝の兵糧を腰に附けさせ、河内郡松原村の陣場を發し、

御誕を守つて藤堂に後れ押行きけるが、平野邊足入なれば、道明寺へ出でんとする時、井伊が斥候般若野宮内より、木村長門守は若江に出張せり。此勢八尾に往きて、

今此所に歸れり。里程を度るに、必定夜深に入尾に來れば、兵疲れ兵糧を使ふべし。其所を撃つに於ては、利を得ん事疑なしと、二度迄本陣へ申來る故、直孝若江に旗を進めけるが、先路玉串村邊に深田あり。其先に大和川の末、玉串川の西の岸に高き堤あり。城兵に之を取敷かれて、爲方あるまじと、悉く鎧を提げ、騎兵五百を下立たせ、馬は一問計り跡より牽かせ、急に二町程押付け、浸々と馬に打乗り、又二町計も進みける。

或記に、井伊掃部頭は、昨夜高安に陣を取り、六日の朝道明寺へ押詰めんとせし所に、家臣木股右京亮・庵原助右衛門・川手主水・三浦與三右衛門・長坂十左衛門・孕石・豊前・廣瀬左馬介等が申すは、只今より道明寺へ御押し候とも、其間に軍散じて、手に合ひ申すまじ。近々と西の方若江に見ゆる敵に御懸りあつて、然るべしと申せども、直孝一圓承引せず。御軍法は背かるまじ。唯、道明寺に向ふべしと申す所に、物見番の般若野宮内・岡本半介は、高みに登りて敵の來るを見しが、岡本人數を見積り、思ひしより大軍なれば、當手一備にて、此敵には對し難しと申せば、宮内

頭を振りて、いや／＼克く見るに、人數の間に小荷駄あれば、此兩旗は、二手に分るべしといひて、是れ長曾我部は、八尾の方へ引分かれたるなり、般若野は乗切つて參り、掃部頭に向ひ、敵近く來り候。早々若江へ御懸あつて然るべしと申しけれども、直孝は左右道明寺へ押して然るべしと合點せざるを、宮内重ねて、道明寺へ向はんとすとも、如何ぞ敵が通し候べき。年寄の分別に御任せあつて、若江へ懸り給へと、荒らかに申せば、家老以下も、尤と同心せるにより、人數を立直しけると云々。

長門守は、玉串川の西なる小堤を抱へて居たりける所、井伊の家臣長坂十左衛門は、金の制札の指物差したりしが、川向の小堤より、此方にて鎧を合せては、味方の負ならん。堤の西にて鎧を合せたらば、勝利たるべしと下知すれば、井伊が勢、浸々と川を押渡り、早鐵炮を打合ひけり。

或記に、此日藤堂和泉守が手の檢使は、久貝因幡守・高木筑後守たりしが、和泉守より、右兩人を以て大御所へ申すは、敵味方の間に大堤有之、之を取敷き申度候へども、小勢にて叶ひ難し。早々二の手を詰めさせられ候様にと、言上しければ、

大御所御氣色あつて、和泉程の者が、斯る事に量簡なきや。敵堤を争つて取らんとせば、取らせよ、堤を便に軍の利を求むるは、高虎に似合はず、堤を取らせても、軍には勝つべしと仰ありける所に、井伊掃部頭が手より、小栗又市馳歸り、掃部頭只今敵と喰合ひ候が、其間に堤有之候。之を取りたる方、勝になるべしと、井伊が年寄共申候由を申上げければ、大御所此儀を御推量あつて、如何にも堤を取るに於ては、勝利たらんと仰ありける。諸人之を聞きて、計らひ難き大將にてましますと申しけると云々。

井伊が先隊川手主水記に、主税助に作り、三千石を領すとあり、成次は、左右に馳廻りて、一人も拔菟すべからず。味方を見合せ、一列に菟るべし。輕卒妄に鐵炮を發せず、令を待つべしと下知する振にて、馬を乗出し拔菟すれば、山口伊豆守重信・遠山甚二郎・勾坂彌五郎・滿座七左衛門も、續いて菟れり。

或記に、川手主水は、冬陣の時、木股右京が事にて、主人を怨みたりしが、今度出陣の砌、父松原石見守が方へ行き、最後の盃をなし、我等が乗馬肝肉に候とて、總

の馬を所望し、出立たんとする時に、主水が兄志摩守送つて出で、去年の事を忘るなど申しければ、何しに忘れ申さんといへりと云々。

木村は、井伊掃部頭と見^み謀^{おは}せ、少しも擬議せず、相懸に懸り、互に圓の聲を揚ぐれば、其響、たとへば百千の雷の、一度に落ち懸るかと思はる。此重成は、年來諸浪人の譽ある者に、米穀金銀を送り、哀憐をなしける故、命を的になしたる者共二三百騎にて、馬の廻を圍ませたり。中にも長屋平太夫・佐久間藏人・牟禮孫兵衛・青木七郎右衛門・佐藤八左衛門・山中彦之助・半田市郎兵衛・川崎和泉・波多野兵庫・大塚勘右衛門・篠岡右京・黒木藤右衛門、一人當千の者共を、眞先に進ませたり。然るに川手主水は、川崎和泉・牟禮孫兵衛^{一本に彦三郎とあり}・佐久間藏人・根來知徳院が、鎧を揃へて待掛けたる所へ、會釋もなく蒐入り、馬を乗放して、無二無三に蒐りけるが、平塚熊之介に突伏せられたり。されども平塚は、首を取る隙なければ、従者に向ひ、其首取れと申しければ、畏り候と刀を抜いて、主水が上に乗懸らんとする所を、満座・山口・勾坂・遠山等、走付きて彼者を切倒し、其上に平塚に蒐り、熊之介を突伏せければ、遠山甚三郎

首を得たり。木村が先手は之を見て、一同に咄と蒐りければ、満座勾坂二人は、終に討死致したり。

或記に、勾坂彌五郎は、小溝へ突込まれて相果てしが、口中未だ暖なりしにより、人家へ昇ぎ込み、色々養生せしかば、暮前に息出で命を助かり、又遠山甚三郎は、平塚が首を得て、掃部頭を相待ちけれども、遅かりしにより、庵原助右衛門が實檢に入れ、首を持ち乍ら死せしと云々。

井伊が先手庵原助右衛門は、川手が討たれたるを見て、早く懸れと下知すれば、八田金十郎、一番鍵と名告りて鍵を合せり。重成は諸軍を下知し、懸寄せて切つて落せ、中を破らんとするならば、透間もなく馬を寄せ、轡を並べて破らせな。敵には進むとも、一寸も退くなと、大音聲に勇むれば、東國の大勢陰に閉ぢて、圍まんとすれども、圍ませず、陽に開きて蒐亂さんとすれども、敢て亂れず。駈入りては討取り、破つて通るを切つて落し、或は首を取るもあり、取らするもあれども漂はず。木村が旗本は、野猪の列卒を破るが如く、直落に馳入り、須臾に變化し、十文字に常り巴の

字に廻り、身命を捨てゝぞ戦ひける。此時長門守は、深田の中なる畑に控へて下知しけるを、山口伊豆守重信之を見て、重成と鍵を合せんと蒐寄つて、木村が爲に命を殞せり。重信が家來角村三右衛門は、伊豆守が骸を肩に掛けて退きしが、父修理亮は、重信討死と聞くや否、木村と雌雄を決せんと競ひ蒐るを、重成は、長屋平太夫・大塚勘右衛門と共に、重政と戦つて引退けり。此時山口が從兵小坂十太夫後に山口木工左衛門とす・寺西十兵衛・住山三右衛門以上二人後に山口氏となる・創を被る。水野茂太夫于時十・千野八十郎于時十・十八・長谷川兵右衛門三人は、討死を遂げたり。又先に進みし八田金十郎は、木村が兵廿餘人に押包まれ、具足甲を廿一ヶ所突かれ、其上左の腕に疵付きたり。八田に續いて鎗を入れたる戸塚左太夫も手を負ひ、金十郎も討死と見えし所に、成島彦左衛門・松井小左衛門・同七左衛門・岸藤七・戸渡太郎右衛門・丸山八郎左衛門・朝比奈彌太郎・林三十郎、同じく鎗を入れたり。丸山市太夫は、鎗脇を入れて、兩陣暫く挑み戦ひし所に、井伊の先手庵原助右衛門・長坂十左衛門を始め、混甲八千餘、一度に突いて蒐りければ、山口左馬介・内藤新十郎一々、此外に眞野藏人以下防ぎ戦ふと雖も、大勢に押立

てられ、過半裏崩して退きけり。然るに青木四郎左衛門・早川茂太夫が申すは、秀頼公の御大事、今日に限るべからず。某等蹈留まつて防矢仕るべし。此所を立退き給へと諫めけれども、木村は元來最後の覺悟なれば、一足も引かず、駆入り〱戦ひしが、其身鐵石にあらざれば、少し疲るゝ所を、庵原助右衛門、十文字の鎗を、重成が母衣へ突込み、引倒さんとしけるを、長門守は、岸へ鎗を突張り、倒されじとするに、庵原強く引きたれば、重成俯に倒れるを、庵原が手廻の歩行侍二三人下立ちて、起しも立てず討取れば、安藤長三郎駆來り、我等儀、今日能き手に合ひ申さず候。此首給はり候へと申せば、庵原聞きて、奇特なる若者なり。木村長門守と名告りしが、虚實の所は知らざれども、最早大坂も明日と相見えたり。其身是程の首には得當るまじ。蚤く取られ候へと申し、重成が懸けたる白纒に彼首を包み、安藤に渡しけれども、庵原が郎等は、如何にしても殘念なりと、白熊付きたる捻竹は、押へて渡さ〱りけりとぞ。今に助右衛門が方
にありといへり。

或説に、重成は多く疵を被り、太刀を杖に突き、腰打掛けて休息する所に、安藤長

三郎于時十
七歳

駈來り、木村が疲れたる體を見て、持ちたる鎗をからりと投捨て、太刀

を抜いて蒐らんとせし時、木村が申すは、若者不心得なり。鍵にて突けよといひ

ければ、安藤透さず、鍵を以て蒐りしに、木村は少しも動せずして、討れたりと云

云。

或本に、首の取様は、先づ鍵を以て右の脇壺を突き、又刀を以て脇の下を突きて俯せ引倒すものなりと云々。

或説に、木村が首は、庵原が討ちしに必せり。然れども人に遣るほどの者故、其事は一言も語らざりしが、江戸御城に於て、井伊直孝・酒井忠勝へ物語ありしと云々。

別記、庵原が息主税助は、幼少たりしが、正先に乗込み敵と引組み、己に危く見えし所、父助右衛門乗付けて、主税神妙に仕れ、爰にて見物せんと、聲掛けしに力を得て、脇差を抜き、下より刺通しければ、主税が家人駈合せ、上なる敵を引伏せるにより、主税は起上りて、敵の首を得たり。横地修理・西江伊豫、之を見て大に感じ、右の趣を大御所へ言上せり。其後何れも助右衛門へ申すは、幼少なる者の、敵に組敷かるゝを、親の身として助けざるは、如何なる心得に候と尋ねければ、

庵原答へて、誰とても子は不便に候と申せしと云々。

木村が組なる川崎和泉・水谷忠介・佐久間藏人・村上十太夫・篠岡右京・大塚助右衛門・牟禮孫兵衛・松浦左吉・青木四郎左衛門・早川茂太夫・秦兵庫・黒木藤七・根來知徳院等は、長門守が死骸の弓手妻手にて、枕を並べて討死せり。

紀に、佐久間藏人は、榎本舍人に討たれ、牟禮孫兵衛は、日下部三郎右衛門・大鳥居八郎、相討にせりと云々。

内藤新十郎は、今年廿一歳にて、千餘の大將なりしが、蹈留つて防戦し、終に討死して、首は日下部源太郎こそ得たりけれ。

或本に、内藤新十郎は、日下部源太郎・朝比奈左近或は左馬相討の論に及びたり。斯る

所へ、水野九兵衛も走り來り、相討の由を申すに付、詮議ありしに、水野は其證なきにより、直孝大に怒り、切腹させしと云々。

山口左馬助弘定は、赤縄懸け、鹿毛なる馬に打乗り、下知してありけるを、八田金十郎走り蒐り、突落して首を取れり。

或記に、山口左馬助は、八田金十郎に立向ひ、自ら山口左馬助と名乗り、太刀の柄に手をもかけず、首を取らせたりと云々。左馬助が父右京亮も、慶長五庚子年、前田の臣木崎長左衛門繁清に立向ひ、如此して討たれたりと云々。
 長屋平太夫は白纒、青木七左衛門は黒き切裂にて、井伊が人數に紛れ居て、直孝と刺違へんとせし所に、終に兩人は生捕られたり。

或記に、長屋青木兩人は、大御所の御前へ引出されしが、平太夫は、冬陣今福合戦に一番鎗、七左衛門は、今日西郡にて、一番高名したる由を聞召され、二人に五百石宛下され、無役にて、濃州に同居せしが、其後病死せりと云々。

大坂勢大敗

其外の勢は、右往左往に敗北せり。今日井伊が備に討取りたる所は、木村長門守山口左馬介・内藤新十郎を始め、佐久間藏人・牟禮孫兵衛・内藤監物等、凡て首數三百十級或三百五級ともありを得たり。井伊にも、騎士六十・雜兵百八十餘人討たれ、手負は騎兵共三百七人ありとかや。又直孝は、藤堂に續いて、八尾に野陣を設けたり。

或記に、井伊の諸士討死して備亂れ、散々になりける時、家臣小幡大膳子時七、十一歳は、老功の者なるが、之を見て、斯る小崩に、旗本の崩るゝ事はあらじ。倡や後殿せ

んと、小高き處に馬を乗上げ控へければ、大膳の一子虎之助は、今歳十八歳になりけるが、此體を見て、父が武者振に似たりと思ひ、馳付きて、敵急に來らば、父子共に討死を遂げんに、至極の場所に候と申しけるを、大膳之を聞き、よくこそ來りたれ。汝は若輩といひ、初陣の事なれば知るまじ。斯様の時に蹈止まり、後に残らば、殿とて大なる覺なるぞ。兩人こゝに在るを、脇より見乍ら、來らずには居られぬものぞ。必ず一步も退くなといひも敢ぬに、五十嵐半次・同傳兵衛・只木治郎右衛門・同忠三郎・功力庄左衛門等、續いて池谷源十郎・木村市郎左衛門・加藤彦兵衛・宮崎與市郎・宇津木武兵衛馳來り、其外所々より馳集り備を立直し、夫より合戰始まりし處、此戰に大利を得て、敵數多討取りしとかや。抑小幡大膳は、始め土肥氏にて、長尾信濃守爲景に仕へ、後に武田信玄に仕へし所、天正十年三月、勝頼生害ありし時には、信州吾妻の城へ使せしにより、末期には會はざりしなり。夫より北條氏政に仕へたり、北條家滅亡の後に、我領所たる上野國濱尻の郷に閑居し、年月を送りし所、去慶長五年、石田三成、徳川家を亡さんとせし時、

直孝が父兵部少輔に招かれたり。始め長尾氏に仕へ、十六歳の初陣より、大坂冬夏の戦、共に七十三度の戦場に出で、行年八十二歳にして病死せりと云々。

記に、井伊が手にて働ある輩は、河野六郎兵衛・戸渡太郎右衛門・丸山八郎左衛門・

成島或は成幸彦右衛門・齋市之丞・内山五郎左衛門・藤田四郎左衛門・石黒傳左衛門・岡部

惣右衛門。又討死の輩には、川手主税助或は主水・廣瀬左馬介一本に七日に討死・孕石豊前或は備後一本に七日に討死

討死・藤澤太兵衛・今泉源左衛門・萬澤又左衛門・岡本半右衛門・三岡長兵衛・内山作右

衛門・田口郷右衛門・山村徳右衛門・加藤庄九郎・平子新藏・松井作兵衛・松本五郎太

夫・中村與兵衛・中堀仁右衛門・小崎七之介・武藤六太夫・皆川新左衛門・酒井勘之介・

平岩小五郎・佐藤彦右衛門・後藤左近・森作藏・飯田十藏・大村善藏・越石何右衛門・唯

一本木與三左衛門・遠山甚三郎・小笠原傳右衛門・雨宮善次・久野角兵衛・本間九右衛門・

渥美作右衛門・松崎道二、其外討死手負數多ありと云々。

或本に、山口修理亮重政が嫡男伊豆守重信は、大久保相模守が事に就き、武藏國入間郡に塾居せし所、去年の軍に、郎等少々召具して、父子海道を駈上りしに、箱

根の關に止められ、引返して山道に差懸る。程なく御和睦あつて、此度の軍に井伊が手に屬し、五月六日、伊豆守重信眞先に進み、武者五騎切つて落し六騎に當り、敵と引組み、刺違へて死したりと云々。

或説に、此夜重政、井伊が陣に行向ふ。在合ふ人々、重信が事を弔ふ。修理亮、されば愚息が討死仕りし事、年頃の本意終に達し、歎の中の喜なり。さり乍ら御勘氣の中に死せし事、死しての恨、さこそ深くは侍らめと、涙と共に答へしを、聞く人皆鎧の袖を濡しけり。玆に直孝は、弔を演べずして、壯なる子を先立て、難面残りし老の身は、何を頼みに生きんと、差顯してはいはねども、詞の餘りにぞ聞えたる。重政大に怒りて、已に刺違へんとしてたりしを、人々中に立塞り、様々に中直しぬ。是は若江の戦に、直孝が麾の揮り様惡しきとて、重政が教へしを恥ぢ、怒つて直孝が斯くいひしなり。是より不快にして、重信が討死せし有様、掃部頭斯くとも申さねば、執し申すべき者更に無く、歎の中に憤りて、空しく月日を送りしが、重政年頃、本多美濃守忠政に親し。依つて其男中務少輔忠刻の御内室天

樹院殿知召され、折に觸れ御歎ありしかば、後に本領給はりしとぞ。三男長二郎弘隆一萬石、四男半左衛門重經、五千石分ち給へり。是寛永五年の事なりとぞ。

或説に、松平伊豆守信綱は、井伊と山口兄弟の中直させんとす。兄弘隆は、父にて候者、死しても猶恨もや残るべく候。此事努々叶ふべからずといふ。弟重經は、信綱のいふ處なり、且直孝は、當時の重臣にておはせばとて、中直りしと云々。

八尾・久寶寺表合戦の事

八尾・久
寶寺表合
戦

さる程に長曾我部宮内少輔盛親は、五月六日卯上刻、唐綾緘の鎧に、白星の冑に、鍬形打つたるを猪首に着なし、父元親が譲りたる二尺八寸の太刀佩きて、木村長門守と、同河州若江郡八尾の方へ進み、久寶寺に陣を張り、此時藤堂和泉守高虎は、八尾より四十町餘り東なる、高安郡千塚といへる山際に陣しけるが、旗を進めて來りけれども、何れの敵に向はんといふ事も定まらざりける。爰に渡邊勘兵衛吉光于時五十三歳、或は五十五歳とありは、冬陣以後、高虎へ暇を申込みし故に、和泉守が目通へ叶はざりしが、今

朝始めて申すは、昔より八尾・平野邊は、足場能からずして、大軍の進退自由ならず。日も已に闌けぬべし。道明寺表は、是より三里計もあるべく候間、早く御人數を進めらるべしといひけるを、高虎聞きて、先づ様體を見合せて向はんと申す故、渡邊重ねて廿町程對に、小山の相見え候。彼山より、道明寺は目の下にあり。急ぎ馳行き、遠近を計るべしといひさま、金のかますの胃に、猩々緋の羽織を着して、馬に打乗り馳せける所へ、朝の斥候酒井與右衛門以下の還るに逢ひけり。酒井即ち渡邊に申すは、道明寺口へは、後藤又兵衛を始め、大坂勢數萬騎出張し、大和口の味方松倉豊後守・伊達陸奥守其外の衆、早合戦を始めけると語れば、渡邊之を聞きて、郎等一人を與右衛門に差添へ、和泉守が方へ遣し、早く道明寺表へ御出馬あるべしと申送る。此時高虎は、道明寺の方に向はんと、飯盛街道を押出し、其勢十町程南に來りければ、渡邊は彼小山に上り、道明寺表を遠見して、歸りさまに西を見れば、八尾と若江の間に當りて、木村長門守が人數一萬計り、馬を北頭になし、平菟に堤を押すと見えしが、俄に備を轉じ、一里餘も相續いて東に向ひ、先陣は一里計り相廣が

り、井伊・藤堂の人数を目掛け、久寶寺川を押渡り、平菟に菟る體、又味方を望めば、和泉守が先手藤堂仁右衛門高刑たかのり・桑名彌次兵衛親氏・山岡兵部重成は、備を亂して平泉に進む體なり。又右の先鋒藤堂新七郎良勝・同玄蕃高治・同勘解由・田中内藏允友・田左近右衛門、並に旗本の隊長等も、妄に進むにより、渡邊は此由を見て、先手の兵を半途に押止めければ、仁右衛門使を以て、少しも早く道明寺へ押詰むる勢なるを、何れに支へらるゝやといへば、勘兵衛答へて、道明寺は鐵炮の音頻にして、関の聲、次第に西に聞ゆ。然れば彼所迄押着くる間には、敵悉く敗軍すべし。城兵は、味方と戦はんと思へばこそ、人数を引來るなれ。然れば彼敵と一戦して可ならんと申すにより、尤と同じける。又高虎は、味方の進まざるを見て、旗本より纒の者堀伊織を以て、何故人数を押止むるやと申越せば、渡邊は高虎が前に來り、敵已に軍勢を此所へ引出し候へば、是にて御一戦あるべし。足場思はしからずと申せど、敵兵急に來る上は是非なし。速に備を立替へ給ふべしといへば、和泉守も、此儀如何と猶豫する體なる故、御思案所にては無之、善にも惡にも、引出したる敵なれば、何百

萬騎候とも、先手は某に任せらるべしと申すにより、然らば先鋒を呼止めよと申すにより、渡邊重ねて、此道は足入にて、人數を立つべき所もなし。量るに敵合、未だ四十町はあるべしと覺えたり。西に見えたる横堤迄は、十町程も候らん。彼所迄畔道四筋あり。然れば味方を西向になし、四筋の道へ、手寄次第に差向けられ、横堤に於て人數を纏ひ、能き潮合を見切つて、御一戰然るべし。此二筋の人數、浮立ちて不行儀に相見ゆれば、横堤に至り給ひ、直に御下知あるべしと申し、頻に使番を先手左右の二陣へ遣し、備を制止すと雖も、藤堂譜代の者共は、渡邊勘兵衛が新參の身として、萬事の裁判、遠慮なくするを憤るか、又は見限つて暇を乞ふ者の、差圖を受くる事を口惜しく思ひけるにや、各下知に背きて蒐りける。

或本に、冬陣の時、紀州新宮の士新宮左馬介、城中へ引取らんとする砌、藤堂古參の輩は、押掛つて討止めんと申しけるを、渡邊勘兵衛、達つて無用と制しけるに依つて、異儀なく、新宮は城中へ入りしより、各討漏らせし事を殘念がりけるを、高虎聞きて、高祿を遣し比丘尼を抱へたりと、陰にて咥かれける。或本に、渡邊は、藤堂に於て一萬石を領す

と云。勘兵衛此由を聞きて、冬陣の後に暇を乞ひ、出仕を止めて居たりし所に、今般の合戦起りし故、止む事を得ず罷上りければ、高虎相變らず懇にせられ、軍旅の事をも數談せられしに付、古參の者共は、在甲斐なき仕合、是非に及ばずと申合せ、兎角討死と覺悟極めしと云々。

中にも先手の藤堂仁右衛門高刑・桑名彌次兵衛親氏、手勢組衆二三百の人数、何の次第もなく馳せけるを、長曾我部宮内少輔は之を見て、馬廻三百餘に下知をなし、敵を近くへ引付け、高みより落し掛けよといひければ、浸々と馬より飛下り、冑を傾け鎗衾を作つて、下敷きければ、仁右衛門・彌次兵衛兩人は、馬を乗放ち、鎗押取りて、堤の腹へ駈上らんとする處を、宮内少輔は之を見て、桑名が来るぞ、夫れ逃すなどいふ儘に、隊長吉田内匠・東一本市縫殿、正先に進んで突蒐る。東國勢は、敵をかきみに受けたれば、なじかは以て怵るべき。藤堂仁右衛門・桑名彌次兵衛、其外頭分九人、鎗下にこそ討たれにけれ。記に、仁右衛門が首は、赤星太郎之を取ると云々。

或本に、桑名彌次兵衛は、先祖より長曾我部の家臣にして、盛親が父元親より、諱

の一字を受け親氏と名告り、毎度武名を顯せり。然るに盛親關ヶ原合戰の時、豊臣家に屬せしにより、知行沒收せられ、桑名は藤堂家へ仕へたりしが、宮内少輔籠城の砌、舊臣を集むるにより、親氏を招きし所、古主の家斷絶して、飢に及ぶを以て、當家に仕へたりし所に、未だ恩を報せず。先主へは前々忠戰を立てたりといひて、領掌せざりけるが、今度討死を遂げ、首は盛親が家人近藤長兵衛、之を得たりと云々。

藤堂新七・同玄蕃は、仁右衛門・彌次兵衛等を救はんと、銀の牛の舌の指物にて蒐りけるを、木村長門守が組なる青木七左衛門^{一本に、七右衛門}は、黒切裂の指物にて乗込めば、藤堂新七は、白紙衣の羽織着て一番に進み、木村が數輩に立向ひ、終に討死したりけり。藤堂玄蕃も深手を負ひ、已に首を取らんとせし所に、家來駕川權左衛門立向つて、當の敵を討ち、玄蕃を扶け退きしが、半町計りも來りて、相果てたりしとかや。

或記に、此時長門守は、平塚五郎兵衛を呼びて、若者共は下知をも待たず、不行儀に蒐れり。急ぎ馳行き差止めよと申しければ、平塚は心得候といひて蒐向ひ、頓

て木村が組を、引取らせたりと云々。

別記に、藤堂玄蕃は、關白秀次公の家臣たりしが、御生害の後に、氏族の好を以て、高虎に仕へたりと云々。

又長曾我部が勢は、勇み進んで追蒐けゝれば、藤堂勢散々に討なされ、冑の緒を締めたる士六十餘人、雜兵二百餘を討たれ、八尾の方へと敗走せり。

記に、藤堂勘解由は、味方の崩るゝをも顧みず、八方に當つて攻め戦ひしかども、終に討死して、首は、盛親が兄なる長曾我部四郎兵衛の息、主水といへる者之を得たり。然るに大坂落居の後に、主水は藤堂家に仕へけると云々。

同記に、長曾我部盛親は、藤堂勘解由が、等倫に過ぎて働きける事を感じ、勘解由が冑を取りて子孫に傳へんと、手前に差置きけると云々。

或記に、長曾我部が一番鍵は上野左近右衛門。二番鍵は南岡主水。上野・南岡兩人の子孫は、藤堂家に

ありとありといへり。 鍵脇は豊永藤十郎。子孫淺野家にありといへり。 中内彌五左衛門は、鍵下にて討死せしと

かや。與力の加江藏人、組頭なりと、藤堂式部が息稻葉猪之助に討たれたり。又藤堂式部

は、盛親が組頭吉田内匠が鍵下^{内匠は、後に藤堂家に仕へ}に討取りたり。^{七千石を領せりと云々。}同従卒十市太

郎右衛門は、藤堂の家人尾崎勘兵衛と鍵を合せし所に、勝負更に見えざりける故、

鍵を捨て、引組みしが、尾崎を取つて押へ、已に首を搔かんとするを、勘兵衛が

郎等走り寄りて、後より太郎右衛門を討取れり。盛親が鐵炮大將梯内監物は、鍵

下の高名す。同従士中尾小十郎は、苗村石見・横山治郎右衛門を討取る。同従士

池田六右衛門は、鍵下の高名せし所、二度目に五人來つて戦ひし時、討死す。其外

吉田左平治

^{子孫、佐渡にありといへり。}

吉松五助・山田孫四郎等鍵を合す。村田又左衛門

^{子孫松平隠岐守に仕ふといへり。}

へ・明石清左衛門

^{子孫、和州龍田の片桐家に仕ふといへり。}

本山佐兵衛・上山十兵衛

^{子孫、山内家にありといへり。}

豊永所左衛

門、各鍵下にて高名せりと云々。

^{所左衛門は、始め山内家にありし所、冬陣の時、古主長曾我部に歸參せり。其妻子は、土州にて誅せられしと云々。}

二の目に蒐る藤堂宮内・渡邊掃部は、一太刀をも合せず引退きけるが、八尾の地藏堂

の前に、宮内が家來青山彌五右衛門・同空之助・福井文右衛門・安養寺三郎右衛門・弓

削平右衛門・横田甚太郎を始め、其外の者共盛返さんと思ひ、暫く支へたれども、先

手の敗兵留まらず、續く味方も無かりければ、是非なく是も引返せり。此時渡邊勘

兵衛は、五六町計り跡に、高虎が旗を立置き、敵の亂るゝを討たんと、山東村^{或は三戸}、阿部村^{或は阿野}へ兵を進めて、鎧を入れければ、勝に乗つたる城兵、大に敗走なしにける。

一本に、渡邊勘兵衛は、鳥毛の天衝を、其夜俄に取替へ、手島筵に黒餅を付けて、馬前に立置きけると云々。

渡邊は彌勝に乗り、城兵を追立てゝ、八尾の方を見てあれば、盛親が勢は、仁右衛門・彌次兵衛が敗軍の士卒を追立て、堤の上迄來りけるを、勘兵衛、長曾我部が後を斷ちければ、城兵も取つて返し闘ひけれども、戦ひ疲れたる兵なれば、如何ぞ敵すべき。八尾の町を南へ敗せり。勘兵衛は、僅の勢なりと雖も、武功勝れたる者故に、首數廿二を得て、高虎が旗本へ遣し、手負の者を返しける。

或記に、長曾我部宮内少輔は、最前堤の下に伏し、仁右衛門・彌次兵衛を始め、八十三騎を討取り、急に北ぐるを追詰むる、右の先鋒藤堂新七・同玄蕃、之を救ふ所を、重成・盛親が狭んで、新七・玄蕃をも討取りたり。其手の將討たるれば、士卒の死傷は數を知らず。渡邊勘兵衛は中備なりしが、味方の敗軍をも救はず、八尾の明神

の脇に、部曲を整へて居たりけるに、敵軍戦ひ疲れたる所を、横合に進んで之を撃ちければ、長曾我部終に敗走せり。盛親、堤の陰に伏したるは良策なれども、兵を分つて二手計殘し、備を立固めて、二の合戦を待つ事を辨へず。依之敗走して、渡邊が名をなせりと云々。

勘兵衛は、殘兵卅騎計りに、本陣の使番纒の士、少々馳加はるのみなりしかば、堤の方へ馬を引返しければ、城兵又慕ひ來り、堤を越して兵を進めけるに、渡邊が嫡子長兵衛は、敵四人を突伏せけり。又勘兵衛は、敵に微勢を見透されじと、小高き畑の陰に控へし所に、和泉守が旗本より、勇士等拔々に、渡邊が屯に來り、程なく三百に及びければ、大坂勢も敢て蒐らず、引退かば、追討たれんとや思ひけん、寓然と相對して刻を移せり。勘兵衛は最前より、藤堂の本陣へ追々使を立て、此敵の退かんとする所を追討たば、須臾の間に大利を得んと、申遣せしかども、高虎は、勘兵衛が一己の功を立てん爲に、左右先鋒の士大將を、棄殺せしと憤りければ、八尾の地藏堂に火を放ち、烟の紛に、早く人數を上ぐべしと、使の來る事、櫛の齒を挽くが如し。

或記に、渡邊と長曾我部と喰合の砌、藤堂高虎は、自身御旗本へ乗向つて、早々御馬を寄せられ候様にと、申上げける詞の下より、横田甚右衛門馬上にありしが、大音聲にて、御馬を寄せよと申上ぐるは何奴ぞ。御先の若者共、それ追拂へと散々に匂りければ、高虎驚き、吾備に歸れり。其後大御所、畠山入庵を召され、關東の者共は、武に馴れたる故に、只今の一言に及べり。外にはあるべしとも覺えずと宣ひける時に、入庵が曰、横田ならでは、最前の辻方は仕るまじ。抽んでたる御奉公に候と挨拶せり。然れども諸人曾て合點せざりし由を、石川彌十郎・田上右京が物語なりと云々。

渡邊は、高虎よりの下知を諾せず。此表は小勢乍ら、一度も仕負け申さず、場所も丈夫に取繕ひ候へば、御旗本も寄せらるべしと返答しけるにより、高虎益忿りて、數度の下知を用ひず。却て陣を寄せよといふこそ安からね。今朝數輩の討死を見殺して、面目なさに、斯くいふならん。片時も早く、人數を上げよといひ越せば、渡邊は、自分の侍彌右衛門といへる者を以て、先手の輩、不節の討死を遂げ、旗廿本計

を敵に取らせたる事、世間に隠れあるべからず。冬陣に申せし如く、天下の御先陣を勤め給ふ上は、莫大の御武功を立て給はんこそ肝要ならめ。すこゝと引取るを、本意と思さるや。御旗本を寄せられなば、敵を大坂迄追討ち、便よくば、城を攻崩し申すべしといひ遣しけれども、高虎憤解けずして、陣を寄せんとはせず、只早に人數を上げよと、催促の軍使等は、渡邊が屯に留まり、皆々若黨を以て、渡邊が演ぶる旨を高虎へ告げ、其上に拔々來れる壯士、二千(カ)(百)計に及べり。斯る所に井伊掃部頭直孝が勢は、若江の軍に打勝ち、赤幟を押立て、藤堂が勢を救はんと、横堤を久寶寺前に出で、長曾我部が黃色に黒餅の旗、朱の三提燭の馬標を、目懸けて蒐れば、城兵之を見て色めき立つを、渡邊勘兵衛が屯より、騎士渡邊作太夫・吉田武左衛門・渡邊三之介・早水四郎兵衛、堤の上に乘騰るを見て、渡邊が勢一度に鍵を入れければ、追の長曾我部も兵を纏ひ、先に藤堂勢を追立てたる堤を、急に久寶寺迄引取りける。爰に増田右衛門尉長盛が嫡子兵太夫長廣は、冬陣には將軍の供奉たりしが、今度は籠城して、秀頼公より給はりし赤地の錦の羽織を着し、立留まりて防

ぎ戦ひし所、藤堂が縄の者、磯野平三郎に立對ひ、潔く討死を遂げにけり。

一本に、増田兵太夫は、冬陣寄手にありし時、城方の事に付、宜き噂あれば悦び、惡しき事あれば悔みしが、御和談の時、右の趣、大御所の御聽に達しけれども、兵太夫に似合ひたる事なりと仰せられ、さして御咎もなかりけるが、今度果して木村長門守を頼み、籠城しけると云々。

或本に、増田長盛が息兵太夫長次〔長廣カ〕は、關ヶ原陣の後に、尾張へ渡し給ひぬ。

三位中將、其勇智ありて美少年なる故、不便に召使はれ、三百石を給ふ。義直卿に至りて御家人となり、名古屋にては、今の杉町一目兩側町屋の尻屋なり。慶長十九年の冬、一筆を残して曰、愚、太閤殿下の舊臣を以て父とす。先祖の心を繼ぎて大坂に籠り、尋常に討死すと云々。冬陣に、大坂へ籠ると作るは、恐らくは誤なるべし。

大坂勢敗
軍

渡邊勘兵衛は、関を發し、いよく勝に乗り、頻に競ひ慕ひし故、城兵は右往左往に亂れ、平野より廿餘町北の方迄追討すれば、三百餘人命を殞し、今朝迄五千の勢も、

僅に五百足らずになりしと聞ゆ。剩へ大將宮内少輔一本に、息右衛門太郎兩人に作れりは、此場より行方を知らず落失せける。

記に、長曾我部は、藤堂が老臣等、百卅餘人討取りたるを御感に預り、今日の合戦に、人數數多討たせれば、明七日には、京橋口を堅むべしと、仰出されしと云々。

渡邊は、未の刻に、平野を取敷きけるが、道明寺表の城兵は、大和組・伊勢組・美濃組に敗られ、平野に退き來りけるを、南へ追立てければ、段々渡邊が勢集まりて、騎士八百計になりける。此時藤堂の旗本を押詰めなば、平野を渡し追討ちて、大功を立てんと控へけるに、野依清右衛門・堀伊織・松原十右衛門・須賀九兵衛等、高虎が使として度々來り、人數を上ぐべしとのみ下知をなしける。然るに御旗本の永井彌右衛門・白元・小澤瀬兵衛・高重一本に、忠重兩人は、道明寺表より參り懸り、城兵と渡邊と迫合ふ様子を、見物して居たりけるを見懸け、渡邊驅來つて申すは、和泉守事は、今朝物頭共の盲死致したるを憎み、某が今朝の戦功を水になし、却て不届者などと惡口致し申候。然れども是は私の意恨、今日の事は、天下の浮沈なれば、私を捨て公儀

を重んじ、旗を寄せ申す様にと、各様より御意見被下候へと、思込んで願ひければ、
兩人も眼前の事なる故、甚だ其功を賞し、急ぎ本陣へ行き、高虎を勸むと雖、一己の
意地を以て八尾に宿陣し、終に馬をば寄せざりければ、勘兵衛は齒嚙をなし、日既に
沒して、援の頼もなく引取り、又せめて之を取りたる驗にと、平野を放火し、心舒に
退きける。惜い哉此時渡邊が詞に随ひなば、藤堂の功、諸家に冠たるべきを、其功
を空しくする事、高虎が失なりと、世人舉げて難じける。今日藤堂が手へ討取る首、
五百六十餘級の内、三百六十餘は、渡邊が一隊に之を得たり。味方の討死の輩は、
澤隼人・山岡兵部・藤堂勘解由南禪寺の位牌に
勘解由頭とあり・同新七・同仁右衛門・同玄蕃南禪寺の位牌に
玄蕃允とあり・桑名彌次兵衛・友田左近右衛門・梅原龜之介・竹中治兵衛・箕浦少内・津田數馬・渡邊作
左衛門・古田内藏助・西川九郎兵衛・桑名源兵衛・七里勘十郎・清水新介・杉山左門・中尾
小十郎・山田八右衛門・安波左衛門・柳田金十郎・玉置藤藏・三田村傳左衛門・橋本平兵
衛・西内九郎右衛門・田邊五兵衛・中西文兵衛・淺木三郎右衛門・竹村兵吉・赤尾加兵衛・
井口半左衛門・内藤傳左衛門・岸田喜右衛門・疋田勘左衛門・米野勘右衛門・青山四郎

兵衛・安波傳左衛門・依岡甚兵衛・矢守太郎介・淺木勘介・松尾甚兵衛・平尾勘七・栗屋治左衛門・堀七右衛門・山岸喜平治・小島傳介・松井甚五・高山加兵衛・中村新右衛門・三塚權左衛門・疋田勘右衛門・稻葉猪之助・杉田源藤介・三塚治兵衛・辻又右衛門・林五郎右衛門・山本傳左衛門・大須賀七兵衛・濱市右衛門・淵本植右衛門・高畑主税・矢倉兵右衛門・野島治兵衛・田中内藏允一本に無し・梅原萬介一本に無し・渡邊甚兵衛一本に無し、此外雜兵共二百九十五人・手負四百餘人とぞ聞えし。

或説に、翌七日の晩に、井伊直孝、藤堂高虎の陣へ訪ひ來つて、昨日の合戦に、泉州の御先手に於て、高名數多あり。御陣中に多くあるまじと賞せられし處、高虎聞きて、いやとよ、物頭の中に臆病者あつて、譜代頭分の者を數輩討たせ、心外に候と申せば、其時直孝、頭分の討死は見請け申さず候。某若江の軍に勝ちて御先手へ參候仕る時分、久寶寺表より、長曾我部を追立て、進み來る貴殿の御先手を見請け候に、筵の指物差したる物頭、人數の使ひやう、城兵を追討たるゝ體たらく、舌を震ひしが、其仁は討死は遂げられずやと尋ねられしに、高虎返答なき内に、

渡邊勘兵衛、甲を脱ぎて直孝の前に出でて、筵の指物は、拙者にて御座候。掃部様の御目に留り、冥加に叶ひ候仕合なりと申せば、直孝其儘渡邊が側に往きて昨日の軍配貴殿なりしや。誠に萬人の目を驚かす舉動、今度泉州御先手第一の戦功たるべしと、返々感ぜられければ、高虎世に不興氣にて、言なかりしと云々。

或記に、今度高虎、藤堂仁右衛門、同新七郎等を、見殺したりとて責怒りければ、渡邊答へて、彼等と共に漫に蒐らば、同じく敗れて益あるべからず。敵の亂れたる虚に乗じて、二の勝を得たり。是れ古よりの兵法なり。臣なかりせば、君も亦危からん。御感にこそ預るべけれ、却て責めらるゝ事、所存の外なりといひける。

高虎忿恚更に解けず、遂に、渡邊、浪人となりしと云々。

豫州大洲近藤氏藏書に、八尾の内埒明き候てから、勘兵衛堤へ乗上げ、見及び候へば、八尾・久寶寺の間に有之川道兩堤の内、欄干橋の前後、所々に敵群立ち幟四五十本にて、二千計りも相見え、端々引取り申す體に候間、手前私に、手前とあるは渡邊勘兵衛なり無人に候へども、敵方の捨鎧を手毎に取らせ、敵間廿間計り迄、勘兵衛仕懸け候

所に、敵も少しそゝり出で、暫く競合^{せりあひ}を仕候へども、敵に合せ候へば、手前の者、卅

分一も無之候へば、勘兵衛手の者を一所に集め、輪を乗引に仕候へば、敵も地足に一町計り、此方の堤迄残らず附きて参り、則ち長曾我部、其八尾堤を取固め申候。

此時堤下へ、勘兵衛乗下^{のりおろ}し候へば、敵も踏下し引付け候間、堤下にて言葉をかけ、乗返し候へば、答へず。敵又堤の上へどつと引上げ申候。夫より此方は、堤の下

敵間四十間計りも有之平地を、取堅め申候事、朝四つ時分より、晚八つ迄、手前無人、殊に場廣に候へども、競合を仕負け不申候、後は跡より心懸の面々、少々加へられ候ても、五分一押崩し候時も、三分一ならでは無之候。泉州旗本は、廿五

六町隔たり候へども、十死一生の覺悟にて、其場を勘兵衛取堅め、物頭に罷成り、裁判仕る事に候。勘兵衛此時の申す所は、第一、手前無人、卅分一も無之候へども、敵の間廿間計り迄仕懸け、競合を仕候事。第二、大將を附留め、一町計有之場廣なる所へ引出し候事。第三、堤際にて引返し敵を追立て、其場を取堅め候事。

又曰、八尾の堤に、二時餘り睨み合ひ有之内に、八尾の堂に火をかけ引取り候へ

と、十度に及び泉州御使に候間、度々勘兵衛御返事には、後詰をなされ候へと申すに付、朝勘兵衛死所を外し候て、左様にしたるを、仕候かと仰せ越され候間、今朝の仕方、白晝の事を御覽なく候や。勘兵衛仕懸け候道筋は、前後勝ち候て参り、八尾にて人前をすけ、それより大將を附留め申候。こゝを引取り、あれ等首に仕らず候ては、何と仰分けられ候や。朝頭分四人其外馬六十餘りの面々を、三ヶ所にて、卅本の轡迄、捨り討たれ候事、其隠れ有之間敷候。勘兵衛冬の御陣にても、度々申候如く、日本の御先をなさるゝ事に候。第一、御無法度に候。又小事を御心懸け候ては、下々にて、大きな仕業はなり難き物と申傳へ候。兎角だゝいの御勝を、専らに御分別なされ候様にと申入候は、斯様の事に候。敵方後より續く人数も無之候。僅千二千の長曾我部を、茲にて討留め申さず候ては、御公儀への被仰上様、天下の褒貶、いかゞ思召候や。大將を勘兵衛討留め候儀、幸の事に候。是非に旗本を寄せられ候へと申候へども、泉州御同心無之候間、左様に候はば、爰は捨になされ候へ。手前稼ぎに仕るべしと申切り、其場を愈堅固に取堅め申

候。勘兵衛此時の申所は、第一、五分一三分一の無人にて、二時競合を仕候事

第二、主人引取り候へと、十度に及び御使有之に、御下知を背き引取り不申、仕勝ち候事。第三、爰は居勝に罷成候と、度々申入候事。

又曰、八つ時分に、長曾我部、堤の人数を引崩し、引取り候所を、此方より引付け、平野廿町北迄追討に仕候。此首數三百餘討取り候。此仕方、前後勘兵衛物頭に罷成裁判仕候。但し此方無人に付きて、大將を討不申候こと、殘多しと申す儀に候。六日の首數、朝二百餘、玆にて三百餘、都合五百六十と、御公儀首の御帳に御座あるべく候。勘兵衛此時の申す所は、第一、三百餘の首を討取り候事。第二、敵地へ五十町踏込み候事。第三、平野に煙を揚げ、道明寺より大坂へ引取り候人数を押へ候事。

又曰、道明寺より大坂へ引取り候數萬の人数、平野迄退き來り候に付、追討を仕捨て、平野へ入込み候大坂人数を、五六町南方へ追立て候處に、猶道幾筋も退き來り候。何れも平野五六町南に、一時餘り支へ置き、大坂へ引取らせ不申候。大

と、十度に及び泉州御使に候間、度々勘兵衛御返事には、後詰をなされ候へと申すに付、朝勘兵衛死所を外し候て、左様にしたるを、仕候かと仰せ越され候間、今朝の仕方、白晝の事を御覽なく候や。勘兵衛仕懸け候道筋は、前後勝ち候て参り、八尾にて人前をすけ、それより大將を附留め申候。こゝを引取り、あれ等首に仕らず候ては、何と仰分けられ候や。朝頭分四人其外馬六十餘りの面々を、三ヶ所にて、卅本の幟迄、捨り討たれ候事、其隠れ有之間敷候。勘兵衛冬の御陣にても、度々申候如く、日本の御先をなさるゝ事に候。第一、御無法度に候。又小事を御心懸け候ては、下々にて、大きな仕業はなり難き物と申傳へ候。兎角だゝいの御勝を、専らに御分別なされ候様にと申入候は、斯様の事に候。敵方後より續く人數も無之候。僅千二千の長曾我部を、茲にて討留め申さず候ては、御公儀への被仰上様、天下の褒貶、いかゞ思召候や。大將を勘兵衛討留め候儀、幸の事に候。是非に旗本を寄せられ候へと申候へども、泉州御同心無之候間、左様に候はば、爰は捨になされ候へ。手前稼ぎに仕るべしと申切り、其場を愈堅固に取堅め申

候。勘兵衛此時の申所は、第一、五分一三分一の無人にて、二時競合を仕候事
第二、主人引取り候へと、十度に及び御使有之に、御下知を背き引取り不申、仕
勝ち候事。第三、爰は居勝に罷成候と、度々申入候事。

又曰、八つ時分に、長曾我部、堤の人数を引崩し、引取り候所を、此方より引付け、
平野廿町北迄追討に仕候。此首數三百餘討取り候。此仕方、前後勘兵衛物頭に
罷成裁判仕候。但し此方無人に付きて、大將を討不申候こと、殘多しと申す儀に
候。六日の首數、朝二百餘、玆にて三百餘、都合五百六十と、御公儀首の御帳に御
座あるべく候。勘兵衛此時の申す所は、第一、三百餘の首を討取り候事。第二、敵
地へ五十町踏込み候事。第三、平野に煙を揚げ、道明寺より大坂へ引取り候人数
を押へ候事。

又曰、道明寺より大坂へ引取り候數萬の人数、平野迄退き來り候に付、追討を仕
捨て、平野へ入込み候大坂人数を、五六町南方へ追立て候處に、猶道幾筋も退き
來り候。何れも平野五六町南に、一時餘り支へ置き、大坂へ引取らせ不申候。大

軍の使、勘兵衛相應には、大きな仕業かと存じ候。彌、平野を、此方より取堅め罷在候所に、泉州より平野を引取り候へと、又爰にても十度に及び御使に候間、御人數を千二千にても詰められ候はゞ、其面々に平野を渡し、今是に罷在候七八百の者、南面になし、支へ置き候大坂人數を追立て申すに、手間は入申間敷候。

左様に候はゞ、大和筋の此方、御人數も懸合はさるべく候。兩方より揉合ひ候はば、住吉堺の方へ、追討に可仕候間、大坂は今日御手に入可申候。平野を今引取り申すに於ては、大坂人數、残らず大坂へ引取り可申候。さ候はゞ明日御合戦有之べく候。爰は泉州御手柄をなされ所、古今有之間敷御仕合に候。天の與へと申すは、斯様の事にて可有之と申入候。此御使に須知主水・伊藤吉左衛門・堀伊織・松原十右衛門・須知九右衛門・野依清右衛門、此面々四度に、此外從者の面々、兩人づつ五六度、都合十度申入候は、胴勢を御寄せ候へと申す事に候へども、前後後詰をなされず候様に申す所へ、長井監物殿・小澤瀬兵衛殿御出候間、平野五六町南に支へ置候大坂人數を、御覽候へと申す次第、又は跡より泉州人數の相詰められ候

様に仰せられ、御尤の段々、御兩所へ固く申入候へども、泉州より人數も差越されず、勘兵衛に彌引取り候へと、又銘々に御使參り候。大場の事に候。無人にては力及ばず、平野に火をかけ、七つ時分に、勘兵衛平野を引取り候へば、支へ置き候大坂勢、平野道を、残らず大坂へ、夜をかけ引取り申すに付、七日に御合戦之ある事に候。此首尾事過ぎ候ても、御評判に御座あるべき事に候。御陣の事は、なされ直しのならざる儀に候。勘兵衛儀、今日四時の間、身命を顧みず、御先にて、恐れ乍ら御將下し、裁判を仕候所に、朝死所を外して、左様にしだるく仕候かと、泉州仰越され候事、さりとては御情なき儀と存じ、今日の泉州御忠節所は、残らず勘兵衛仕候。別には御座ある間敷候。申過し候、御腹立とは存候へども、平話事に候は、御言葉のあやは堪忍仕るべき儀に候へども、侍役の忠義を、不忠に仰せなされ候事、曲なく存候。若し勘兵衛申す所も、言葉の違ひ有之との沙汰いかいと存じ、證文の爲め書付申候事云々。勘兵衛、今年五十四歳なりと云々。

或記に、渡邊勘兵衛は、故阿閉あひ淡路守に仕へ、其後秀吉公より、御養子次九君に、一本

正三位權中納言秀勝卿小字次と稱す。信長公の
息男なり。天正十三年十二月十日に薨す云々 へ附けられし所、此君早世により、中村式部

少輔に招かれ、夫より増田右衛門尉に仕へ、一萬石を領す。關關ケ原合戰の後、關ケ

戰の時、和州郡山即ち増田の
城にて手柄あり。諸書に委し、 藤堂へ二萬石にて仕へし所、故あつて浪人し推庵と稱し、

江州大津或は京都に住居し、寛永の頃死去す。嫡子長兵衛は、藤堂家にあつて、

三千石を領す云々。或曰、藤堂家に仕へしは、渡邊が
 末子にて、千石なりしと云々。

一説、二男を三郎兵衛と稱す。江戸にあつて、采祿千石にて、本多能登守に仕へ

たり。然るに弟三十郎方より、書狀を以て、兄長兵衛殿は、據なき事にて、一生三

千石領せられたり。貴殿僅に千石の扶助を受け給はん事、父の武功を徒ただになし、

某に對しても御情なき御覺悟なり。此方の分限量り知られたる上は、男を止め

申すなりといひて髪を下し、不誰と改名せり。三郎兵衛も此事を聞きて、恥ぢ悔

みけるが、生涯妻妾を持たず、養子せずして、子孫を斷ちけり。又不誰は、堀田上

州上野介正
 信なるか、割なく招かれたるに依つて還俗せり。後に一萬石の知行を與へんと

ありけれども、之を受けず、三百人扶持にて、京都にありしが、彼三郎兵衛が志を悼

みしにや、魚鳥は喰ひ乍らも、他事は出家の如くにてありしといへり。然るに、堀田蟄居の後、青山大膳亮幸利、賓客のもてなしにて、甚だ寵遇せられ、三千人扶持をぞ遣せしと云々。

木村重成以下の首御實檢并河野權右衛門御

勘氣御赦免附木村主計助榊原勢と合戦の事

さる程に大御所は、五月六日辰刻計りに、星田を出御ありて道を行かせられ、暫く御駕籠を立て給ひ、御先手の左右を待たせられし處、一時計り經て、先年御勘氣を蒙りたる河野權右衛門道重、此度井伊直孝に屬し、御先手にありし處、金の丸の指物の中を、鎗にて突破られたるを刺して、一番首を持ち、本多上野介正純に就いて披露を遂げしかば、御勘氣御赦免あつて、御前に召出され、合戦の次第を、直に御尋ありける。道重が父は、庄左衛門盛政とて、今年七十二歳なりしが、武道功者たる故に、御使番を勤め在合す故、是も同じく御前に出されけれども、暫く涙に咽び、左

木村重成以下の首御實檢并河野權右衛門御
勘氣御赦免附木村主計助榊原勢と合戦の事

右の事も申し得ざりけり。扱首上覽の後に、此首の名を存じたる者ありやと御尋ありしにより、上方衆大勢罷出で之を見しが、三好因幡守・猪子内匠助堀若狹守言上に、慥に見覚え不申候へども、物頭の内なる内藤監物が首なるべしやと申しければ、大御所御氣色快然として、監物といふは、新十郎が一族なるかと問はせらるれば、則ち答へて、新十郎が伯父に候と申しける時に、大御所、此首は目利に遇ひて、掘出しけると笑はせ給ひ、其後權右衛門は、供奉仕るべしと仰付けられけるが、道重は正純に對し、只今の仕合を、掃部頭に知らせ申度由を望みければ、尤なる儀と宣ひ、權右衛門は、再び井伊が陣へ赴きけり。又直孝よりは、木村長門守・山口左馬介・内藤新十郎等が首を持たせて獻じけるを、平岡の一里程前にて、御駕を立てられ、上覽ありけるに、木村が首は甚だ薰じければ、大御所の仰に、若輩なる長門守が斯る行跡、希代の勇士、不便の次第なりと宣ひける。

記に、大御所の近臣等、木村が事を評しけるは、長門守は、所勞の聞ありしが、今日も死を決せざるにや、月額を剃らずと、口々に申しけるを、家康公聞召され、月額

には因るべからず。已に忍の緒を、眞結にして、兩端を切つて捨てたれば、再び此冑を脱ぐまじき心底にて、討死と極めたる所なり。汝等が申分、無僉議なりと仰せられけると云々。

或本に、木村は、討死の前日風呂に入り髪を洗ひ、頭に伽羅を留め、江口の曲舞なる紅花の春の朝と謠ひ、餘念なく小鼓を打ちしが、今日大御所首實檢し給ひ、涙を流させられ、此若者討死を極め、髪に香を留め乍ら、月代を剃らざりしと仰せられしなり。其時髪を梳き香を燒きし女は、江戸にて木原意運といへる外科醫の伯母にてありけるが、常に談じけると云々。

或記に、長門守木村重成墓は、河州若江郡西郡村にあり。山口重政の墓に相隣る。

木村が父は常陸介、母は豊臣秀頼公の乳母なり。重成、時に廿五歳と云々。

又松平右衛門大夫は、本多上野介に就いて、山口左馬介事は、拙者遁れざる者に御座候へば、首を拜領仕度由望みけれども、正純隙入あつて、未だ上聞に達せざりけるにより、御直に訴訟申しければ、大御所則ち首を給はりける。採申の下刻、平岡

へ着御あつて、百姓の家に御止宿ありける。供奉の輩は、大方野陣をなせり。又安藤長三郎は、御褒美に、黄金廿枚記に十枚、時服三領記に無し、八田金十郎は、黄金三枚・良馬一疋、日下部源太郎は、黄金三枚拜領せり。

或本に、八田金十郎は、山口左馬介が部下の弓頭飯塚太郎右衛門を討取りし故に、良馬黄金を拜領せりと云々。

或記に、安藤、舊は食祿五十石計り、八田は二百石計なりしが、各七百石となりし所、兩人の子孫、所以あつて、知行沒收せられ、八田は三百石、長三郎は僅百石になりしと云々。

爰に木村重成が伯父に、木村主計助宗明は、洗革の鎧づなりに、頭成の筋骨の緒を締め、口の丸付きたる羽織を着けて、三百餘騎を引率し、是も重成と同時に、地白に入幡と、大文字に書きたる旗一流を押立て、長門守が左備とし、河州若江郡岩田村記に、山田村とあるは誤なるべし。或本に、山田村は、石川郡に屬すと云々。へ出で、東國勢を防がんとす。關東方には、櫛原遠江守康勝、相備に松平丹波守康重・小笠原兵部大輔秀政父子・仙石越前守好俊・諏訪安藝守忠恒・保

科肥後守正光・丹羽五郎左衛門長重卿・檢校藤田能登守信吉等は、同國松原村より小川を涉り、若江郡・西郡・菱江の間に押詰めしが、井伊・藤堂の兩備に軍始まる頃、榊原遠江守は、車の紋付きたる旗を押立て、岩田村へ出で、木村主計助と、互に鐵炮を打違ふる程こそあれ、康勝が先鋒村上彌右衛門・原田權左衛門、鎗を入れける間に、榊原が家人三持勘兵衛といふ者、首一つを取り來れり。則ち此手の一番首なり。之を始として、敵を引組み或は討たれ、或は首を取るもあり取らるゝもあり。中にも榊原方の貴志角之丞は、馬上にありて敵と引組みしが、兩人馬より組んで落ち、城兵を引伏せ首を搔落す所に、味方の脇より大勢來り、彼首を奪ひ取れば、貴志は口惜しき事と思ひ乍ら、敵中へ走り入り、冑首を取り來れり。元老伊東忠兵衛は、深入して終に戰死す。息宮内、于時十八歳父が討たれたるを見て、口惜しく思ひ、駆入りて高名せり。榊原康勝は、風毒腫を煩ひ、膿汁鞍を浸し乍ら、身を揉んで下知をなし、軍には勝ちたるぞ、懸れくと、横合に突懸りければ、主計助が勢は、散々に敗北するを、追討に首六十八或は七十八を取り、榊原にも、伊東を始め高津長兵衛、一本に長右衛門、其外數輩討

木村重成以下の首御實檢并河野權右衛門御
勘氣御赦免附木村主計助榊原勢と合戰の事

死せり。木村も今は叶はじと思ひ、城中へ引取らんとするを、康勝が勢は、附入にせんと慕ひける故、宗明は敵を尻目に睨み、其間近くなりし時、大返しに咄と返し、戦ふ事度々なりしかば、康勝が兵も、さのみ長追はせざりけり。

或記に、榊原が人数は、井伊と同時に蒐らんとするを、檢校藤田能登守藤田が事は、小笠原秀政討

死の卷に載せたり制して曰、彦根の人数、殊の外浮立ちたれば、唯突返さるべし。當手は、敵

の備を亂し追來る所を、脇鎧に突崩さんといふにより、榊原の長臣伊東忠兵衛、此旨を守りて人数を抑止め、井伊勢の崩るゝを相待つ所に、思の外に打勝ち、長門守が備も主計助も、悉く敗しける故、榊原の人数は、後馳に三五人走付き、手を塞ぎたる計なり。是れ偏に忠兵衛が麾の惡しき故なりと、若者共は罵るを、伊東聞きて、翌七日の合戦には、討死を遂げしと云々。此説是なりや、覺束なし。

同日酉の上刻、大樹は平岡へ成らせられ、大御所へ御對面あつて後、還御なり。是れ明七日合戦の御評定の爲とぞ聞えし。

或説に、道明寺・若江・八尾三口、共に大坂方敗軍して、後、藤又兵衛・薄田隼人正・井

上小左衛門・山本左兵衛・木村長門守・山口左馬介・内藤新十郎・眞野藏人・入道宗信・増田兵太夫を始め、數多戰死しなければ、其殘兵大坂へ逃籠る事引きも切らず。中にも大野主馬助は、櫓井を引取りたる日より、船場に陣取りて居たりしが、道明寺口の敗軍を聞きて、茶臼山迄押上り、敗軍の勢を集め、一戦すべき覺悟の所に、秀頼公より黃母衣衆を以て、皆々人數を上げ、明七日未明に、岡山筋天王寺前に出で、東國勢と合戦を挑み、引受けてあへしらひ、敵を天王寺迄引付けなば、御勝利の手段ありと觸れられる故、總軍皆大坂へ引入り、眞田・毛利・福島伊豫同兵部以下は、天王寺庚申堂近邊に陣を取る。又東國勢勝利に依つて、將軍は道明寺・大御所は千塚に御宿陣。出雲井・四條繩手・高安・岡山・八尾・若江・西郡・萱振・山土・阿部野・久寶寺・龜井田・高井田・柏原・舟橋・國府・老原・植松・古市・譽田・葛井寺近邊に、軍勢充滿して、兩將軍を守護し奉る。若し大坂より夜討もやあらん、油斷すべからざる旨を、五の字の使番衆乗廻り、幾度も觸通る故に、諸陣何れも甲の緒を締め、馬の腹帶を固め、箒を焚かせ少しも油斷せず。夜に入り千塚・道明寺の兩陣、本陣

へも、諸大名御見舞に參る。然れども大和・伊勢・美濃組、竝に井伊・藤堂以下御先手の大將は、陣々を守りて一人も來らず。今夜將軍よりは佐久間將監、大御所よりは横田甚右衛門を御使として、井伊が陣へ遣され、今日の様子尋ねさせられしが、佐久間歸り來つて、大御所へ申上ぐるは、井伊掃部頭、今日の軍に、競ひ切つて居申候。さり乍ら先手の川手主水を始め、多く討死を遂げ、明日の御先手勤め難く候へば、新手を御差替下され候様に、願ひ申す由を言上す。然れども大御所、取合ひ給はず、掃部は、でかしたりと計り上意ありし所へ、甚右衛門も歸り來り、定めて佐久間將監申上候べし。今日井伊掃部頭大利を得、甚だ勇み居申候。尤手負討死過半有之候へども、夫には動せず、今日敵に鹽を附け、明七日此勢を抜かず、押崩さんと申し罷在申すと、言上しければ、大御所は嘸こそと、御氣色快然たり。時に横田が申すは、さり乍ら爰は御賢慮あるべき所に御座候。掃部頭人數を損じ、殘兵も武具を損ひ、馬とても疲れたる體に見請け申候へば、掃部頭如何程勇み申すとも、明日の御先手は、餘人に仰付られ然るべく候へども、外へ譲る

事を、合點仕るまじく存じ候間、押して御振替あらば宜しかるべし。此段愚案の趣に候と演べければ、家康公莞爾とし給ひ、さあらば先手を、加州竝に本多出雲守へ申付けよと、御使番を遣されたり。又佐久間は、赤面して退出しけると云々。別記に、本多上野介、大御所の御前に出で、明晩御臺所の支度の場合は、何方へ申付くべしと伺ひければ、茶臼山にせよと上意ありける。未だ味方へ取敷きたると申す場所にもあらざる故、合點の行かぬ事と存じ乍ら、其旨を申渡しけるが、果して翌七日の夜は、彼所の御本陣となりける。是は上野介の物語なりしと云々。

越前少將忠直朝臣御先手を望まると事

越前少將忠直朝臣は、五月五日の夜、河州四條巖手に宿陣あつて、今六日の合戦には脱けられしが、井伊・藤堂の兩家に、討死多かりける故、御先手を承らんと、本多伊豆守富正・本多飛驒守成重の兩人、大御所の御旗本に來り、明七日の御軍法を相伺ひける所に、二人を御前に召され、今朝井伊・藤堂が働を、越前の者共は、朝寐して知ら

ざるか。先手は加州へ申付けしと仰ありければ、兩人は御請の辭もなく、悄々すこくと退出せり。

或記に、藤堂・井伊兩家の御先手、御免あるべしとの御沙汰により、越前より御先手を願はんと、兩本多、大樹の陣營に上り、本多正信に逢ひて、様子を聞合さんとする所を、大御所入らせられければ、佐渡守も、御迎に出でける。兩人は手を突きて居けるを、あれに居るは何者ぞと御尋ありしにより、越前の兩本多に御座候と言上しければ、大御所、兩人に向ひ給ひ、越前の者共は、今日晝寐をして居たるかとお意あつて、佐渡守へ、あの者共は、何の用にて來るやと御尋故、正信答へて、明日御備の儀に付、上り候と演べければ、大御所兩人へ向はせられ、明日の先手は、加賀へ言付けたるぞと宣ひしが、其後は將軍と御雜話ありて通り給ひける故、兩人すべき様なく、罷歸れりと云々。

伊豆守・飛騨守は立歸りて、大御所の仰を、忠直朝臣へ申しければ、少將恥ぢられ、此表も、明日中には埒明くべし。然れば領國を差上げて、高野の住居をするの外なし

と、思ひ詰められたる顔色を、伊豆守目早く見て取り、夫は如何なる思召に候やと申しければ、忠直朝臣が申さるゝは、尋ぬるにも及ばざる事なり。前田筑前に劣りたる某と、兩御所の御見限に預かり、男が立つ物かとあれば、伊豆守承り、左様の思召に候はゞ、明日此表に於て、思召の儘になされ、御軍法を背き給ひ、越前國を差上げられ候へと申しければ、少將大に悦喜あつて、如何にも其旨にせんと申さるゝにより、本多重ねて、然るに於ては、吉田修理亮を召出され、御相談あつて然るべしと申すにより、直に呼出され、其事を尋ねられければ、修理亮が申すは、明日の御合戦には、正先に進ませられ、諸人の目を覺されて、然るべく存じ候。さり乍ら加賀の軍勢に、前路を塞がれ候ひて、以前長に思召さるゝとも相叶ふまじ。幸ひ拙者當所の地理を委しく存じ候へば、先陣を給はる様にと申すに付、忠直朝臣も老臣等も、皆其儀に隨ひける。吉田又申すは、短夜の事に候へば、只今御用意あつて然らんと申し、某も支度次第に出勢仕るべければ、我等が備に相續き、御勢を可被出と申して、其座を罷立ちけり。

或記に、吉田修理亮は、内記重氏入道長英が、息九郎左衛門が二男なり。

嫡男は、内記と稱せり。織

田信長公に仕へ、永祿十一年九月十三日、始め大橋彦四郎といひて、織田信雄公の家人とな

勢州大河内の城の追手に於て討死せり。
り、其後關白秀次公に仕へたりしと云々。

同七日寅刻計に、越前の軍兵は勢揃して、旌旗を眞先に押立て、白き吹貫に二引兩の馬印を、徐に進めて行く所に、加州の者共が申すは、今日の御先手は、當家へ仰付けられたれば、先へ通す事不罷成といひけるを、吉田修理亮聞きも敢ず、某は吉田修理と申して、筑前守様にも御存知の者に候。貴家へは如何仰出され候や、當家への仰渡されには、岡山筋の御先手は加州、天王寺表の御先手は越前の承なるを、各御存知無之事は、近頃雇略なる儀に候と、申捨て、馳通れば、本多伊豆守富正・同飛騨守成重、竝に小栗美作多賀谷左近・山川讚岐守以下相續きて、卯の上刻、天王寺の南表に至り、馬の駈場を残して陣を張りける。

一本に、一番の左本多・丹下組共、右は本多伊豆守組共、家臣大祿小祿の次第を合せ、騎士三百人。二番の左右は、吉田修理亮・山本攝津守・片山主水・萩田主馬、各組

共三百五十騎、是に加はる。三番の左右、松平庄五郎後に直政出羽守と稱す・國枝頼母・菅沼伊賀入道休也・片山丹波・三崎新左衛門・淺井丹波・笹根大膳・岡淡路・原隼人、並に大番三組の騎士百三十三騎、是に副へ、其次は旗本跡備山川・讚岐守・永見右衛門兩組、總騎馬千五百・雜兵一萬五千、茶臼山に向ふと云々。

又水野日向守勝成以下は、住吉へ押さんとする所に、越前勢の體を見て、早合戦始まると思ひ、いや／＼住吉へ押行けば、今日の手に合ふまじ。いざ蒐れやと備を北頭に直し、越前勢の左に立ち、茶臼山へ取上れば、之に續いて本多美濃守・松平下總守・美濃・伊勢組も段々に、備を立てゝぞ蒐りける。

或記に、越前少將は、兩本多への御意の趣により、是非討死と覺悟せられたる心底と相見え、合戦の始まる前に、湯漬を給べんとある故、平子一本に眞子・平馬といへる近習、膳を持ち來りしを、立ち乍ら食し、兵糧を使ひぬれば、最早餓鬼道には落つまじきぞ。死出の山を心易く越え、正直に閻魔の城へ着くべしといひて、馬に乗り申されし顔色、常とは格別に相見えしと云々。

或記に、越前の家臣片桐丹波守は、先達つて勘氣を受けしが、此陣へ忍びて供し、先手に居たりしを、本多伊豆守之を見て、忠直朝臣の前に来り、片桐丹波守事、今般忍んで御供仕り、御先手に加はり居申候。其氣色、今日を最期と存じ極めたる様子に相見え候。御勘氣の内に討死を遂げなば、冥途黄泉の障になるべく、不便なる事に存じ候間、哀れ御勘氣を御免あらば、二世の思出と可存と、伊豆守涙を流し申しければ、少將の申さるゝは、勘氣を免す間、早々召出すべしとありけるにより、使番深澤長左衛門、乗切つて先へ通り、丹波守に斯くと申渡しければ、其儘旗本へ來り、馬より下立ち、冑を脱ぎて畏り、頻に落涙するを、忠直朝臣見られ、片桐勘氣を免すと申されければ、其辭を聞きて、片桐は頭を地に附け、一禮して罷立ちしが、只今になり、許すとは聞えざる事と思へる氣色にて其場を退き、馬に乗り駈出しけるが、先手に鎧始まると同じく、冑付の高名して、持參せしと云々。

五月七日兩將軍家御陣御進めの事

五月七日の黎明、家康公は、河州平岡を御進發あり。本多上野介御前に候す。永井右近大夫正綱が組なる弓銃の卒、次第を守つて押行けば、板倉内膳正重正・植村出羽守・家政一本・植村新六郎又は種村大膳政春ともあり。

或本に、家政は新六家次の息にて、慶安三年に卒すと云々。

内藤主税介後に石見守に任ず・信廣一本に、諱を載す掃部とのみあり

或本に、内藤信廣は、豊前守信成の息なりと云々。

打續き、尾州宰相義直卿・駿河宰相頼宣卿は、御後の翼衛たり。抑大御所は、京都御出陣の日より、遂に甲冑を帶し給はず、白き袷の御道服にて、乘輿に召さる。

記に、大御所御旗本の左は、阿部左馬介正吉・松平左馬介。右は松平・豊前守・松平志摩守・酒井左衛門尉等なりとあり。

秀忠公は、黒糸の御鎧を着し給ひ、頭巾の御冑、山鳥毛の御陣羽織に、白熊の旒を持たせられ、栗毛鬣の御馬に召されたり。丹波・保科・成田・仙石等は、御左の邊にあり。井伊・藤堂は、御右の邊に屯せり。六隊の長は兵を率ゐ、麾下の前軍たり。酒井雅樂

頭・土井大炊頭・本多佐渡守三部の兵は、其左右に陣す。安藤對馬守重信は、後陣に備ふ。

記に、大樹の左右は、植村出羽守・本多大隅守・内藤主税介・松平左近等を始として、大番頭・書院番頭・歩行頭、其組を相從へ、次第を守つて扈從す。御小姓組番頭の一番は水野監物。二番は井上主計頭。三番は板倉周防守。四番は成瀬豐後守、段々に備へ、其前には總鐵炮數千挺を持たしめ、御旗を立て、虎の皮の擲鞆掛りたる千本鎧を眞先に立て、合戦始まるに於ては、歩行の輩に持たすべき由、御下知なりと云々。

秀忠公は、道明寺に御宿陣ありしが、未明に、八尾堤へ御出あり。

或記に、加藤左馬介嘉明・黒田筑前守長政、今度は小勢にて、御供仕るべき旨仰出されしに付、兩人は、本多大隅守が備に居たりしが、秀忠公御成の山にて騒ぎければ、加藤・黒田は御目見え申さんと罷出でし所を、冑を召されず、御鎧の上に、山鳥の御羽織を召され、櫻野といへる馬に乗らせられ、御徒扈從人二三十人計りに

て、諸手を御檢分の爲に御出なり。長政は一の谷の冑、嘉明は富士山の冑或本に、嘉明が富士山の形なりと云々を家人に持たせ、御目通へ出でし處を、兩人の方へ御馬を向けられしにより、加藤・黒田は罷出で、御馬の左右に取附き、昨日は城兵共、足長に出で候へども、うち洩らし引取らせ申す事、殘念に存じ候ひしに、今日は堂々と人數を引出し候。誠に御連に叶ひたる御事なりと申せば、秀忠公は御機嫌宜しく、追々にとの上意にて通らせらるれば、兩人は、少しの間供奉しけるを、最早夫にと仰あるに任せ、加藤・黒田は差控へける。又本多佐渡守は山駕に乗り、澁帷衣に冑計りを着し、大なる澁團扇を持ち、蠅を打拂ひ乍ら御供せり。其時長政が申すは、將軍様には、常の様子と變り、扱々輕き事かなといひければ、左馬介聞きて、さればの事に候。斯様の節に手輕とあるは、御親父様以來、御家癖に候と挨拶せり。扱長政は其邊を見合せ、我等共は、此邊に備へても宜しかるべけれども、前に沼あつて、〔否〕〔異なカ〕ものなりと申しければ、左馬介が返答に、此所一段然るべし。貴殿某などは、今日手に合はぬが御奉公なりと申せしと云々。

已の下刻、家康公と將軍は、平野に於て御參會。其時大御所の仰に、予は茶臼山に向ふべし。大樹は岡山へ向ひ給へと宣ひけるが、岡山口は、大坂の城より出づるに道惡しく、足入の所ある故、御心に叶はざりけるか、更に御請なかりければ、大御所、御氣色宜しからざる所、本多佐渡守進み出でて申すは、如何様にも御意に従はせ給ふべしと、頻に諫め申しける時、大御所又宣ひけるは、今日は已に午刻に近ければ、急に陣場も取り難からん。兩旗本の先手は去年の陣所へ入るべき旨仰ありける。時に秀忠公は、御尤に御座候と御請あつて、岡山へ赴き給へり。

記に、伊達陸奥守も此所に來り、今日御先手の様子を見るに、兩御將軍家に對し、心變の者も有之やうに見及び候。大和口より、兩御旗本へは程遠し。某は去年の陣所船場口へ陣替仕り、兩御所に對し、逆心の輩と申すならば、一戰仕るべしと言上しければ、大御所尤なりと、許容し給ひしと云々。

夫より家康公は、路次を急がせられ、少し行き給ひ、義直卿・頼宣卿へ、間宮權左衛門を以て、急ぎ來り給へと仰遣され、其後板倉内膳正重昌を、秀忠へ御使として、合戰

の儀御取扱ひなされ度由仰遣されければ、御返答に、思召次第たるべしと仰せられる。重ねて大樹より、朝比奈源六を以て、已に合戦を始め給ふべき旨を告げしめらる。大御所則ち御馬に召され備を立て、敵陣近く押向け給へり。

異本に、大御所、龜井村を通らせ給ふ所に、眞田左衛門佐は、伏兵を以て、御駕の通る先へ、三百餘人を突出せり。大御所を始め、上下三百餘人の者、眞田は岡山か天王寺口にあるべきと、油斷して通りける所故、大に驚き、例の眞田ぞと言葉を掛け、植村新六郎・別所孫兵衛・甲斐庄喜右衛門・丹羽勘助・遠山久兵衛以上五騎、轡を並べて馳合せ、眞田が歩行立を蹴立てんとするに、眞田は之を取圍みて突立てしかば、植村・別所・遠山三人は手を負ひ、丹羽と甲斐庄は、馬を返して引退く所に、内藤掃部助・須賀攝津守・水野美作守・本多因幡守・松倉左衛門・藤堂將監・山岡主計以上七人、馬より飛下りく、歩行武者と突合さんとすれば、眞田方より、究竟の騎馬武者十騎馳出して戦へば、關東方の七人は、何れも手を負ひ引退きぬ。大久保彦左衛門・西尾豊後守・桑山伊賀守・本多中務少輔・松倉豊後守・多賀谷右近・村

越三十郎・桑山左衛門・稻葉淡路守・織田民部少輔・一柳監物、以上十一騎馳出でて、火花を散らして防ぎ戦ふ。眞田方より、打物と鎌鎗との勢出でて、關東方の馬の諸膝薙居るゝ、或は内冑を突入れ、馬共に突倒す故、桑山兩人・本多中務・松倉豊後・稻葉・多賀谷六騎計り、手を負ひ空しく引退く。數萬騎の關東勢、河州一國に充滿すると雖も、遽の事にて之を知る者なし。然る所に大久保彦左衛門一人は、一足も引かず、歩行立になりて戦ふ内に、眞田は、外の者には目をも懸けず居たりしが、大御所の御姿を見ると其儘、年來の願望成就せり。親父に反吐なつかせると罵り乍ら、十文字の鎗提げ、粕毛の馬の其長六寸計なるに、白木の鞍置きて打ち、六文錢の旗を進めて、追蒐り奉れば、御旗本の歷々、何れも手を負ひたる故、前後忘する計なり。爰に天海僧正は、竹腰山城守へ、早々御供して退かれよと申さるゝ所へ、本多上野介・板倉内膳正・水野日向守・大久保彦左衛門、蒐來つて眞田に向へば、幸村が手廻の士、各鎧を以て四人を突立つる。家康公も、今は叶はじと思召され、御馬を、植村の方へ引返されけるを、金地院の長老、御馬の三つをはた

と打ち、左様に臆し給ひ、此大儀の調ふべきかと罵る聲の下に、大御所忽ち吐逆し給ひ、又馬は駿足なれば、眞田及ぶ事ならず、遙に逃延び給ひければ、最早軍は是迄なりと、何方へか退きしと云々。疑ふらくは此説、幼童の戯に、記を講ずる者の作れるもの。

或説に、家康公は、軍中に於て御具足振ひまし、其跡に吐逆し給ふ時は、御身鐵石の如くにならせらると、人口に膾炙すれども、未だ詳ならずと云々。

或本に、家康公は、御危き戦に望ませらるゝ時は、大指を嚙ませ給ふ御癖あり。關ヶ原合戦にも、金吾秀秋卿に、大坂勢の裏切を約せられしに、少し遅はりければ、忤めに謀られしと、大指をひたもの嚙ませられしと云々。

眞田左衛門佐大野治長を喩す

井幸村息大助を促し城中に遣す事

さる程に、昨六日の合戦に大坂方の大將並に士卒、多く討たれしと雖も、残る輩、猶義を純一に守り、東國勢と花麗はなやかなる一戦を遂げ討死すべし。哀れ秀頼公、天王寺表

へ御出陣まし、武士の剛臆を直に御覽あつて、御下知を加へられよかしと、申す輩も亦多かりける。

或本に、城兵共、關東勢は、冬陣の如く早速寄すべしとも思はず、上下油斷せる中にも、毛利・豐前守が組の鐵炮大將・松岡・彥兵衛・雨森三右衛門は、敵付の方を見置かんと、七日の未明に、兩人打連れ素肌になり、刀を若黨に持たせ、亂髮の體にて、天王寺迄來りし所、寄手には、大御所の仰にて、井水或は溜水、又切門には、皆引裂紙を竹に附けて立置きたりしを、松岡・雨森は、味方よりなせしと思ひ、さても早き事かなと談りける。扱夜明離れ、平野・岡山筋、東南四五里の間に、村里と覺しき物のありける故、霧に依つて斯様に見ゆるかと疑ひ乍ら、能く見れば、森林と思ひしは、皆寄手の旗指物長柄等なり。村里と思ひしは、東國勢の備にて、日の出づるに従ひ、長柄などきらめき渡り、八尾・若江、南は平野塙へ掛り、三里が程は一面になつて、押し來るに驚き、毛利・眞田の方へ、右の趣を申遣しければ、何れも周章^{ちうしやう}て、足輕を張出し、備を立てしと云々。此説未詳。

城兵七日の未明より、各南表へ出張し、敵寄せ來らば馳合せ、一軍せんと味方に目を配り、馬に白泡嚙ませて控へたり。其備、西は茶臼山、東は岡山の端迄、一面に人數を立並べたり。

一本に、伊木七郎右衛門遠雄等、赤旗一流、唐人笠に四手附きたる馬符を、正先に打立てたり。眞田が備の東には、福島伊豫守正鎮まさつね・同兵部少輔正守は、紺地に白餅の旗を押立てたり。古田玄蕃允・篠原又右衛門・石川肥後守數矩・津田左京・結城權之介等は、谷を後になして控へたり。毛利豊前守勝永が一陣・子息式部・同勘解由、直達の旗に烏毛輪貫の馬符なり。其陣に續いて、七組の長中島式部少輔氏種・堀田圖書助勝喜・速水甲斐守時之・野々村伊豫守雅春・眞野豊後守頼包記に、此外に伊東の旗に銀の角の折敷三重の馬符なり。丹後守長實、黒地の旗に銀の角の折敷三重の馬符なり。丹後守長實、黒地の旗に銀の角の折敷三重の馬符なり。等は、組中家子を出し、其長は、秀頼公の御前に伺候せり。此外小姓組は、後陣に備ふ。岡山表は大野主馬介治房、鉈の紋付けたる旗四五流、郡主馬介良州は、豊臣家の旗、金の切裂付けたるを十二本押立て、諸軍の後に備ふ。津川左近親行は、秀頼公より預かる所の茜の吹貫五十本、並に金の瓢

簞の本に、金の切裂付けたる馬符を押立てければ、東國勢は之を見て、秀頼公御出馬ありけると思ひしと云々。

然るに茶臼山に屯する眞田左衛門佐幸村が陣所へ、大野修理亮治長馳來り、敵色を窺ひける時に、眞田が曰、豫て中上ぐる如く、天下分目の雌雄今日に決せる間、御前にも御出馬まし、軍令を施し給ひなば、衆心大に勇むべければ、足下宜しく御諫言あるべし。又味方より天滿と船場に控へし明石掃部助全登を、西高津今宮より旗を卷き、天王寺の岸陰を歷て、爪生野に押出し、相圖の狼烟を揚げなば、夫に應じ、某等は上道より掛りて戰を始めたらんには、大御所堪へ兼ねて、旗本の士を以て、一戰せられん事必定なり。其時明石が勢虛に乗じ、本陣を撃たば、多少勝利を得べしと申せば、治長大に感心し、此趣を全登が方へ申送り、其身は城中に歸りて言上せり。

或本に、眞田幸村は、伊木七郎右衛門を招き、大野治長と相議し、然々の手段あれば、此儀を毛利豊前守に知らせ、其備をなさしめらよといひければ、伊木は諾し

て、毛利の陣に馳行き、巨細を告げける故、豊前守も、此謀尤も宜しかるべしと領掌し、味方より所々に足輕を蒐けて發する事を、急に差止め、且諸將へ軍を發すべからずと軍使を遣し、其上に毛利は、眞田が陣に來り、猶も謀の次第を談じける中に、あれ東方に備へたる味方は、早軍を發し、足輕を蒐くると見えたり。急ぎ貴殿御陣所へ御歸あつて、之を制し給へといひければ、毛利は心得候とて、我陣天王寺の東南庚申堂の前に歸る中、東兵は競ひ進み、豊前守が備に打つて蒐れりと云々。

然るに大御所の御旗本より、本多三彌・坂部三十郎・久世三四郎を以て、合戦の圖を見せしめ給ふ所に、三人の者共、罷歸りて申すは、敵の備厚くして騒動せず。合戦を待設けたる由を言上しければ、大御所より、重ねて秀頼公へ仰遣さるゝは、斯の如く成り來り候へども、縁者の好捨^{よしめ}て難く、此上乍ら御和睦あらば、和州に於て領地を參らすべしとの御事なり。是勇氣を確むる謀なるべし。又秀頼公には、已に御用意あつて、櫻門に控へ給へり。

或記に、秀賴公は、緋緘の御物具を召され、天王寺表へ御出張あるべしと、櫻門迄出立ち給ひ。太閤より御相傳の御旗馬印を押立てられ、太平樂といへる黒の御馬に、梨子地の鞍置きて引立て、御玄關より櫻門並に門外堀端迄、甲冑の武者次第を守り、並び居ける形勢に、太閤御在世の昔を存じ出し、御譜代の面々は、落涙せりと云々。

斯る所に大御所の謀にて、大野壹岐守氏治一本大野彌十郎とありより、修理亮治長が方へ、内通狀

を以て、七組頭の内、密に關東へ志を致し、裏切の約あれば、秀賴公御出馬の事は、努
 努あるべからずと申來れり。治長は、此謀に落ちて、一向御出馬を止め奉る故、眞
 田が手段も空しくなれり。縦ひ秀賴公御出門あつて、直に下知を加へらるとも、御
 勝利はあるまじけれども、大野に支へられ、恥辱を重ね給ひしこそ、淺ましかりけ
 る形勢なれ。又幸村は、秀賴公御出馬の延引に氣を焦いらち、息大助信隆或は幸昌を招きて申
 すは、量るに我親屬東國にある故、大野修理亮、頗る疑心あり。汝参りて、左衛門佐
 儀、一度豊臣家に随持し、二心なき事を能々示し、御出馬を疾く進め奉れ。某は此

所にて討死を遂げ、素志を顯さんと申しければ、大助は去る事を肯せず、願はくは父子死生を共にせんと申しければ、幸村怒つて、士にして二心を懷くは、骸上の恥辱なり。汝何ぞ我志を明かさゝるやといひければ、大助も已む事を得ず、涕泣して城中へ赴けり。

或本に、眞田左衛門佐は、茶臼山の出先に屯しけるが、息大助を呼び、其方は、昨日の一戦に手を負ひぬれば、渉々しき勦は叶ふまじ。其上思ふ仔細あれば、只今の内、御城に歸り、御前の御先途を見奉れと申しければ、大助答へて、物前になり、左様に致し候事は、本意ならず候間、父君と死を俱にせんとて諾せざるを、左衛門佐、大助を近く呼寄せ、何やらん申含めければ、大助伏して、頓て馬に乗らんとせしが、父が方を見遣りつゝ、離別の情切なりしを、左衛門佐近臣を以て、心強くいひやりければ、是に勵まされて、馬を乗出しけれども、幾度となく父を見返りて、城へ歸りける。衆人、父子の別れを見て、涙を流さゝるはなかりけるとぞ。是は、稻垣奥右衛門、其節眞田が手にありて、直に見たる由な、則ち奥右衛門語りけると云々。

或記に、眞田左衛門佐は、秀頼公の御出馬を急がるべしと、大野治長に謀じ合せ城中に歸し、猶も御出馬を疾く勸め奉れと、息大助を歸しける。夫を知らざる士卒等は、大野も城中へ逃入り、眞田は味方の負を知りて、我子を城へ歸せりといひしと云々。

新東鑑卷之十七

眞田左衛門佐井御宿越前守戰死の事

五月七日午の刻、越前家の軍配者天文者の事なり赤見新兵衛といふ者、今日の合戦は西南より蒐り、軍を始め午の刻過ぎて吉なりと申しければ、手々に得道具を持ちて、今日こそ討死を遂げ、昨日の恥辱を雪ぐべけれど、一同に蒐りけるが、眞田左衛門佐幸村は、軍を延々にして、搦手の明石掃部助全登を、大御所の後陣へ廻し、且秀頼公の御出馬を相待ちて蒐らんと、敵を會釋し時刻を移しける處に、越前の先手本多伊豆守富正、大音聲にて、旗本の下知を守るも時によるぞ。軍法を守るは命を惜むが故なり。時分は能きぞ、懸れや者共と、眞蔭に攻めんとす。眞田は、伊木七郎右衛門に向ひ、豊臣家の御運も盡き果て給ひ、味方に作る程の手段相違し、此の如く御出馬

も遲滯す。此上は是非に及ばず、去來合戰いざを始められよといひければ、伊木答へて、尤に存候、左の魁首毛利豐前殿にも、早合戰を始められしと相見え候と申しけり。

或本に、伊木七郎右衛門常旗は、幼若の時、遠雄半七と稱せり。祖父を武馬大和守と稱し、下總國より上りて、織田信秀に仕へたり。父は武馬七右衛門といひしが、續いて信長公に仕ふ。然るに濃州各務郡かづみに、木曾川を隔て、東は尾州犬山、西は濃州伊木山あり。其頃伊木山香川といへる將寵城して、信長公に敵せり。

依之武馬七右衛門、先登にて力戰して、彼伊木山を攻落しければ、信長公感悅斜ならずして、末代の譽に、氏を改めよとありしにより、此後に氏を伊木とす。又其城の本丸に、石の井桁ありしが、彼所に於て、働拔群なる故に、月に星の紋を替へて、井桁になせり。又、七郎右衛門は、十六歳の時、秀吉公の兒小姓に召出され、翌天正十一年、江州志津ヶ嶽合戰に太刀打して、柴田方の使番の、指物差したる武者を討取る。此働き、七本鍵と左右に立並びたる手柄故、世に七本鍵・三振太刀といふ。其他二人石河兵介・櫻井左吉なり。同十八年小田原陣には、黃母衣を掛けたり。太閤記志津ヶ嶽の處に、伊木半七と

あり。其外軍書等に、伊木七郎右衛門遠雄、或は伊木七郎右衛門常雄、又伊木有齋と記せるは此者なりと云々。

落城の時に、命を遁れけるが、方々

より高祿を與へんと招きしかども、所存あつて應ぜず。片桐氏の後見として、現米五百石、嫡子は千石を領せり。其後京極安知始め高廣丹後守と稱せりの招に應じ、丹後國に赴き、父子三人にて三千石を領せり。二代目七郎右衛門は、千二百石の采地にて、同丹後守の家老職を勤めたりしと云々。

幸村は今日を最後と思ひ、緋緘の鎧に、

或記に、緋緘といふは、紅絲にて威すといふ。別記に、日威の鎧といふは、天子に限る。是は日の海水より出づるに譬へて、胸より上を薄白く、夫より下を臙に、裾を青くす。玉體を日とする故に、紅絲を用ひすと。又氷魚威は、神功皇后、魚を釣り給へるに譬へ、銀小札にして、水あさぎ絲なり。銀は魚、あさぎは水に象ると云々。

抱角打つたる甲に、白熊を附けしを猪首に着なし、日頃祕藏しける河原毛の馬に、紅の厚總の鞆かけ、金を以て六文錢打つたる白木地の鞍置きて打乗り、越前勢に掛

りける。越前勢は、鶴翼に開きて押取籠め、一人も漏らさじと、前後に當り左右を支へ、義を重んじ命を輕んじ、安危を一時に定め、剛臆を累代に残すべしと、猛卒の氣を勵まし、萬人死して一人残り、百戰は破られ、一陣になるとも、引くな者共、進めや殿原と、互に匂り相戰ひける。大坂勢も、今日を限りの軍なれば、數多戰場に討死し、白骨を砂礫に曝せり。此時は諸手一同に軍始まりければ、関の聲矢叫の音、天を響かし地を震はし、百千の雷一度に落懸るとも、是には過ぎじと思はれけり。

又眞田左衛門佐は、味方の諸軍、敗走するにも氣を屈せず、魚鱗に蒐つて駈破り、虎踏に分れて追靡け、蜘蛛十文字に蒐破らんと、諸卒を勵まして蒐入り、敵の大軍を多しとせず、堅甲利兵を強しとせず、進退節あり周旋度あれば、諸手既に眞田が爲に開き靡くと見えし處に、越前勢は少しも動せず、節に應じ機に隨ひ、轉化する事宛も神の如く、敵、千變萬化すと雖も、敢て物の數ともせず。城兵は集勢なれば、眞田種々に心を盡すと雖も、終に精力を打碎かれて敗北す。中にも伊木左近祐光大音揚げ、去冬よりして、命は豊臣家に捧げたり。何の爲にか命を惜まんと、追ひ來

れる敵を尻目に睨み、敵合近くなる儘に、取つて返して戦ひけるが、越前の家臣山縣伊賀守と鎗を合せ、遂に左近は討たれにけり。是れ此日の一番首とぞ聞えける。一本

此日の一番首は、益田作十郎なりしと云々。

斯くても眞田は、討殘されたる郎等を、前後左右に引連れ、彼所に顯れ此所に隠れ、火を散らして、聚散離合の形勢、須臾に變化し、前にあるかとすれば、忽焉として後にあり、左にあるかとすれば、右に出で、在所を定めざれば、敵は大勢なりと雖も、選み討つべき様なし。

或本に、眞田左衛門佐は、千變萬化して、敵の圍を切抜け、間道を経、不意に大御所の御旗本を討ちければ、城兵斯の如く急に蒐るべしとは思寄らず、御先手組本多上野介・松平右衛門大夫・秋元但馬守の者共も、油斷してありける處大に騒ぎ、朋勢の中へ、鎧を取りに歸るを、味方崩るゝと見て、御旗本の備一統に崩れ、安西組へ逃げ懸る。永井右近大夫の備、駿尾兩卿の人數も各敗走せり。大御所甚だ忿らせ給ひ、御馬を立直され、御下知ありけれども、崩れ立ちたる癖なれば、耳にも入れず亂れける。御旗本宗徒の面々馳廻り、蹈留まれと罵れども制し得ず。是

非なく俱に崩れ、御馬副には、漸く大竹郷左衛門正重・茂呂水之介・山中五介、扱小十人少々計なり。小栗忠左衛門は、後馳に供奉す。其外續く勢もなし。眞田は纔なる人數なれども、思ふ儘に切崩し、最後の戦快しと、氣色ばみて猶も窺ひ奉れども、眞田は多く創を被り、身神勞れ果てたる所に、再び越兵後を襲みて、困兵を擒にせりと云々。

眞田が間道は、生玉明神の南、西照庵の邊にある庵の境内より見れば、空堀の如しといへり。或記に、此道舊よりありけるを、後人眞田が拔道と偽り稱せる者なるべしと云々。

或記に、此砌、天王寺庚申堂の前なる小屋に棄置ける掛硯を、本多上野介・松平右衛門大夫等が輕卒争ひて、口論喧しかりしが、大軍の馬煙にて、四方朦朧と見え分たず。少し計りの沼田前にありて、人數廻り兼ねたる其向にて、味方の争ひ居けるを敵と見誤り、折節秀忠公の御先備聞崩の期に、此事は後卷に載す本多が輕卒、鐵炮を

二三十挺に發しければ、裏切ありと罵り騒ぎ、本多が組四五百計り崩れて、安西

が組へ雪隠れかゝり、永井右近大夫が組は、安西組に押立てられ、動搖斜ならず。然るに横田甚右衛門が申すは、敵兵少しく備を固くして蒐るにや、御備を脇へ啓かるべしと言上するにより、大御所、則ち其趣に御下知ありし所、果して其跡へ味方崩れ懸れり。其儘備を置かれなば、其崩に及び、或は敵兵紛れ來り、大御所を窺はんとする事も量るべからざるを、横田が武略は理に當れりといへり。初家康公は、先陣の崩るゝを怒らせ給ひ、御軍場の後に栗桑の林あつて、前は芝土居なりければ、御馬廻の兵を下敷かせ、芝土手に鑓を突付け、敵蒐らば我旄に應じ、一同に立騰り、鋒を揃へて突懸るべし。斯る大合戦には、一萬二萬の敵をも、五百三百にて討勝つ者ぞ。鎗を未だ取らざる者は、急なる時太刀にて働くべしと、御備の内を二三遍乗切らせ給ひ、御下知あり。大竹・毛呂・田中小十人組も、其場もあり。然る處に小栗忠左衛門久次、栗毛の馬に乗りて馳來り、御先備大利を得て、軍已に終れり。是は其崩れる由を述べける。

後の差別辨
に難し。

大御所御先手崩の事は、眞田討死の後なるか、未詳。凡て此日は、諸手一同の合戦故、前

此時城兵、船場の方より、住吉の方を指して、三百計り落行きけるが、疑ふらくは是れ落行く勢ならずして、大御所の御後を襲はんと、船場より廻りし明石掃部介が勢なるべき。其内三十騎計り、天王寺石の華表に附きて、直道を經て逃ると。又茶臼山より岡山の方へ行き、本道を押來る味方と、皆一同に混亂し、敵味方の差別なく、大御所の御備先なる總鎗の備場まで、崩れ蒐りしかば、御鎗奉行頻に制すと雖も、御長柄鎗を始め動亂して、立直す事を得ざりける。然りと雖も追武功の大久保彦左衛門忠教若林和泉直則が指揮に應じ、甲陽の舊臣、當時は武州八王子の萩原・志村・原・石坂・河野・窪田・中村・山本等、虎革の抛鞘の御鎗を、其場所に立て咏へさせ、且歩卒頭阿部左馬助正吉伊豫守正勝の息今武州忍十萬は、石を領する阿部氏の家系なり。組中並に手勢を圓め、在家を廻つて押出し、味方の棄置きたる鎗を拾はせ、半月の形に打敷かせ、我身は只一騎、小塚の上に凜然と控へたり。蹈留まらんと欲する者は、左馬助にいひて、後の證になしけると云々。或曰、眞田、大御所に近付き奉りし事、三々度見えたり。然れども正録に載せざれば、共に後人附會せる者ならん。若亦實辭に於ては、應に此時の事なるべしと云々。

眞田は千變萬化すと雖も、越前勢は少しも漂はずして、眞田が勢を引包んで攻戦ふ

程に、小敵の堅きは、大敵の擒なりと、孫子が詞、争でか違ふべき。從卒忽に討たれ、眞田幸村は、越前家西尾仁左衛門に討たれにけり。時に四十九歳一本に四十六とかや。

一本に、眞田幸村・大塚清安・眞田勘解由・高梨主膳、共に戦ひ疲れ、畔に腰を掛け、雜卒に疵藥を與へ、息を休めて居たる處へ、西尾は士卒を携へ來り、幸村を討取れりと云々。

或記に、眞田左衛門佐幸村本書信繁に作る・嫡子大助信隆十六歳、共に討死す。信繁外に二人

の女子あり。一人は、青木民部少輔一重家中、青木五郎兵衛尉が妻、次は蒲生飛驒守氏郷の家人蒲生源左衛門郷成が妻なりと云々。

別本に、眞田幸村本書に信仍との塔は、妙心寺の中、養徳院竝に龍安寺の中、大珠院にあり。法名大光院道白といふとなり。

或記に、若林平右衛門は、中務少輔鎮興が次子なり。嫡男は、八郎統昌と稱し、大友家に仕へたり。大友豊後

守義統卿左衛門督義鎮入道宗麟が息男なりの臣なりしが、大友氏國を除かるゝ時、是に隨ひて遷都せり。

或記に、參議羽柴義統卿は、豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後六州の守護職にて、百五十三萬石餘を領せられし處、朝鮮征伐の時、彼地に向ひけれども、軍功更になかりし故、累代の舊領を、秀吉公より沒收せられたりと云々。

然るに、大坂の兵起るに及び、輒く城中に入り、眞田に屬せしが、今日天王寺口に出で敵と相戦ひ、首二級を得て鞍間に掛け、なほ敵陣に入らんとするを、從者馬を控へて之を諫めければ、若林が曰、今日は士の死すべき時なり。汝我を許せと、言未だ終らざるに、鞭を着け奔擊して、遂に戦死せりと云々。

此時大野主馬助治房が次將御宿越前守正倫は、固より嗚呼の者なりしが、岡山より眞田が方へ、軍議の事に付きて行きし處、途中に於て、早合戦始まり、味方敗軍の場へ來かゝり、心ならずも引立てられ、藪蔭を行く處を、越前勢に取圍まれ、追つつ巻くつつ戦ひしが、竟に野本^{一本}右近に討たれたり。

記に、御宿越前守は、白絲の鎧に、梨子打鳥帽子の冑を著け、金覆輪の鞍置かせ、紫の厚總掛けたる馬に打乗り、其勢三千餘人、武田菱の旗二流、五色の幣の馬符

を吹靡かせ、自ら鎧を取り、茶臼山の坂の上より、本多伊豆守に突いて掛る。本
多が從卒、突戰する事良久しく、本多も備を立兼ねて、右往左往に奔走す。され
ども御宿は、鐵炮に左の腰を打抜かれ、馬より下へどうと落つるを、譜代の郎等
由良千齋・小泉主水・加藤治太夫・上田權兵衛・足洗藤内・生田外記以下究竟の兵共、
主人の首を取らせじと、前後左右に軍を亂し、各討死しけり。折節越前家の臣野
本右近、六七騎にて來れり。御宿とは舊友なりしかば、右近を呼びかけて申すは、
身不肖なりと雖も、秀頼公に頼まれ奉り、白旄を取つて、大將の號を被る。貴殿
我首取りて、實檢に入れられよ。早疾々と勸むれば、右近も泣々首打落せり。抑
御宿越前は、始め駿州葛山の城主葛山播磨守綱氏一本に元綱の嫡子、御宿監物友綱入道
が養子なり。監物入道は、武田信玄の旗本にて、屢武功の者なりしが、天正十年
三月、勝頼沒落の時に、越前守は未だ幼弱たるの間、密に小田原の北條氏政に屬
ひ、勘兵衛と改め、度々兵力を顯す處、北條滅亡して、羽柴中納言秀康卿、禮を厚
うして招き給ひ、一萬石を領して、麾下に屬する事數年なりしが、忠直朝臣を恨

むる仔細あつて、越前國を出奔し、秀頼公に與力し、生年四十九歳にて、討死せりと云々。

或本に、御宿越前守は、相州竹下の住、御宿監物入道素全が養子にて、實は武田信玄の五男葛山十郎信綱の一子なり。甲州没落の時、上杉景勝卿に屬ひ、成長して御宿が養子となり、源左衛門と稱し、福島正則に仕へ、其後勘兵衛と稱し、越前家へ召出されしと云々。或記に、勘兵衛は、越前より來りし故に、人呼びて、越前守と稱すと云々。

扱西尾仁左衛門は、眞田が頸を持參し、大御所の實檢に備へし處、幸村は生前に御目見えをせざる故、御見知もなかりけるにより、其首の向齒、缺けてありやと宣ひ、御近臣に檢めさせられける處に、仰の通りなれば、勝負は如何と、西尾へ尋ね給ひしに、耽と御請も申上げず、平伏しければ、能き首を取りたりとの上意を蒙り、西尾は御前を退出せり。其後御側衆へ向はせられ、勝負はなさりし者なりと仰ありけるとぞ。

異説に、西尾久作後に仁左衛門眞田を討取り、首を實檢に入れし處、大御所の御前に召出

され、其場の様子を尋ね給ひし處、西尾が答に、左衛門佐、烈しく働き候故、拙者も疵を被り、漸く突伏せ首を得申候由を述べければ、眞田は早天より三軍を指揮し、數回戰ふ上は、最後如何ぞ、汝が言の如く戰ふべきやと、御誼ありしと云々。

記に、眞田左衛門佐は、天王寺・勝曼堂・生玉の間にて、越前の物頭西尾仁左衛門に討たれしが、誰が首とも知らざりしに、甲の立物に、抱角打ちたるを、同家臣原隼人、一目見て涙を流し、是は眞田が首なるぞや。去年御和陸の砌、渠が宅へ尋ねし時に、則ち申せるは、再び御合戰あらん事、鏡に掛けたるが如し。然らば此甲を着て討死遂ぐべし。足下此甲を見給はゞ、某が首ぞと思ひ、一遍の回向あらんこそ、舊友の情たらんと語り、其後に河原毛の三寸許もあらんと思しき、太く逞しきに、金を以て六文錢附けたる本地の鞍置きて、曳き來りけるに打乗り、是又幸村が最後に乗るべき馬なりとて、三遍計り乗りしが、其形勢眼前に見る心地すと、鎧の袖を濡らしける。西尾聞きて、實に討死の體たらく、常の葉武者とも思はれず。馬は本間太郎左衛門に取らせたりとて、馬を牽かせに遣さんとする

を、隼人が曰、夫迄に及ばず、口中を見給へ。前齒二つ缺けてあらんといひけるにより、則ち筭を以て口を開きしに、果していふに違はざりけり。其後に、眞田が首竝に御宿が首を、大御所御覽あつて、野木右近を召され、御宿が働を尋ね給ひけるに、野木承りて、老武者にて、合戦に疲れけるが、安々と首を取り候旨を申上げける。次に西尾を召され、幸村が最期の形勢を尋ねられしに、眞田左衛門佐と名乗り威を振ひ、形の如く働きたる由言上せり。時に家康公聞召され、右近は天性正直なる者と見えたり。西尾は過言ある男なりと仰せられ、さのみ御感もなかりしかども、兩人へ、御腰物竝に黄金を給はりける。此時眞田隠岐守を召され、只今左衛門が頸なりとて、越前の手より持参す。然るに眉の内に疵あり。是は何れの國にて付けたるやと尋ね給へば、隠岐守畏りて、左衛門には、面疵無之由言上しければ、大御所怒らせられ、汝去年兩度まで、渠が陣へ使し、返事をも申せしが、此疵を知らざるか。但し参りても逢はざりしやと、仰ありければ、隠岐守迷惑して、夜陰といひ殊に老眼に候故、疵の事は目に掛り不申由、陳謝し

けりと云々。

或記に、越前忠直朝臣は、落城の砌、首數三千七百五十一級を得らる。其中に本多伊豆守百七十三、落合美作守重長が手へ四十八なり。本多自讃して、我等が手は、首數の第一なりと申しけるを、落合聞きて、某こそ首數は多かりしと相諍ひければ、本多が曰、夫は如何なる事に候やと申しければ、貴殿は七萬五千石の身上にて、百七十三。某は一萬石にて、四十八なれば、首數は過半多く候と申しけるを、使番諸星金左衛門といへる者、松山浪人にて、大剛の兵なりと云々眠り乍ら柱に凭掛つて居たりしが、此事を聞き、作州の申さるゝ事、尤至極に候といひければ、本多は閉口せり。斯様の遺恨にやありけん、落合は其年浪人して、後に頼宣卿に召出され、二百人扶持を給ひしと云々。此説、如何あるべきや。

或本に、本多飛驒守成重は、作左衛門重次の息なり。童名仙千代丸、成人して丹下と稱す。父重次、所以あつて上總國小原の莊に籠居の時、父重次忠義の事、諸記に詳なり成重も出仕を止めらる。關ヶ原御陣の時、御後に陣し、慶長十八年越前國丸岡の城を給

はり、忠直朝臣に屬せらる。五月七日に、一番に合戦を始め、眞田が陣を打破り、自ら敵二騎切つて落し、大勢の敵を追崩し、首二百七十三討取り、大手の城門を破つて、左の脇より城に乘込み、此處彼處に火をかけ、首廿八を切る。手の者共、討たれし者五人、疵を被る者七人なり。元和九年、忠直朝臣配流の後に、再び將軍家に召され、慶安四卯年十二月に卒す。時に六十二歳なりと云々。

松平伊豫守高名の事

越前忠直朝臣の舍弟松平伊豫守忠昌は、越前の手より、合戦始まりける時、十文字の鎗を提げ、先に進んで敵軍に向ひ首一つを取り、關治兵衛を以て、御旗本へ送られける處に、城兵念流の何某とて、本書に大夫とあり、劍術に名を得し者あり。黒革の鎧を着し、味方を離れ、只一人來りしが、伊豫守を見て、能き敵と思ひけん、眞慕に打つて蒐る。太刀銳にして、防ぐに隙やなかりけん、忠昌は馬上にありて、鞍を撚りける程に、馬跳ねて、伊豫守に當るべき太刀は、馬の口付に當り、袈裟掛に打倒され、

のつけに斃れて、餘る太刀は、忠昌の脇當に中れば、伊豫守も馬より下立つ間に、歩
行頭の安藤治太夫、透さず彼者に討つてかゝれば、敵はひらりと脱し、安藤が首の骨
を、半過る計に斬込みしが、如何しけるか死せざりける。之を見て歩行侍の吉田五
左衛門・同竹右衛門、得たりや賢しと打つて掛りけれども、敵は物の數ともせず、左
手右手へ切据ゑければ、或は首を半斬り、或は深手を負うて働き得ず。小人頭戸田
六兵衛、或は有田少有ともあり此形勢を見て、忠昌の前に立塞がり、太刀を合せしが、是も亦大
指かけて切落され、働き得ずして、忠昌も危き處に、高瀬彌右衛門といへる笠持走
り來り、敵の腕をはたと切り、終に組伏せ首掻落し、茂右衛門苗字未詳といへる者に持た
せ、御旗本へ遣しけるが、此時合戦最中にて、敵味方入亂れ、已に首を奪はれんとし
ける程に、茂右衛門、防ぐ手段なく、彼首の鼻をそぎ、冑に添へて持行き、伊豫守手討
の由を言上しければ、兩御所大に感じ給ひ、場所など委しく尋ね給へり。彼茂右衛
門が鼻をそぎて獻じけるを、忠昌怒りて、終に勘當せられしとかや。又家臣永見志
摩守は、猯の皮の指物を落しけるが、敵に取らせては、長き弓矢の恥辱なりと、走り

歸つて取り來れり。此戰に永見が弟毛受將監は高名せり。同家來相樂半兵衛・田中某は、首一つを相討にす。從士栗栖長九郎は高名せり。忠昌僅の從士たりけれども、首五十七級を得られ、家臣岡部豐後は戰死せり。又伊豫守の弟庄五郎後に出羽守と稱す。或は此時出

羽守と稱す。或は此時出直政は、自ら生捕高名あり。

或記に、伊豫守忠昌は、生年十九歳なり。將軍の御後備本多佐渡守正信が組にありけるが、昨六日の夜、秀忠公の御陣に參られ、諸軍の中を進み出でて、御目見えに候。御免あれと申し乍ら、諸軍の前に伺公せられければ、秀忠公打笑み給ひ、若者の志神妙なり。合戰に前後の替りはなき者ぞと宣ひければ、正信心得、御免なり、御先手へ御出あるべしと申しければ、忠昌謹んで御禮申して退出せられ、夫より舍兄忠直朝臣の陣へ行かれければ、少將も喜悅にて、先手本多飛騨守本書に丹下とあり。然れども丹下は飛騨守が始の稱號なり。依つて改之。同伊豆守が備の間に陣を据ゑられ、左右の手配、皆人目を驚かせしと云々。

或記に、中納言秀康卿の御二男伊豫守は、若輩乍ら、冬陣にも供奉にて、本多正信

が相備にあり。然るに今度の御陣前、誰に寄らず、前髪有之幼弱の面々は、御供に召連れられずといへる雜談を聞きて、或夜若輩の小姓に申付け、公儀へも伺はず、前髪を落されし故、附々の者共驚き乍ら、なすべき様なく、有體に本多佐渡守へ申入れたりければ、則佐渡守より上聞に達せし處、大御所御笑あつて、前髪ある者を、今度の供に連れまじとある儀は、何者がいひ聞かせし事やと、上意ありけると云々。或曰、伊豫守は、今年十九歳なれば、前髪はあるべからず。疑ふらくは、忠昌の舍弟直政なるべし。直政は、今年十四歳なりと云々。

水野日向守、明石掃部助と合戦の事

城將明石掃部助全登は、豫て眞田左衛門佐と謀し合せし如く、堺道を歷て南へ廻り、瓜生野より、大御所の後へ押寄せ、不意に討たんと、騎士三百、雜兵三千計りを率ゐ、旗を卷きて來りし處に、天王寺表の味方早敗軍し、支度相違しけれども、全登は少しも氣を屈せず、馬を控へて敵陣を遙に見やり、旗を颯と揚げ、味方に下知しけるは、敵の旗の手を見るに、東國勢の中にて、名ある將なれば、尋常に戦ひては、中々

水野勝成
明石全登
合戦

以て耐るまじ。夫れ合戦の勝負は、強ひて勢の多少には依るべからず。只士卒の心を一つにすると、せざるとにこそあれ。相構へて惡びれたる働きして、東國勢に笑はるな。生ある者、何れか死を遁れん。君の爲に討死せば、屍は主君の恩を報じ、名は永く子孫の面を雪がんと、士を勵まして備を立つれば、關東の先鋒水野日向守勝成は、紺地に永樂の紋付きたる旗に、二蓋笠の上に烏毛を付け、中に金の切裂付けたる馬符、續いて本多美濃守忠政は、地黒に金の矢の丸を付けたり。松平下總守忠明は、金籠の馬符にてぞありける。明石掃部助之を見て、重ねて下知しけるは、天王寺の味方敗軍し、敵前後を遮つて、味方は陣を隔てたれば、今は遁れざる處なり。去來いざや前なる敵を、蒐散らし追捲つて、左右の敵と相戦はんといひければ、皆然るべう候と同じけるにより、三百騎を前後に立て、大勢の中へ蒐入りければ、東國勢は、黑白段々の旗を見て、能き敵と思ひけん、我れ劣らじと取込め、一時に討たんと犇きけれども、掃部助以下の兵共、萬死一生になつて、東より西へ破り、北より南へ追靡ひ、其心偏に能き大將と組んで、雌雄を決せんと思ふにあれば、さすがの東

兵も、崩れ立ちて逃掛りければ、日向守麿を取つて、卑怯者共、何國へ逃ると言れども、耳にも入れず敗走す。然るに水野が備より、廣田圖書、尾崎作右衛門記に尾關佐治右衛門等も、鎗を合すと雖も、各突倒され、日向守も馬を馳せ、當の敵を鎗付け、岸豐左衛門に其首を取らせ、又右の方なる烏帽子形の冑を被たる敵をも突落しけるを、成瀬久太夫馳寄つて首を得たり。大將斯く手を下して力戦する故、家臣等は必死になりて、敵に蒐りければ、明石勢も武威を奮ふと雖も、許多討たれて敗北す。大將掃部助は、陣頭に在つて身力を碎き働きけるが、續く味方もなく、寄手は追々盛返して蒐るにより、明石も今は戦ひ疲れ、水野が從士汀三右衛門に討たれければ、殘黨は一同に、櫻門の方へ逃歸れり。

或記に、明石掃部助は、落城の時、野江に於て、京極若狹守忠高の家人三田茂左衛門に討たれ、明石が甥八兵衛は、同じく家人汀三右衛門に討たれしと云々。

一本に、明石掃部は、落城の後行方知れず。大將分の上、日頃耶蘇宗を専ら勸めし故、大御所の御憎み深く、戸川肥後守に仰付けられ、草を分けて探し求むれど

も、遂に死生を知らず。蠻國へ渡りしものならんと云々。此説、實なりや覺束なし。

勝成が旗奉行神谷久右衛門は、急に進んで、櫻門に旗を立てけるとかや。又越前の臣吉田修理亮は、天王寺の町口より、輕兵五十人を以て、所々に火を放ち、敗軍の敵を慕ひ追行く處に、天滿橋半燒落ち、渡るべき様もなかりければ、越兵は如何せんと猶豫する處に、吉田は一番に乘入りしが、如何したりけん、人馬共に溺死しけるこそ本意なけれ。後陣の兵は之を見て、此處は淵ありと覺えたりといひて、各瀬を求め、ひし〜と轡を並べ、打入りける程に、一騎も流れず、向の岸にぞ着きたりける。

記に、修理亮が扈從牛本何某は、此時越前の先手と、一所にありて忠戦しけるが、翌八日天滿橋の燒残りたる上より飛入りて、殉死しけると云々。

或記に、大御所御歸陣の後に、二條の城へ、越前の兩本多を召され、七日の御先手は、加州へ仰付けられし處に、越前勢夜中に出勢して、加州勢を押抜きしは仔細ありや、言上すべき由仰出されしに、伊豆守承りて、此儀は、御上にも御存知の吉

田修理と申す者、吉田は、一萬四千石を領せしとぞ自分の人數も餘程有之、又組の侍も候處、如何な

る所存に候や、去ぬる六日の夜中、自身一手の勢引纏ひて、城の方へ押出せりと、家中の者共承り及び、修理が組下の者共に、先を越されてはと、我もくんと駆出で候に付、私共兩人も、心元なく存じ、跡を追ひ出勢仕候故、少將の旗本計り、殘し止むべき様も御座なく候に付、押出し申候。右の次第故、家中の者共は、修理が跡より、茶臼山邊まで押詰め候。夜明けての儀は、申上ぐるに及ばず。此事は、後日に御尋も御座あるべくと存じ候故、修理が存寄の程をも、承り届け申すべし、私共兩人相心得罷在候處、其一戰の砌、修理が手先にて追崩し候城兵共、天満の方へ敗走せしを追討ち、天満川へ乗込み、其身馬共に沈み果て候に付、承り届け申すべき様も無之、近頃卒忽の至り恐入候と申しけると云々。

或本に、大御所御歸陣の上、二條の城へ、水野日向守を召され、八方の大將を承る上は、相構へて昔の如く、自らの高名せんと思ひそといひしに、五月七日の合戦に、明石が陣に向ひ、自ら鎧取つて、眞先かけて敵四人と渡合ひ、二人を追拂

ひ、二人は首切るなんど、豫ての仰を背きて、輕々しき振舞をば仕りし、奇怪の至なりと、甚だ御叱ありし程に、彼が手の者共の高名せしも、御威に預かる事を得ず。されども今年七月二十日、三萬石御加増あつて、大和國郡山の城を賜はりしは、今度の勸賞と見えたり。同五年、備後國福山の城を賜ひ、城を築きて移る。十萬石なり。慶安二年二月十五日に卒す。時に八十八歳なり。

同記に、日向守が息勝俊は、十八歳にて、七日の合戦に、敵の多勢を破り、首數多取る。明暦元年二月二十日、五十八歳にて卒す。時に美作守と稱す云々。

本多出雲守の事

爰に本多出雲守忠朝といへるは、中務大輔忠勝が二男にして、去ぬる關ヶ原合戦にも高名ありて、大御所甚だ御褒美なりしに、例年出雲守參勤の折に、蠟燭を獻じけるが、此蠟燭他に異なりと仰ありけるに、或時忠朝參府して、晩景に及び出仕し、在所の鹽肴を獻せし處、老中一同に申さるゝは、足下獻上の蠟燭、御旨に叶ひ候。同

じくは蠟燭然るべしとありければ、忠朝は其事を知らざる故、用意なしと申しければ、本多上野介之を聞きて、然らば御納戸にある所の蠟燭にて、間を合さるべしといひける故、出雲守大に喜び、之を献上しけり。而して忠朝退去の後に、彼蠟燭を燭させられし處、大に流れければ、大御所御覽じて、出雲が父は、武勇のみにもあらず、斯の如き小事にも、曾て越度なかりけるが、父には似ざる者かなと仰ありぬ。又去年冬陣に、出雲守が仕寄場は、城の東に川筋流れ、深田あつて難儀なる由言上しければ、軍場を嫌ふと思召しけるにや、昔の若者共は、難所の攻口、或は剛敵などと聞きては、頻に所望しけるが、今の武士は、多く之を嫌へり。出雲が祖父平八郎忠高と稱せりは、險難剛敵を嫌はざる者なるが、出雲は不届なる者と上意ありけるを、忠朝傳聞きて、口惜しく思ひ、今度の合戦には、是非とも討死を遂げんと思ひて上りけり。

或記に、去冬の陣に、大御所、本多出雲守をして、河水を觀せしめ給ひし處に、歸り來つて申すは、水上強くして渉るべからずと言上しけるを、大御所聞召され、汝、父が子にあらず、水勢の強き、汝が眼を借らんやと仰ありける。是は忠朝が詞を

以て、軍勢に川を渡さしめんと欲し給ふ所なりと云々。

或記に、本多出雲守忠朝は、冬陣の時、仕寄口の事に付、大御所の思召に違ひけるが、上總國大多喜へ歸城して、重ねて大坂蜂起せば、我れ必ず討死すべし。誰々枕を並べしと誓紙を望みし處に、加藤忠左衛門・大屋作右衛門・藤井治左衛門・白井七兵衛、其外誓紙致して見せしが、小野勘解由は書かずして、侍の戦場に出づるに、誰が命を助からんとする者あらんやとて、遂に誓紙を認めざりしといへり。又昨六日、葛井寺口にて、舍兄美濃守忠政の手先にて、眞田・毛利を討留めざる事を、出雲守は口惜しく思ひ、暮前に道明寺へ來り、兄忠政には逢はずして、甥の平八郎忠刻・申斐守政・能登守忠義を呼出し、芝堤の上にて、最後の盃をなし、其上三人の甥に向つて、今日城兵を討止めざる事、本多家の名折なり。向後とても武邊の儀、祖父中書を學び申すべしとて、本陣八尾に歸る處へ、御本陣へ召され、七日の御先手を仰付けられければ、面目比類なき由悦び、勇んで陣場に歸れりと云々。

或説に、本多忠朝、御先手を仰付けられければ、陣場に歸り、家人に此段申聞かせし處に、小野勘解由罷出で、明日は存寄三つならでは無之候。一の仕合にて討死、二の仕合にて一番鎧、三の仕合にて、高野の住居にて候と申しければ、出雲守は點頭きたる計なり。とかく左右する中に、夜半過ぎになりければ、相備の秋田城之介・眞田河内守・松下石見守・六郷兵庫頭・淺野采女正・植村主膳正・須賀攝津守へ相觸れて、夜中に四里の道を押し、何れも夜明に、天王寺口へ相詰めしと云々。

毛利豊前守武功并本多出雲守戰死

附 松下石見守高名の事

さる程に本多出雲守忠朝は、五月七日の丑の刻計り、黒糸緘の鎧に、鹿の角打つたる冑の緒を締め、百里と名付けたる栗毛の馬の、太く逞しきに跨り、白地の旗銀の三蓋笠の馬符を押立て、夜中に四里の行程を進み、毛利豊前守勝永が、黒半月の旗記に・鳥毛輪貫の馬符を立て、備へたる、天王寺の南の門へぞ向ひける。

或記に、忠朝打立つ砌、甲の立物なる黒鹿の角一方落ちける故、小姓大原長五郎之を取揚げけるを、無用なりと制し、又例のいらたかも掛けざりけり。然るに合戦の前に、馬そばえ落馬しけるを、其時長五郎、件の鹿角を立てけるが、忠朝は殊の外焦れたる體なりしと云々。宇佐美小右衛門が語れり。

然るに總監軍安藤帶刀直次馳來つて、雲州の備へ、餘に出過ぎ候と制しければ、忠朝答へて、押出したる備を、引入るべき道理なし。外の屯を出され候へといへば、直次尤なりと、他の陣へこそ馳行きけれ。

或記に、本多忠朝が備は、右に四十間餘の深みあり。左は野山の高き所ある故、左右に更へて備を立てけるにより、總軍とは、殊の外出張りたる様に見えしと云々。或記に、忠朝、最初足輕を出せしが、其備まばらなる故に、家老小野勘解由、何とて足輕を、斯様に御立て候や。只今に突崩され申すべしといへば、出雲守大に急せき、耳にも聞入れず、我れ次第なりと申せば、勘解由は立腹し、口脇の黄なる人の、何を御存じと嘲りければ、加藤忠左衛門も同じく、誠に此足輕備は、終に見ず。只

國元の鹿狩の勢子の立て様なり。あれに見えたる足輕は某の組にて、實の備よと笑ひければ、出雲守立腹して、口脇の黄なるとは何事ぞと、長刀を持つて掛れば、小野勘解由申すは、只今討死を遂げんと匂り乍ら、右の方へそびへ行く。加藤は手近にありしが、大力なる出雲守に、馬より叩き落されければ、大に立腹し、今討死して見せ申さんと、先へ進みけり。此時忠朝が備は横陣に立て、皆馬を引付け置きしを、本多怒りて、己等は馬に乗りて逃げん爲かと、長刀にて後陣へ拂へりと云々。

毛利豊前守が備は、四千計り斜に進み、四十間程隔りて、すぎなり杉形に下敷けり。永井傳

兵衛弟九兵衛

後に保科家に仕へ、加古自齋と改名す

兩人、鐵炮頭なる故、毛利が旗本にありけるが、一所

に働かんと、先へ馳せ來りける。是に續いて、許多の人数も出でければ、勝永忿りて、いかで軍令を背くと制しけれども、耳にも入れず先手に進む。此時忠朝は、吾陣の先鋒に進み、日來の修練は爰なりとて、兒扈從を先に進め、炮術の妙手三宅軍兵衛窪田傳十郎等に指揮して、頻に鐵炮を發せしむれども、毛利は場數の勇將故、

関を上げ鎗を入れければ、本多が輕卒七十餘人、之が爲に戰死し、先へ出でたる鐵炮の者七人小姓組、共に忠朝が旗本へ崩れ掛れば、毛利が勢は左右に分れ、本多勢を押圍まんとす。本多が家臣三宅軍兵衛は、一番鎗と思ひ進む處に、毛利が手より、太刀武者左右より掛りければ、鎗にて争ふべき様なくして、持ちたる鎗をからりと投捨て、太刀打して功名を遂ぐる。續いて窪田傳十郎・大原惣右衛門・押田左馬助・山本只右衛門・原田四郎兵衛・御旗本浪人柳原加兵衛、群を抽んで、一戰せんと罵る處に、小鹿主馬介は、紫の纒掛けて、河原毛の馬に打乗り、若武者共、鎗は早きぞ、鐵炮を發せよと、敵味方の間を、乗切つて下知をなせども、窪田・大原・押田・山本・原田の五人は、立泳へて鎗を合すれば、毛利が兵は、尙横切つて、本多が相備秋田城之介・六郷兵庫頭・淺野采女正・植村主膳正・須賀攝津守が隊に雪崩れ蒐る。時に本多組の松下石見守重綱本書長綱に作るは、茶臼山の右の方にありて、他の備より、十間計り張出して居たりける故、鐵炮迫合に、雜卒多く死傷しけるが、一番に鎗を始めし處、敵七八人競ひ來り、馬上なる石見守を、鎗四本にて突揚げんとしければ、松下之を見て、忽

ち馬より飛んで下り、敵一人を突倒すと雖も、馬に離れ茫然たりし處に、從士梶塚主殿馳せ來り、己が馬を授けしにより、彼馬に打乗り、跡の軍には眼もふらず、剛敵を突破り、城の方へと競ひ進む。又秋田城之介實季が手へ向ひたる毛利が隊長岩村清右衛門・佐治内膳、其組に下知しけるは、敵の足輕は、堤を取敷く故、透間なく鐵炮を發すと雖も、玉越して中らざれば、妄に放つ事なかれ。心を靜め、銃先を下げて發すべしといひさまに、はつと立騰り、躬ら二度放てば、佐治も同じく之に傲へり。時に岩村大音にて、鎗を合せんと欲せば茲なりと罵り、佐治諸共に急に突掛る。秋田が銳卒四人、進んで鎗を始めけるが、佐治・岩村が爲に、十間計りも突退けらる。其中なる一人、堤の上より投突にせしが、岩村が胸板へ中り、道より下へ倒るゝ處を秋田が士卒、透さず首を取らんとせしを、佐治傍より岩村を救ひ、秋田が家來を討取りける。毛利勢は、本陣より之を見て、一同に関を作つて突掛り、堤の上なる秋田勢を打破り、六郷淺野・植村・須賀、及び右軍の眞田河内守信吉本書に、信次とあり。下皆同じが備も、悉く突崩されければ、備頭本多忠朝、大に怒りて牙を嚙む所に、松平丹波守康長

より、之を救はんと申し来る。時に忠朝、吾等が死したる後の事にせらるべしと答へ、騎士大屋治左衛門一人、歩卒二十人計りを相從へて馳せ出し、向うを屹と見やれば、長臣小野勘解由其真先にありて、大勢と戦ふ。忠朝大音にて、勘解由を討たすなと下知すれば、歩卒七人、小野を救はんと駆行く間に、勘解由は鎗玉に揚げられる。馳着きたる歩士五人は討たれ、二人は創を被りけり。忠朝眼を瞋らし、出雲守是にあり。我兵等追返せよと呼ばはるを、城兵之を見て、雨森三右衛門・中川彌治右衛門・徳永甚左衛門^{秀頼公の隊長なり}等を始め七八人、透間もなく突いて蒐る。忠朝は、我持鎗來らざりければ、傍にある數鎗を取りて、馬上より敵二人を突伏する處に、組の羽織を着たる輕卒、忠朝を狙うて鐵炮を發しければ、本多が胸板に中りけれども、無雙の猛將故か、痿む氣色もなく馬より下立ち、豫て持たせ置きたる鐵の筋金入たる大鼻捻を左に持ち、右に刀を振つて、敵七八人撃取り、尙も進んで小溝を越えけるが、最初の鐵炮疵の上に、又鎗創を被りたる故か、終に其所にぞ倒れける。

記には、忠朝、最初本國を出づる時、鐵の棒を八角にして、八尺計りありつる其手

本を圓くし、重さは、人夫六七人して持つ程なるを、前に立て上りけるが、合戦の時は、彼棒を以て敵陣を薙立てしに、恐れて敢て近付く者なければ、詮なき物と思ひけん、彼棒に、敵の首二十餘級を附添へて、舍兄美濃守が方へ、持たせ遣したりと云々。

大坂勢は、本多が轉びたるを見ると等しく、群り來つて首を取らんとする處を、大屋作左衛門竝に浪人匹田道師、之を遮り戦ひしが、兩人も忽ちに討たれければ、遂に忠朝が頭は、雨森傳右衛門に取らせけり。時に出雲守、三十四歳なり。一本。慶長五年、廿九歳とあり。然れば今年卅三歳なり。

或記に、雨森傳右衛門は、落城後食祿千石にて、蒲生家に仕へしといへり。記には、忠朝の首は、秀頼公の御家人雨森三右衛門之を得たり。此雨森は、千石を領し、足輕五十人の大將なり。靜謐の後、本多中務大輔に扶持せられたりと云々。

或記に、出雲守が首は、眞紅の腕貫にて括り、鼻をそぎ、田の中に捨て置きしを、晩方になり、忠朝が家中の者、取上げて持歸りけると云々。

出雲守が勢は、主人の討死せしも知らず、敵陣の後に廻り、先隊の城邊に至る頃、忠朝の戦死を聞きし故、舊の陣場に引返しける處に、本多が馬の鞍坪に、主人の骸を載せ、平野の方へ向ひ、日高吉左衛門が携行くに遭ひて、泣々歸り退きけり。

或記に、忠朝の塚は、攝州東生郡天王寺村にありと云々。或本に、忠朝の墓は、東成郡一心寺の境内にあり。法諡三光院岸譽良玄居士といふ。其臣小野勘解由青山五左衛門・嘉藤忠左衛門・大屋作左衛門・山崎半右衛門・中根權兵衛・石川半彌・臼杵七兵衛・大原長五郎、共に此寺にありと云々。

本多家の四件一本曰井七兵衛・加藤忠左衛門・中根權兵衛・山崎半右衛門・石川半彌・大原長五郎・村越茂兵衛・青山五左衛門・藤平治右衛門・大橋加兵衛・土屋太郎八・稻毛市郎兵衛等は討死せり。勾坂若狹・大原惣右衛門・柳田左馬允・石川金彌・窪田傳十郎・近藤五郎左衛門・小森左衛門・門田治太夫・杉浦墨右衛門・河崎市左衛門・宇佐美小右衛門・内藤五郎作等は、粉骨を盡して疵を蒙れりと。出雲守が手へ、首百七十餘級を得たり。

記に、窪田傳十郎・大原惣右衛門・柳田平兵衛・山本唯右衛門・小鹿主馬は、御感狀を

給はりけると云々。

或記に、三宅軍兵衛は、鎗を捨て太刀にて高名せり。後に本多美濃守詮議ありける處、忠朝の臣小鹿主馬が申すは、關東にては、持道具は何にても構はず、眞先へ出づるを、一番鎗とする由を申しけれども、吟味の上、三宅は一番高名となれり。或記に、一番に出でて鎗を合するをば、首を取らずとも、一番鎗なり。首を取りたるを、一番鎗下の高名といふ。右一番鎗に、必ず添へて、太刀長刀にて首を取りたるを、鎗脇の高名といふ。其外二番三番目の鎗脇を、崩際といふなり。又刀にての鎗脇は、二番鎗に少し劣りたる高名とするなり。高下の次第は、一番鎗、二番鎗、三番鎗に、場中の高名、是は兩陣合戦の中に、手負死人あるを、敵方より其首を取らんと來るを、味方進み出でて討捕るを、場中決斷の高名ともいふなり。四番に鎗下の高名、五番に崩際の高名、六番に鎗脇の弓、七番に鎗脇の鐵炮なりと云々。

又柳原加兵衛と、御旗本浪人原田四郎兵衛は、一所に鎗を合せしが、原田は年來

美濃守が氣に違ふ事あつて、一番鎗にならず、依之浪人となる。榊原も立退き、後に紀州へ奉公せしと云々。

松平丹後守康長も、本多に續きて駈入りけるが、躬ら刃を揮つて手を碎き、數ヶ所疵を被り、已に危く見えける處に、從者近藤兵右衛門馳せ來り、急難を救ひける。其外七八人計り、討死せしとかや。

或記に、水谷信濃守は、十七歳にて出勢せしが、家中の者共、城兵に突立てられければ、家臣水谷太郎右衛門、主人の側へ馬を乗寄せて、只今敗軍せし者共を、能く御覽のつて、連々御暇を遣さるべし。せめて某なりとも、討死仕らんといいて、敵陣へ馳入り戦死しけると云々。

毛利豐前守、井伊・藤堂と合戦^井安藤彦四郎戦死の事

さる程に本多出雲守忠朝が勢も、敗軍の體に相見ゆ。□須御旗本の先鋒井伊掃部頭直孝・藤堂和泉守高虎が勢、横合に突懸りければ、之を見て大野修理亮が組、嶮し

く鐵炮を發しけれども、夫にも構はず、毛利豊前守が備に押蒐りける。

或記に、是より先、成瀬豊後守が組なる安藤彦四郎重能拔駈して、井伊が隊に來り、家老庵原助右衛門に遇うて、急ぎ戰を始められよといひける時に、庵原曰、軍には潮合あり。斯の如く待受くる敵の矢鼻へは、蒐らざる者なりと申せば、彦四郎が曰、斯る矢鼻へ蒐るこそ本意なれと、衆を抽んで敵中に入りて命を失ひければ、家僕馳せ來り、父帶刀直次に、其事を告ぐるに、男子は山野に於て、君の爲に屍を曝すべし。何ぞ驚くに足らんやと、申しけると云々。

同記に、此折節、井伊が歩卒に場數の者ありしが、其頃流布する煙草を吸付けて、直孝に渡しけるを、則ち取りし處、火消えたる故、煙草を押付け吸ひて見て、火を附けさせ再び吸ひける。是は其心の動せぬを、士卒に示す爲ならんといへり。斯くて井伊が臣三浦與左衛門は、己が組の輕卒四十人に、矢五六筋各へ相渡し、直孝に向ひ、輕卒共に花を咲かせて見せなんと、筈より箭一抱程を出し、舒に待ちける處に、井伊の謀臣岡本半介宣就、敵の色を量り、鬨を始めけると云々。

勝永は、前々よりの戦に勞れける上、後陣の間へ蒐けられて、支ふる事能はず、引退かんとするを、井伊・藤堂の勢は、勝に乗つて追蒐る處へ、七組の内青木民部少輔は、京都に押へ留められたる故、其陣代青木駿河守竝に眞野豊後守頼包或は牧野豐前守に作るが組は之を見て、鎧の穂先を揃へ突いて蒐れば、井伊・藤堂は、此勢に突立てられて、敗軍せる中に、直孝が旗奉行孕石主水備前が父なりといへり、一本備前に作るは誤なるか・廣瀬左馬介は、一足も引かずと誓ひ、旗一本を地に突立て、二人共に旗竿に手をかけて討死せり。廣瀬は、青木が組稻葉伊豫守に討たれしとかや。

或記に、旗奉行孕石主水

本書に豊前

は、廣瀬左馬介に向ひ、我等今年七十五になり、餘

命なく、重ねて此恥を雪ぐべき期なし。貴殿は又合戦にも遇へるべければ、早々

引退かるべし。我等は爰にて、討死を遂げんといひけるを、左馬介聞いて、恥辱

は老若に依るべからず。然るに存命し、孕石を捨殺したる者の顔を見よと、人に

笑はれん事も口惜しければ、去來御供申さんと立ゆたる討死せり。斯る事故、井

伊家の旗馬印は捨りし處を、八田金十郎菅沼郷左衛門

一本に郷右衛門

拾ひ取りて、天王寺

の丸山にて、長臣庵原助右衛門に相渡せりと云々。

掃部頭が勢は、許多討たれる所に、三浦與右衛門は、四十人の輕卒を勵まし、頻に矢を發し、長坂左衛門も能く下知して、火炮を發しける處に、軍監安藤帶刀も當手に來り、直孝が勢と共に、勝誇りたる剛敵に向ひ盛返せば、城兵大に敗軍せり。

或記に、此時安藤彦四郎が骸、路傍にありける故、父直次へ之を告げしかども、耳にも入れず、敵を慕ひけると云々。

別記に、安藤が從者、彦四郎が死骸を、如何致候はんと、父帶刀に尋ねければ、大に喰はせよといひ捨て、馬を乗廻しける故、家臣等は餘りなる事と思ひし處に、晩方陣場に歸り、大に愁傷せしと云々。

茲に去年御勘氣を蒙りたる青山大藏大輔幸成

今濃州郡上四萬八千石を領す、青山氏の祖なり。或本に、青山播磨守忠成の第三子大藏少輔幸成

は、寛永二十年二月十六日卒すと云々

も、井伊が備にありしが、躬ら高名せり。竝に其臣芝原源左衛門・堀

江六兵衛・野村七右衛門・鈴木佐五右衛門等は奮戦し、各首一級を得たり。

或記に、藤堂和泉守が備は、殘らず敗軍せし處に、旗奉行九鬼四郎兵衛廣隆只一

騎にて、高虎の旗三本を押立て、逃懸る味方の正中を、一文字に進み出で、良き場所を見て旗を立て、鎗を取りて折敷き、立固めしにより、藤堂の人数は、蹈止まつて盛返せり。安藤帶刀、之を能く見たる故、後に紀州へ招きけると云々。

或記に、城中に於ては、人数の薄き方へ加勢すべしと、相圖の狼煙を揚げしに、家康公御覽じて、彼の煙こそ、返忠の相圖なり。先手へ相觸れ諸勢を勵ますべしと仰せられけると云々。

小笠原兵部大輔父子戰死附保科甚四郎勇氣の事

茲に小笠原兵部大輔秀政は、信州筑摩郡松本の城主なるが、中仙道樞要の地なればとて、去冬は國に留められしを、今度は供奉し奉り、昨六日若江に於て、一戰に及ぶべき處、前途に沼のありし故、猶豫する砌、監軍藤田能登守信吉此處に來り、敵必す敗軍すべし。其亂るゝに乗つて、勝利あるべしと支へらるゝ間に、城兵は敗軍せしにより、手を空しくして、井伊掃部頭が陣場の前を通りしかば、直孝は近く見掛く

ると雖も、知らず敵（顔丸）にもてなしける。秀政は元來武勇の士なる故、愈無念を重ね、
今七日には、城中へ一番に攻入りて討死を遂げんと、家臣等に下知をなしける。

或記に、小笠原秀政が備場の先に水あつて、其深さを知らず。如何せんと議する
に、藤田能登守制して、妄に此足入を越すべからずといへる内に、榊原勢は涉り
けれども、甚だ淺かりける故、小笠原勢之を見て、續いて渡り、主計が勢と闘はん
とするを、藤田再び、榊原勢の敗せん事必せり。其時貴殿の勢を以て、攻め撃た
れよといひ、左右（とかく）して隙取る間に、早、城兵敗軍して、秀政手を空しくせり。此越
度により、藤田は食邑を沒收せられ、浪人して憂死せり。

一本に、昨六日の合戦に、井伊直孝、木村と戦ふ。榊原康勝戦はんとするを、藤
田能登制して曰、味方の多勢に向ひ、出でて軍する敵の陣の、張りやうの薄きこ
そ怪しけれ。あの譽田の森に續きたるしげりに勢引隠れ、味方勝に乗つて亂れ
たらん時に、敵打つて出で戦はんと覺ゆるぞ。井伊既に勝ちぬと見ゆ。伏兵今
に起りなん。其敵打破つて捨つべきものといひけるに、敵思ふにも似ず敗れ

けると。榊原が手に、首少し討取りぬ。然るに今年康勝卒して、彼家の老輩が訴にて、五月六日に、若江合戦に、榊原が手の軍勢、戦に會はざる事、藤田が量らひに據る處なりと聞召され、能登守を召決せらる。藤田陳じ申す旨、其謂れなきにあらず。重ねて御裁斷あるべしと仰下さる。藤田疵を療せんが爲に御暇申して、信州諏訪の温泉に赴きしに、身の疾、以の外なり。醫療の爲に、山道を経て都に登る。鳥居峠の麓奈良井といふ所にて卒す。時に元和二年七月十四日、五十九歳なり。男子なくして家斷絶す云々。別記にも、藤田が榊原勢を制せし由見えたり。前卷に見ゆ。藤田、敵の勢を見過ちし上は、兩方を制せん事勿論なるべし。

抑藤田能登守信吉は、始め上杉家に仕へて、度々高名ありしが、直江山城守が爲に讒せられ、慶長五年三月三日、會津を去つて都に上り、大徳寺に籠り、入道して源心といへり。關ヶ原陣の前に、大御所より御使立ちて、那須の地を給ふべき由なり。十萬石なり。源心申すは、某上杉家を立去るは、全く讒訴を申開かんが爲なり。今

御陣に召されん事、望む處に候はずと返答す。重ねて本多佐渡守を以て、汝主人に二心なからんには、早く御陣に参り、彼家の亡びざらん様を慮るべしとありしかば、此上はとて見参し、其謀を廻らす。然るに景勝卿降参の後に、信吉やがて、御暇給はるべし、上杉家に歸らんと申せば、大御所、信吉を召され、汝其始に兵を擧げて世を亂す。其罪なしといふべからず。されば天下の大法を示さん爲に、其國を削らるゝ事、既に訖ぬ。さり乍ら其罪人こゝに得て、石田等なり、彼罪にあらざる事を知る。されば程なく本領を復し給ふらん日、汝が望に任せなん。先づ其程は關東に伺候すべしとて、藤田に、下野國西方の地を賜はる。信吉一萬三千石、化粧田二千石、合せて一萬五千石といふ。信吉永く御家人に侍らんには、始め賜はりし處の那須の地を領せん事、相違あるべからずと仰下さるれども、能登守、猶も上杉家に歸らん事を望みしかば、景勝卿徳川家へ参られし時、信吉を召出され、ありし事共御物語ありしに、景勝卿心解けて、此上は、汝が志既に顯れぬ。本領給はらんまで、此儘に候へとて、關東に留められ、重信と改めしと云々。藤田が家の嫡流は、重の字を用ふ。庶流は信の字を用ひ來れり。嫡流既に絶えたる故なりとぞ。

一本に、藤田能登守、上杉家にて一萬四千二百石、去る慶長五年正月元日、景勝卿の名代として、豊

臣家へ參賀して、家康公へも上りしに、何かと仰の上、刀青江直次一腰〔脱字ア〕ルカ、百枚・美服

二十領を賜はりける。時の面目、諸人大に羨みける。是より藤田は、徳川家へ心を傾けしに、其事あらはれ、既に誅せられん兆あるを見て、同年三月中旬、妻子を携へ江府に到り、上杉家には、徳川家を亡さんとする企ある由を、一々言上せり。

夫より徳川家へ仕へしと云々。或説に、是れ徳川家の、智臣の謀る所なるべしといへり。

武田榮翁が備は、天王寺東の門の方にありしが、諸手に勝れて押出すに付、毛利豊前守より使を以て、此時毛利は、本多忠朝に打勝ちし時なりと云々、備を立替へられよと請ひけれども、榮翁は肯

せずして、我れ先づ鎗を始めて後は、左も右も指圖せらるべしと答へて進む處に、小笠原の勢は、武田が馬符を目掛け、舒々と馬を乗入れ、昨日の恥を雪がんと、命を輕んじて突蒐り、火花を散らし攻戰ひける。必死と極めたる軍卒なれば、強きを破り堅きを碎き、風の如く散じ、雲の如く集まり、喚き叫んで蒐入れば、城兵は、故の陣へ突崩さる。秀政が嫡子信濃守忠修は勝に乗り、備を亂して追行きし處に、右

軍大野治長が組福島伊豫守正鎮・石川肥後守數矩等、相支へて戦ひしを、小笠原が旗本を以て、横合に之を救ひ、其臣高瀬六郎左衛門等、首級を得たり。毛利式部勝家豊前守は、後軍を引率し、秀政が左軍に突蒐り、結城權之助・橋本十兵衛は、縦横に馳廻りて戦ひければ、秀政も此大敵に遭ひ、郎等金子某其外二十餘人、命を殞せり。又信濃守は、鎧十本計りに突揚げられて死しければ、小笠原主水・征矢半彌、枕を並べて戦死せり。

記に、小笠原兵部大輔は、去冬の陣には領國にありて、息信濃守大坂に向へり。今度忠修は、在國と仰出されける故、再三此事を歎じ申しけれども、御聞届無かりしにより、松本より逃げて上り、父が陣に加はりしが、軍令を破れる罪遁れ難きにより、討死せんと思ひ詰めたりしと云々。

一本に、信濃守在國たるべき由の御奉書、出づる由を承り、御奉書到來せざる内に、信濃守は出陣せり。大坂に於て、將軍家罷上りたる由を聞召され、御目見仕り候様にと仰出されしに、御奉書に背き、罷越したる事なれば、御歸陣の

時、目出度御目見申上ぐべしと返答せり。豫て討死の覺悟なりしと云々。

又曰、小笠原家人原四郎兵衛は、信濃守が討死すべき砌まで、相從ひしに、敵大勢にて取巻きけるを、忠修、後より蒐よと聲を掛ければ、原は得たりな賢しと、大勢が中へ馬を駛入れしに、主人の行末覺束無く思ひ又取つて返し、此所彼所を尋ねし處、金の三團子の立物したる武者、伏して居たる故、馬より飛下り之を見れば、忠修なりしが、未だ息は絶えざりしかば、詞をかくると雖も、次第々々に弱り、遂に死せしと云々。或本に、七日の夜に死す。時に廿二歳なりと云々。

或記に、兵部大輔は、信濃守が討たれたるをも知らず、家臣金子某と共に苦戦せしが、金子は其座に討死し、秀政は半死半生になりしを、從者に扶けられ、戰場を退きける時、兵部大輔は息の下より、信濃は如何なりしと尋ねけるに、從者答へて、早、討死を遂げ給ひしと申しければ、悲歎に堪へずして、其儘息は絶えたりと云々。

或本に、日野輝資入道雄心の息は、本國寺の住職にて、日横と稱せしが、後小倉山

の麓に隠れ、常寂光寺を建てらる。小笠原家に俗縁ありし故、父子共に彼寺に葬りしと云々。

秀政が二男大學忠政は、今年十八歳なるが、父兄の討死をも知らず、家人澁谷縫殿介・淺香角兵衛・森尾某、並に歩卒二人を相從へ、深く敵陣に蒐入り、先へ行抜けゝる處、先途には敵なく、後を顧れば、馬烟夥しく立ちて天を掠めければ、澁谷・淺香兩人、忠政に申すは、合戦は後にありと相見え候。いざ打つて返し、御一戰然るべしといひければ、何條さる事やあるべき。幾度も敵を駈破り、城中に攻入らんこそ、武士の譽なるべしと、馬を進めしが、城兵の屯に行懸り、喚いて馳せ入り、前後に當り左右を撃ちて相戦ひけれども、忠政終に突落され、討たるべく見えし處へ、澁谷縫殿助・森尾某駈來り、上なる敵を討つて取り、主人を救ひて歸りける。忠政多く疵を被れり。又今日、小笠原の手へ討取る所の首、四十七級なり。

或本に、秀政が臣小笠原隼人は高名して、鹿島佐左衛門と打連れ立ちて行きし處へ、御使番坂部三十郎・阿部四郎五郎に出遇ひし故、彌其名を顯せり。又山本掃部

は、高名も生捕もありしが、落馬して、生捕は餘人が連れて立退きけり。山本は大指物故、引兼ねたる處に、越前家の佐野金七といへる者馬を借して、自身は步行立にて引取り、又掃部が嫡子金左衛門は、敵に鎗付けたる處に、大小姓駈來り、山本を見て、助けんかと申せしが、金左衛門答へて、夫に及ばすと申しければ、彼大小姓、此首某に給はり候へといふにより、首を與へ、猶も先へ進んで高名せり。又小澤軍左衛門といへる者は、具足の見苦しかりければ、春日淡路其事を申しけるを、小澤答へて、今般大坂に到り、取替へ申すといひけるが、詞に差はず、敵を討取り具足を替へしと云々。

同記に、小笠原家に於て高名の面々は、上條加兵衛・大熊十郎右衛門・勝野求之助・伊藤作右衛門・小笠原軍兵衛・伊藤市兵衛・小笠原伯耆・岡村左五右衛門・小澤利右衛門・二木左源太・岩乘彌五右衛門・川手佐兵衛・由江九郎右衛門・堀伊右衛門・淺香角兵衛・江戸加兵衛・小口彈左衛門・上條外太夫・丸山將監・馬場喜右衛門・馬場は、相討せし論により、改易せらるゝと云々。討死の面々は、二木勘右衛門・政成侍大將なり・小笠原主水介・政定・岩波平左

衛門貞重武者奉
行なり

・島立内膳政繼・二木庄左衛門政光・淺香太左衛門重政・征矢半彌廣

重・白石市左衛門光重・大日向治郎左衛門重吉・森下善兵衛爲吉・百束治郎左衛門勝

清・原彌治右衛門長重

一本、庄左衛門以下
八人は使番に出づ

・武居治兵衛氏信・多々井六兵衛友重・川井庄

兵衛長吉・百束六郎右衛門光氏・鈴木九郎左衛門長利・澤井庄兵衛爲勝・江本彌治兵

衛實次・横川茂右衛門乘直・渡邊庄七郎正久・新村傳兵衛・百束掃部・同治郎右衛門・

青木内藏允・多々井小介・百束十郎右衛門・島立内藏允等なりと云々。

同記に、小笠原父子の死骸を引取りし節、牧方に於て、御番所の伊奈衆へ斷なく

して通りしかば、落人と思ひ刃傷に及び、死傷の者も多かりけると云々。

別記に、秀政の二男大學忠次は、忠眞右近大夫

或は右近將
監に作る

と稱し、豊前國小倉城主、

十五萬石を領す。

今猶小倉に
在る城也。

舍兄信濃守の幼息は、長次信濃守と稱し、豊前國中津城

主、八萬石を領せし處、長次が孫修理大夫不行跡により、元祿年中に領地召上げ

られ、長胤舍弟長圓

ながのぶ

に四萬石を給はり、信濃守に任ず。然るに長圓息造酒之介長

邑早世し、嗣子なくして領地召上げられ、長邑喜三郎長興に、播州宍粟郡安志

あんし

於て、一萬石を下されたりと云々。今其地に居住す。

或本に、秀政の二男大學助は、十六歳なりしが、父兄と共に出戦し、多勢と戦ひ、數ヶ所の疵を被り、剩へ鎗玉に上げられ、谷底へ突落されしが、谷の中段なる樹木にかゝり、漸くと這上り、陣屋に歸りしを見れば、總身に殘る處もなく疵を蒙りけれども、幸に癒えて、後に右近大夫と稱しける。然るに兄忠修が後室を、妻女とすべき上意なりけれども、辭退せしに、再應の仰により、御請を申し妻とせり。此腹に男子出生せしかば、則ち忠修が家督相續仰付けられ、豊前國中津を給はる。信濃守長次是なり。忠次は段々御取立に預かり、小倉の城主となり、老年に至る迄位

四品にて、侍従を望みたれども、仰付けられざりしに、或正月、諸大名御目見えの節、忠次も則席たりしが、次第に相濟み、右近大夫が順に當りし時、忠次は、烏帽子に紫の縮緒たりし故、大目附衆之を咎め、疾く紙撚に改められよといへども、苦しからず、此儘にて罷出でんといへり。此論にて遅はりし故、御老中も來られ、彼此とする内に上聞に達し、右近大夫は、先づ差控へ申すべき由なれば、如何あ

らんと思ふ處、やがて御前に召出され、侍從に任せられ、大に弱目を披き、今に至るまで、代々侍從に任ず。此人長壽にて、九十餘歳まで存命せしと云々。

或本に、忠次、本書に忠興とあり。寛永三年十二月廿九日、侍從兼右近將監、又九州探題の事承る。同七年十月十八日、七十二歳にて卒すと云々。

保科甚四郎

後に彈正忠

今上總國飯野城主、二萬石を領する保科氏の祖なり

は、小笠原信濃守、唯一騎にて敵陣へ乗込

みし砌に馳せ來つて、信濃殿助け申さんと蒐りける。此時敵合やうく二間計り

ありし處に、甚四郎は、右の脇を打抜かれ、其上に内冑を突かれ、間もなく又股を

突かれ、馬より眞倒に落つる處を、九郎太郎

本書に苗字を脱す

といへる小姓蒐來り、敵を防ぎ

乍ら、長臣監物

本書に苗字を脱す

を呼びければ、監物透さず駈寄りて、正貞を肩に掛け退かん

とす。甚四郎は、放せくといひ乍ら、鎗を堤げ尙も進む處に、九郎太郎は、主人に

暇を乞ひ、其場にて討死せり。正貞も敵を突伏せたりけれど、又我身も突伏せら

れ、既に討死と見えけるが、家臣等追々馳せ來り、幸に命を助かりけり。

記に、本多出雲守忠朝、大坂へ向ふとて、江州勢田の橋を通りし時、怪しげなる男、

澁帷子に破れたる編笠を着て、若黨一人小者二人相具し、小高き處に上り、忠朝を待受けて、編笠を脱捨て、是は保科甚四郎正貞にて候。兄に勘當を受け、忍んで是まで参り候。御陣所を借り申したしと望みしかば、忠朝馬より飛下り、安き御事に候へども、某は存する仔細の候間、他の陣を御借りあるべしと申しければ、正貞重ねて、貴殿の御所存を、粗推量致せし故にこそ、斯くは申すといひければ、出雲守も止む事を得ず相伴ひ、足輕十人・武具・馬・鞍等まで遣し、忠朝と一所に蒐り、郎等隼人本書に苗字を脱すは、眞先に戦死し、正貞も數ヶ所疵を蒙り、馬より落ちけるを、足輕の兵肩にかけて、引取りけると云々。

或本に、保科彈正忠正貞は、彈正忠正直の三男なり。始め甚四郎と稱せり。大坂御陣の後に御家人となり、寛永七年午五月十八日、大番頭となる。慶安元子年、大坂御城番となり、上總國佐野にて、一萬石加賜せらる。始め一萬石。寛文元丑年十一月に卒す。時に七十四歳なりと云々。

大野治長・速水時之城中に歸る并石川重之拔懸

附細川柵際に押詰むる事

さる程に城兵は、本多小笠原父子を討取り、勝に乗つて、總軍心を一にして、將卒共に、其心偏に將軍家に近附き奉らんとする氣色にて、身命を捨て、戦ひければ、東國の軍兵共も、防ぎ兼ねたる體に見えける所に、最前、大御所より秀頼公へ、縁者の好よしなれば、此上乍ら捨て難ければ、御和睦あるに於ては、和州に於て領地を遣されんといへる御使立ちければ、此術により、城兵の勇氣撓み、秀頼公より、大野修理亮方へ、御相談の事あり。速水甲斐守同道して、城中へ來るべしと仰遣されしかば、大野・速水兩人は、何事ならんと馬印を引付け、城中へ引取りけり。大坂勢は之を見て、すはや天王寺口の味方、敗北するといふ程こそあれ、備亂れ、軍兵後足を蹈んで色めきければ、東兵は氣に乗り、勝鬨を作り、追掛け、首を取ることに許多なり。

記に、此折節、越後忠輝朝臣の先手は、漸く押付きけるに、嚮の味方崩にあひ、先

備より崩れ立ち、這々の體なりしと云々。

大野修理亮は、先達つて刺客の爲に傷けられし疵口より血走り、正氣を失ひけるを、從者漸く介抱し、血を留め櫻門に至り、秀頼公に謁し、合戰の次第を具に言上せしとなり。

或記に、是より先御和睦の使來りし故に、秀頼公は近臣等を集め、意見を問はせ給ひしに、早水甲斐守之を聞き進み出でて曰、斯く迄成行き候上は、實の御和睦あるべき様なし。天王寺表の寄手は、はや合戰を始めたる體に相見え候と言上しける故、御出馬の御用意ありけると云々。

本多佐渡守正信は、秀忠公の御旗本にありて、三軍の令を司る故、人數は、二男本多大隅守正吉に預け置きし處、正吉拔蒐して相戰ひけるが、敵は目に餘る程の大勢なれば、一戰に利を失ひ引退く。城兵は之を見て勝に乗り、短兵急に挫かんと、喚き叫んで攻蒐る。豫て正信、大隅守が弱年たるにより、立花左近將監宗茂を頼み置きし故、立花下知して、横合より鐵炮をつるべ打に發しければ、城兵共は打立てられ、

辟易して進み得ざる處を、本多大隅守驍戰して、一手へ首十級を得たりける。爰に參州泉莊の産、石川嘉右衛門重之といへる者あり。素より儒學を好み、氣象豪放なりしが、大御所へ昵近せり。然るに同輩中に憎疾せられ、怯弱の汚名を得て蟄居しけるを、今度供奉して、河州枚岡より南へ廻り、天王寺表に働くべき處に、苟^{いぢ}つて枚岡より、直ちに玉造口東の門より、城中へ入らんとし、櫻門の前にて、佐々木十右衛門と相戦ひ、首を取りける。然るに佐々が郎等、主人を討たせ、何かは以て怵ふべき。無二無三に討つて蒐るを、重之太刀を以て斬伏せ首を取り、西の大手よりつゝと出で、家康公の御前へ持參せり。然れども制令に違へる罪にて改易せらる。

或説に、石川重之は、幼名孫介、後に三彌と改む。參州碧海郡泉郷の産にて、父は信定加左衛門と稱せり。母は本多佐渡守正信が妹なり。駿府に奉仕して、五百石を領す。今度軍令を犯せるに依つて、改易せられけるが、淺野但馬守長晟に招かれ、五百石を領せり。淺野家の臣一萬石を領する天野友之介は、重之が兄なりと云々。後に國を去つて、山州愛宕郡一乗寺村に住し、剃髮して犬山と稱し、本邦倭歌仙三十六人の例に擬し、西上の詩人

三十六人を選び、其像を板面に圖し、詩を書き之を四壁に掲ぐ。詩仙堂と號す。寛文十二年五月廿三日、九十歳にて歿せりとかや。息あり、石川半介と稱せり。

板倉周防守重宗に仕へたりと云々。或本に、重之は、一生妻を娶らずと云々。

細川越中守忠興は、微勢にて出陣し、御旗本の先にありしが、諸手の軍一同に始めると、岡山の西を押抜き、天王寺毘沙門が池に備を立つる。城兵堀田圖書助・眞野

豊後守野々村伊豫守本書に、此外に伊東丹後守とありと、暫く鐵炮迫合あり。忠興の小姓溝田七介後に石見

守と稱す。四・村上縫殿後に長岡河内守と稱す。家領二萬石なり・藪新太郎後に三右衛門と稱す。紀州に仕ふ此三騎は、はや合戦始ま

りければ、打連れて乗込む處、細道にて足場惡しきにより、新太郎は左へ附き、田の中へ乗付け、西の土手を抱へたる敵に向ひければ、城兵も相掛りにする處を、新太郎

は馬より下立ち、細川越中守の内、藪新太郎と名乗りければ、敵の中より、内匠が子なりやと問ひければ、中々といひも敢ず、鎗を合せて高名す。村上・溝田は、細道を乘行きて高名せり。其外佐藤將監・都築庄介、各手柄あり。鳴海丹後守は討死せり。

忠興は、此口の軍に打勝ち、敵を追うて柵際まで押詰めけり。

或本に、大坂落城の時、細川玄蕃頭興元、鎗を合せりといへる儀を、家康公聞召され、仰に、鍵を合す事は、左様に再々あるものにあらず。此茶臼山の北に見ゆる勝蔓院の山に、佐久間不于、筒井順慶、荒木村重籠りて、大坂の門跡より攻めたる時、鎗を合せしと聞きたり。其外上方にて、鍵は聞及ばずと宣ひければ、佐久間備前守罷出で、上意の如くに御座候。其日は同姓不于が手に付き、兩度の鍵御座候。天正六年五月三日の事にて、朝は茶臼山の西に相見え候難波の貝塚合戦に御座候。不于が與力佐久間久右衛門・同葵之助・梶川彌三郎・水野源太郎・水岡小三郎・六人鍵を合せ、其晚勝蔓院の山にて、不于内、志水天市・江原彌助・浮貝藤助・長瀬彌五右衛門・四本鎗を合せ申候。長瀬は、只今は小右衛門と申し、加州に罷在由を言上しけりと云々。

或本に、秀忠公の御先鋒青山伯耆守が組土方宇右衛門・花房又七郎魁して、鎗を合せけるに、味方二人突伏せられ、敵兵溢れ掛りしかば、土方・花房は、彼手負を肩に掛けて退きしにより、兩人鎗を突きたりと人々申しけるに、家康公聞かせ給ひ、

七日の合戦、總て鍵は無し。兩人の者、鍵を突きたるにはあらずと仰出されしが、各千石御加恩あり。古は弓箭にて戦ひしに、楠正成、異朝の鉾戦を象りて、鎗を作り始めけれども猶弓箭とはいひて、鎗とはいはず。武田信玄の時代より、専ら鎗の穿鑿あり。凡そ敵味方備を立寄せ、弓鐵炮にて迫合ひ、其後忙しくなり、弓鐵炮も放ち難き時は、鉾矢形はうしげやうとなる。其時進んで鍵を入れたるを、一番鍵と名付く。夫より二番鍵、或は太刀弓鐵炮にて、一番鍵の脇を結びたるを、鍵脇といひ、又其時首を取りたるを、鍵下の功名といふ。又此場にて、手負ひたる味方を肩に掛けて退くを、場中の高名といひ習はす。又敗軍に、敵小返して働くを、突伏せて首取つたるを、印といひ鍵とはいはず。何れの道にも、強き働を鎗と名付くるなり。されば天文十一寅年八月、今川駿河守義元と、織田備後守信秀と合戦の時、參州小豆坂に於て合戦ありしが、今川勢の四萬騎、一度に咄と討つて懸りしかば、織田勢の四千騎、亂れ立ちて敗北せしを、信秀の先陣織田孫三郎引返し討つて向ふ。續いて織田造酒之丞・下方左近・岡田左近・岡田助右衛門尉・佐々隼人

正・同・孫・助・中・野・又・兵・衛・七・騎・進・ん・で・敵・を・突・立・て・た・る・故・に・七・本・鎧・と・名・付・け・ら・れ・た・り・。又・天・正・十・一・未・年・四・月・、秀・吉・公・と・柴・田・勝・家・の・合・戦・に・、賤・ヶ・嶽・の・七・本・鎧・と・い・ふ・も・、敵・兵・崩・れ・色・づ・き・て・、總・懸・り・の・鎧・な・り・。又・未・の・森・の・城・攻・に・、前・田・利・家・卿・の・家・人・山・崎・六・左・衛・門・は・小・太・刀・、山・崎・彦・右・衛・門・、野・村・已・下・は・鎧・な・り・。此は天正十二年にて、敵は佐々内藏助なり。六・左・衛・門・一・番・に・首・を・取・り・た・る・に・よ・り・、利・家・卿・一・番・鎧・の・感・狀・、並・に・一・萬・石・の・加・増・せ・ら・れ・た・り・。彦・右・衛・門・此・時・、某・一・番・鎧・な・り・と・争・ひ・け・れ・ど・も・、利・家・卿・許・容・な・く・、太・刀・は・鎧・よ・り・短・き・故・、先・に・進・み・た・る・事・分・明・な・り・と・、批・判・せ・ら・れ・た・り・。又・垣・越・、狹・間・越・、投・突・は・、犬・鎧・と・い・ひ・て・、弱・き・鎗・な・れ・ど・も・、狹・間・よ・り・鐵・炮・打・出・す・時・、鎗・に・て・狹・間・を・閉・ぢ・た・る・に・於・て・は・、鎧・と・す・べ・し・。又・垣・越・に・も・、其・場・に・よ・り・て・品・あ・る・べ・し・。又・投・突・も・、合・渡・に・て・杉・江・勘・兵・衛・は・蹈・止・ま・り・、忙・し・き・場・な・る・故・に・、投・突・に・せ・し・か・、是・等・は・犬・鎧・と・い・ひ・難・し・と・な・り・。五・月・七・日・に・、鎗・は・無・し・と・宣・ひ・し・は・、假・に・も・秀・頼・公・は・、主・君・た・る・故・の・御・思・慮・な・る・べ・し・と・い・へ・り・。さ・れ・ば・冬・夏・兩・度・の・御・陣・に・、相・手・は・淀・殿・と・、仰・せ・ら・れ・た・る・に・て・思・ひ・量・る・べ・し・。名・將・の・御・一・言・は・、表・向・の・事・に・あ・ら・ず・、深・き・御・智・計・あ・る・事・に・

やと云々。

新東鑑卷之十七畢

大正四年二月十二日印刷
大正四年二月十五日發行



發行所

東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番

編者
發行者
右代表者
印刷者
印刷所

國史
叢書

新東鑑二

定價金一圓

黑川眞道
國史研究會
小瀧淳
橘山定吉
友文社

東京市神田區三崎町三丁目一號地

東京市本郷區駒込林町二二四番地

東京市神田區三崎町三丁目一號地

國史研究會



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03008 1392